

「創造し、造形し、形成する」 宇宙言語の協和音としての人間」

宇宙関係、地球関係及び動物界の人間との連関

第一講 一九三三年一〇月一九日 ドルナハ

- ・エーテル的に鳥を見ると、鳥全体が一個の頭部である
- ・鳥の翼と人間の思考
- ・ライオンと胸部律動組織
- ・牛：途方もなく美しい消化
- ・鷲、ライオン、牛の統合としての人間
- ・蝶・蛾の幼虫は太陽光を紡いで繭を織る
- ・蝶の翅と人間の記憶
- ・認識原理としての芸術

第二講 一九三三年一〇月二〇日 ドルナハ

- ・翼―人間の頭部の形態化・太陽と外惑星の力の共同作用
- ・ライオン―人間の律動組織は太陽の作用
- ・牛―新陳代謝組織は太陽と内惑星の作用
- ・鷲、ライオン、牛の作用の合流としての人間
- ・人間を一面化させようと誘惑する鷲、ライオン、雌牛の呼びかけ
- ・雌牛の誘惑の聲に捉えられると起こること―機械音の鳴り響く文明
- ・ライオン、鷲の誘惑に捉えられると起こること
- ・ライオン、ハイエナ、狼の寓話の現代的意味
- ・一面化させようとする誘惑の呼びかけに対抗するための人間の箴言

第三講 一九三三年一〇月二三日 ドルナハ

- ・霊的実質と物質的実質、霊的な力と物質的な力
- ・上部人間、下部人間における霊的―物質的な実質と力の相互浸透

- ・実質と力の不規則な配分によって病気が起こる
- ・人間の宇宙的カルマー人間は地球に対して負債がある
- ・牛は地球にとつて必要な霊的実質を地球に与える
- ・鷲は地球にとつて不要になつた物質的実質を霊界に運び去る
- ・地球存在を確実にする鷲と牛
- ・牛と鷲の回りの元素霊たちの歓び
- ・現代の一般的科学、認識では宇宙の意味は見出せない
- ・鷲、ライオン、牛に示される宇宙的秘密

宇宙現象と宇宙存在の内的連関

第四講 一九三三年一〇月二六日 ドルナハ

- ・かつての地球の状態と、現在の地球状態に見られるその名残
- ・土星―太陽と月―地球の区別
- ・土星―太陽的なものと昆虫界（特に蝶）との関連性
- ・昆虫界は太陽作用と共に働きかける火星、木星、土星作用の賜物
- ・植物界の発生―地球に委ねられた胚と金星、水星、月の作用
- ・植物は地球に繋ぎとめられた蝶、蝶は宇宙に解放された植物

第五講 一九三三年一〇月二七日 ドルナハ

- ・蝶、鳥による地球素材の霊化
- ・蝶は生きている間に、鳥は死ぬときに、
霊化した地球素材を宇宙にもたらす
- ・蝶と鳥の世界を通じて地球は宇宙に霊化された素材を放射する
- ・星は無機的なものではなく、生命あるもの、霊化されたものの結果
- ・蝶は光エーテルに、鳥は熱エーテルに属する
- ・鳥は呼吸を通じて体内の空気に熱を生み出す
- ・蝶の呼吸と高等動物の呼吸
- ・蝶は光の生きもの、鳥は空気の生きもの
- ・コウモリは黄昏の動物、地球の重さを克服できない
- ・蝶は宇宙の記憶、鳥は宇宙の思考、コウモリは宇宙の夢
- ・コウモリは霊的実質を宇宙空間ではなく空気中に分泌する
- ・コウモリの分泌の残存物を人間が吸い込むことにより

- 龍が人間に 支配力を行使する
- ミカエル衝動によるその防御

第六講 一九二三年一月二八日 ドルナ八

- 地球進化においてもつとも古い被造物である人間
- 土星―太陽―月―地球への進化のなかでの、人間の各部分と個々の動物種の発生

- 土星紀…人間の頭と蝶の原基、
- 土星紀の終わりから太陽紀前半…人間の頭―胸組織と鳥類、
- 太陽紀後半…人間の呼吸組織とライオン
- 月紀前半…人間の腹部―消化組織と牛
- 月紀後半…人間の消化器官と爬虫類、両生類
- 人間と動物の形成のされかたの違い
- 蝶、鳥の形姿は地上に下降してくる前の人間の霊的形姿を思い起こさせる
- 蝶コロナと鳥コロナが、霊界にいる人間を再受肉へと誘う
- 人間の胎児期の形成
- 人間の進化において内から外へと働くものが、動物においては外から内へと働く
- 地球のエーテル要素のなかに生きる魚
- 地球のアストラル要素のなかに生きるカエル
- 人間の消化器官と両生類、爬虫類
- 円の集中と放射の図によるマクロコスモスとミクロコスモスの照応
- 植物界、鉱物界への架け橋
- 鉱物質のものの意味、霊人[Geistesmensch]と松果腺の脳砂

植物界と自然元素霊たち

第七講 一九二三年一月二日 ドルナ八

- 植物界に関わる目に見えない存在たち
- 根の精霊グノームと鉱物
- グノームは植物を通じて宇宙の理念を知覚する
- グノームと両生類
- 地上的なものへのグノームの反感

- 水の元素霊ウンディーネは植物の葉で働く
- ウンディーネは空気素材を結合し分離する夢見る化学者
- ウンディーネと魚
- 空気―熱エレメントのなかに生きるジルフェ
- ジルフェは鳥の飛翔とともに空気のなかで響く宇宙音楽を聴く
- 鳥のなかに自我を見出すジルフェは宇宙の愛の担い手
- ジルフェは植物に光をもたらす
- ジルフェとウンディーネの共同作用により原植物の理念形態が形成される
- 滴り落ちてくる植物の理念形態を地下でグノームが受け取る
- 唯物論的の科学による植物の受精の説明の誤謬
- 熱―空気のエレメントのなかに生きる火の精霊たち
- 火の精霊は宇宙の熱を集めて植物の花にもたらす
- 植物の受精は花ではなく、地下で行われる
- 植物の父は天、母は大地
- グノームは植物の生殖の霊的な産婆
- 火の精霊は蝶、昆虫と一体化しようとする
- 蜂のオーラとなる火の精霊たち
- 下降する宇宙の愛―供犠と上昇する地の密度―重力の共同作用の現れとしての植物

第八講 一九二三年一月三日 ドルナ八

- 現代の人間からはエレメンタル存在たちを知覚する力が失われている
- グノームは骨格のない下等動物たちを霊的に補足する
- グノームの知性と注意深さ
- 入眠時の夢とグノームの知覚
- ウンディーネはもう少し高等な動物たちを補足し、鱗、甲殻を生じさせる
- 夢のない眠りとウンディーネの知覚
- ジルフェは本来頭である鳥を霊的に補足する
- 目覚めの夢とジルフェの知覚
- 火存在は蝶の体を補足する
- グノームとウンディーネは下等動物を上つまり頭の方向に補足し、
- ジルフェと火存在は鳥と蝶を下つまり四肢の方向に補足する
- 思考存在としての自己の観察と火存在の知覚
- 宇宙思考と火存在の領域
- 良い種類の元素霊と悪い種類の元素霊

- ・悪い種類のグノームとウンディーネにより寄生生物がもたらされる
- ・人間の排泄プロセスと脳形成、脳は排泄物の高次のメタモルフォーゼ
- ・グノームとウンディーネの力による物質的な脳形成
- ・グノームとウンディーネは破壊の力に関わり、ジルフェと火存在は構築する力に関わる

- ・悪い種類のジルフェにより果実に毒が生じる、ペラドンナ
- ・悪い種類の存在たちは領域をずらして作用する
- ・火存在は果肉を焼き尽くし、これが行き過ぎると果実の核が有毒となる
- ・ブラフマー、ヴィシュヌ、シヴァと元素霊の関係

第九講 一九二三年一月四日 ドルナ八

- ・人間と元素存在たちの知覚・体験の違い
- ・地球の内部でのグノームの逍遙とその地質・鉱物体験
- ・グノームは月に対して敏感であり、月相によつて姿を変える
- ・月の秘密と未来の地球に対するグノームの使命
- ・グノームたちは過去から未来へと固体の構造を保持していく
- ・海の微生物の死とウンディーネ
- ・ウンディーネたちは燐光を発しつつ上昇し、高次存在たちの糧となることに至福を感じる
- ・ジルフェは死んでいく鳥たちが霊化した実質を高次世界に媒介する
- ・ジルフェたちは稲妻となつて霊化された実質と共に上昇し、高次存在たちに呼吸し尽くされることを欲する
- ・火存在たちは、蝶が絶えず霊化する実質を熱エーテルにもたらし、地球の本来の景観を高次存在たちに観てもらうことを望む
- ・地球と霊宇宙を媒介する元素存在たち
- ・意識とともに前進せよと人間に勧告する元素霊たちの言葉
- ・元素霊たちが自らの本質を表現する言葉
- ・元素霊たちから人間に向かつて響いてくる金言
- ・宇宙は言葉から創り出された、という抽象的真理の具体的な意味
- ・元素霊たちが発する宇宙言語のさまざまなニュアンスから
- ・人体組織の各部分が形成される
- ・宇宙言語の協和音である人間

人体組織の秘密

第一〇講 一九二三年一月九日 ドルナ八

- ・真の人間認識の必要性
- ・各進化期に人間に与えられたもの…
- ・地球進化期：運動機能に関するもの、月進化期：新陳代謝に関するもの、太陽進化期：律動（呼吸・循環）的経過に関するもの
- ・土星進化期：神経・感覚に関するもの
- ・人間と鉱物、植物、動物の関係…人間が摂取する鉱物的なもの、植物的なもの、動物的なものは体内でそれぞれ、熱エーテル、空気状のもの、液体状のものに移行する。固体的なものに入り込んでいくのは人間的なもののみ。
- ・人間の呼吸、炭素の働き…炭素は炭酸となつて吐き出されるときに人体内にエーテルを残していく
- ・新陳代謝組織は常に人間を病気にする傾向を持つ
- ・循環は絶え間ない治癒プロセス
- ・呼吸のリズムは宇宙のリズムと一致し、循環リズムを制御する
- ・土星と人体組織の照応…土星の内部は病む力、土星環は健やかにする力
- ・これを眺める高次ヒエラルキアの満悦が神経―感覚組織を貫いて精神的進化の力を形成する
- ・真の合理的な治療学の体系は新陳代謝から出発すべきである
- ・教育芸術と医学
- ・全体的な人間認識から医学体系が生み出される必要性
- ・人体における栄養摂取経過、治癒経過、精神的経過の相互移行
- ・血液のなかで起こるべきプロセスが他の場所に入り込むと炎症徴候が生じる
- ・神経のなかで起こるべき経過が他の場所に入り込むと腫瘍形成への衝動が生じる
- ・教育学における病理学的―治療学的認識の必要性
- ・教育芸術的治療において物質的なものの治療作用を知ることの有益さ
- ・銅をはじめ、鉱石形成の持つ治療作用
- ・外なる自然の治癒プロセスと人体組織の治癒プロセスの関係

第一一講 一九二三年一月一〇日 ドルナ八

- ・人間の体内での代謝経過は、外部に観察される物理・化学的経過の継続ではない

- ・体内に摂取された鉱物質のものは、いったん熱エーテルの形になって宇宙からの諸力を受け取り、再び硬化して人体形成の基礎となる
 - ・鉱物質のものが熱に変化されきらずに人体組織内に沈殿すると、たとえば糖尿病などの原因となる
 - ・外部から人体内に入ってくるものは、物質であれ力であれ、完全に加工され尽くされねばならない
 - ・外部の熱を体内で完全に変化させられないと風邪をひく
 - ・外界でのエリメンタルガイストの仕事が、人体内では高次ヒエラルキアに委託される
 - ・植物の根は地上的に満足し、花は宇宙に憧れる
 - ・植物界は自然界において人間の良心を映す鏡
 - ・植物の根は月がまだ地球のもとにあった時代に由来する
 - ・花的なものは月が地球を去ってから展開する
 - ・霊的―宇宙的なものから地上的―物質的なものが生まれる
 - ・人間が植物を食べることで植物の宇宙への憧れが満たされる
 - ・植物質は人体内で空気のなものになり、上下逆転する
 - ・人間に食べられると根は頭へと上昇し、花は下にとどまる
 - ・動物の消化においては植物は逆転できず、植物の宇宙への憧れは満足されず地にへと投げ戻される
 - ・動物の消化における、消化の流れに対抗する不安の元素霊の流れ
 - ・草食動物と肉食動物の死における不安
 - ・人智学はアジテーション的に何らかの食餌法を支持するのではなく、あらゆる食餌法を理解させるもの
 - ・子どもにはまだ鉱物を熱エーテル化する力が不足しているため、ミルクが必要
 - ・子どもは頭の内部から形成力を発達させるが、年取ってから頭以外の生体組織全体が形成力を放射しなければならぬ
 - ・人間が頭の内部で行っていることを蜂は外部で行っている…蜂の巣は頭蓋冠の無い頭
 - ・人間が年取ってから形成力を促進しようとするときは、ミルクでなく蜂蜜が適する
 - ・「乳と蜜の流れる土地」という言葉に含まれる深い叢智
- 第一二講 一九二三年一月一日 ドルナ八
- ・物質的、自然的人体組織と霊的（精神的）道徳的なもの
- ・人類の道徳的―精神的（霊的）なもの源泉…人間理解と人間愛
 - ・今日、精神的（霊的）なものは単なる抽象思考として語られる
 - ・物質界、自然界にあるすべてのものは、霊的世界に関する文字
 - ・人間の（物質的）形姿は、霊的に観て道徳的冷たさと憎悪から構築されている…道徳的冷たさは人体組織を固く構成し、憎悪は血液循環を引き起こす
 - ・人間の魂には道徳的熱（暖かさ）、人間愛への萌芽があるが、下意識には道徳的冷たさと憎悪が潜んでいる…現代文明との関係
 - ・死の門を通過していくとき、人間は冷たさと憎悪の結果を携えていく
 - ・今日の一般的な社会生活に見られる道徳的な熱と愛の欠如
 - ・人間が携えてきた冷たさと憎悪の結果を負担する高次ヒエラルキア存在たち…第三ヒエラルキアが冷たさに由来するもの、次いで第二ヒエラルキアが憎悪に由来するものを取り除く
 - ・人間の形姿は純粹に霊的なもの…単なる物質的なものを人間の形姿に保つのは霊的なもの
 - ・死後霊の世界でこの形姿は徐々に頭の部分から溶解していき、第一ヒエラルキアのもとで完全に変容する
 - ・第一ヒエラルキアのもとでの霊形姿の形成…
 - ・四肢であったものが未来の頭の原型となる
 - ・脳だけでなく、手足で思考することでカルマを追求することができる
 - ・人間の動きとともに、その人間の道徳的全体が運動している
 - ・死後の生の後半における新たな形姿の形成プロセス…第二、第三ヒエラルキアは死後の生の前半に人間から取り出したものから、胸器官、四肢代謝器官の原基を形成する
 - ・人間の物質的本質と周囲の物質的自然との違い
 - ・人間と結びついているヒエラルキアの営み
 - ・新たな人間形姿形成のために使い果たされなかつた人間無理解と人間憎悪の力の残余、その帰結としての文明の癭形成、潰瘍形成
 - ・寄生生物に冒された生体組織のような現代文明…人間との生きた結びつきを持たない思考
 - ・現代文明に上から下降してくる霊的なものは人間を通じて有毒となる…下からの寄生性と上からの毒性
 - ・文化の病の診断と治療法
 - ・人間の心と心情から生み出される新たな文明の必要性…文化の病の治療としてのヴァルドルフ教育
 - ・真の文化の覚醒衝動としての人智学

第二講 一九三三年一〇月一九日 ドルナハ

私たちが行なっている考察においてしばしば言及され、四季とミカエル問題に関する前回の連続講義（1 GA229 四季の宇宙的イマジネーション）でもある役割を果たしていたのは、人間というものは、その構成全体においてその生の関連において、人間であるものすべてにおいて、本来、小宇宙[*kleine Welt*]を、マクロコスモスに対するミクロコスモスを示しているのであり、人間は実際自らのうちに、宇宙の法則性のすべて、宇宙の秘密のすべてを含み持っているということです。ただし、このまったくもって抽象的な所説を完全に理解することがたやすいことだ、などとお考えになってはなりません。いわば宇宙の秘密の多様性の奥深く入り込んでいって、この秘密を人間のなかにふたたび見出さねばならないのです。

さて今日はひとつこのことを、一方においてある出発点から宇宙を見、それから、人間がいかに小宇宙として大宇宙の内部に存在しているか理解するために人間を見るというようにして観察していこうと思います。大宇宙について語ることができることは、常に小さな断片でしかないというのはもちろんです。決して完全なものを叙述することはできません、そうするには観察にあたって少なくとも全宇宙をくまなく歩き回らなければなりません。

まず最初に、こう言ってよろしければ、私たちのすぐ上に現われているもの、これに目を向けてみましょう。人間の周囲のものうち、動物の系列のなかでその生をいわば空中で営んでいるもの、しかも非常に際立つたしかたで空中で生を営んでいる部類を見てみましょう。つまりこれは鳥類です。

空中に住み、その生存条件を空中から得ている鳥というものが、大地に接して棲み、あるいは地下に棲むことさえある他の動物たちとは本質的に異なっており構築されている、ということはいくつも否定できないでしょう。私たちが鳥類を見ると、一般的な、人間として通例の見解にしたがって、鳥の場合にも、頭部、四肢その他について語らざるを得ないと思うのは当然です。けれどもこれは根本的にまさしく芸術的でない観察方法です。すでにしばしば注意を促してまいりましたことですが、そもそも真に宇宙というものに精通しようとするなら、主知主義的な理解にとどまっていることはできず、主知主義的なものは、しだいに宇宙を芸術的に把握することに移行していかざるを得ない、ということです。

さて、そうしますと皆さんにしても、他の動物の頭、頭部と比較して実際きわめて奇形化しているいわゆる鳥の頭部なるものを、ほんとうの頭部と理解することはできないでしょう。なるほど、外面的、主知主義的に観察すれば、鳥は頭をひとつと胴体をひとつ、そして四肢を持っている、と言えるでしょう。しかし、よく考えてみてください、そうですね、たとえばラクダの脚やゾウの脚と比較して、鳥の脚はいかに萎縮していることでしょうか、また、私見ではライオンやイヌの頭に対して、鳥の頭はいかに萎縮していることでしょうか。このような鳥の頭部のなかには、規定どおりのものはほとんどまったく存在していないのです。つまり鳥の頭部のなかには、根本的に、イヌや、私見ではゾウやネコの場合のような、前方の口吻部以上のものはほとんど存在していないのです。哺乳動物の口の部分が少しばかり複雑になったもの、これが鳥の頭である、と私は申し上げたいのです。それに哺乳動物の四肢であるもの、これも鳥の場合には完全に萎縮しています。なるほど、芸術的でない観察方法は、それについても単純に、前肢が変形して翼になった、と言います。けれどもそれはことごとく、まったく芸術的でない見方であり、イマジネーション的でない見方です。自然を真に理解しようとするれば、宇宙の内奥へと真に入り込んでいこうとするれば、こういうことをもつと深く、とりわけその形態化する諸力と形成する諸力において観察しなければなりません。

単純に鳥も頭と胴体と四肢を持つ、というような見方は、けっして、たとえば鳥のエーテル体を観るということをも真に理解できるには至りません。と申しますのも、イマジネーション的に観ることを通じて、鳥において物質的にあるものを見ることから、鳥においてエーテル的にあるものへと移行すると、エーテル的な鳥にあつてはまさに頭しかない、ということに至るからです。エーテル的な鳥から即座に理解できることは、鳥というものは、他の動物の頭、胴体、四肢とは比較できず、鳥は単なる頭として、まさに変形された頭として、頭として変形された頭として理解されねばならない、ということです。したがって、本来の鳥の頭は、単に口蓋と前方の部位、口の部分を示しているにすぎず、さらに後方へ続くもの、骨格のうち肋骨や脊椎に似て見える部分、これらはすべ

編註

1 ルドルフ・シュタイナー「四つの宇宙的イマジネーションにおける四季の体験」(1923年10月3日から13日にドルナハ、10月15日にシュトゥットガルトで行なわれた七回の講義 GA229)参照。*邦訳は「四季の宇宙的イマジネーション」(西川隆範訳 水声社)

て、変容され、変形されてはいるけれども、やはり頭とみなされるべきものなのです。そもそも鳥全体が頭なのです。これは、鳥を理解しようとするれば、実際のところ私たちは、地球進化を、惑星としての地球進化（2）を、ずっとずっとはるかな昔まで遡っていかねばならない、ということによるのです。

鳥は長い惑星的（惑星進化的）な歴史を経てきています。鳥は、そうです、たとえばラクダなどよりはるかに長い惑星的歴史を経てきているのです。ラクダはどの鳥よりもずっと後になって発生した動物です。ダチョウのように、地上に縛りつけられた鳥は、もっとも後になって発生した鳥です。鷲、ハゲタカといった自由に空中で生きる鳥たちは、非常に古い地球動物です。これらの鳥は、以前の地球紀、月紀、太陽紀において、その後鳥のなかへ入って内部から外に向かつて皮膚にまで移行していったものを、それ自体としてまだすべて有していたのですが、鳥類において、今日皆さんが羽のなかに見えるもの、角状の嘴のなかに見えるものは、本質的には後になってから完成されたのです。鳥における外的なもの起源はより遅く、鳥がその頭部の性質を比較的早期に作り上げたことによってもたらされ、地球進化の後の時代になってから鳥が入り込んだといった諸条件のもとでは、鳥は、その翼にみられるものを外的に付け加えることができるだけとなったのです。この翼というものは、たとえば月と地球によって鳥に与えられたのですが、他方、鳥のその他の性質は、さらにずっと以前の時代に由来します。

けれどももともとずっと深い側面もあるのです。ひとつ空中の鳥を、そうですね、堂々とあなたに飛び去る鷲を見てみましょう、いわば外に現われた恩寵の賜物のように、太陽光線がその作用をもって、鷲にその翼を与え、他の作用についてもお話ししていきます。その角状の嘴を与えたのです。この鷲がどのように空中を飛んでいるか、見てみましょう。このとき鷲にはある種の力が働きかけています。太陽というものは、私たちが通常話題にするような物理的な光および熱の力のみを持っているわけではありません。ドルイドの秘儀についてお話ししたとき（3）に、皆さんの注意を向けていただいたことですが、太陽からは霊的な力も放射されているのです。この霊的な諸力に目を向けなければなりません。さまざまな鳥類に、多様な色彩と、独特の翼の形態を与えるのは、この太陽の霊的な力なのです。太陽の作用であるものを、霊的に見通せば、鷲がなぜあの翼を持っているか、私たちは理解できるのです。

このように、私たちがこの鷲の本性に正しく沈潜し、霊的なものをも含む内

的芸術的な自然理解を発達させることを理解するならば、また、後にお話しします他の衝動によって強化された太陽衝動から、いかに芸術的に作り上げられるのかを見ることができるようなら、さらに、鷲が卵から這い出す前から、いかにこの太陽衝動が、いわば鷲へと溢れみながっていき、いかにその魔術的力を翼へと顕現させ、あるいは本来、もつと良い言い方をすれば、いかにその魔術的力を筋肉の形態へと送り込むかを私たちが見るならば、そして、いったいこれは人間にとってどういう意味があるのか、と私たちが問いかけるならば、それは人間にとって、その脳を思考の担い手にするものを意味するのです。ですから、皆さんが鷲を見て、こつおつしやるなら、皆さんは、マクロコスモスを、大いなる自然を正しく見ていることになり、つまり、鷲は翼を持つ、色さまざまな、多彩な羽を持っている、この翼のなかに生きている力は、お前の脳を思考の担い手にすることによって、お前のうちに生きている力と同じだ、とお前の脳にしわを刻み、お前の脳が、あの内的な塩の力、思考の基礎である塩の力を取り入れることができるようになるもの、そもそもお前を思考する者にするために、お前の脳を創り出すもの、これは、空翔る鷲にあの翼を与える力と同じ力なのだ、と、一、そうすると、私たちは思考すること、自らのうちにいれば鷲の翼の代用品を感じつつ、（鷲に）親近性を感じるわけです。

私たちが物質的なレベルからアストラル的なレベルに上昇すると、次のような逆説的な発言をせざるを得ません。つまり、物質界においては、アストラル界において思考形成を引き起こすのと同じ力が、翼の形成を引き起こす、と。この力は鷲に翼の形成を起こしてくれませんが、これは思考形成の物質的な相です。この力は人間には思考形成を起こしてくれませんが、これは翼形成のアストラル的な相です。こういう事柄が、驚くべきしかたで民族の言霊[der Genius der Volkssprache]のなかに表現されていることがあります。一本の羽を上部で切り取り、その内部にあるものを取り出すとき、その民族はこれを魂と呼ぶのです。なるほど、このような魂という命名に外面的な表示を見るひともいるでしょう。けれどもこれは外面的な表示などではなく、ものごとを洞察するひとなんとして、一本の羽が、何かとほうもないものを含み持っているのです、

編註

- 1 「アーカーシャ年代記より」（1904-1908 GA11）、および「神秘学概論」（1911 GA13）の「宇宙進化と人間」の章に見られるシュタイナーの基礎を成している記述を参照。
- 2 1923年9月10日の講義「ドルイド祭司の太陽秘儀参入と月存在の認識」（「秘儀参入学と星認識」GA28）所収）参照。

思考形成の秘密を内包しているのです。

今度は空中に棲む鷲から目を転じて、また別の代表的なものを見るために、ライオンのような哺乳動物を見てみましょう。ライオンをほんとうに理解できるのは、ライオンというものがその環境を生きるのにいかなる喜びと満足とを持っているか、ということに対する感覚を発達させる場合のみでしょう。ライオンに似ていない動物はどれか、これほど驚くべき、秘密に満ちた呼吸をしてはおりません。動物という存在にあつてはいかなる場合も、呼吸のリズムと循環のリズムが一致しています。ただ、循環のリズムは、それにぶら下がっている消化器官によって重くなり、呼吸リズムは、脳形成という軽さに到達しようとして上昇を目指すことによって、軽くなるのです。鳥の場合においても、鳥の呼吸のなかに生きているものが、同時に頭部のなかにも生きていて、という状態にあります。鳥はまったく頭そのものであり、鳥はいわば外的に、宇宙のためにその頭を担っていくのです。鳥の翼の形が鳥の思考です。美のなかに生きることで正しい自然感情にとつて本来、実によりありと具象化した、内的に生氣を得た人間の思考であるところのものが、鳥の翼と親和性を持っている、ということほど心を動かすものはありません。こういう事柄において内的な実践のできるひとは、自分がいつ孔雀のように考えているのか、いつ鷲のように考えているのか、いつツバメのように考えているのか、全く正確にわかるのです。一方はアストラル的で、他方は物質的であるということとは別として、これらはまったくもって驚くべきしかたで対応しています。そのようになっているのです。ですからこう言うことができます、鳥は、非常に呼吸を主とする生を営んでいるので、他のもの、血液循環その他は、ほとんど消えてしまっている。消化の重さのすべて、血液循環の重さすら、鳥にあっては、自らのうちで感じることから排除され、存在しないのです。

ライオンの場合は、呼吸と血液循環の間にある種の均衡が成り立っています。もちろん、ライオンの場合も、血液循環は重くされていますが、それでも、そうですね、ラクダや牛ほど重くはないのです。これら（ラクダや牛）の場合は、消化が、血液循環に非常な負荷をかけるのです。ライオンの場合は、消化器官がこれらと比較してとても軽く、しかもできるだけ速く消化がなされるような体構造になっているので、消化が循環に対してひどく負荷をかけることはありません。それに対して、ライオンの頭部においては他方で、呼吸と循環のリズムの均衡が維持されるように頭的なものが展開しています。ライオンは、内的

な呼吸のリズムと、心臓の鼓動のリズム、内的に釣り合いを保ち、内的に調和し合っているこの二つのリズムを最も多く有している動物なのです。ですからライオンは、私たちがライオンの主観的な生活、とても申し上げたいものに入り込んでいくと、独特のしかたで、ほとんど際限のない食欲でその餌食を飲み込むこともします。つまり餌食を下方に送り込むのがとても嬉しいからです。ライオンが餌食に対して貪欲なのは、ライオンにとつて空腹が、他の動物にとつてよりもはるかに苦痛であるためなのはもちろんです。餌食に貪欲であるからといって、ライオンはことさらに美食家たることに執心しているわけではありません。ライオンは多く味わうことに執心しているわけではないのです。なぜなら、ライオンは、呼吸と血液循環の釣り合いから満足を得る動物だからです。ライオンは呼吸の流れを深い内的満足をもって自らのうちに取り入れることによって、呼吸することに歓びを感じるわけですが、ライオンにおいて、大食が心臓の鼓動を調節する血液のなかへと移行し、この心臓の鼓動が呼吸と相互に関わり合つてはじめて、また、大食した結果を、つまり呼吸と血液循環とのこの内的均衡を、自らのうちを感じてはじめて、ライオンは自らの要素（エレメント）のなかで生きるのである。要するにライオンは、血液が拍動しつつ上昇し、呼吸が波打つて下降していく、という深い内的満足を得るとき、まさしくライオンとして生きています。この打ち寄せる二つの波動の相互の接触のなかにライオンは生きています。

このライオンがいかにか走り、跳躍し、頭をもたげ、そしていかにか見つめるか、よく見てごらん下さい、そうすれば、均衡から出てくるものと再び均衡に至るものとの、絶え間ないリズムの交替へとすべてが還元されることがおわかりになるでしょう。この独特なライオンの眼差し、自らから発してこれほど多くを見る、自ら発して、内的な克服、相対する働きをするものの克服を見つめるこの眼差しほど秘密に満ちた気分にはせざるものは、ほとんどないかもしれませぬ。ライオンの眼差しが外に向かつて見ているものは、これ、すなわち、呼吸リズムによってまさに完璧なしかたで行なわれる心臓の鼓動の克服なのです。さてまたしても、形態化を芸術的に把握するセンスを持つひとは、ライオンの口を、ライオンの口のこの構造、つまり、心臓の鼓動がこの口のところまで上昇してくると、呼吸がそれを押し止める、ということを示しているこの口の構造を見るとよいのです。皆さんが、心臓の鼓動と呼吸のこの相互の接触を心に描き出すとしたら、皆さんはライオンの口に至るのです。

ライオンはまさに胸部器官に他なりません。ライオンは実際、その形姿のなかに、その生態のなかに、まさしく律動組織を表わしている動物です。ライオンは、この心臓の鼓動と呼吸の交替を、その心臓と肺との相互関係においても表わすように組織化されているのです。

したがって、私たちは実際こう言わなければなりません、もっとも鳥に似たもの、ただし変容（メタモルフォーゼ）させられたものを、人間において捜すとしたら、それは人間の頭である、もっともライオンに似たものを人間のなかに捜すとしたら、それは人間の胸の辺り、循環のリズムと呼吸のリズムが互いに出会う胸の辺りである、と。

さて、今度は、上空に鳥類として現われてきているもの、本来地球の直接の環境である空中において、ライオンのなかに見られるような空気の循環とともに生きているために鳥類として現われているもの、これらすべてから目を転じて、牛を見てみましょう。他の関連でもう何度も指摘したことです、満腹した牛の群れが牧場に横たわっているのを観察するのは、姿勢にも、目の表情にも、動きのひとつひとつに表わされているこの消化という営みを観察するのはなんと魅力的なことでしょう。たとえばなかがあちこちで物音をたてた場合の、牧場に横たわっている牛を一度よく見てごらん下さい。牛が頭をもたげ、この頭をもたげる動作のなかに、すべてが重く、頭を上げるとは容易ではない、という感情があること、この頭を上げることのなかにまったく特別なものがあるということがわかるのは、実際驚くべきことです。牧場においてこのように頭を高く上げることが煩わしそうな牛を見れば、こう言うほかはなくなるでしょう。この牛は、草を食べること以外の目的のために頭を上げなくてはならないことをいぶかっているのだ、いったい何でまた今頭を上げなくちゃならないの、草を食べてもいないのに、草を食べていないときに、頭を起すなんて無駄よ、と。これがどんなようすか、ちょっと見てごらん下さい。

この動物が頭を上げることのなかににはこういうことが含まれているのです。しかしこのことは、この動物が頭を上げる動作だけに含まれているわけではありません。皆さんは、牛が頭を上げるようにライオンが頭を上げるとは、想像できないうえです。このことは頭部の形のなかに含まれているのです。そこでさらに進むと、この動物の全身の形態に入っていきます。これは実際、まったく成長しきった消化器官の動物とでも申し上げたいものです。消化の重さが血循環に負荷をかけるので、すべてが頭と呼吸を圧倒するのです。この動物は

まったく消化なのです。このことを霊的に見ると、眼差しを上空の鳥に向け、それから牛を見下ろす場合、実際計り知れない不思議があります。

牛を物理的にもっと高く持ち上げても、牛が鳥になつたりしないのは言うまでもありません。けれども、同時に牛における物質的なものを移行させることができるとしたら、それは地球に隣接している空中に、気体、湿気的なもの、湿気的なものに適している牛のエネルギー的形態の変化へと同時に移行させることができるとしたら、そして牛をもっと持ち上げ、アストラル的なものにまで運んでいくことができるとしたら、そのときは遙か上方で牛は鳥になるでしょう。アストラル的に、牛は鳥になるでしょう。

よろしいですか、ここで驚くべきことが心に浮かんできます、つまりこのことを洞察すると次のように言えるのです、鳥があの上空で自らのアストラル体からアストラル的に得ているもの、私が申しましたように、その翼の形態化に働きかけているもの、牛はこれを、肉のなかに、筋肉、骨のなかへと送り込んだのだ、と。鳥においてアストラル的であるものが、牛においては、物質的になったのです。もちろんアストラル性においては異なって見えますが、そのようなのです。

さらにまた、私が逆に、鳥のアストラル性に属しているものを落とす、その際エネルギー的なものと物質的なものへの変化を引き起こすとしたら、驚は牛になるでしょう、なぜなら、驚においてアストラル的であるものは、消化するとき大地に横たわっている牛において肉と化し、物質体と化しているからです。と申しますのも、牛にあつては、驚くべきアストラル性を発達させることはこの消化の一部だからです。消化しているときの牛は美しくなります。アストラル的に見て、この（牛の）消化の内部には何か途方もなく美しいものがあります。通常の俗物的概念から、まさに俗物的理想主義に浸って、消化の営みはもっとも低次のものだ、などと言うとしたら、霊的観照におけるより高い見地から牛のこの消化の営みを見るとき、偽りを責められることになるでしょう。牛の消化は美しく、崇高な、なにか途方もなく霊的なものなのです。

ライオンは消化をこの霊性にまで導きません。鳥にあつてはなおさらです。鳥においては、消化の営みはほとんど完全に物質的なものです。鳥の消化機構のエネルギー体が見られるのはもちろんですが、鳥の消化機構のなかにアストラル性が見出されることは非常にまれで、ほとんどまったく見出されません。こ

れに対して牛においては、消化器官は、アストラル的に見て、何かまったく崇高なもので、ひとつのまったき宇宙なのです。そこで、今度は人間のなかに似たものを見ようとすれば、さらに牛が一面的に形成しているものの照応、ある種のアストラル的なものの肉化を見ようとすれば、人間においてはそれが、消化器官のなかと、消化器官の継続つまり四肢のなかに、調和的に他のものに加されて組み込まれています。したがって、私が高い上空の鷲のなかに見えるもの、ライオンの場合のように動物が直接空気を享受するところに見るもの、動物がその消化器官のなかで作用し続ける地下の地の力に結びつくとき、つまり私が高みを見る代わりに深いところを見下ろして、そこから理解に満ちて牛の本質に迫るときに私が見るもの、以上、人間のなかで統合されて一つの調和（ハーモニー）を成し、それによって互いに調停し合う二つの形態を私は持っているのです。つまり、人間の頭における鳥の変容（メタモルフォーゼ）、人間の胸におけるライオンの変容、人間の消化器官および四肢機構、四肢機構においてはさらに大規模な変容、大規模な変形がなされるのはもちろんですが、この消化器官と四肢機構における牛の変容です。

今日、こういう事柄をこのように見て、人間は本来自然全体から生まれ、しかも自らのうちに全自然を担っていること、私が示しましたように、鳥の領域、ライオンの領域、牛の本性を自らのうちに担っているということにたどりつくなら、人間は小宇宙である、という抽象的な所説が語ることになり立たせている個々の要素を手に入れることができるのです。——人間はたしかに小宇宙です、そして大宇宙も人間のうちにあります。空中に棲む動物、地球の周囲を循環する空気のなかにその主要なエレメントを持っている動物、そして大地の下の重力のなかにその主要なエレメントを持っている動物、これらの動物はすべて、人間において調和した全体性を成して共に作用しているのです。それで人間は、鷲、ライオン、雄牛または雌牛の統合(Zusammenfassung)なのです。

このことを比較的新しい精神科学の見地から研究し、洞察すると、しばしばお話ししたことです。古代の本能的な靈視による宇宙の洞察に対して大いに尊敬の念が生じます、たとえば、互いに調和して相応じつつひとつの全体として人間を形成している鷲、ライオン、雌牛または雄牛、人間がこれらから成り立っていることについての力強い像（イメージ）、このようにものに対して大いに尊敬の念が湧いてくるのです。

けれども、個々の衝動、つまりたとえば鷲の周囲に漂う諸力のなかにある衝

動、ライオンの周囲に漂う諸力のなかにある衝動、雌牛の周囲に漂う諸力のなかにある衝動、これら個々の衝動について論ずること——これは明日にもできると思います——に移る前に、内的——人間のなものと外部の宇宙のなかにあるものとの、もうひとつ別の照応（コレスポンデンス）についてお話ししたいと思います。

さて私たちは今や、すでにわかったことにしたがって、これについてイメージすることができません。人間の頭は、その性質に合ったものを求めます、つまり頭は鳥類に眼差しを向けざるを得ません。人間の胸、心臓の鼓動、呼吸は、自然の秘密のなかの秘密として自らを理解しようとすれば、ライオンであるものに眼差しを向けざるを得ません。人間は自らの新陳代謝機構を、牛の体構造と生体機構から理解することを試みなくてはなりません。けれども人間は、頭のなかには思考を担うもの、胸のなかには感情を担うもの、新陳代謝機構のなかには意志を担うものを有しています。ですからつまり、鳥類とともに宇宙を織りなし、鳥の翼に現われている表象、地球のまわりを巡り、ライオンにおける心臓の鼓動と呼吸との内的な均衡の生になかに見出される感情世界、これは人間においては和らげられてはいるものの、人間においてまさしく内的な大胆さ——ギリシア語は大膽なという言葉で心臓の特性、胸の特性のために作り上げました——を示している感情世界、人間は魂的にも、この表象と感情世界の模倣なのです。そして人間が、主に新陳代謝のなかに位置を占めている意志衝動を見出そうとすれば、これを外的に形態化しようとすれば、人間は牛のなかに肉として形態化されているものを見るわけです。

今日グロテスクで逆説的に聞こえること、宇宙の靈的な関連に關してもはやまったく理解が失われてしまった時代にとつては狂気の沙汰と思われるかも知れないことでも、古きからの風習が示唆しているある真実を含んでいるものです。よろしいですか、あのマハトマ・ガンジー、ロマン・ロランが楽しいといえない書物でありかばしくない記述をしたあのマハトマ・ガンジー（4）が、彼の活動は確かに外に向かうものではありましたが、しかしその時モインド民族の内部にあつて、いわばインドへと移動させられた十八世紀の啓蒙

編註

4 マハトマ・ガンジー：Mohandas Karamchand(Mahatma) Gandhi (1869—1948) インド独立運動の指導者。ロマン・ロラン「マハトマ・ガンジー」エミール・ローニンガーによりフランス語から訳されたもの、ロータフェル出版。エルレンバハ・チューリヒ、ミュンヘン、ライプツィヒ、1923（シュタイナーが使用した版）

主義者のように古いヒンズー教に對峙していること、彼がその啓蒙主義的なヒンドウイスムにおいてもひとつのこと、つまり牛の崇拜ということは守ったということ、こはやはり、注意をひく現象です。これを捨てることはできない、とマハトマ・ガンジーは言うのです、ご存じのように、インドでの政治活動のためにイギリス人から六年の重禁固を負わされた彼がです。彼は牛の崇拜を捨てないのです。

比較的まだ靈的な文化のなかに強固に維持されているこういう事柄を理解できるのは、こういう関連を知るときのみ、つまり、消化する動物、牛のなかにどんなに大きな秘密が生きているか、そして、牛のなかの、地上的になった、それゆえ低次のものとなってしまった、気高くアストラル的なものがいかにあがめられうるものなのか、これを真に知るときのみです。このよつなことから、ヒンズー教において牛に寄せられる宗教的な崇拜というものが理解できます、逆に、人々がこれにくつつけるありとあらゆる合理的、主知主義的な錯綜した概念からは、決してこのことは理解されないのです。

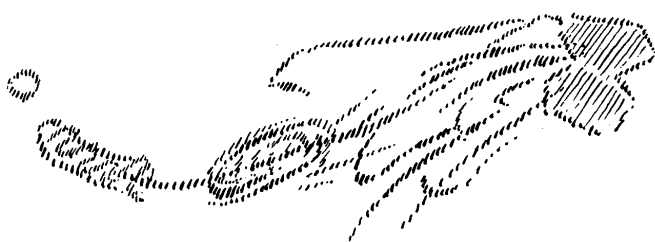
さてこうして私たちは、意志、感情、思考が外部の宇宙のなかにいかに探索されうるか、その照応であるミクロコスモスのなかにいかに探索されうるか、理解するのです。

けれども、よろしいですが、人間のなかには、さらにまだいろいろと別の力がありますし、外部の自然にも、さまざまな別のものがあります。ここでひとつ、次のようなことに注目していただきたいのです。蝶・蛾となつていく生き物が成し遂げるあのメタモルフォーゼにひとつ注目してください。

蝶（や蛾）は卵を産みますね。卵から幼虫が出てきます。幼虫が卵から這い出してきました。卵は、それ以降の生き物の原基であるものすべてを円く閉ざしたなかに含み持つています。さて幼虫が卵から出ます。幼虫は光に浸透された空気に触れます。この空気が幼虫が入つていく環境です。ここで、この幼虫が今や太陽の光に浸透された空気のなかで實際どのようになつていくかに目を向けていただかなくてはなりません。さらに、皆さんが、そうですね、夜ベツドに横たわつてランプを灯すと、蛾がランプに向かつて飛んできて、光を目指して飛んで光のなかで死んでしまふとき、このことを研究してみなければなりません。光は蛾に作用して、蛾は死を求めるところに屈してしまふのです。このことでもう、生きているものに対する光の作用がわかります。

さて、幼虫は——私はこのことを警句的に示唆しておくだけにします、明日

と明後日にはもう少し厳密に考察していくでしょうから——上方の光源、つまり太陽にまで至つてそのなかに突き進むことはできません、しかし、幼虫はそうしたいのです。蛾は皆さんのベッドのかたわらで炎のなかに身を投げ、そこで命を失いますが、蛾がそれを欲するのと同じくらい強く、幼虫もそれを望んでいるのです。蛾は炎のなかに身を投げ、物質的な火のなかで死を迎えます。幼虫も同じように炎を、太陽からやつてくるあの炎を求めます。けれども幼虫は太陽に身を投げることはできません。光と熱への移行は幼虫においては靈的なものにとどまっています。太陽の作用全体が靈的なものとして幼虫に移行するのです。彼らは、幼虫は、太陽光線のひとつひとつを追ひ求めます、日中は、太陽光線と行動をとるのです。蛾がいちどきに光に突進してその蛾としての実質[Raupenmaterie]をゆつくりと光のなかに織り込んでいき、夜には中断し、昼にはまた織り、自分の周囲に完全なまゆを紡ぎ織り上げます。ですからまゆの内部、まゆの糸の内部には、幼虫が流れ込む陽光のなかで紡ぎ続けて、幼虫自身の実質から、自身から織り上げたものがあるのです。今や、さなぎとなつ



た幼虫は、物質に変化させた陽光を、自分自身の実質から自らの周囲に織り上げたのです。蛾は物質的な火のなかで急速に燃え尽きます。幼虫は自らを捧げながら陽光のなかに突き進み、追い求める陽光のそのときどきの方向にむかって自らのまわりに陽光の糸を織りなします。皆さんが蚕蛾[Seidenspinner]のまゆをとってこれをごらんになれば、これは織りなされた太陽の光だ、ただ、この太陽の光は絹を紡ぎ出す[seidenspinnend]幼虫自身の実質を通して物質化されている、ということがわかるでしょう。これによって空間が内的に閉ざされているのです。外的な太陽の光はいわば克服されます。しかし、皆さんにお話ししましたように、太陽の光によってクロムレック(環状列[Kromlech])のなかに入り込んでくるもの―このことはドルイド秘儀に関する説明の際に皆さんにお話ししました―、この場合これは内的なものなのです。それまでの太陽光は、物質的な力を行使して、幼虫がまゆを紡ぎ出すよう導いてきました、今度は内的なものに力を行使して蝶・蛾を創り出します、今(まゆから)這い出してくる蝶や蛾をです。こうして新たに循環が始まります。皆さんの前に、鳥の卵のなかに寄せ集められているものが分割されて現われたわけですよ。

この経過全体を産卵する鳥の場合の経過と比較してごらん下さい。鳥自身の内部では、さらに変容させられた経過によって、石灰質の殻が周囲に形成されるのです。蝶・蛾において卵、幼虫、まゆのなかに分割されているプロセス全体をまさに寄せ集めるために、鳥の内部では石灰質が用いられるのです。このような、つまり例えば鳥の卵におけるような固い殻を直接円く形成するようなところでは、すべてが寄せ集められています。このように別々に分けられたプロセスが寄せ集められることによって、鳥の場合発生の経過全体がまったく異なったものになっています。鳥においてはこの段階、つまり第三の段階まで実現されているものが、蝶・蛾の場合は分割されて現われてきます、つまり、蝶・蛾においてはこれが、卵形成、幼虫形成、さなぎ形成、まゆ形成へと分割されるのです。このように外的に見ていくことができます。こうして蝶・蛾(の成虫)が這い出してくるのです。

今、この経過全体をアストラル的に追求すると、何が見えるでしょうか。そう、このとき鳥は、その形成全体のなかに人間の頭を示します。思考形成の器官を鳥は示すのです。やはり空中に棲んでいますけれども、その発形成態はもつとずつと複雑な蝶(および蛾)は何を示すでしょう。蝶(および蛾)が示しているのは、いわば頭の機能がその継続のなかに示すもの、頭の力をいわば人

間全体へと広げているものだ、ということに私たちはたどり着きます。そこでは、自然における鳥形成とは別の経過に対応することが、人間全体に起こっているのです。

人間の頭のなかに、これにエーテル的なものとアストラル的なものをつけ加えれば、卵形成のなかにあるものに非常によく似ているもの、ただし変容させられています、そういうものがあります。しかし、私たちが単に頭の機能だけしか有していないなら、私たちは瞬間的な思考しか形成できないでしょう。思考はもはや私たちのなかを下降して人間全体を用いることができず、そうすると記憶として再び浮上することもないでしょう。私が外界に沿って形成する自分の瞬間的な思考を見て、そして驚を見上げると、私はこう言います、驚の翼のなかに、私は私の外部に物質化した思考を見る、私のなかでそれは思考となる、しかしそれは瞬間的な思考となるのだ、と。私が自分のなかに記憶として携えているものに目を向けるなら、複雑なプロセスが起こっています。物質体の下の方では、もちろん霊的なものではあります、一種の卵形成が起こっているのです、これはもちろん、エーテル的なものにおいては、まったく別のもので、外的物質的には幼虫形成に似ていますが、アストラル体においては、内的にさなぎ形成、まゆ形成に似ているものです。そして、私が知覚するときに、私のなかで思考を解き放ち、下方へ送り込むもの、これは、ちょうど蝶(および蛾)が卵を産むときのような状態なのです。この変化は、幼虫に起こっているものに似ています、つまりエーテル体における生命が霊的な光に自らを捧げ、内的、アストラル的なまゆの織物でいわば思考を織りなし、そこに記憶が現われ出てくるわけです。私たちが鳥の翼を瞬間的な思考のなかに見るなら、私たちはさまざまな色にきらめく蝶(および蛾)の翅を、私たちの記憶的(想起的)思考のなかに霊的なしかたで現われてきたものと見なければなりません。

私たちはこのように外部を見渡し、自然というものが途方もなく私たちに親和性を持つものと感じます。私たちはこのように考え、この思考の世界を飛翔する鳥のなかに見るのです。私たちはこのように思い出し、このように記憶にとどめ、私たちのなかに生きている記憶像の世界を、陽光のなかでほのかに光りつつ舞い飛ぶ蝶のなかに見ます。実に、人間はミクロコスモスであり、外部の宇宙の秘密を含み持っているのです。つまり、私たちが内部から見るもの、私たちの思考、感情、意志、記憶表象、これらを、別の側から、外部から、マ

クロコスモス的に見ると、私たちはこれらを自然界のなかに再認識することなのです。

これは、現実を見渡すということです。この現実には、単なる思考によって理解できません、単なる思考にとつて、現実というのはどうでもよいことです。単なる思考が尊重するのは論理のみだからです。しかし、この論理では、現実におけるきわめてさまざまなことを覆い尽くすことはできません。このことを具象的に理解するために、ある喩え話をもって締めくくらせてください、これをさらに明日の説明につなげていこうと思います。

アフリカの黒人部族、フェラタ（中部アフリカのブル(Denka)族)には、多くを具現する実にすばらしい喩え話があります。あるとき、ライオンと狼とハイエナが旅に出かけました。彼らは一頭のカモシカに出くわしました。カモシカはこの動物たちの一頭に引き裂かれました。三頭の動物たちはお互い親しかったので、引き裂かれたカモシカを、ライオン、狼、ハイエナのあいだでどう分け合うか、ということになりました。ここでまずライオンがハイエナに向かって言いました、君が分けるよ、と。ハイエナにはハイエナの論理がありました。ハイエナというのは、生きたものではなく、死んだものに執着する動物です。ハイエナの論理は、この種の勇氣、というよりむしろその臆病さによって決定されます。この勇氣はそれがいずれであるかに従って、いずれかのしかたで現実的なものに向かうのです。ハイエナは言いました、「カモシカを三等分しよう。そのひとつはライオン、ひとつは狼、もうひとつはハイエナ、つまりぼく自身がもらうんだ」と。するとライオンはハイエナを引き裂き、殺してしまいました。さてハイエナはいなくなりました。また分けなくてはなりません。ライオンは狼に向かって言いました、「ごらん、狼くん、今度はちがつた分けかたをしなくちゃならないよ。今度は君が分けてくれ。どういふふうに分けるんだい」ーすると狼は言いました、「そうだね、今度はちがつた分け方をしなくちゃならない、もう前みたいにそれぞれ同じものをもらえないんだから。君がぼくたちからハイエナを取り除いたんだから、ライオンとしての君は当然最初の三分の一をもらわなくちゃいけない。次の三分の一はハイエナが言ったようにいずれにせよ君のものだろう、そして最後の三分の一も君がとらなくちゃいけない、君は動物のうちで一番賢くて勇敢なんだから。」ーさて狼はこのように分けたのです。するとライオンは言いました、「その分けかたを君に教えたのはだれだい」ー狼は言いました、「ハイエナが教えてくれ

たのさ」ーするとライオンは狼を食べてしまうことはせず、狼の論理にしたがって三つの部分を取りました。

そう、ハイエナの場合でも狼の場合でも、数学、主知主義的なものは、同じだったのです。ハイエナも狼も三分割し、わり算しました。けれども両者は、この知性、数学を、異なったしかたで現実に適用したのです。それによって、運命もまた本質的に変わったわけです。ハイエナは、分割原理と現実との関わりにおいて、狼とは別のものを与えたので、食べられてしまいました。狼は、ハイエナの論理との関係でー狼自身が、ハイエナから習ったと言っていますねーこの同じ論理をまったく別の現実に関係づけたので、食べられなかったのです。狼はこの論理を、ライオンが狼まで食べてしまう必要がもはやなくなるように、現実に結びつけたのです。

おわかりですね、ハイエナの論理があり、ハイエナの論理は狼にもあるのですが、その現実への適用において知性的なもの、論理的なものは、まったく異なったものとなるのです。

このようにこれはあらゆる抽象化をとまなうのです。皆さんは、抽象化をあれこれと現実に適用するそのしかたに応じて、宇宙において抽象化によってあらゆることを為すことができます。ですから、マイクロコスモスとしての人間とマクロコスモスとの対応のなかのリアリティといったことにも目を向けなければならぬのです。人間を単に論理的にのみ観察できる必要はありません、主知主義から宇宙の芸術的なものへの移行することなしには決して到達できない感覚をもって観察できなくてはならないのです。皆さんが、主知主義的なものから芸術的な把握への、いわばメタモルフォーゼを成し遂げることができ、芸術的なものを認識原理として育成できれば、人間のなかに人間のなしかたで、つまり自然的なしかたでなく生きているものが、外部のマクロコスモス、大宇宙のなかに見出されることでしょう。そのとき皆さんは真の感覚をもって大宇宙と人間との親和性を見出すことができるでしょう。

第2講 一九三三年一〇月二〇日 ドルナ八

- ・翼―人間の頭部の形態化・太陽と惑星の力の共同作用
- ・ライオン―人間の律動組織は太陽の作用
- 牛―新陳代謝組織は太陽と惑星の作用
- 鷲、ライオン、牛の作用の合流としての人間
- ・人間を一面化させようと誘惑する鷲、ライオン、雌牛の呼びかけ
- ・雌牛の誘惑の聲に捉えられると起こること―機械音の鳴り響く文明
- ・ライオン、鷲の誘惑に捉えられると起こること
- ・ライオン、ハイエナ、狼の寓話の現代的意味
- 一面化させようとする誘惑の呼びかけに対抗するための人間の箴言

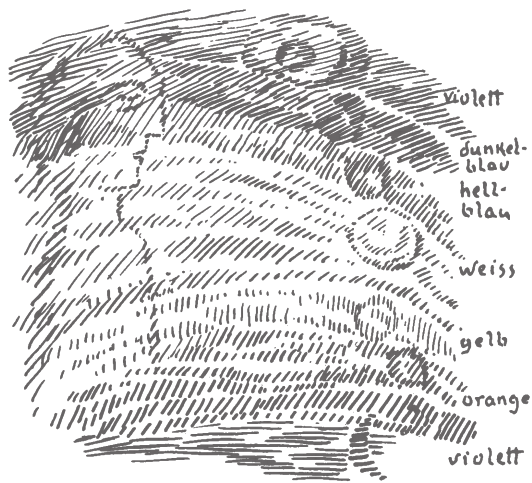
昨日私たちは、鷲に代表される高いところの動物、ライオンに代表される中間の動物、牛、雌牛に代表される地底の動物、これらの動物たちの関係について学びましたが、今日は、まさにこれら動物界を代表するものたちに対する人間の内的形態上の関係から明らかになる観点から、他ならぬ人間と宇宙との関係に注目することができます。

あの領域、それがこの動物がその特殊な力を引き出してくる領域であるなら、本来それはこの動物全体を頭部組織にする、と昨日私たちが言わなければならなかった、あの領域へとひとつ視線を上げてみましょう。こういう領域を見上げてみましょう。すると私たちに、この動物がこの動物たりうるのは陽光に貫かれた大気のおかげであるということがわかるのです。陽光に貫かれた大気は、この動物の生存は主に陽光に浸透された大気のおかげである、ということを通じていわばこの動物によって引き寄せられうるすべてであるにちがいありません。私は昨日皆さんに、本来の翼の形態化はこのことに由来する、と申し上げました。この動物はいわばその本性を外的なものなかに有しています。外界がこの動物から作り出すもの、これがこの動物の翼のなかに具現されているのです。そして、この陽光に貫かれた空気から作り出されるものが、鷲の場合のように外から本質へともたらされるのではなく、人間の神経組織のなから刺激されるように、内部において刺激されると、思考が、瞬間の思考、直接的な現在の思考が生じる、と私は皆さんに申し上げたのです。

さて私たちの視線を、このように、いわばこういう観察によって明らかにな

るすべてのことで重石をつけて、高い所へと向けてみますと、私たちにはまさに、静止している大気と流れ込む陽光が示されるでしょう。けれどもこういう場合にも、太陽それ自体を観察することはできません。太陽というものは実際、宇宙のさまざまな領域と関係を結んでいく、ということを通じてその力を保持しているのです。この関係は、人間がその認識をもって太陽の作用を、いわゆる獣帯（黄道十二宮）と関係づけることによって表わされます。したがって、太陽の光が、獅子座から、天秤座から、蠍座から地球に落ちるとき、その太陽光は（その都度）地球にとって異なることを意味するのです。太陽はまた、この太陽系の他の惑星によって強められるか、弱められるかによっても、地球にとって異なった意味を持ちます。つまりこの太陽系のさまざまな惑星に対して、さまざまな関係が生じているわけです。火星、木星、土星といったいわゆる外惑星に対して、また水星、金星、月といったいわゆる内惑星に対して、異なる関係が生じているのです。

さて、私たちが鷲の生体機構に注目するとき、とりわけ、太陽と土星、木星、火星との共同作用を通じて太陽の力がどれくらい修正されるか、強められたり弱められたりするか、ということを見なくてはなりません。伝説が、鷲はユピテル（ジュピター）の鳥である、と語るのもいわれのないことではないのです。木星（ユピテル）はそもそも外惑星を代表するものとして存在しています。こ



* 上記図のドイツ語部分（上から）：
violett: 紫色 / dunkelblau: 紺色 / hellblau: 薄青 / weiss: 白 /
gelb: 黄 / orange: オレンジ / violett: 紫色

の場合重要なことを図式的に示すなら、私たちは、万有において、宇宙において、土星が占める領域、木星が占める領域、火星が占める領域を指し示さなくてはならないでしょう。

ひとつ私たちの目の前にこれを置いてみましょう、土星領域、木星領域、火星領域を。すると、私たちは太陽領域への移行を見出し、いわばこの太陽系のもっとも外部に、太陽、火星、木星、土星の共同作用が得られます。そして私たちが空中を輪を描いて飛ぶ驚をみると、次のように言うとするなら、私たちはまったくもってひとつの真実を語っているのです、つまり、太陽から大気を貫いて流れ込む力、したがって、太陽と火星、木星、土星との共同作用から成り立っている力、これが、驚の全形態、驚の本質のなかに生きている力なのだ、と言うならばです。この力はしかし同時に人間の頭の形成のなかにも生きています。ですから私たちが、人間をその真の在りように関連づけて―地上においては人間はミニアチュール像として存在しているだけだ、と申し上げたいのです―宇宙のなかに据えるなら、頭に関しては人間を驚の領域に据えなければなりません。つまり、私たちは人間というものを、その頭に関しては驚の領域に置いて思い描かなくてはならず、それによって上へ向かう力と関連するものが人間のなかに与えられたのです。

ライオンは、本来の意味での太陽の動物、太陽がいわば自身の力をそこに展開している、太陽の動物である動物を代表しています。ライオンがもっともよく繁殖するのは、太陽の上にある星々、太陽の下にある星々が、太陽そのものに対して影響を及ぼすことがもっとも少ない配置にあるときです。このとき、昨日皆さんにお話ししました奇妙なことが起こります、つまり、大気を貫いてくる太陽そのものの力が、ライオンのなかのこのような呼吸組織をまさに活気づけ、この呼吸組織はそのリズムにおいて血液循環のリズムと、数によってではなく、そのダイナミズムによって完全に均衡状態にある、ということなのです。これはライオンにおいて見事に均衡しているのです。ライオンは血液循環に呼吸抑制を対置し、血液循環は絶えず呼吸の流れを刺激します。私は皆さんに、このことは、その形のとおり、ライオンの口の形態のなかにも見ることが出来る、と申し上げました。そこには、この血液のリズムと呼吸のリズムの驚くべき関係が、形のとおりに現われているのです。これはまた、自らのうちに安らぎつつも大胆に外に向けられている

ライオンの独特の眼差しからも見て取ることができます。けれども、このライ

オンの眼差しの中に生きているもの、これはまた、人間本性の他の要素、つまり頭部組織、新陳代謝組織と連結して、人間の胸部あるいは心臓組織、律動的組織のなかにも生きているのです。

したがって、本来の太陽作用というものを私たちの前に置いてみると、太陽領域にしたがって、人間の心臓とその一部である肺を太陽の活動範囲のなかに置くように、人間を描かなくてはなりません、するとこの領域に人間のライオン性質が得られます。

私たちが内惑星、地球に近い惑星へと移ると、まず水星領域に至ります、これは、とくに人間の最新代謝系、新陳代謝組織のより精妙な部分に関わるもので、そこでは栄養分がリンパ性の物質に変成され、さらにそれが血液循環のなかへと送り込まれています。

さらに進むと、私たちは金星の作用する域へと至ります。人間の最新代謝系のより複雑な部分、人間の生体組織において、取り入れられた食物をまず胃から加工するものへと至るのです。私たちはさらに月の領域へと進みます。私はこの帰結を、今日天文学において通常行なわれているように描写しております、別の描写をすることもできるでしょうが、つまり、私たちは今や月領域に至り、月と関係するあの新陳代謝の経過のなかで人間に作用し、作用される領域に至るのです。

私たちはこのようにして人間を全宇宙のなかに据えたわけです。太陽が、水星、金星、月と一致して実現する宇宙的な作用へと向かうことによって、私たちはさらに、私が昨日説明しました意味で、あの雌牛によって代表される動物を受け容れる力を含む領域へと入っていきます。ここで私たちに得られるのは、太陽がそれ自身によって造ることができないものではなく、太陽の力が地球に近い惑星を通じてまさに地球にもたらされるときに太陽が造ることができません。これらの力がすべて、単に大気を貫いて流れ込むだけでなく、地球の表面にさまざまなしかたで浸透すれば、これらの力は地から上へと作用します。そしてこの地から上へと作用するもの、これは、私たちがまさに雌牛の生体機構のなかに外的に具現しているのを見る領域、そういう領域に属しているのです。

雌牛は消化の動物です。しかし雌牛は同時に、次のようなしかたで消化というものを成し遂げる動物なのです、つまり、この消化という経過のなかに真に地上を超えたものの地上的な模像があるような、雌牛のこの消化全体が、全宇

宙を見事に象り（かたどり）つつアストラル性に貫かれるような、そういうしかたです。昨日すでに申しましたように、雌牛のこのアストラル的な生体組織のなかには全宇宙があるのですが、すべては重さによってささえられ、すべて地球の重さが効果を現わすことができるようにしつらえられています。皆さんは、雌牛は毎日その体重の八分の一の食物を必要とする、ということを考えてごらんになりさえすればよいのです。人間は二十分の一で満足できませんし、それで健康も維持できません。雌牛は、その生体機構を完全に満たすことができるためには、地球の重さを必要としているのです。雌牛の生体機構は、物質が重さを持つように方向付けられています。雌牛の場合、毎日重さにおいて八分の一が交換されなければなりません。これが雌牛をその質量で地球に結びつけますが、その一方で、雌牛はまさにそのアストラル性を通じて、同時に、高きものの模像、宇宙の模像でもあるのです。

ですから、雌牛はヒンズー教の信奉者にとってー私が昨日申しましたようにー崇拜に値する対象なのです。なぜなら、ヒンズー教の信奉者はこう言うことができるからです、雌牛はこの地上に生きていて、この地上に生きていてというそのことだけで、雌牛は、物質的な重さー質量のなかに、地上を超えたもの、と言い得るものを象っているのだ、と。ヒンズー教の信奉者の意味で語るならそうなのです。そしてこれはまったくもって、人間の本性が正常な生体機構を得るのは、人間が、鷲、ライオン、雌牛のなかに一面化されたこれら三つの宇宙的作用に調和をもたらすことができる、つまり人間が真に鷲の作用、ライオンの作用、雌牛の作用の合流であるときである、ということなのです。

しかし、普遍的な世界の進展に従い、私たちは宇宙の進化にーこういう表現をしてよろしければーある種の危険がさし迫っている時代に生きています、一面的な作用が、人間のなかに現に一面的に現われてくる、という危険です。十四、十五世紀以来現在にいたるまで、この地上の人類進化において、鷲の作用は人間の頭を一面的に利用しようとし、ライオンの作用は人間のリズムを一面的に利用しようとし、雌牛の作用は人間の新鮮代謝と地に対する人間の作用全体を一面的に利用しようとする、という事態がますます強まってきたのです。

人間がいわば宇宙の諸力によって三分割されようとしている、そして宇宙の諸力のうちひとつの形が常にその他の要素を制圧しようとする懸念になっている、

というのが現代のしるし（シグナトゥール）なのです。鷲は、ライオンと雌牛を突き落としてその力を無効にしようとする懸念になっていきます、同様に他の二者も、その都度自分以外の両者の要素を無意味なものにおとしめてしまおうとやっきになっていきます。そして他ならぬ今日の時代、人間の下意识であるものに對して実に絶え間なく、きわめて誘惑的なものが働きかけているのです、誘惑的であるのは、それが各種の関連で美しいものでもあるからです。意識の表層においては今日人間はそれを知覚しておりません、けれども人間の下意识にとつては、人間を誘惑しようとする三重の呼びかけが宇宙を貫いて波立たせ、鳴り響かせています。現代の秘密というのは、鷲の域から、鷲を本来鷲たらしめているもの、鷲にその翼を与えるもの、鷲の周りをアストラル的に漂っているものが下へと鳴り響いてくることだ、と申し上げたいのです。人間の下意识に聞こえてくるのは鷲の本質そのものなのです。これは心を惑わす呼び声です…

私の本質を学ぶがよい！

私はおまえに力を贈る、

おまえ自身の頭のうちに

万有を創り出す力を。

鷲はこう語ります。これは、今日人間を一面化しようとする上からの呼びかけです。

続いて第二の誘惑の呼び声です。これは中間の域からやってきます、そこでは宇宙の力がライオンの本性を形成し、宇宙の力が、ライオンの本性を構成しているあのリズムの均衡、呼吸と血液循環の均衡を、太陽と大気の合流から生じさせるのです。ここでいわばライオンの感覚のなかで大気を振動で満たすもの、人間自身の律動組織を一面化しようとするもの、これがやはり今日人間の下意识に向かって誘惑的に語りかけます。

私の本質を学ぶがよい！

私はおまえに力を贈る、

巡る大気の輝きのなかに

万有を体現する力を。

ライオンはこう語るのです。

私たちが考える以上に、人間の下意识に語りかけるこれらの声には影響力があります。そうです、親愛なる友人の皆さん、地上でのさまざまな人間の生体機構は、これらの作用を受け容れるように組織されているのですから。ですからたとえば、鷲の声によってとくに誘惑され、惑わされやすいのは、西洋に住むすべてのものです。とくにアメリカ文化は、その人類の特殊な（生体）機構を通じて鷲が語る誘惑にさらされています。ヨーロッパの中部、古代文化（ギリシア、ローマの）であるものの多くを自らのうちに有し、たとえばゲーテを人生の解放のためにイタリア旅行へと導いたものの多くを自らのうちに有しているヨーロッパ中部は、とくにそこでライオンが語りかけるものにさらされています。

東洋の文明はとりわけ、そこで雌牛が語りかけるものにさらされています。あとの動物が両者ともその宇宙の領域で鳴り響くように、地の底深く、とても申し上げたいところから、轟き、叫びつつ鳴り響いてくるのは、雌牛の重さのなかに生きているものです。これは実際、すでに昨日皆さんに描写いたしましたように、たらふく草をはんだ群が、独特の大地の重さに身をささげるようなしかたで、この大地の重さのもとにあること、毎日自分の体重の八分の一を、その重荷のために自らのうちで交換しなければならぬ、という状況のもとにあることを表現するような格好で、横たわっているのを見るような、そういうものです。これに加えて、太陽、水星、金星、月の影響のもとに雌牛の栄養摂取機構におけるすべてを引き起こす地の底、この地底が、魔物のように轟く力で鳴り響かせるように、次のような言葉の響きでこのような群を満たすのです。

私の本質を学ぶがよい！

私はおまえに力を贈る、

秤、標尺、数を

万有より奪い取る力を。

雌牛はこう語ります。この誘惑の呼び声にとくにさらされているのは東洋なのです。ただしそれはこういう意味です、つまり、東洋はヒンドゥー教におけ

る古くからの牛崇拜があるので、なるほど最初は東洋がこの雌牛の誘惑の呼び声にさらされているけれども、この誘惑の呼び声が実際に人類を捉えて、この誘惑の声から生じるものが勝利を得るほどになるとしたら、まさにこの東洋から作用するものが、中部と西方を抑えて、自らを、前進を阻む、没落を引き起こす文明であると告知するだろう、ということですが。大地の魔の力が一面的に地球文明に働きかけるでしょう。それでは、このときいったい何が起ころうでしょうか。

このとき起ころうことは以下のようなことです。前世紀の経過にともない、私たちは地上で外的科学の影響下にある技術を、外的な技術の生活を獲得いたしました。実際あらゆる分野における私たちの技術は驚異的なものです。自然力は技術においては、生命のない形態で作用します。そして、この自然力を担ぎ出して、いわば徹底的に地球の上に文明の層を形成するために役立つもの、これが秤、標尺、及び数なのです。

秤、物差し、量る、数える、測定する、これが、今日まさに外的科学を本職としている今日の科学者、今日の技術者の理想です。私たちは、「存在を保証するものは何か」と問われた著名な数学者が以下のように答える、という事態にまで達しているのです。あらゆる時代の哲学者たちは、「そもそも現実的なものとは何か」という問いに答えようとしてまいりましたが、この著名な物理学者は、こう答えます、測定できるものが現実的なのだ、測定できないものは現実的ではない、と（1）。これはいわば、あらゆる存在を次のようにみなす理念なのです、つまりあらゆる存在は実験室に持ち込んで、重さを量ったり、測定したりすることができ、科学、この科学が技術のなかに流入するわけですが、この科学となおみなされているものは、この量られ、測定され、数えられたものから組み立てられる、とする理念です。数、寸法、重さは、文明全体をいわば方向づけるように作用すべきものとなったのです。

さて人間がただ単に悟性をもってこの測定する、数える、重さを量ることを用いている限りは、とりたてて不都合はないのです。人間はなるほど利口ではありませんが、宇宙万有の賢さにははるかに及びません。したがって、測定する、重さを量る、数えるということに関して、いわば宇宙万有に対してディレッタ

編註

1 (誰のことを指すのか) 確定できない。可能性としては、物理学者エルンスト・マッハ(1838-1916)か、シュタイナーが言及することの多い数学者・物理学者アンリ・ポワソナレ(1854-1912)の1つと思われる。

ント的にあれこれやっている限りは、とくに不都合にはなり得ないのです。けれどもまさに今日の文明が秘儀参入に変貌するとしたら、それが秘儀参入の心情にとどまり続けるとしたら、まずいことになるでしょう。このことが起こり得るのは、まさに秤、物差し、数という記号のなかに成立している西洋の文明が、何と言つても東洋において起こりうるであろうこと、つまり本来霊的に雌牛の生体機構のなかに生きているものは何か、秘儀参入学を通じて究明されうることによつて、あふれさせられるときです。と申しますのも、皆さんが雌牛の生体機構に入り込んでいって、そこで、この栄養分の八分の一が、いかに地上的な重さ、つまり量つたり測定したり数えたりできるすべてのものの重荷を負わされているかを学び、雌牛のなかのこの大地の重さを霊的に組織しているものを学び、牧場に横たわり、消化し、その消化のなかに宇宙からもたらされた驚異をアストラリックに顕現させているこの雌牛の生体組織全体を知るようになる、そうすると皆さんは、量られたもの、測定されたもの、数えられたものをひとつの体系にはめ込むことを学び、そうすることによつて文明における他のものをすべて克服し、ひたすらいつそう量り、数え、測定して文明から生じるそれ以外のすべてをものを消滅させるような文明を、唯一その文明だけを地球に与えることができるのですから。いったい、雌牛の生体機構の秘儀参入（イニシエーション）は何をもたらすのでしょうか。これは非常に奥深い、途方もなく意味深い問いです。雌牛のイニシエーションは何をもたらすのでしょうか。

たとえば、機械を構成するしかたというのは、個々の機械によつて非常に異なっていますでしょう。ですが、まだ不完全な、原始的な機械が徐々に振動に基づくものになっていく、つまりそこでは何か振動していて、この振動、発振を通じて、周期的に経過する運動を通じて機械の効果が得られるのですが、すべてはそういうものになっていく傾向にあります。すべてはこのような機械に収束していくのです。ところが、いったんこういう相互作用する機械を、雌牛の生体機構のなかでの栄養分の分割に学ぶことができるようなしかたで構成すると、機械によつて地球上に創り出された振動、この小さな地球振動は、地上で起こっているもの、地球の上部にあるものと共鳴し、共振して経過するようになり、この太陽系がその振動においてこの地球系と共振しなければならぬようになります、ちょうどしかるべく調律された弦が、同じ空間の別の弦が鳴らされると共鳴するように。

これが、雌牛の呼び声が東洋を感ぜるとしたら実現されるであろう、振動の共鳴の恐ろしい法則です、その結果東洋が説得力あるしかたで、西洋と中部の精神性に欠けた純粹に機械的な文明に浸透していき、そしてそれを通じて宇宙万有の機械的な系（システム）に精確に適合する機械的な系（システム）が地上に生み出されることになりかねないでしょう。それとともに、空気の作用であるもの、循環の作用であるもの、そして星々の作用であるものすべてが、人類の文明のなかで根絶やしにされてしまつてしまふでしょう。人間がたとえば四季の移り変わりを通じて、つまり芽生え、萌え出る春の生命、死滅し衰えていく秋の生命に人間が参加することで体験するもの、これらすべては人間にとつての意味をなくしてしまうでしょう。ガタガタと振動する機械の音と、その反響（エコー）、地球のメカニズムへの反応として宇宙から地球へと流れ込んで来るであろうこの機械音の反響が、人間の文明を貫いて鳴り響くことでしょうか。

現在作用しているものの一部を考察してみれば、皆さんは自らにこう言い聞かせることでしょうか、現在の私たちの文明の一部はまさに、この恐ろしく没落的な目標に通じる道の途上にある、と。

さて、ひとつ考えてみてください、もし中部がライオンの語るることによつて誘惑されるとしたら、なるほど私がたつた今描写しましたような危険はないでしょう。機械装置は次第にまた大地から消えていくでしょう。文明は機械的になりはしないでしょうが、人間は一面的な強さで、風雨のなか、四季の循環のなかに生きていくすべてのものに委ねられるでしょう。人間は四季の循環のなかにはめ込まれ、そのためとりわけ呼吸リズムと循環のリズムの相互関係のなかで生きざるをえないでしょう。人間は、その不随意の生活が彼に与えてくれるものを自らのうちに育てていくでしょう。いわば人間は胸の性質を特に発達させるでしょう。けれどもそうすることによつて、人間において、実に誰もが自分自身だけで生きようとし、誰も現在の幸せ以外の何かを気にかけることはない、といったような利己主義が地球文明に到来することでしょう。これにさらされているのは中部の文明です、中部の文明はこのような生活を地球文明に科すこともできるでしょうから。

さらにまた、鷲の誘惑の呼び声が西洋を感ぜるとしたら、鷲の思考方法と心情を地球全体に広げ、この思考方法と心情のなかに自分自身を一面化することに成功するとしたら、かつて存在していた世界、地球の出発点、地球の初めに存在していた地上を越えた世界とこうして直接結びつきたいという衝動が、

人類のなかに全般的に生じてくるでしょう。人々は、人間がその自由と独立のなかに獲得したものを消し去りたい衝動を得るでしょう。人間の筋肉、神経のなかに神々を生かすあの無意識の意志のなかでのみ生きるようになるでしょう。原始的な状態、太古以来の原始的な霊視へと退行していくでしょう。人間は、地球の始まりへと戻ることによって、地球から離れ去ろうとするでしょう。私は申し上げたいのですが、厳密に透視的（クレアヴォウヤント）

「clairvoyant」な眼差しによって、これはさらに、草をはむ雌牛が絶えず一種の声で人間を貫くということによって裏づけられます、その声は、こう語るのです。「上を見るな、すべての力は地より来るのだ。大地の作用のなかにあるすべてに精通せよ。お前は大地の主となる。お前は、お前が地上で獲得するものを永続的なものにするであろう」と。さて、人間がこの誘惑の声を除去するしたら、私がお話しした危険、地球文明の機械化、というあの危険を除去することはできないでしょう。と申しますのも、消化動物のアストラル的なものは、現在のものを永続的に、現在のものを不朽にしようとするからです。（一方）ライオンの生体機構からは、現在のものを永続させようとせず現在を出来る限りすばやく過ぎ去らせようとするとするもの、すべてを絶えず繰り返す四季の循環の戯れにしようとするもの、天候のなかへ、太陽光の戯れや大気のなかへと上昇しようとするものが現われてきます。文明はこういう特徴を現わすようになるでしょう。

空中を漂っていく鷲を人間が真に理解をもって観察すれば、鷲はその翼に地球の出発点に存在していたものの記憶を担っているように思われます。鷲はその翼のなかに、地球内部へとまだ上から作用していた諸力をとどめているのです。言うなれば、いかなる鷲のなかにも地球の数千年を見て取ることが出来るわけです、そして鷲は、せいぜいえものを捕らえるため以外には、物質的なものによって地球に触れたことはなく、いずれにせよその独立生活の充足のためには地球に触れることはありません。鷲はこの独立生活を維持しようとするとき、空中を旋回します、なぜなら、地上で生成されたものは鷲にとってはどうでもよいからです、鷲は大気の諸力によって歓喜と熱狂を得、地上生活を軽蔑すらして、地球がまだ地球でなかったとき、地球がその地球存在としての初めのころまだ天的な諸力に貫かれていたときに、地球自体がそのなかで生きていたような、そういう要素（エレメント）のなかで生きようとするからです。鷲というのは誇り高い動物で、固い地球進化に参加しようとはせず、この固体

化する地球進化の影響から身を離し、そして地球の出発点にあった諸力とのみ一体化しようとした動物なのです。

以上は、私たちがこれを宇宙の謎の解明のために宇宙万有のなかに書き込まれた巨大な文字とみなすことができるなら、これら三つの動物が私たちに与えてくれる教えなのです。と申しますのも、根本的においては宇宙万有のなかのいかなるものも、私たちがそれを読む事ができれば、ひとつの文字なのです。つまりこの連関を読むことができれば、私たちは宇宙万有の謎を理解するのです。

コンパスあるいは定規で計測するとき、秤で量るとき、数えるときに私たちがすることによく考えてみなければならぬ、ということはやはり意味があるにしても、私たちはその際結局、すべて断片にすぎないものを組み合わせているのです。それが全体となるのは、私たちが雌牛の生体機構をその内的な霊性において理解するときです。そしてこれは、宇宙万有の秘密を読み取ることで、そしてこの宇宙万有の秘密を読み取ることが、宇宙存在と人間存在を理解することに通じていくのです。これが現代の秘儀参入の叢智

[Initiationsweisheit]です。これは、今日精神生活の深みから語られねばならないことなのです。

今日人間にとってそもそも人間であるということが困難なのです。と申しますのも、人間は今日、昨日皆さんにお話しいたしました寓話のなかの、三頭の動物に向き合ったカモシカのように見える、と申し上げたいからです。一面化しようとするものが特殊な形を取っているのです。ライオンはライオンのままで、ライオンは自分の仲間の猛獣を、変容されたものとして他の動物の代わりにならんとします。ライオンは、もと鷲であるものの代わりに、猛獣の仲間であるハイエナをいいます。ハイエナは基本的に死んだものによって生きています、私たちの頭のなかに生み出され、私たちの死に向かって絶え間なく瞬間ごとに原子論的な断片を供給しているあの死んだものによってです。したがって、この寓話は、ハイエナを、腐肉を喰らうハイエナを鷲と取り替えるのです、さらにライオンは、雌牛の代わりに、没落にふさわしくこの伝説は黒人文化から生じたのでしょから、仲間の猛獣、狼を置きます。こうして寓話のなかに三頭の別の動物、ライオン、ハイエナ、狼が現われるのです。今日誘惑の呼びかけが対立しあっています、誘惑の呼びかけが響くとき、徐々に鷲は地に降ってハイエナとなり、雌牛はもはや聖なる忍耐強さで万有を象る

うとせず、猛獣の狼となることにより、実際そのように対立しあっているのは、宇宙的シンボリズムとでも申し上げたいものです。

そうすると、昨日の講義の終わりに皆さんにお話ししましたあの伝説を、黒人の言葉から私たちの現代文明の言葉へと翻訳する可能性が出てきます。昨日私は、いわば黒人の心情で語らねばなりません。ライオン、狼、ハイエナが、狩に出かけました。彼らはカモシカをしとめました。ハイエナが最初に分けることになりました。ハイエナはハイエナの論理にしたがって分け、こう言いました、「二等分しよう、三分の一はライオン、三分の一は狼、三分の一は僕のものだ。」するとハイエナは食べられてしまいました。さてライオンは狼に言いました、「今度は君が分ける。」すると狼は言いました、「最初の三分の一は君のものだ、君がハイエナを殺したんだから、ハイエナの分け前は当然君のものだ。次の三分の一も君の、ハイエナはそれぞれが三分の一取る、と言ったけど、その通りにすれば、どっちみち三分の一は君がもらうんだから、君のものだ。最後の三分の一も君のものだ、君は動物のなかで一番勇敢で賢いんだから。」そこでライオンは狼に言いました、「君にそんなに上手に分け方を教えたのはだれだい。」狼は言いました、「ハイエナが教えてくれたのさ。」

— 論理は両者とも同じです、現実への適用において、ハイエナが論理を適用するか、あるいはハイエナの経験をふまえて狼が論理を適用するかでは、全く異なるものが出てきたわけです。本質的なことは、現実への論理の適用にあるのです。

さて、私たちは、いわば現代文明的なものに翻訳して、これをいくらか別様に物語ることもできます。けれども私が語りますことは常に、このことにご注意ください、私が語りますことは常に、文化の大きな流れにおいて重要なことなのです。ここで申し上げたいことは、この物語は現代的に次のように表現されるかもしれない、ということなのです。— カモシカがしとめられます。ハイエナは後ろに退き、無言の判断を示します。ハイエナは敢えて最初にライオンの恨みを買うようなことはせず、後ろに退きます。ハイエナは無言の判断を示し、背後で待ちます。さてライオンと狼は獲物のカモシカをめぐる闘いを始め、闘いに闘い、互いにひどい傷を負い、傷によって共に死んでしまうまで闘い続けます。さて今度はハイエナが出てきます、カモシカとライオンと狼を、これらが腐敗してしまつてから平らげます。ハイエナは、人間の知性のなかにあるもの、人間の本性のなかの殺し去るものを具象化しています。ハイエナは、驚

の文明の裏面、カリカチュアなのです。

私がこの古い黒人の寓話のヨーロッパ化によって申し上げようとすることを、皆さんが感じとってくださいれば、今日こういう事柄がほんとうに正しく理解されるべきである、ということをご理解いただけるでしょう。こういう事柄が正しく理解されるのは、三重の誘惑の呼びかけ、驚と、ライオンと雌牛の呼びかけに、人間が自らの箴言を、今日人間の力と思考と作用の合い言葉であるべき箴言を対置することを学ぶときのみです。

私は学ばねばならぬ、

おお、雌牛よ、

星々が私のなかに啓示する言葉から、

お前の力を。

地球の重さではなく、単に重さを量り、数え、計測することのみではなく、単に雌牛の物質的な生体機構のなかにあるもののみを学ぶのではなく、雌牛のなかに体現されているもの、雌牛の生体機構から雌牛が体現しているものへと畏怖しつつ眼差しを転ずること、眼差しを高めへと上げることを学ぶのです、そうすれば、そのままでは地球の機械文明となつてしまつてしまうものが霊化されるのです。

人間がよく考えなければならぬ第二のことは、

私は学ばねばならぬ、

おお、獅子よ、

日ごと年ごとの巡りが

私のなかに織り込む言葉から、

お前の力を。

「啓示する」という言葉、「織り込む」という言葉に心を留めてください。そして、人間が学ばなければならぬ第三のものは、

おお、驚よ、

大地から萌え出たものが私のなかに創り出す言葉から、

お前の力を。

このように人間は、一面的な誘惑の呼びかけに、自らの三つの箴言を対置しなくてはなりません、その意味が一面性を調和的な均衡に導くことができる三つの箴言をです。人間は学ばねばなりません、雌牛を見ることを、ただし、雌牛を徹底的に感じ取ったあとで、雌牛から、星々の言葉が啓示するものを見上げることを学ばなければなりません。人間は学ばねばなりません、鷲に眼差しを向けることを、そして、鷲の本性を徹底的に自らのうちで感じ取ったあとで、その眼差しで、鷲の本性が人間に与えたものをもって、大地のなかで発し萌え出て、人間の生体機構においても下から上へと作用するものを見下ろすことを。そしてまた人間は学ばねばなりません、ライオンを観ることを、風のなかで人間を取り巻くもの、稲妻のなかで鋭く見据えるもの、雷鳴のなかで人間の回りを轟き巡るもの、人間が組み込まれている地球生命全体の四季の巡りのなかに嵐が引き起こすもの、これらがライオンによって人間に開示されるようにライオンを観ることを。つまり人間が上方への物質的な眼差しを下方に向けられた霊の眼差し[Geistesblick]と、下方への物質的な眼差しを上方へ向けられた霊の眼差しと、まったく東洋に向けられた物質的な眼差しを、逆にまったく西洋に向けられた霊の眼差しと、上方と下方、前方と後方、霊の眼差しと物質的な眼差しを、相互に浸透させ合うことができれば、そうすれば人間は、高みからは鷲の、(地球の)周囲からはライオンの、地球の内部からは雌牛の、人間を弱らせるのではなく力づける真の呼びかけを感じ取ることができます。

私の本質を学ぶがよい！
私はおまえに力を贈る、
おまえ自身の頭のうちに
万有を創り出す力を。

鷲はこう語る
西洋

私の本質を学ぶがよい！
私はおまえに力を贈る、
巡る大気の輝きのなかに
万有を体現する力を。

獅子はこう語る
中部

私の本質を学ぶがよい！
私はおまえに力を贈る、
秤、標尺、数を
万有より奪い取る力を。

雌牛はこう語る
東洋

私は学ばねばならぬ、

おお、雌牛よ、お前の力を
星々が

私のなかに啓示する言葉から。

おお、獅子よ、お前の力を
日ごと年ごとの巡りが

私のなかに織り込む言葉から。

おお、鷲よ、お前の力を
大地から萌え出たものが

私のなかに創り出す言葉から。

第二講 一九三三年一〇月三日 ドルナハ

- ・ 霊的実質と物質的実質、霊的な力と物質的な力
- ・ 上部人間、下部人間における霊的・物質的な実質と力の相互浸透
- ・ 実質と力の不規則な配分によって病気が起こる
- ・ 人間の宇宙的カルマー人間は地球に対して負債がある
- ・ 牛は地球にとって必要な霊的実質を地球に与える
- ・ 驚は地球にとって不要になった物質的実質を霊界に運び去る
- ・ 地球存在を確実にする驚と牛
- ・ 牛と驚の回りの元素霊たちの歓び
- ・ 現代の一般的科学、認識では宇宙の意味は見出せない
- ・ 驚、ライオン、牛に示される宇宙的秘密

私たちは人間を再びある観点から宇宙万有のなかに据えようと試みました。今日は、いわば全体を総括することのできるような考察を試みましょう。私たちは物質的な生の範囲内においては地上に生きていて、きわめてさまざまなしかたで自然界の本性、そして人間の形態そのものへと形成され、形態化されている地球の物質素材、この物質素材を通じて存在している出来事および事実にもまれていきます。あらゆるもののなかにまさに地球の物質素材が存在しているのです。私たちは今日これを、この物質素材をひとつ、後ほどすぐにこの反対のものについても語らなければならぬので、地球の物質的実質[*die physische Substanz*]、つまり素材的に地球のさまざまな形態化の基礎を成しているもの、と呼びましょう、そして、この物質素材の反対のものとして宇宙に存在するもの、霊的実質[*die geistige Substanz*]をこれと区別しましょう、この霊的実質は、たとえば私たち自身の魂の基礎を成すものですが、ふつうは宇宙において、物質的形態化に霊的なものとして結びつくような形態化の基礎を成しているのです。

物質素材あるいは物質的実質について語るのみでは間に合わないのです。私たちが高次ヒエラルキア存在たちを私たちの宇宙の全体像のなかに置いてみる、と考えるならなりさえずればよいのです。これらの高次ヒエラルキア存在は、地の実質というものを有しておりません、私たちが彼らの身体性とも呼ぶところのものなかに地の実質を有してはいないのです。したがって、

私たちが地上的なものを見ると、私たちは物質的なものを知覚するでしょう、私たちが地球外のものを見ると、私たちは霊的実質を知覚するでしょう。

今日、霊的実質についてはほとんど知られておりません、そのため、物質界と同時に霊界にも属している地球存在、つまり人間についても、あたかも人間が物質的実質しか有していないかのように語られるのです。けれどもそうではありません。まったくもって人間は自らのうちに霊的実質と物質的実質を担っています、しかも非常に独特なしかたで、つまりこういう事柄に注意することに慣れていないひとが最初驚愕せざるを得ないようなしかたで、人間は自らのうちに霊的実質と物質的実質を担っているのです。つまり、人間を運動に移行させるもの、すなわち人間の四肢であるもの、そして四肢から発して新陳代謝活動として内部へと継続されるもの、人間におけるこうしたものを考慮に入れると、そのとき私たちが主として物質的実質について語るとすればそれは正しくありません。私たちが人間について正しく語ることができるのは、人間のいわゆる低次の性質について、他ならぬこの性質の根底には根本的に霊的な実質があるのだとわかるべきのみです。したがって、人間を図式的に描こうとすれば、以下のようなしかたで行なわなくてはなりません。

私たちはこう言わなくてはなりません、本来下部人間は、霊的実質のなかに形成されたものを私たちの前に示し、私たちが人間の頭に向かって進めば進むほど、人間は物質的実質から形成されるようになる、と。そして脚については、異様に聞こえようともこう言わざるを得ないのです、脚は、本質的に霊的実質から形成されている、と。申しましたように、異様に聞こえようともです。ですから、頭の方へと進むと、私たちは人間をこのように、つまり霊的実質を物質的実質に移行させるように、描かなくてはなりません(図が描かれる)、そして物質的実質はとくに人間の頭のなかに含まれているのです。これに対して、霊的実質がとりわけむごくに広がっている、とでも申し上げたいところは、人間がその脚を空間へと伸ばす、あるいはその腕を空間のなかへと差し伸べるということです。腕と脚にとって肝心なのは、この霊的実質が腕と脚を満たしているということ、腕と脚の本質的なものであるということだろうというのは、これは実際そのとおりなのです。実際のところ、腕と脚にとって、物質的実質はいわばそこでは霊的実質の内部に浮かんでいるだけであり、他方、頭というのは、実際いけば物質的実質から緻密に形成されたものです。——けれども私たちは、

人間がそれであるようなこういう形成物において、単に実質を区別するだけではなく、その形態化において力を区別しなければなりません。そしてこの場合にも、霊的な力と地上的・物質的な力とを区別しなければなりません。

さて力の場合にはこれがちょうど逆になっています。四肢と新陳代謝にとっては実質が霊的である一方、その内部の力、たとえば脚にとつての力は、重さであり物質的なのです。そして頭の実質は物質的である一方、頭の内部で働く力は霊的です。霊的な力が頭を貫いて流れ、物質的な力が四肢―新陳代謝人間の霊的実質を貫いて流れているのです。人間というものを完全に理解できるのは、人間において、その上部領域、頭部と、胸の上部領域、本来は物質的実質で、霊的な力に浸透されている―呼吸においてはもつとも低次の霊的力が働いている、と申し上げたいのです―胸の上部領域が区別されることによつてのみであり、さらに私たちは下部人間を、内部に物質的な力が働いている霊的実質から形成されたものと見なければなりません。ただ、言うまでもなく私たちがはつきりと理解しておかなくてはならないことは、こういう事柄は本来人間においてどういう状態であるか、ということなのです。つまり人間はその頭の性質を生体組織全体に広げているため、頭というのは、霊的な力に貫かれた物質的実質であり、この頭の本質すべてを人間の下部にまで広げ伸ばしている、ということを通じて存在するものでもあるのです。内部に物質的な力が働いている霊的実質を通じて人間であるところのもの、これは逆に上部人間に向かって上に送られます。こうして人間において作用しているものは相互に浸透し合っているのです。けれどもやはり、人間を理解することができるのは、このように人間を、物質的・霊的に、実質的にして力動的なもの、すなわち力存在でもあるもの、と見なすときのみです。

これにもまた大きな意味があります。と申しますのも、外的現象から目を転じ、内的な本質に入り込んでいくと、たとえば、人間におけるこの実質的なものと力に則つたものの配分に不規則が生ずることは許されない、ということが私たちに示されるからです。

たとえば、人間において純粋な実質、純粋に霊的な実質であるべきものなかに、物質的な素材、物質的な実質が侵入すると、つまりたとえば、本来は頭部に導かれるべき物質的実質が、新陳代謝組織のなかであまりに優勢になりすぎて、新陳代謝がいわば頭の本質に浸透されすぎると、そうすると人間は病気になるります、まったく特定のタイプの病気が生じてくるのです。そこで治療の

課題とは、こうした霊的に実質的なものなかに広がっている物質的な実質形成を、ふたたび弱め、駆逐することとなります。他方、人間の消化組織、霊的実質のなかの物質的な力に貫かれているという固有の性質を持つこの消化組織が、頭へと上に送られると、人間の頭は、こういう表現が許されるなら、過度に霊化され「spiritualisiert」ます、頭部の過度の霊化が起こるのです。その場合、これは病気の状態を示しますので、物質的な養う力をじゅうぶん頭に送り込んで、この物質的な力が霊化されずに頭に着くように配慮しなければなりません。

健康な人間と病んだ人間に目を向けるひとは、このような区別が役に立つことをすぐさま理解するでしょう、もつとも単なる外観だけでなく、真実を問題にする場合はですが。けれども、こういう事柄においてはさらに本質的にまったく別の何かが働いています。ここで働いているもの、つまり人間は私が示しましたような性質の存在であることによつて、自らをそういうものと感ずるのですが、そういうものは、今日の通常の意識において最初はまさに下意識にとどまっています。すでにそこにあるのです。そこではこれは、人間の一種の気分として、生の気分として現われてきます。これを完全に意識化させるのはやはり霊的な観照のみであり、この霊的観照を私は皆さんにただ以下のように描写することができますのみです。つまり、今日の秘儀参入学から、この人間の秘密、すなわち、物質的実質を必要とするもつとも主要な、もつとも本質的な器官は本来頭であり、それによつて頭はこの物質的実質を霊的な力で貫くことができるという秘密を知るひと、そしてさらに、四肢―新陳代謝人間において本質的なものは、霊的実質であつて、これは存続するために物質的力、重力や均衡力その他の物質的力が必要とする、ということを知るひと、つまり人間の秘密をこのように霊的に見通したうえでこの地上的人間存在を振り返つて見るひと、そういうひとにとつては、そもそも自分が人間として、地球に対して途方もない負債を抱えた者のように思える、ということなのです。と申しますのも、一方において人間は、人間存在として直立を維持するために一定の条件を必要とする、と言わなければなりません、これらの条件を通じて人間は元来地球の債務者なのです。人間は絶えず地球から何かを奪い取っています。つまり、人間は自らにこう言つて聞かせなければならぬと気づくのです、人間が地上生活を営む間に自らのうちに霊的実質として担っているものは、本来は地球が必要としているものなのだ、と。人間は死へと赴くときに、これを地球に残していかなければならない、なぜなら地球は自らの更新のために絶えず霊的実質

を必要としているからだ、と。人間は残していくことができず、(そうすれば)人間は死後の時期にあって人間の道を歩むことができなくなるでしょうから。人間はこの霊的実質を死と新たな誕生との間の生のために携えていかなくてはなりません、なぜなら人間にはこれが必要であり、この霊的実質を死の間携えていなければ、人間は死後いわず消滅してしまふでしょうから。

人間が成し遂げねばならないあの変化は、人間がその四肢―新陳代謝人間の霊的実質を死の門を通過して霊界へともたらずことよってのみ成し遂げることができるとです。人間がもし、本来地球に対して負っている債務を地球に返してしまつたら、人間は将来の受肉を引き受けることはできないでしょう。人間にはそれはできません。人間は負債者のままにとどまります。これは地球が中間状態にあるかぎり、さしあたりどういふ手段によつても改善できないことです。地球存在の終わりになれば、事態は変わってくるでしょう。

ともかくこういうことなのです、愛する友人の皆さん、霊視をもつて人生を見つめるひとは、単なる苦しみや悲しみ、それに私見では通常の生活が与えてくれるような幸福や喜び、単にそういうものを持つただけでなく、霊的なものを観ることで宇宙的感情[kosmische Gefuehle]、宇宙的な喜びと悲しみが生じてくる、ということなのです。秘儀参入とは、このような宇宙的悲しみ、たとえば自らにこう言い聞かせざるを得ないようなこういう悲しみの出現と分かちがたいものなのです、つまり、まさに私が私の人間本性を直立に維持することによつて、私は自らを地球の負債者へと形づくらざるを得ない、私が宇宙的にまったく公正であるなら本来は地球に与えなければならぬものを、地球に与えることができな、という悲しみです。

頭部実質のなかにあるものについても同様です。地上生活全体を通じて、霊的な力が物質的な頭部実質のなかで働くことにより、この頭部実質は地球から疎遠になります。人間は実際自らの頭のために地球からこの実質を奪い取らなければならぬのです。しかも人間は人間であるためには、この頭の実質に地球外的なもの、霊的力を絶えず浸透させなければなりません。そして人間が死ぬと、今や地球は自分から疎遠になつてしまつた人間の頭部実質をまた引き取らなければならぬわけですが、これは地球にとつてはきわめて害になるものなのです。人間が死の門を通過してその頭部実質を地球に引き渡すと、この頭部実質、まったく霊化されてしまい、自らのうちに霊的な成果を担っているこの頭部実質の作用は、根本的に地球生命全体を毒します、本来その作用はこの

地球生命を害するものなのです。本来人間は、こういう事柄を見通すなら、こう言わなければなりません、この頭部実質を携えてまさに死の門を通過して行くのが人間にとつて公正なことだろ、なぜなら、この実質は本来、人間が死と新たな誕生の間に通過していく霊的領域にずっと適しているのだろ、と。(しかし)人間はそうできません。と申しますのも、人間がこの霊化された地球実質を携えて行つたとしたら、人間は死と新たな誕生との間の自らの進化のすべてに敵対するものを絶えず作り出すことになるからです。もしこの霊化された頭部実質を携えて行つた場合に人間に起こりうることは、きわめて恐るべきことでしょう。これは、死と新たな誕生との間の人間の霊的進化が無に帰するように絶えず働きかけるでしょう。

ですからこういう事柄を見通すなら、こう言わざるを得ません、ひとはこのことによつてもまた地球に対して負債のある者となるのだ、と。ひとが地球のおかげで手に入れた地球にとつては使用不可能にしてしまつたものを、ひとは後に残して行かざるを得ず、携えていくことができないからです。ひとは地球に置いていくべきものを地球から奪い去り、自分が携えていくべきものを、地球にとつて使用不可能にしてしまつたものを、自らの土の塵とともにこの地球に委ねます、地球はその全生命において、全存在として、それによつて法外な苦しみを与えられるのです。

つまり、まさに霊眼を通して観るとまづもつて、途方もなく悲痛な感情のような何かが人間の魂に横たわつていて、ということなのです。そしてさらに長大な時間を見はるかし、系全体の進化を見渡すときのみ、次のような展望が開かれます、つまりたとえば、地球がいつの日かその最後を迎えるとき、人類の進化の後の段階、木星、金星、ヴルカン段階において、ひとはこの罪をいわば清算し、罪を脱することができるであらう、と。

このように、個々の地上生活を全うするということによつてのみならず、そもそも地球人であること、地球に居住し地球からその実質を引き出すことを通しても、ひとはカルマを、世界のカルマ、宇宙的カルマを生み出しているのです。

ここで人間から目を転じ、その他の自然に目を向けることもできます、すると、なるほど人間は、私がたつた今お話しいたしましたような罪をいわば積み重ねていかざるを得ないけれども、それでも宇宙の本質を通して絶え間なく調停がなされているのだ、ということもわかるでしょう。こうして、存在の驚く

べき秘密、これを統合してはじめて、本当に宇宙の叡智についての表象として自らのもののできる秘密へと入り込んでいきます。

人間から眼差しを転じて、ここ数日鷲によって代表されるものとして私たちに現われてきた鳥の世界に眼差しを向けてみましょう。鷲について私たちは、鳥の世界を代表するものとして、いわば鳥の世界の特性と力を統合した動物として語ってきました。そして鷲を観察することで、私たちは結局、宇宙的連関において鳥の世界全体に責任を負っているものを観察しているのです。ですから鷲については今後またお話しするでしょう。——皆さんにお話ししましたことは、鷲は本来人間の頭に対応していること、人間の頭において思考を行動させる力が、鷲にあつてはその翼を行動させる、ということでした。したがって、鷲の翼においては、太陽が流入した大気の力、光が流れ込んだ大気の力が作用しているのです。鷲の翼で煌めいているのは、光に浸透された大気の力です。

さて、やっかいな特性もいくらかつけ加えることができるとはいへ、やはり鷲というのはその宇宙的現存に関して注目すべき特徴を持っています、つまり、いわば鷲の皮膚の外側、翼の形成のなかに、この太陽の作用に貫かれた大気の手が作り上げるものすべてがどまつている、ということですが。鷲が死んではいじめて、ひとはここで起こっていることに気づきます。

鷲が死ぬと、反芻をする牛の徹底的な消化に対して、鷲の消化がいかに奇妙な、表面的とても申し上げたいようなものであるかがはじめて明らかになるのです。多くの動物の種を代表するものとして、牛は本当に消化動物です。牛においては徹底的な消化が行なわれます。どの鳥もそうですが鷲は表面的に消化します。いわばすべてが単に始まりだけであり、消化の営みも発端のみなのです。そして鷲という存在において、この消化というものは、私たちが全体を見れば、本来生存の副業とても申し上げたいものです。これは鷲のいたるところにおいて副次的な力として扱われています。これに対して、鷲において徹底的な経過を示しているのは、鷲の翼に用いられるものすべてです。他の鳥の場合、これはもつと強力です。途方もなく念入りに、羽毛のなかのすべてが仕上げられます。それでこのような羽毛は本来驚くべき構成物なのです。つまりそこには、地上的素材（質料、マターエ[Materie]）とても呼びたいものがもつとも強力に現われているのです。この地上的素材を鷲は地球から取り出し、上部の力によって霊的に浸透されますが、鷲は再受肉を要求しないので鷲に独占され

ることはありません。したがって、上部の霊的力を通じて翼のなかの地上的素材に生ずるもの、これによってそのとき起こることが鷲を困らせる必要はありません、霊界においてそれがさらに作用しても、鷲を困らせる必要はないのです。

ですから、鷲が死に今やその翼も崩れていくと——申し上げましたように、これはどの鳥にもあてはまりません——、そのとき霊化された地上的素材が霊の国に入っていく、再び霊的実質へと変化させられる、ということがわかります。おわかりのように、私たちは頭に関して鷲と奇妙な親和関係にあります。私たちにできないことを鷲はすることができます。鷲は、地球で霊的力を通じて物質的実質において霊化されたものを、絶え間なく地球から運び去るのです。

私たちがあんなにも独特の感情をもつて、飛翔する鷲を見つめるのは、この所以もあるからです。私たちは鷲を、何か地球から疎遠なもののように、地球よりも天に関わっているもののように感じます。たとえ鷲がその実質を地球から取り出しているにしてもです。けれども鷲はどうやってそれを取り出しているのでしょうか。鷲は地球実質にとって単に奪う者にすぎない、というやりかたで鷲はそれを取り出すのです。地球存在における通常の月並みな法則のなかでは、鷲がさらに何かを得ることは見込めません。鷲はその素材を盗み取り、奪い取ります、そもそも鳥類全般がさまざまに素材を奪うように。けれども鷲はそれを清算します。鷲は素材を奪いますが、霊的力として上部領域にある力によってその素材を霊化させ、そして死んだ後、自分が奪ったこの霊化された地球の力を霊の国にさらっていくのです。鷲とともに、霊化された地球質料が霊の国へと引き入れられます。

動物が死んでも、その生命は完結しません。動物の意味は宇宙万有のなかにあります。鷲が物質的な鷲として飛翔すれば、鷲はいわばそのありかたのひとつの形象にすぎません、鷲は物質的な鷲として飛翔するだけです。ああ、でも鷲は死後も飛翔するのです！鷲の性質の霊化された物質的素材がかなたへと飛翔していき、霊の国の霊実質とひとつになるのです。

おわかりですね、こういう事柄を見通せば、宇宙万有における驚くべき秘密に到達します。このときはじめて、地球の動物その他のこれらのさまざまな形姿が存在しているのはいったいなぜなのか、と言えるのです。これらの形姿はすべて宇宙全体において意味があるので、大きな、とてつもなく大きな意味があるので。

今度は、これも数日來私たちが観察してまいりましたもう一方の極端に移りましょう、ヒンズー教徒にあれほど崇拜されている牛に移りましょう。確かにこれはもう一方の極端です。鷲が人間の頭に非常に似ているように、牛は人間の最新陳代謝組織に非常に似ています。牛は消化動物なのです。そして、奇妙に聞こえようと、この消化動物は本来靈的実質から成り立っていて、食された物質素材はこの靈的実質に引き入れられ、混入されるのみなのです。つまり牛のなかには靈的実質があつて（図示される）、物質素材がこのいたるところに入り込み、靈的実質に摂取され、加工消化されます。これを徹底して遂行するために、牛の消化の営みはあんなにも念入りで徹底的なのです。これは考えうるもっとも徹底した消化の営みであり、この点で牛は実際、もっとも徹底して動物であることに気を配っているわけです。牛は徹底して動物です。事実牛は、動物存在を、この動物生体組織、この動物自我「Tier-Ichheit」を宇宙から地球へと地球の重力の領域に引き下ろすのです。

血液の重量と全体重との比率を牛と同じくする動物はおりません、（他の動物は）体重に対する血液の比率が、牛よりも多いか少ないかいずれかです。そして重量は重さと、血液はエゴ性「Egoität」と関係があります。人間のみが有しているエゴ性「Egoität」ではなく、エゴ性、個別であることと関係があるのです。血は動物をも動物にします、少なくとも高等動物にするのです。こう言えるかもしれませんが、牛は宇宙の謎を解いた、徹底して動物であろうとするとき、血液の重さと全体重の重さとの正確な比率をどのように保つのか、という謎を解いたのだ、と。

よろしいですが、いにしえの人々が獣帯（黄道十二宮）「Tierkreis」を「獣帯」と名づけたのはいわれの無いことではないのです。獣帯は十二の部分から成り、いわばその全体が十二の個々の部分に分けられています。宇宙から、獣帯からやってくるこの力は、諸々の動物のなかでまさに自らを形づくるのです。しかし他の動物たちはそれほど厳密にこの力に従いません。牛は、その体重の十二分の一が血液の重さです。牛の場合血液の重量は体重の十二分の一ですが、ろばの場合はわずかに二十三分の一、犬の場合は十分の一です。どの動物も異なつた比率になります。人間の場合血液は体重の十三分の一です。

おわかりですね、牛は動物存在全体を重さのなかに現わすことを、可能な限り徹底的に宇宙的なものを表現することを目指してきたのです。私はここ数日にわたって、牛は本来上なるものを物質的・質料的なもののなかに具象化して

いるが、それは牛のアストラル体に見て取れる、とお話ししてきましたが、まさにこのことのなかに、牛が自身の内的な重量の比率において十二分割を正確に維持していることが現われています。牛は内部において宇宙的なのです。牛にあつてはすべてが、靈的実質になかに地球の諸力が取り入れられているような状態なのです。地球の重さは牛のなかの獣帯の比率で分割されることを余儀なくされます。地球の重さは、十二分の一をエゴ性へと展開させることに応じざるを得ないので、牛はすべてを地上的比率のなかに押し込みます、牛がその靈的実質のなかに有している地上的比率のなかにです。

このように、牧場に横たわっている牛は、事実靈的実質なのです、この靈的実質は地球素材を自らのうちに摂取し、吸収し、自らに似たものにするのです。牛が死ぬと、牛が自らのうちに担っているこれらの靈的実質は、地球全体の生命の恵みとなるために地球素材とともにこの地球に摂取されることが可能となります。ですから、牛に対してこういう感情を持つのが正しいのです、つまり、お前はまさしく供犠の動物だ、おまえは地球が必要としているものを絶えず間なく地球に与え続けているのだから。お前が与えるものがなかったら、地球はこの先存続することはできないだろう、お前が与えるものがなかったら、地球は硬化し、ひからびてしまつたらう。お前は地球に絶え間なく靈的実質を与え、地球の内的な活動性、内的な生命力を回復させている、という感情です。

そして皆さんが、一方に牛のいる牧場を、もう一方に飛翔する鷲を、ごらんになるなら、そこに注目すべき一対が得られます、鷲、これは、靈化されてしまったために地球にとつて使用不可能となつた地球素材を、死ぬときにかたの靈の国に運び去ります、牛、牛は死ぬとき、地球に天の素材を与え、そうして地球を回復させます。鷲は、もはや地球には使用できず、靈の国に戻さなければならぬものを、地球から取り除きます。牛は、地球が靈の国からの回復させる力として絶えず必要としているものを、地中にもたらしすのです。

ここで皆さんは、秘儀参入学から浮かび上がってくる感情のような何かをごらんになるのです。と申しますのも、通常次のように信じられているからです、そういう秘儀参入学、ひとはともかくもそういうものを研究する、でも結局それが与えてくれるのは概念、概念以外のなものでもない、ひとは超感覺的なものについての観念で頭をいっぱいにしていて、ふつと感覺的なものについての観念で頭をいっぱいにするのと同じように、と。ところがそうではないのです。こういう秘儀参入学において先に進めば進むほど、以前はそれについ

て予感もしなかつたにせよ、どんなひとにも無意識的に存在している感情を、ひとは魂の奥深くから引き出してくるようになります、あらゆる存在を以前感じ取っていたとは別様に感じ取るようになるのです。私はある感情を皆さんにこのように描写することができず、これは精神科学、秘儀参入学をまさに生き生きと把握することの一部なのです。これは、ひとは次のように自らに語らざるを得ない、という感情です、つまり、人間の眞の性質を認識すれば、地球上に人間しかないとしたら、地球がそもそも必要なものを得るといふこと、そして正しい時期に地球から靈化された（物質）素材が取り除かれ、靈素材が与えられるということに対して、ひとは絶望的にならざるを得ない、と。ひとは本来、人間の存在と地球の存在との間のこのような対立を感じ取らざるを得ないので、これはきわめて悲痛な対立です、人間が地球上で正しく人間であるうとすれば、地球は人間によって正しく地球であることができず、と言わざるを得ないがゆえに悲痛なのです。人間と地球はお互いを用いています、人間と地球は互いに支え合うことができず、一方の存在が必要とするものが他方から失われ、他方が必要とするものが一方から失われます。周囲の環境が現われてこないなら、人間と地球との生の連関についてひとは安心していられないでしょう、そしてひとは自らにこう言い聞かせざるを得ないでしょう、靈化された地球実質を靈の国へと持ち去ることに人間にできないこと、これを成就するのは鳥の世界なのだ、と。さらに、人間が靈的実質として地球に与えることができないもの、これを与えるのは反芻動物たち、そしてその代表としての牛なのだ、と。

「ごらんのように、これによって宇宙はいわば、ひとつの全体へと完結するのです。単に人間だけを見ると、感情のなかに入り込んでくるのは地球の現存についての危うさですが、人間の周囲にあるものを見ると、再び安心感が得られるのです。

今や皆さんは、ヒンズー教のように深く靈的なものに入り込んでいく宗教的世界観が牛を崇拜することに、さほど驚きをお感じにならないでしょう、なぜなら、牛は地球を絶え間なく靈化し、牛自身が宇宙から取り出してくるあの靈的実質を絶えず地球に与え続けるからです。本来このイメージはリアルなものになるはずなのです、草をはんでいる牛の群の下で、大地（地球）がいかに喜びをかき立てられて生きているか、そこで草をはんでいるものたちがいることよって宇宙からの栄養の確保が約束されたために、いかに元素靈（精霊）

[Elementargestir]たちが下で歓呼の声を挙げていてか、というイメージです。驚を取り巻いて漂いつつ、踊り歓呼の声を挙げる元素靈たちの空気の環がほんとは思い描かれるはずなのです。そうすれば靈的眞実が再び描かれたということ、そして靈的な現実の内部に物質的なものを見出せるでしょう、驚がそのアウラ[Aura]のなかに継続されているのが、そして、そのアウラのなかに、元素的な空気の精（精霊）たちと空気中の火の精（精霊）たちの歓声が続いていくのがわかること、でしょう。

まったく宇宙的であるために地上的存在に非常に抵抗するこの牛の独特のアウラをひとは見るでしょう、そしてこれが地の元素靈たちの上機嫌の感覚を呼び起こすのを見ること、でしょう、元素靈たちは、大地の闇のなかで生き続けることができるでしょう。牛のなかに現われているものは実際これらの精霊にとつて太陽なのです。地中に住まうこうした元素靈たちは物質的太陽に歓びを感じることはできませんが、反芻動物のアストラル体に歓びを感じることはできるのです。

そうなのです、愛する友人の皆さん、今日の書物には載っていない別の自然史というものもあるのです。それでは、今日書物に載っている自然史の最終結果とは、いったいどんなものでしょうか。

それは、私が一度論評したことのあるアルベルト・シュヴァイツァーのあの本の続編（1）に他なりません。皆さんは、私が少し前にゲーテアムで行なった、現代の文化状況についてのこの小著の論評を覚えておいてかもしれません。この続編の前書きは実に、現代の精神の産物のかなり悲しむべき一章といふものです、と申しますのも、私が当時論評いたしました最初の巻には、少なくともまだ、私たちの文化に欠けているものをつけ加えるためのある種の力と洞察があります、ですからこの前書きは事実本当に悲しむべき一章なのです。

編註

1 アルベルト・シュヴァイツァーのあの本の続編『文化哲学』文化の没落と復興（ベルン、1923年）「文化の外見上の局面と現実の局面」という題のシュタイナーの論評は、全集版『現代の文化危機のさなかにあるゲーテアム思想』通刊「ゲーテアム」からの論文集「921-1925」（GA36、100頁以下）に所収。

アルベルト・シュヴァイツァー：Albert Schweitzer、1875-1965

ロテスタント神学者、哲学者、医師、音楽家。1913年よりガボン（アフリカ西部の共和国）のランバレーネで派遣医師。シュヴァイツァー、ルドルフ・シュタイナーとの出会いも参照のこと。これは『ルドルフ・シュタイナーの思い出』（エーリカ・ベトツレ、カルト・フィール編、シュトゥットガルト、1979年）に所収。33頁以下。

なぜなら、ここでシユヴァイツァーは自分が、知は結局いかなるものも与えることはできない、ひとは認識によるのとは別のどこから世界観と倫理学を獲得せねばならない、ということを見抜いた最初の人物であると豪語しているからです。

さて、先ず第一に、認識の限界についてはもうじゅうぶん語られてきましたし、ひとが自分を認識の限界について語った最初の人物であると思うことには、どう申し上げるべきか、いささか近視眼的なところがすでであります。認識の限界についてはすでに自然科学者たちがありとあらゆる言い方で語ってきたのですから、ですからこの巨大な誤謬を最初に発見したなどと自慢するには及ばないのです。

けれどもこれを度外視しても、まさにこのことは、シユヴァイツァーのような卓越した思想家——この第一巻に関しては彼はやはり卓越した思想家です——が、こう語るに至ったということに他なりません、つまり、我々が世界観を持つとうとするなら、我々が倫理を持つとうとするなら、知と認識とを我々はまったく問題にしない、これらは我々に何ひとつ与えはしないのだから、と。今日まさに書物に載っていて公に認知されている知と認識、そういう諸々の科学、認識は、世界のなかに意味を発見する——シユヴァイツァーの言うように——ことに通じていくことはありません。と申しますのも、結局のところ、こうした人物たちが世界を眺めているように眺めるなら、実際次のようなこと以外には何も浮かんでこないからです、つまり、鷲から紋章の動物を作ることができると、という点は別として、鷲が飛翔することには意味がない、とか、雌牛が牛乳を与えてくれることは、地上的に有用である、とか。人間もまた単なる物質的存在でしかないのです、物質的有用性しか持つておらず、世界（宇宙）全体にとつていかなる意味も与えない、ということになります。

それ以上進もうとしないのであれば、そのひとは世界に意味が現われてくる水準にはないということも言つてもありません。霊的なものが、秘儀参入学が、世界（宇宙）について語りうることへと、ひとはまさに移行していかねければならないのです、そうすれば、この世界（宇宙）の意味が見出されるでしょう。しかもそのときこの宇宙の意味は、あらゆる存在のなかに驚くべき秘密を発見することによって、見出されるのです、それは、死にゆく鷲と死にゆく牛とともに起こる秘密、そしてこの両者の間にライオンがいて、ライオンは自らのうちでその呼吸のリズムと血液循環のリズムの協和を通じて霊的実質と物

質的実質の均衡を維持する、つまりライオンは今や、私がお話ししましたような上と下への正しいプロセスを生じさせるために、どれだけの鷲が必要で、どれだけの牛が必要であるかを、その集合魂を通して調整するものである、といった、そういう秘密です。

ごらんのように、この三種の動物、鷲、ライオン、雄牛あるいは雌牛は、驚くべき本能的な認識からまさしく生み出されたのです。これらと人間との親和性を感じ取られていました。と申しますのも、こういう事柄を見通すなら、人間は自らにこう語らざるを得ないからです、鷲は、私が私の頭によって自分で果たすことができない課題を私から取り除いてくれる、牛は、私が私の新陳代謝、私の四肢組織を通じて自分で果たすことのできない課題を私から取り除いてくれる、ライオンは私が私の律動組織を通じて自分で果たすことのできない課題を私から取り除いてくれる、と。こうして私と三種の動物から宇宙的連関の全体が生成する、と。

このようにひとは宇宙的連関のなかに組み込まれて生きています。このようにひとは宇宙における深い連関を感じ取り、存在を統括している力、人間が織り込まれ、さらに人間を取り巻いて波打ち、うねっているこの存在を統括する力が、本来いかに聡明であるかを認識することを学ぶのです。

さてごらんのように、先週お話ししました三種の動物に対する人間の関係を探究したことにより、このとき私たちに立ち現われてきたものをこのようにまとめることができました。(2)

編註 2 この講義に引き続いて、シュタイナーは第二ゲーテアヌム設立に関する募金活動のために見解を表明した。彼の「ゲーテアヌム貯金箱についての発言」は『人智学協会の歴史における運命の年1908年』(GA259 166頁)に掲載されている。

第4講 一九三三年一〇月二六日 ドルナ八

- ・かつての地球の状態と、現在の地球状態に見られるその名残
- ・土星―太陽と月―地球の区別
- ・土星―太陽的なものと昆虫界（特に蝶）との関連性
- ・昆虫界は太陽作用と共に働きかける火星、木星、土星作用の賜物
- ・植物界の発生…地球に委ねられた胚と金星、水星、月の作用
- ・植物は地球に繋ぎとめられた蝶、蝶は宇宙に解き放たれた植物

私たちは、あるやりかたで、地球状態、宇宙状態、動物界それぞれと人間との連関を考察いたしました。これから数日間はまさにこの考察を先に進めていくことになるでしょう、けれどもきょうのところは、今後私たちの関心事となるにちがいないより広範な領域へのつなぎにしたいと思います。ここでまず最初に示唆しておきたいことは、すでに私の『神秘学概論』のなかで、宇宙における地球の進化は、この地球進化というものを問題にするなら、太古における地球の土星変容[Saturnmetamorphose]を出発点としなければならぬ、というふうな叙述されていたことです。この土星変容は、そもそもこの太陽系に属しているすべてのものがまだこのなかに含まれている、という状態として思い描くことができます。土星から月に至るこの太陽系の個々の惑星は、当時まだこの古い土星―これはご存じのように熱エーテルからのみ成り立っています―において、溶解した宇宙体[Weltenkoerper]なのです。つまり、まだ空気の密度すら獲得しておらず、熱エーテルそのものである土星は、後に独立した形態を取って個々の惑星へと個別化されるすべてのものを、同じくエーテル的に溶解した状態で含んでいるのです。

次いで私たちは、地球進化の第二の変容として、私がつまめて地球の古い太陽変容と呼んだものを区別します。ここでは、土星の火球から徐々に空気球が、光の流入した、光によって輝ききらめく空気球である太陽が形成されます。

さらに第三の変容があります、前の状態が繰り返されたのちにここで形成されてくるものは、一方では、当時まだ地球と月とを包含していた太陽的なものであり、さらには、他ならぬ分離された土星をその一部とする外的なもの―これも『神秘学概論』に書かれているのをご存じですね―です。

けれども当時この月変容においては同時に、太陽と、地球と月との連関であ

るものが、分離するということが起こります。そしてもう何度も記述しましたように、今日私たちが見知っているような自然領域は当時存在しておらず、とくに地球は鉱物塊を含んでいませんでした、地球は―こつこつという表現が許されるなら―角質[Horntieg]のものでしたのです、したがって、固体成分が角質状に溶け合っていて、液体状になった月の塊から角質の岩がいわば突出していたのです。続いて、私たちの今日の地上の状態である状態が、第四の変容のなかで誕生しました。

さて、私たちがこれら四つの変容を順に描いてみますと、まず最初に土星変容、つまりのちにこの太陽系に含まれるものがすべてまだ溶解していた熱体、(それから)太陽変容、月変容、そして地球変容となります。私たちはこの四つを二つに分けることができます(図示される)。

ひとつよく考えてみてください、土星の太陽への進化において、まず気体的実質へと前進したものを私たちはどのように扱おうでしょう。進化は火球から始まり、火球が変容し、空気球へと凝縮します、この空気球はすでに光に浸透され、光にきらめいているのですが、これで進化の最初の部分が得られます。

さらに、月がその当初の役割を果たす進化の部分が得られます。と申しますのも、月が果たす役割はまさに、あの角質状の岩石形成物を形成することができるようになることだからです。月は地球変容の期間に放出されますね、月は衛星となり、内的な地球の力を地球に残していきます。たとえば、重さの力[Die Kräfte der Schwere]は、物理的な関係において月によって置き去りにされたものに他なりません。月自身は去ってしまいましたが、もしこの古い月の包含物の名残が置いていかれなかったら、地球は重さの力を発達させられないでしょう。月は宇宙空間におけるあのコロニーなのです、これについて私はもうずいぶん前に霊的観点から皆さんにお話しいたしました。月は地球とはまったく異なる実質を有していますが、月は地球に、広義の地磁気[Erdenmagnetismus]と各付けられるものを残していききました、地球の力、とくに地球の重力[Schwerkraefte]、重量作用とみなされる作用、これらは月が残していったものです。ですから私たちはこつこつと申すことができます、ここに(左)黒板に描かれた(左の2つの円)土星状態と太陽状態があります、両者をまとめると、根本的に熱の、光に浸透されて輝く変容です。そしてここには(右の2つの円)月状態と地球状態があります、月に担われた液体的変容、液体的なものは月変容の期間に形成され、さらに地球変容の期間にも残ります、そして固

体は、まさに重力を通じて出現させられるのです。

以上二つ（ずつ）の変容は、本来かなりはつきりと区別されます、そして明確に理解しておかなくてはならないことは、かつてあったものはすべて、後のものの内部にも潜んでいる、ということですから。古い火星土星であったものは、熱実質としてその後のすべての変容の内部に残りました、私たちが今日地球領域の内部をあちこち移動していたところでお熱にぶつかるなら、この私たちがいたるところで見出す熱は、古い土星進化の名残なのです。私たちが空気あるいは単に気体状の物体を見出すいたるところに、古い太陽進化の名残が得られるのです。私たちが太陽に貫かれて輝く大気を見わたすとき、私たちがこの進化の感情に満たされることによって、ほんとうはこう言うべきなのです、この太陽に貫かれて輝く大気のなかに、私たちは古い太陽進化の名残を得ているのだ、と。と申しますのも、この古い太陽進化というものが存在しなかつたら、私たちの大気と、今や外部にある太陽光線との親和性は存在しないでしょうから。太陽がかつて地球と結びついていたこと、太陽の光がまだ気体状であった地球の内部で自ら輝きを発していたこと、つまり地球は内部の光を宇宙空間に放射する空気球であったこと、こういうことを通じてのみその後の変容、つまり現在の地球変容が可能となったのです、こうして地球は、大気圏に囲まれ、そのなかに外から太陽光線が差し込んでくるようになりました。とは言えこの太陽光線は、地球の大気圏に深い内的親和性を有しています。この太陽光線はたとえば、今日の物理学者たちが粗雑に語るような、たとえばガス状の大気中を貫いていく小さな射出粒子がそうであるような、そういう光線ではありません、そうではなくこの太陽光線は、大気と深い内的親和性を有しています。そしてこの親和性は、かつて太陽変容の時代共にあったことの残響に他なりません。このように、以前の状態が繰り返し繰り返し多種多様なしかたで後の状態に入り込むことよって、すべては互いに親和関係にあるのです。全般的に見て、皆さんが『神秘学概論』のなかに見出すように、今ここで私が手短かに描き出しましたように地球進化が進行していくうちに、地球上と地球の周囲にあるもの、そして地球内部であるもの、これらすべてが発生してきました。そこで私たちは今やこう言うことができます、今日の地球を眺めると、私たちは地球の内部に、固体を生ぜしめるものを、本質的に地磁気のなかに繋ぎ止められた内的な月を持っている、と。内的な月、これは実際固体的なもの全般が存在するように、重さを持つものが存在するように作用するもので、重力と

は実に液体的なものから固体的なものを作り出すものなのです。私たちはさらに、本来の地球領域、すなわち液体的なものを持っていきます、これは多種多様なしかたで再び現われてきます、たとえば地下水として、また、雨となって上昇し下降する、水蒸気状態の水などとして。さらに私たちは周囲に、気体状のものを有しています、古い土星の名残である火的なものに貫かれたすべてのものを有しています。したがって私たちは、今日の地球においても、上方に太陽―土星あるいは土星―太陽であるものを指摘せねばならないのです。私たちは常にこう言うことができます、光に浸透されて輝く暖かい空気のなかに存在するものはすべて、土星―太陽である、と。そして私たちは上方を見上げ、この空気が貫かれて見えるのを見るのです、この空気が、土星作用であるもの、太陽作用であるもの、その後時の経過につれて本来の気圏として、ただし太陽変容の残響である気圏として発達してきたものに貫かれて見えるのを見るのです。これが得られるのは、私たちが眼差しを上に向けるときです（図示される）。

私たちが眼差しを下へ向けますと、後半の二つの変容の間に生じたものを継承するものがより多く得られます。重さ、固さ、もつと良い言い方をすれば重さを引き起こすもの、固体となっていくものが得られるのです、私たちは液体的なものを得ます、月―地球が得られるのです。いわば地球という存在のこの二つの部分を私たちは厳密に区別することができるのです。皆さんが『神秘学概論』を今一度こういう観点から通読なさるなら、太陽変容が月変容へと移行する箇所において、まさに表現全体を通じて深い区切りが入れられているのがおわかりになるでしょう。このように今日においてもなお、上にあるものつまり土星の鋭い対照（コントラスト）があります。つまり私たちは、土星―太陽的―空気のものと、月―地球的―液体的なものとを完全に区別することができます。一方は上、他方は下です。

地球進化においては全般的にみて地球に属するものすべてがともに進化したため、こういう事柄を秘儀参入学をもって見通すひとの眼差しがまず最初に向かうのは、昆虫の世界の多様性です。単なる感情であつても、この飛び回りきけざるを得ない、と考えられるのです。これはまったくそのとおりです。私たちが蝶をじっくりと見るとき、蝶は空中を、光の流入した、光に貫かれて輝く大気のなかを、きらめく色彩をみせて舞い飛びます。蝶は空気の波に運ばれる

のです。蝶は本来、月―地球的―液体的なものにはほとんど触れません。蝶のエレメントは上にあるものです。本来地球進化とはどのようなものであるかをさらに研究しますと、小さな昆虫の場合とくに、奇妙なことに地球変容の非常に初期の時代に至ります。今日光に貫かれて輝く大気のなかで蝶の翅としてきらめいているものは、最初は古い土星の時期に元基のなかで自らを形成し、古い太陽の時期にさらに進化しました。今日なお蝶が光―空気の創造物であることを可能にしているものは、このとき生み出されたのです。太陽が光を放射するという天分は太陽自身に帰せられます。太陽の光が物質のなかに火的なもの、きらめくものを生じさせる天分は、土星―木星―火星作用に帰せられます。ですから、蝶の本性を地上に捜し求めるひとは、結局蝶の本性を理解できません。蝶の本性のなかで働いている力を、私たちは上に捜さなければなりません。太陽、木星、土星のもとに探究しなければなりません。私たちがこの驚くべき蝶の進化のもっと細部に入り込んでいくと―私はすでに一度ここで、この蝶の進化を人間との関連においていわば記憶の宇宙的体現としてお話ししましたが―、もっと細部に入り込んでいくと、蝶はまず光にきらめきつつ空気に運ばれて地球の上方を舞い飛び、ということがわかります。蝶は卵を産みま

す。そう、粗雑な唯物主義の人は、蝶は卵を産む、と言います、なぜなら現在の非科学[Unwissenschaft]の影響下にあっては、そもそももっとも重要な事柄が研究されないからです。問題はこういうことです、蝶は卵を産むとき、いったい誰に卵を委ねるのか、と。

さて、皆さんが蝶の卵が産みつけられる場所をくまなく研究してごらんになると、蝶の卵は太陽の影響から遠ざけられることがないように産みつけられるということが、いたるところでおわかりになるでしょう。地球への太陽の影響は、単に太陽が地球を直接照らす場合にのみ存在するわけではありません。もう何度も注意を向けていただきたいのですが、農民たちは冬の間ジャガイモを地中に置いて土で覆います、なぜなら、夏の間は太陽熱と太陽の光の力としてやってくるものは冬の間は地球の内部にあるからです。地球の表面ではジャガイモは凍りついてしまいます。ジャガイモを穴に埋めてその上に土をかぶせると、冬の間は太陽の作用が地中にあるため、ジャガイモは凍りつかず、ちゃんとした良いジャガイモのままです。冬の間私たちは夏の太陽の作用を地下に求めなくてはなりません。たとえば私たちが12月にある程度の深さの地下に行くと、12月に7月の太陽の作用が得られるのです。7月には太陽はその光と熱

を地表に放射します。熱と光は徐々に深く入り込んでいきます。7月に私たちが地球の表面への太陽の力によって体験するものを12月に捜そうとするなら、私たちは穴を掘らなくてはなりません、すると、7月には地球の表面にあったものが、12月にはある程度深いところに、地下にあるのです。ここではジャガイモが7月の太陽のなかで埋め込まれています。このように、太陽は単に、ひとが粗雑な唯物論的知性でもって捜すところにも存在するわけではありません、本来太陽は多くの領域に存在するのです。ただ、このことは宇宙における季節によって厳密に統御されています。

けれども蝶は、卵が何らかのしかたで太陽との関係を保てないようなところには卵を産みません。ですから、蝶が地球領域に卵を産みつける、と言つのは、まずい表現なのです。蝶は断じてそんなことはしません。蝶は太陽領域に卵を産みつけるのです。蝶はまったく地球へは降りてきません。地上的なものなかに太陽が存在するいたるところに、蝶はその卵を産みつけるための場所を捜します、そのためこの蝶の卵はまったくもって太陽影響下のみあります。蝶の卵は全く地球の影響下にはないのです。

次いで、ご存じのように、この蝶の卵から幼虫が這い出していきます。つまり幼虫が出てきて太陽の影響のもとにとどまるのですが、今やその他の影響も共に受けるようになります。まだ他の影響を共に受けないうちは、幼虫は這い出してくるのができないでしょう。これは火星の影響です。

地球を思い浮かべていただいて(図示される)そして火星が地球の回りを回転するとしますと、上のいたるところに火星の流れがあつて、しかもとどまり続けます。火星がどこかにある、ということが問題なのではなく、私たちが火星領域を有しているということ、そして幼虫が這い出していくとき、幼虫は火星領域の意味において這い出していくのだ、ということが重要なことです。それから幼虫はさなぎになり、自らの周囲に繭を作り出します。私たちは繭を得るのです。私は皆さんに、これは幼虫の太陽への献身であること、このとき紡がれる糸は光線の方向に紡がれることをお話いたしました。幼虫は光にさらされ、光線を追いかけて、紡ぎ、暗くなると中断し、また紡ぎます。これはすべて本来、宇宙的な太陽光、物質素材(マテリアル)に浸透された太陽光なのです。つまり皆さんがたとえば、皆さんの絹の衣服に用いられる蚕の繭を手にとれるとき、絹のなかにあるものは、まさしく太陽の光、蚕の物質素材が紡ぎ込まれた太陽光なのです。自身の体から蚕はその実質を太陽光線の方向に紡ぎ込

みます、そしてそうすることによって自らの周囲に繭を作り出すのです。けれどもこれが起こるためには、木星作用が必要です。太陽光線は木星作用によって修正されなければならないのです。

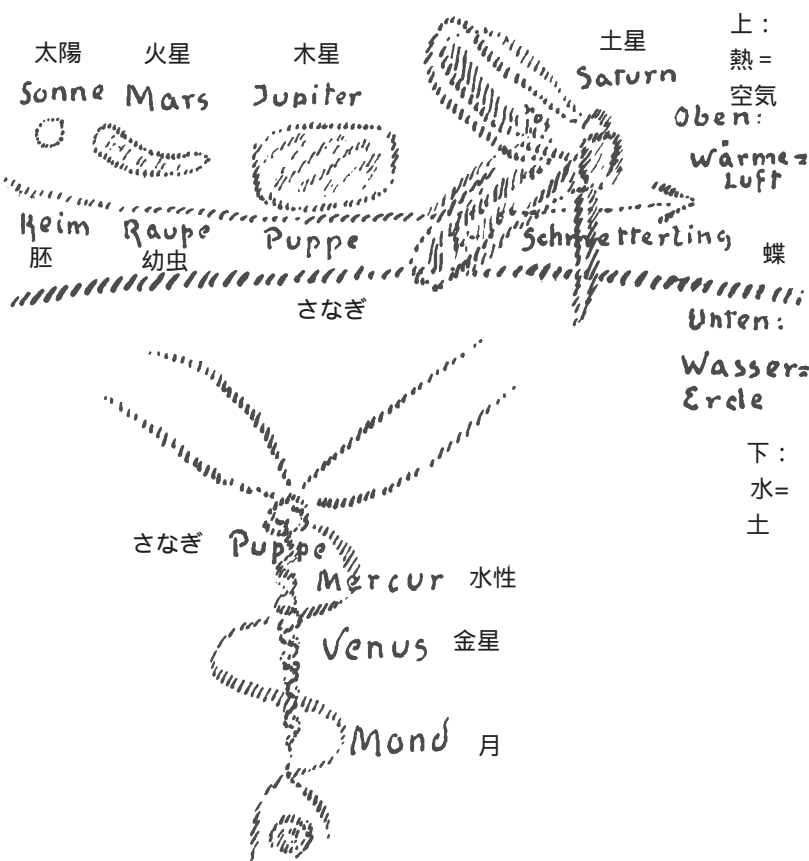
そして、ご存じのとおり、繭から、さなぎから這い出してくるのは、蝶です、そう、光に運ばれ、光に輝く鱗翅類です。蝶は、ちょうどクロムレック（環状列石）に射し込んでくるようにしか光が入ってこない暗い部屋を後にします、このことを私は皆さんに古代のドルイドのクロムレックによってお話ししました。このとき太陽は土星の影響下に入ります、そして土星と共にあることよってのみ太陽は、鱗翅類が空中でさまざまな色彩に輝くように光を空気のなかに送り込むことができるのです。

ですからよろしいですか、私たちが大気中を飛ぶ無数の蝶の群を眺めるとき、その内部には私たちがそれについてこう言わざるを得ない何かがあるのです、これは根本的に地球の産物などではない、これは上から地球へと産み落とされたのだ、と。蝶はその卵を、太陽から地球へやってくるものより下へは決して携えていきません。宇宙は地球に無数の蝶の群を贈ります。土星は蝶に色彩を与えます。太陽は飛翔の力を、光の支える力その他によって引き起こされた飛翔の力を与えます。

つまり実際のところ私たちは蝶のなかに、小さな存在を、太陽と太陽を越えたこの太陽系であるものによってこの地球上へとまき散らされた小さな存在とでも申し上げたいものを、見なければなりません。蝶、昆虫全般、とんぼ、その他の昆虫たちは、まさしく土星、木星、火星および太陽からの賜物なのです。もし太陽の向こうにある諸惑星が太陽と共に、地球にこの昆虫界という贈り物を与えてくれないとしたら、地球は、たったひとつの昆虫も生み出すことにはできないでしょう、蚤一匹たりともです。事実、土星、木星その他は非常に物惜しみしないので、昆虫界を羽ばたき出させることができます、これは地球進化が体験した最初の二つの変容のおかげなのです（図参照）。

さて今度は、後半の二つの変容、月変容と地球変容がいかに共に作用してきたかを見てみましょう。さて、蝶の卵はまったく地球に委ねられないとはいえず、やはり次のようなことは指摘されなければなりません、つまり、月変容つまり第三の変容が始まった頃、蝶はまだ今日のようなものではなかったということです。地球もこれほど太陽に依存してはいませんでした。太陽はもともと第三の変容の当初は、まだ地球と共にあったのであり、その後になってはじめて分

離したのです。したがって蝶もまだ、その胚「Keim」を地球にまったく委ねないほど脆くはありませんでした。蝶はその胚を地球に委ねることと同時に太陽の変容においては、昆虫界の遠い祖先について語ることもできるのみです。とは言え、宇宙に、外部の惑星や太陽に委ねるといことは、当時はまだ地球に委ねるといことでした。地球が濃密化し、水を獲得してはじめて、地球が月の磁気的な力を獲得してはじめて、事態は変化し、差異が生じてきたのです。さてこう考えてみましょう、このすべて、つまり熱―光は上に属します、今度は下を考えると、水―地です。地球に委ねられる運命にあった胚を想定してみましよう、一方、別の胚は、引き留められ、地球ではなく地上的なもの内部の太陽にのみ委ねられます。



さて、第三の変容つまり月変容が起こったときに地球に委ねられた胚を想定してみましよう。よろしいですか、この胚、これは地球作用の影響下、水的な地球―月作用の影響下に入り、これは、昆虫の胚が太陽作用の影響下と太陽より上にあるもの、影響下にのみ入るのと同様です。そして、これらの胚が地―水作用の領域に入ったことによつて、これらの胚は植物の胚となりました。そして上に残された胚、これらは昆虫の胚のままとなりました。さらにそれから第三の変容が始まったとき、当時太陽的であったものから月の地球的なものへと変化したものを通じて、植物の胚がこうして地球進化の第三変容の内部に発生したのです。今やこの地球外の宇宙の影響のもとに得られたもの、胚から幼虫、さなぎを経て蝶となるこの進化全体を、皆さんは今やこのように追求することができます。種子が地球的になることによつて生じてくるのは蝶ではありません、種子が地球的になることによつて、――今や太陽ではなく――地球に委ねられることによつて生じてくるのは、植物の根、つまり胚から発生する最初のものなのです。そして、幼虫が火星から発する力のなかで這い出していく葉わりに、葉が生えてきます。上に向かって螺旋状の位置に沿って生えていく葉です。葉とは、地球の影響下に入った幼虫なのです。這っている幼虫をよくごらんになると、上において下つまり植物の葉に対応するものが得られます、葉は太陽領域から地球領域に移された種子によつて根となったものから変容して生じるのですが、この葉に対応するものが得られるのです。

皆さんがさらに上昇すると、萼のある位置に向かつてますます収縮した、さなぎであるものが得られます。そして最後に、鱗翅類が花の中に発生します、上空の蝶と同様に色とりどりの花のなかにです。円環は閉じます。蝶が卵を産むように、花の中にはまた未来のための種子が発生します。おわかりですね、私たちは上空の蝶を見上げます、私たちは蝶を空中に持ち上げられた植物と理解するのです。卵から鱗翅類（の成虫）に至る蝶は、地球の影響のもとに下で植物であるものと同じものですが、上位惑星とともに太陽の影響下にあるのです。これが葉に達すると（図参照）、地球から月の影響、さらには金星の影響と水星の影響が得られます。それからまた地球の影響にもどります。種子は再び地球の影響なのです。

さてごらんのように、私たちの前に自然の大きいなる秘密を現わす二つの句を置くことができます…

植物を見よ
植物は地球により
繋ぎとめられた蝶。

蝶を見よ
蝶は宇宙により
解き放たれた植物。

植物――それは地球（大地）により繋ぎ止められた鱗翅類です！鱗翅類――それは宇宙により地球（大地）から解き放たれた植物です！

蝶を、昆虫全般を、胚から飛び回る昆虫に至るまで眺めるなら、それは空中に持ち上げられた、宇宙により空中に形成された植物なのです。植物を眺めるなら、それは下に繋ぎ止められた蝶なのです。卵は地球に要求されます。幼虫は葉形成に変容させられます。収縮したもののなかには、さなぎ形成が変容させられています。さらに、鱗翅類のなかに発生するものは、植物の場合花のなかに展開されるのです。蝶―昆虫界全般と植物界との間にあんなに密接な関係があるのも驚くにはあたりません。と申しますのも、そもそも、昆虫たち、蝶たちの根底をなしている霊存在たちはこう言わざるを得ないからです、この下には私たちに近いものたちがいる、私たちはこれらに親しまねばならない、これらと結びつかねばならない、これらは私たちの兄弟だからだ、と。これらと結びつかねばならない、これらは私たちの兄弟だからだ、と。これらは兄弟だ、地球領域に下降していき、地球によつて繋ぎ止められ、別の生存状態を受け入れた兄弟なのだ、と。

また一方、植物に魂を吹き込む霊たちが、蝶たちを見上げてこう言つこともあり得るでしょう、これは地球の植物の（うちの）天に近いものたちだ、と。よろしいですか、宇宙の理解は抽象をもつてしては成立しない、と言えます、抽象では理解するために不十分だからです。なぜなら、宇宙において働いているものからして、もつとも偉大な芸術家だからです。宇宙はあらゆるものを法則に従つて、もつとも深い意味において芸術家の感覚を満足させる法則にしたがつて形成します。抽象思考であるものを芸術家の感覚のなかで変容させることによつて以外、誰も地球に沈降させられた鱗翅類を理解できません。光と宇宙の諸力によつて空中へと持ち上げられた植物の花の内容を、誰も蝶のなかに

見て理解することはできません、抽象的思考に再び芸術的な運きを与えることのできないひとは誰も。とは言え、私たちが自然物と自然存在とのこの深い内的な親和性に注目するとき、それはともかくも何かとほうもなく精神を高揚させるものであることには変わりありません。

昆虫が植物にとまっているのを見ること、そして同時に、植物の花をアストラル的なものがいかに統べているかを見ることは、何かまったく特別なことです。そこでは植物は地上的なものを抜け出そうとしているのです。植物の天への憧れがさまざまな色彩にきらめく花びらを統べています。植物は自分ではこの憧れを満たすことはできません。そこで植物に向かって宇宙から、蝶であるものが放たれます。植物は蝶を見つめます、蝶の中で自分の望みがかなえられているのを見るのです。植物界の憧れが、昆虫、とりわけ蝶の世界を観ることで鎮められる、ということ、これは地球を取り巻く驚くべきほどの結びつきです。満開の花々の色彩がその色を宇宙に放射することで示している切なる願い、これは、植物に向かって鱗翅類がその色彩をきらめかせて近づいてくることにより、植物にとつてその憧れの認識実現のようになるのです。放射するもの、熱を放射する憧れ、天から放射されてくる満足、これが植物の花の世界と蝶などの鱗翅類世界との交流なのです。これこそ、ぜひとも私たちが地球の周囲に見なければならぬものです。

さて、植物界への移行が得られましたからには、人間から動物に至った観察を次の時間に拡張していくことができるでしょう。今や私たちは植物界を組み入れることができ、こうして次第に、人間と地球全体との関係へと至ることができるでしょう。しかしそのためには、飛翔する空中の植物つまり蝶から、地に固着している蝶つまり植物へと、いわば橋が架けられることがどうしても必要でした。大地の植物は地に固着している蝶です。蝶は飛翔する植物です。私たちがこの地に結びつけられた植物と天に解き放たれた蝶との関係を認識でき始めて、動物界と植物界との間に橋を架け、さらにはきつとある種の無関心をもってあらゆる俗物性、あいもかわらず自然発生云々がどうであったかを語り続ける俗物性を見下ろすこともできるのです。これらの散文的概念をもってしては宇宙万有（ウニヴェルズム）の領域、到達すべき宇宙万有の領域に到達できません。この領域に到達することは、散文的概念を芸術的概念に転換することができ、さらに次のようなことを思い浮かべることができるようになって始めて可能なのです、つまり、太陽にのみ委ねられた天から生まれた蝶の卵か

ら、植物が後になつてから生じるよつすを、以前は太陽のみに委ねられていた蝶の卵が今は地球に委ねられることにより、この蝶の卵が変容させられることで植物が生じてくるよつすをです。

第5講 一九三三年一〇月二七日 ドルナ八

- ・蝶、鳥による地球素材の靈化
- ・蝶は生きている間に、鳥は死ぬときに、
靈化した地球素材を宇宙にもたらす
- ・蝶と鳥の世界を通じて地球は宇宙に靈化された素材を放射する
- ・星は無機的なものではなく、生命あるもの、靈化されたものの結果
- ・蝶は光エーテルに、鳥は熱エーテルに属する
- ・鳥は呼吸を通じて体内の空気に熱を生み出す
- ・蝶の呼吸と高等動物の呼吸
- ・蝶は光の生きもの、鳥は空気の生きもの
- ・コウモリは黄昏の動物、地球の重さを克服できない
- ・蝶は宇宙の記憶、鳥は宇宙の思考、コウモリは宇宙の夢
- ・コウモリは靈的実質を宇宙空間ではなく空気中に分泌する
- ・コウモリの分泌の残存物を人間が吸い込むことにより
龍が人間に 支配力を行使する
- ・ミカエル衝動によるその防御

この連続講義は、宇宙の現象と宇宙の本質の内的連関を扱っておりますが、皆さんはすでに、外的な現象界にしか目を向けないひとにはさしあたり予想もつかないようなさまざまなことが判明するのをごらんになりました。私たちが見てきたのは、根本においていかなる存在のありかたもー私たちがこれを二三の例で示しましたがーその課題を宇宙的現存の連関全体のなかに有している、ということでした。さて今日は、すでにお話しした存在のありかたをいわば要約しつつもう一度ながめ、ここ数日間私が蝶についてお話しして参りましたことに注目してみましょう。私は植物の本質に対立するもののなかにまさに蝶の性質を展開いたしました、そして私たちは、蝶とは本来光に属するもの、外惑星、つまり火星、木星、土星の力によって修正されたうえでの光に属するものであると語ることができたのです。したがって私たちは本来、蝶をその本質において理解しようとするなら、宇宙の上方の領域を見上げてこう言わざるを得ないので、宇宙のこの上方の領域が蝶の本性を地球に贈り、蝶の本性を恵みとして地球に授けた、と。

さて、この地球に与えられた恵みはさらはずっと深くまで達するものだ、と申し上げたいのです。思い起こしてみましよう、私たちはこう言わざるを得ませんでしたが、蝶は本来地上での生存に直接参加しておらず、太陽がその熱と輝きの力をもってまさに地上での生存のなかで働いているその範囲内において間接的に参加しているのみである、と。しかも蝶はその卵を、それが太陽の領域から抜け出さないと、太陽の効力の領域内にとどまるところに産みつけます、つまり蝶は本来その卵を、地球ではなく太陽にのみ委ねるのです。それから火星作用の影響下にある幼虫が這い出してきます、むろん太陽作用は相変わらず存在しています。そして、木星作用の下にあるさなぎが形成されます。さなぎから蝶が這い出してきます、これは、その色彩のきらめきのなかで、土星の力とひとつにされた太陽の輝きの力であることができるものを、地球の周囲に再現しているのです。

このように本来私たちは、地球存在（状態）の内部、地球存在（状態）の周囲に、土星の効力が蝶存在のさまざまな色彩のなかで直接活きているのを見ます。けれども、宇宙生存にとつて問題となる実質というのは、二重のものである、ということも思い出されます。私たちは純粋に素材的な地球の実質を扱いますし、靈的実質も扱います、私は皆さんに申しました、奇妙なことに、人間はその新陳代謝組織に関しては靈的実質を根底に有している一方、人間の頭、頭部の根底を成しているのは、物質的実質である、と。人間の下部の性質においては、靈的実質が、物質的力作用、重さの作用、その他地上的な力作用に浸透されています。頭においては、地上的実質、つまり新陳代謝全体、循環、神経活動その他を通して人間の頭へと上に運ばれた地上的実質が、私たちの思考や私たちの表象のなかに反映されている超感覚的、靈的な力に浸透されているのです。したがって私たち人間は頭のなかに靈化された物質的素材

[vergeistigte physische Materiel]を持ち、新陳代謝ー四肢組織のなかに、地上化されたーこいつという言葉を作つてよろしければー地上化された靈的スピリチュアルな実質性[verirdische geistig-spirituelle Substantiaetaet]を有しているのです。

さて、この靈化された素材（マテリア）はとりわけ蝶存在のなかに見出されます。蝶存在はそもそも太陽の存在領域にとどまることによつて、地上的素材を自らのものとします、ーむろん比喩的に言つてーいわばもっとも微細なちりのような状態のみですが、蝶は地上的素材をもっとも微細なちりのよ

うな状態でのみ自らのものにするのです。蝶はまた太陽に加工された地球の實質から食物を調達します。蝶が自身の本質と結びつけるのは、太陽に加工されたもののみです。蝶はあらゆる地上的なものからもつとも精妙なものをいわば選び出し、それをもつとも完全に靈化してしまふのです。蝶の翅（はね）に注目するなら、実際のところ、その根本にあるのはもつとも靈化された地球素材 [Erdematerie] なのです。蝶の翅の素材が色彩に浸透されることにより、蝶の翅はもつとも靈化された地球素材なのです。

蝶とは本来、靈化された地球素材のなかでのみ生きている存在です。しかも靈的に見てわかることですが、蝶は、自らの色彩豊かな翅（はね）のまんなかの胴体がある意味で軽蔑しています、なぜなら、蝶の全注意力、蝶の全集合魂は、もともと自らの翅の色彩を喜び享受することに安んじているからです。

その翅のきらめく色彩に驚嘆しつつ蝶を追いかけられることができないと同様に、これらの色彩に対する舞い飛びが歓喜に驚嘆しつつ蝶を追いかけることもできません。これは根本的に子供のときに開発されているべきことです、空中をひらりと飛び交う靈性、本来舞い飛びが歓喜である靈性に対するこの喜び、色彩の戯れに対するこの喜びは、この点において蝶的なものはまったく驚くべきしかたでニユアンス付けされています。そしてこれらすべての根底にはまた別の何かがあります。

私たちは、鷲に代表されているのを見た鳥について、こう言うことができます。私たちが、鳥はその死に際して靈化された地球實質を靈界へと運び去ることができる、鳥は、鳥として地球素材を靈化し、人間が行なうことができないことを行なうことによつて、宇宙での生存における課題を果たしている、と。人間もその頭のなかで地球素材がある程度までは靈化したのですが、人間はこの地球素材を、死と新たな誕生との間生きていく世界のなかに携えていくことはできないのです、と申しますのも、頭のなかのこの靈化された地球素材を靈界へと持ち込もうとすれば、人間は止むことなく、言語を絶した耐え難い破壊的な苦痛に耐えなければならぬでしょうから。

鷲によつて代表される鳥の世界はこれを行なうことができません、ですから実際のところこれによつて、地上的であるものと地球外のものとの間に關係が生み出されるわけです。地上的素材はまずいわばゆっくりと靈のなかへと移されます、そして鳥類は、この靈化された地上素材を宇宙万有に委ねるといふ課題を有しているのです。ですから、いつか地球がその存在（状態）の終わりに到

達したとき、こう言うことができるでしょう、これらの地球素材は靈化された、鳥類は、靈化された地球素材を靈の国に戻すために、地球存在（状態）の經濟全体の内部にいたのだ、と。

蝶に関してはいくらか事情は異なっています。蝶は鳥よりもさらに多く地上の素材を靈化するのです。鳥は何と言つても、蝶よりもずっと大地の近くにいる、という状態にあります。このことは後ほどお話ししましょう。けれども蝶は太陽領域をまったく去らない、ということによつて、その素材を、鳥のように死ぬときになってようやく、というのではなく、まだ生きていううちに、靈化された素材を絶えず地球の周囲に、宇宙における地球の周囲に讓渡するほど、それほど靈化することができるのです。

ひとつ考えてみてください、私たちが地球を、つまり、きわめてさまざまに飛び交う蝶の世界に貫かれ、この蝶の世界が宇宙に讓渡する靈化された地球素材を絶え間なく宇宙空間に放射している、そういう地球を思い浮かべることができる、宇宙の全經濟のなかにはほんとうに何と偉大なものがあることが、こうして私たちは、地球の回りのこの蝶の世界の領域を、このような認識により、まったく別の感情をもつて觀察することができるのです。

私たちがこのひらひらと舞い飛び世界をのぞき込むことができると、こう言うことができます、お前たち舞い飛びものたちよ、お前たちは太陽光よりも良いとさえいえるものを発するのだ、お前たちは靈光を宇宙へと放射するのだ、と。實際靈的なものは私たちの唯物論的な科学からはほとんど考慮されません。そのため、こういう唯物論的な科学には實際、宇宙經濟 [Waltoekonomie] の全体に属するこういう事柄にどうにか行き着く手がかりはまったくないので、とは言え、物理的作用が存在するのと同様、宇宙經濟も存在します、しかも宇宙經濟は物理的作用よりも本質的なのです。と申しますのも、靈の国に放射されるもの、これは、地球がとくに崩壊してしまつても、作用し続けるからです、今日、物理学者、化学者が構成するものは、地球存在とともにその終結を見るでしょう。したがって、ある觀察者が外部の宇宙に座して長い間觀察するとしたら、そのひとは見るでしょう、靈の国への靈素材の絶え間ない放射のように、靈的になった素材の靈の国への放射のように、何ごとかが起こるのを見るでしょう、地球が自身の本質を宇宙空間へと、宇宙へと放射するのを、そして、迸（ほとばし）る火花、輝きを発し続ける火花さながら、鳥類が、鳥のすべてが、その死後に輝かせるものが、今やこの宇宙万有へ

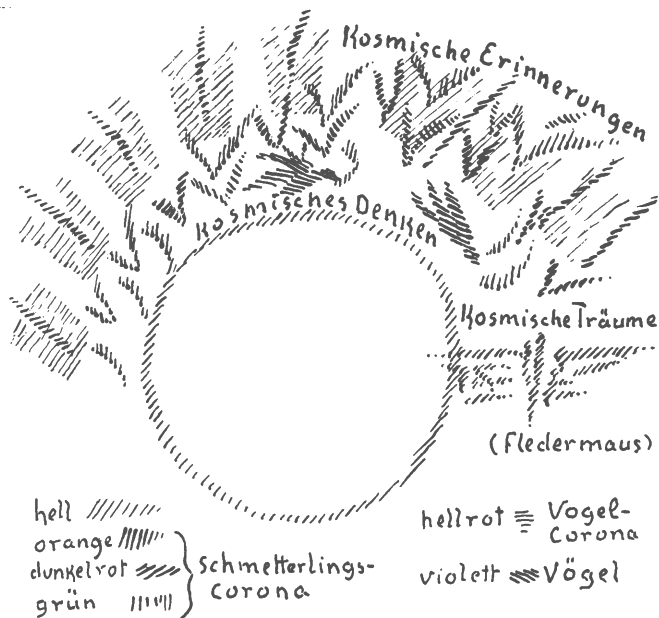
と光線の姿で放射していくのを、蝶の靈光のきらめきと鳥の靈光の迸りを。

これはしかし、同時に次のようなことにまで注意を導きうるであろうことである。つまり今や別の星界に目を向けるなら、分光器が示すものが、あるいはむしろ、分光学者が分光器のなかに夢想するもののみが、そこから放射されてくると信じるべきではなく、地球から宇宙空間へと放射されるものが生きものの結果であり、それと同様に、別の星界から地球へと放射されてくるものもまた別の世界の生きものの結果である、ということにです。私たちはある星を見て、今日の物理学者とともに、発火した無機的な炎とかそれに類するものを想定します。これももちろんまったくナンセンスです。と申しますのも、そこに見られているものは、まったくもって、生命を与えられたもの、魂を与えられたもの、靈化されたものの結果だからです。

さて私たちは、こう申してよろしければ、地球をぐるりと取り巻いているこの蝶の帯から、もう一度鳥類へと入って行きましょう。私たちがもう知っていることを思い浮かべますと、境を接した三つの領域が得られます。その上部には別の領域があり、その下にもまた別の領域があります。私たちは光エーテルを有し、私たちは熱エーテルを有しますが、これには本来二つの部分、二つの層があります。一方は地上的な熱層、他方は宇宙的な熱層であり、これらは絶えず浸透し合っています。実際のところ私たちは一種ではなく二種類の熱を有しているのです。地上的、地球的な起源である熱と、宇宙的起源である熱です。これらは絶えず互いに浸透し合っています。さらに熱エーテルに接して空気があります。続いて水と地が、上方には化学エーテルと生命エーテルが来るでしょう。

さて、今蝶類を取り上げてみますと、蝶類は主として光エーテルに属している、光エーテルそのものが、輝きの力が蝶の卵から幼虫を引き出すための手段なのです。輝きの力は本質的に幼虫を引き出します。鳥類の場合もこのことは当てはまりません。鳥たちは卵を産みます。この卵は熱によって孵されねばなりません。蝶の卵はもっぱら太陽の本性に委ねられますが、鳥の卵は熱の領域まで至ります。鳥は熱エーテルの領域に存在します、単なる空気であるものを鳥は本来克服しているのです。

蝶も空中を飛翔します、けれども蝶は根本的にまったく光の被造物です。そして、空気が光に浸透されることで、蝶はこの光—空気存在(状態)の内部で、空気存在(状態)ではなく、光存在(状態)を選び取り、空気は蝶にとつ



て運び手にすぎません。空気は蝶がいればその上を漂っていく波浪ですが、蝶のエレメントは光なのです。鳥は空中を飛翔します、けれども本来鳥のエレメントは熱、空気中のさまざまなニュアンスの熱であり、鳥はある程度空気を克服しています。鳥もまた実際的には空気存在でもありません。鳥はかなりな程度空気存在なのです。ひとつ哺乳動物の骨、人間の骨をごろんくさい、それは髓で満たされています。なぜ髓で満たされているかについてはさらにお話ししていくでしょう。鳥の骨は空洞で空気のみ満たされています。したがって私たちの骨の内部にあるものを観察する限り、私たちは髓的なものから成っており、鳥は空気から成っています。鳥の髓的なものは純粹な空気なのです。鳥の肺を考えてみると、皆さんはこの鳥の肺のなかに肺から出ている多数の袋を発見されるでしょう。これらは空気袋なのです。鳥が吸い込むとき、鳥は単に

Kosmische Erinnerungen:宇宙の記憶
 Kosmisches Denken:宇宙の思考
 Kosmische Traeume:宇宙の夢
 (Fledermaus:コウモリ) hell:明るい

orange:オレンジ
 dunkelrot:暗い赤
 gruen:緑
 Schmetterlings-corona:蝶のコロナ
 hellrot:明るい赤
 Vogelcorona:蝶のコロナ
 violett:紫
 Voegel:鳥

肺のなかへと吸い込むだけでなく、この空気袋のなかへと空気を吸い込みます。そして空気はこの空気袋から空洞の骨のなかへと入っていくのです。したがって、鳥から筋肉も羽根もすべて外し、骨も取り去ることができるとしたら、空気から成る動物がなおも得られるでしょう。この動物は、内部の肺を充填するものとすべての骨の内部を充填するもの形（フォルム）を有しています。これを形（フォルム）において思い浮かべれば、まさしく鳥の形が得られることでしょう。筋肉―骨驚[Fleisch- und Beinader]の内部に空気驚[Luftader]がおさまっているのです。さてこれは、単にまだ内部に空気驚が存在するからという理由でのみそうなのではありません、鳥は呼吸します、呼吸を通じて鳥は熱を生み出します。この熱を、鳥は、鳥が今やそのすべての肢のなかに押し込んでいる空気に伝えるのです。ここで、外部環境に対して熱差が生じます。鳥はここに内熱を、ここに外部の熱を有します。空気の外的な熱と、鳥が自身の内部の空気に与える熱との間のこの水準差、この水準差のなかに、つまり熱の熱のエレメントの内部の水準差のなかに、本来鳥は生きています。そしてしかるべきやりかたで皆さんがもし、そもそも鳥の体はどういう状態なのか、鳥にお尋ねになるとしたら、鳥は皆さんに答える―皆さんが鳥の言葉を解されるなら、鳥が答えることはおわかりになるでしょう―でしよう、そして皆さんに明らかになるでしょう、鳥は堅く実質的な骨について、そして通常自らが担っているものについて語っているのだ、つまり、たとえば皆さんが、トランクを左右に持ち背中と頭の上にも乗せているときのように、自分が担っているものについて語っているのだ、と。トランクを持っているときは皆さんにしても、これは私の身体だ、右側のトランク、左側のトランクその他は（私の身体だ）、とはおっしゃいません。皆さんが、自分が荷物として担いでいるものについて、自分の身体について語るように語るとはほとんどなく、自分が担いでいるものとして語るように、ちょうどそのように、鳥は自分について語る時、単に鳥によって暖められた空気について語るのです、鳥が地上での生存において担っている荷物とは違うものについて語るのです。この骨、こういう本来の鳥の空気を覆っているこの骨は、鳥の荷物なのです。したがって私たちはまったくもってこう言わなければなりません、根本的に言って鳥はまったく熱エレメントのなかで生きています、そして蝶は光エレメントのなかで生きています、と。蝶にとっては、蝶が霊化する物質的実質であるものはすべて、霊化以前にはそもそもまさに荷物ですらなく、建物の設備とでも言ってもよいもので

す。これは蝶からさらに遠く離れているものなのです。

つまり、この領域まで、この領域の動物のところまで上昇することで、私たちは、私たちが決して物質的なしかたで判断してはならないものに到達するのです。私たちがこれを物質的なしかたで判断すれば、それはたとえば、私たちがひとりの人間を次のように描こうとするときのようなものです、つまりその髪の毛が頭にかぶっているものなかと生えていくように描いたり、そのひとのトランクが両腕と合体し、背中にそのひとがリュックサックとして背負っているものが付いているように、その結果、あたくもリュックサックが後ろへ成長していったかのように背中に瘤をつけてしまつ、という具合に描こうとするときのような。私たちが人間をこのように描くとすれば、これはひとが画家として鳥について本来抱いている想念に当たります。それはまったく鳥ではありません、それは鳥の荷物なのです。本来鳥もまた、あたくも自分がこのひどく重い荷物をひきずっているように感じています、と申しますのも、鳥は率直に、まったく重荷などなく、暖かな空気動物として、世界をめぐってさすらいをして行くことを一番望んでいるのですから。それ以外のことは鳥にとって重荷なのです。そして鳥は、貢ぎ物を宇宙存在（状態）へともたらし、死ぬときに、この重荷を霊化し霊の国へと送り込むことによつてです、蝶はまだ生きていくうちにこれを行ないません。

よろしいですが、鳥は私がお話ししましたようなしかたで呼吸し、空気を利用します。蝶の場合これはまた異なっています。蝶はそもそも、いわゆる高等動物と言われているものが有しているようなそういう装置によつて呼吸しているではありません、高等動物といつのは実際高高度動物なのであつて、本当は高等動物などではないのです。蝶は本来、その外側の覆いから内部に入り込んでいる管を通してのみ呼吸します、この管がいくらか膨らまされ、それで蝶は飛んでいるときに空気を貯えることができます、それで蝶は常に呼吸しなくてすむようになっていのです。蝶は本来いつも、蝶の内部に入り込んでいる管を通じて呼吸します。内部に入り込んでいる管を通じて呼吸することによつて、蝶は、吸い込む空気と共に、空気のなかにある光も同時に体全体へと取り入れることが可能なのです。ここにもまた大きな違いがあります。

図式的に示しますと、高等動物を思い浮かべてください、これは肺を持ってきます。肺の中へと酸素が入ってきて、心臓を迂回してここで血液と結びつきます。血液は、こういう嵩高い動物の場合それに人間の場合もですが、酸素に

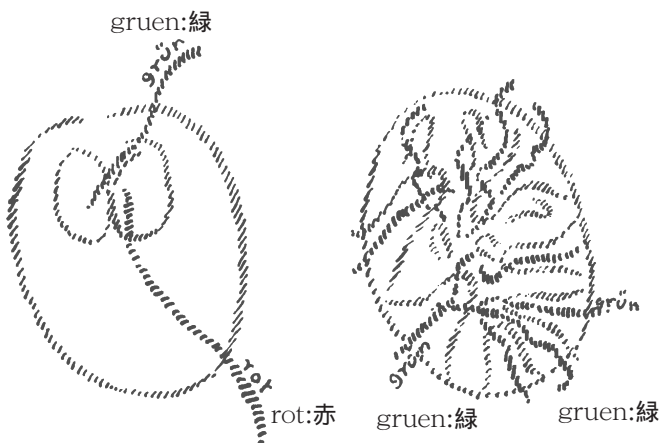
接触するためには心臓と肺に流れ込まなければなりません。蝶の場合、私はまったく別様に示さなければなりません。この場合次のように示さなくてはならないのです、つまりこれが蝶だとすると、このいたるところに管が入り込んでいます、これらの管がさらに枝分かれしていきます。そして今度は酸素がいたるところに入って行って酸素自身も枝分かれします、空気が体内のいたるところに侵入するのです。

私たちの場合もいわゆる高等動物の場合も、空気は単に空気としてのみ肺まで入ってきます、蝶の場合、外部の空気は光を携えたその内容と共に体内全体に広がるのです。鳥は空気を空洞になつて骨の内部まで行き渡らせます、蝶は単に外部に向かつてのみ光動物なのではありません、蝶は空気に担われてきた光を体全体にくまなく行き渡らせます、ですから蝶は内的にも光なのです。私が皆さんに、鳥は本来内的に暖められた空気であるということを描写できるなら、蝶は本来まつたき光です。蝶の体もまた光から出来ているのです、そして熱は蝶にとっては本来重荷であり、荷物です。蝶はまつたくもって光のなかを舞い飛び、その体を完全に光から作り上げます。そこで私たちは、蝶が空中をひらひら飛ぶのを見るとき、ほんとうは単なる光の生きもの [Lichtwesen] が飛んでいると見なければならぬでしょう、自らの色彩を、自らの色彩の戯れを喜ぶ光の生きものです。他のものは衣装であり荷物なのです。地球の周囲の存在たちが本来何から成り立っているかということにまず向かわなければなりません、と申しますのも、外見的な現われはひとを欺くからです。

今日表面的にあれこれのことを学んだひとたち、そうですね、東洋の叢智から学んだひとたちは、世界はマーマ（仮象、幻影 [Majal]）である、ということについて語ります。しかし、世界はマーマである、と言つたら、それはほんとうに何にもなりません。どういふふうの世界がマーマであるのかを個々の部分において見ていかなければなりません。マーマといふことを理解できるのは、鳥は本来その本質においては外面的に現われているような姿に見えるのではなく、空気の生きもの [Luftwesen] なのだといふことを知るときです。蝶はそこに現われているような姿にはまったく見えません、蝶は光の生きものです、飛び交い、本質的に色彩の戯れへの喜びから出来ている光の生きものです、あの色彩の戯れ、地上のちりのような素材が色彩に貫かれ、それによって霊的な宇宙空間への、霊的宇宙への霊化の最初の段階であることで蝶の翅に生じている、

あの色彩の戯れへの喜びです。

よろしいですか、ここで皆さんはいわば二つの段階を得られたわけですが、この地球の周囲の光エーテルに住まうものである蝶、そしてこの地球の周囲の熱エーテルに住まうものである鳥です。今度は三番目の種類です。私たちが空気まで下降すると、そこであの生きものに行き着きます、この地球進化のある特定の時期、たとえば月がまだ地球とともにあり、月がまだ地球から分離していなかった時期にはまだまつたく存在することができなかった生きものです。ここで私たちがたどり着く生きものは、なるほどやはり空気の生きものであり、すなわち空中で生きてはいるけれども、本来すでもつ、地球に固有のもの、地球の重さに完全に接触している生きものです。蝶はまだまつたく地球の重さに接触していません。蝶は喜々として光エーテルのなかを舞い飛び、自分を光エーテルから生まれた被造物だと感じています。鳥は、空気を体内で暖め、そして暖かい空気があることによって重さを克服します、暖かい空気が冷たい空気に運ばれるのです。鳥はまだ地球の重さを克服しているのです。



なるほどその素性からすればまだ空中で生きざるを得ないけれども、空洞の骨ではなく、髓に満たされた骨を持っており、鳥が持っているような空気袋も持っていないので、地球の重さを克服できない動物、こういう動物はコウモリです。

コウモリというのはまったく奇妙な動物です。コウモリは、その体の内部のものによって地球の重さを克服することはまったくできません。コウモリは蝶のように光さながらに軽やかではなく、鳥のように熱さながらに軽いつわいでもありません、コウモリはすでに地球の重さに屈し、すでに筋肉と骨のなかに自らを感じてもいるのです。したがってコウモリにとって、たとえば蝶を作り上げていて蝶がまったくもってそのなかで生きているエレメント、この光のエレメントは快適ではありません。コウモリは黄昏を好みます。コウモリは空気をいぎるを得ませんが、空気が光を担っていない場合の空気をもつとも好むのです。コウモリは黄昏に身を委ねます。コウモリは本来黄昏の動物なのです。コウモリが空中で身を支えることができるのは、コウモリがいささか力りカチユア風に見えらるるでも申し上げたい翼、それは実際ほんとうの翼ではなく広げられた皮膚、伸ばされた指の間に広げられた皮膚、パラシュートを有していることによってのみなのです。これによってコウモリは空中で身を支えます。これによってコウモリは、重さそのものに、この重さに関係あるものを対重（釣り合い重り[Gegengewicht]）として対置することで、重さを克服するのです。けれどもそうすることによってコウモリは完全に地球の力の領域に係留されず。そもそも物理的・機械的構成に従って蝶の翅をそう難く構成することは決してできません、鳥の翼もです。それは決してうまくいかないでしょう。けれどもコウモリの翼、これは皆さんが地上的な力学と機械学で完全に構成することができます。

コウモリは、光、光に浸透された空気を好みません、せいぜい光が少しだけ残っている黄昏の空気を好むくらいです。コウモリが鳥と区別されるのは、鳥は見るとき、本来いつも、空中にあるものを目を向ける、ということによってです。ハゲワシでさえ、子羊を見ると、子羊が気圏の端に居るもの、上から見ると、地面に接したように描かれたものであるというように知覚します。しかもおまけに、これは単に見ることでなく欲望です、皆さんはこれを感じ取られることでしょう、子羊めがけて向かってくるハゲワシの飛行、欲求と意志と欲望のまぎれもないデュナーミク（力学）であるこの飛行を実際にごらん

になるときに。

蝶は地上にあるものを、総じて鏡に映っているように見ています、蝶にとって地球はひとつの鏡なのです。蝶は宇宙のなかにあるものを見るのです。皆さんが蝶がひらひらと飛ぶのをごらんになると、ほんとうは次のように思い浮かべなければなりません、地球に蝶は注意を払わない、地球は鏡なのだ、と。地球は蝶に、宇宙のなかにあるものを映し出します。鳥は地上的なものを見ませんが、空中にあるものは見ます。コウモリにいたって初めて、自分が飛行して横切っていくもの、飛行して通過していくものを知覚し始めます。コウモリは光を好まないのです、本来自分が見るすべてのものに接触されるのが不快なのです。ですから、蝶と鳥は非常に霊的なしかたで見ると、ということが出来ます。上から降りてきた最初の動物、地上的なしかたで見なければならぬ動物は、この見るといふことに触れられるのが不快です。コウモリはこの視覚を好みません、したがってコウモリは、自分が見るものと見たくないものに対する具現化した不安とでも申し上げたいものを持っています。コウモリはもののかたわらさつとかすめていきたいのです、見なければならぬけれども見たくない、というふうにして、そんなふうにいるところできつと身をかかわりたいのです。コウモリはどのように身をかかわりたいがために、すべてのものにあれほど驚異的に耳をすましたいのです。事実コウモリは、この飛行がどうかして危険にさらされないかどうか、絶えず自分の飛行に耳をすましている動物です。

コウモリをよくごらんください。皆さんは、コウモリの耳が宇宙の不安に適合させられているのを見て取ることがおできになるでしょう。これがコウモリの耳なのです。これはまったく奇妙な形成物です、これは世界をひそかに通過していくこと、宇宙の不安に正確に適合させられています。これらすべては、コウモリを今私たちがそれを据えた関連のなかで観察するときに初めて理解されるのです。

ここでもう少し言っておかなくてはなりません。蝶は霊化された素材を絶え間

編註

1 土星は記憶の大きいなる担い手：詳細はシュタイナーの「1923年7月27日の講義」（『秘儀参入学と星認識』Initiationswissenschaft und Sternenerkenntnis] GA228）参照。

訳註

* 1 GA228『秘儀参入学と星認識』の第1講（1923年7月27日）によれば、土星は太陽系の生き生きとした記憶、木星は宇宙の創造的、受容的思考、火星は言語の衝動に關係する。金星は地球から発するすべてを愛に満ちて宇宙に返す。水星は宇宙的思考、月は道徳の力の担い手。火星、木星、土星は人間を解放する惑星、金星、水星、月は運命を定める惑星。これらの惑星の間において、調和を創り出すのが太陽。

なく宇宙に与えます、そして蝶は土星作用のお気に入りです。さて、思い出し
てください、私はここで、土星はこの太陽系の記憶の大いなる担い手である
(1 * 1)と申し上げました。蝶はこの惑星の想起能力とまさに関連して
います。これらは、蝶のなかに生きている想起的思考なのです。鳥はーこれ
もすでに皆さんに申し上げたことですがー全体として本来一個の頭であり、
そして宇宙空間を貫いて飛翔していくこの熱に浸透された空気のなかで、鳥は
本来生きて飛翔する思考なのです。私たちが私たちのうちに思考として持つて
いるもの、実際熱エーテルとも関連しているものは、私たちのなかの鳥の本性
驚の本性です。鳥は飛翔する思考なのです。コウモリはしかし飛行する夢、飛
行する宇宙の夢です。したがって皆さんはこう言うことができます、地球は蝶
によって織りめぐらされている、蝶は宇宙の記憶である、そして鳥類につい
ては、鳥類は宇宙の思考である、そしてコウモリについては、コウモリは宇宙の
夢、宇宙の夢みることである、と。コウモリとして空間をばたばたと通り過ぎ
ていくのは、実際のところ飛行する宇宙の夢なのです。夢が黄昏の光を愛する
ように、宇宙はコウモリを空間を通過していかせることによって黄昏の光を愛
します。記憶という持続的な思考、私たちはこれが地球を取り巻く蝶の帯のな
かに具現されているのを見ます、現在のなかに生きている思考は、地球を取り
巻く鳥の帯のなかに見ます、夢は地球の周囲に飛び回るコウモリとして具現し
ているのを見ます。でもどうか感じとってください、私たちがこのように
正しくそのフォルムへと深く入っていくとき、コウモリをこのように見ること
は何と夢を見ることに親和性があることか。コウモリを、次のような考えが浮
かんできるといふ以外の見方はできません、お前はやはり夢を見ている、けれ
どもそれは本来ここにあるべきではない何かだ、夢が通常の物質的現実から出
てくるように、自然(界)の別の被造物から出てきた何かだ、と。

つまり私たちはこう言うことができます、蝶は靈化された実質を生きている
うちに靈の国へと送り込む、鳥は死後にそれを送り出す、と。さてコウモリは
何をするのでしょう。コウモリは、靈化された実質、とりわけ、個々の指の間
に張られた皮膚のなかに生きているあの靈的実質を、生存中に分泌します、し
かしそれを宇宙に委ねるのではなく、地球の大气中に分泌するのです。それ
によって絶え間なく地球の大气中に靈の真珠、とても申し上げたいものが生じま
す。さてこのように地球は、放射していく蝶の靈素材の持続的なきらめきに取
り巻かれ、死にゆく鳥から発するものが迸っていくのですが、コウモリがそ

で自分が靈化したものを分泌した空気、この空気中の奇妙な含有物が地球へと
放射されてきます。これらは、コウモリが飛んでいるのを見るときいつも見ら
れる靈の形成物です。事実、コウモリはいつも彗星のように背後に尾のよう
なものを付けています。コウモリは靈素材を分泌しますが、それを送り出さず、
物質的な地球素材のなかに押し戻します。コウモリはそれを空中へと押し戻す
のです。物質的なコウモリが飛ぶのを物質的な目で見るように、このコウモリ
に相応する靈的形成物が空中を飛んでいくのを見ることができず、これは空
間をばたばたとよぎっていきます。そして私たちが、空気は酸素、窒素、その
他の構成要素から成り立っていると知るとき、それがすべてではありません、
空気はそれに加えて、コウモリの靈的影響から成り立っているのです。

どれほど風変わりで逆説的に聞こえようと、コウモリのこの夢の類は空气中
に小さな幽霊たちを送り込むのです、それらはやがてひとかたまりに一体化し
ます。地質学では、大地の下にあつてまだどろどろの粥状の岩石の塊であるも
のをマグマと呼びます。コウモリの分泌物に由来する空气中のマグマについて
も語る事ができるでしょう。

本能的な靈視がまだ存在していた古代においては、人間たちはこの靈マグマ
に対して非常に敏感でした、ちょうど今日でも、より物質的なもの、たとえば
悪臭に敏感なひとたちがいくらかいるように。ただ、これは何かもつと下賤な
とても申し上げたいものとみなすことができるでしょう、他方、古代の本能的
な靈視者の時代においては、人間たちはコウモリとして空中に存在するものに
対して敏感だったのです。

人間たちはこれから身を守りました。いくつかの秘儀のなかには、このコウ
モリの残存物が人間に支配力をふるわないように、人間が自らを内的に遮断す
るためのまったく特定の呪文がありました。と申しますのも、人間である私た
ちは空気とともに単に酸素と窒素だけを吸い込むのではなく、私たちはこのコ
ウモリの残存物も吸い込んでいますからです。ただし、今日の人類はこのコウモ
リの残存物から身を守ることを目指してはおらず、場合によっては、たとえ
ば匂いに対して、と私は申し上げたいのですが、とても敏感である一方、コウモ

訳註

* 2 ミカエルと龍の闘い、ミカエル衝動…すぐ前の時期に行なわれた、G229「四つの宇宙的イマジネーシ
ョンにおける四季の体験」(1923年10月30日から10月15日)などの内容と関連していると思われる。第1講の
編註 1も参照。* 邦訳は、「四季の宇宙的イマジネーション」(西川隆範訳 水声社)

りの残存物に対してはきわめて鈍感なのです。人類はこれを飲み込みます、そしてその際何か吐き気のようなものすら感じることもなく、と言えます。これはまったく奇妙なことです、それ以外ではとても神経質な人々が、私がここでそれについてお話ししたものを、せつせと飲み込むというのは。しかしこれはこうして人間のなかにも入っていきませぬ。これは物質体とエーテル体には入っていきませぬが、アストラル体のなかに入っていきます。

さて、ごらんのように、ここで私たちは奇妙な連関にたどり着きました。秘儀参入学はまさに、至るところで連関の内部にまで入り込んでいきます、つまりこれらのコウモリの残存物は、私が連続講演においてここで皆さんに龍として描写いたしましたものにもつとも欲される食物なのです。ただ、これらコウモリの残存物は、最初に人間のなかにも吸い込まれざるを得ませぬ。そして人間がその本能をこれらのコウモリの残存物に浸透させるとき、龍は人間の本性のなかにその最良の拠り所を得ます。コウモリの残存物が人間の内部で攪乱するのです。そして龍はこれを貪り喰いそれによって太ります、もちろん霊的に語ればですが、そして龍は人間に対して支配力を得ます、さまざまなかたで支配力を獲得するのです。そしてこれは、今日の人間もまた身を守らなければならぬことです。ミカエルと龍の闘いの新しい形としてここで描写されましたものによって、防御がなされねばなりません。ミカエル衝動をここで描写されましたように（*2）受け入れるときに、人間が内的に力づけられつつ得るもの、これが、龍が得ようとする食物から人間を守ります、そうすれば人間は大気圏内のきわめて不当なコウモリの残存物から身を守ることができるようです。

内的な宇宙連関から引き出されうる真実を前にして決して尻込みしてはなりません、この内的な宇宙連関にほんとうに深く入り込んで行くこととするなら、です。と申しますのも、今日一般によく知られている真理探求者の形式は、まったくいかなる真実のものにも導くことはなく、たいていは夢みられたものですらない何か、まさにマヤーにしか導かないからです。真実は、物理的存在といえどもすべて霊的存在に浸透されているのが見られる領域においてこそぜひとも探求されねばなりません。そこにおいて真実に近づくことができるのは、今この連続講義においてなされているように真実を観察するときのみです。

どこかに存在しているものは、何か善いものか、何か悪しきもののために存在しています。すべては、それぞれが他の存在とどう関連しているのか認識できようなしかたで宇宙連関の内部に置かれているのです。唯物論的な考え方

のひととつて、蝶は飛び、鳥は飛翔し、翼手類、つまりコウモリは飛びます。しかしこれはほとんど、あまり芸術センスのないひとに見られることですが、自分の部屋いっぱい、互いにはらばらの、内的な連関のまったくないありつたけの絵画を掛ける、という場合のようなものです。通常の世界観察者にとつて、世界（宇宙）を飛んでいくものも、何ら内的な連関を有しておりませぬ、そういうひとにはそれが見えないからです。けれども、宇宙におけるすべてのものは、自らの場所に立っています、なぜなら、それらはその場所から、まさに宇宙の全体性との内的連関を有しているからです。蝶であれ、鳥であれ、コウモリであれ、すべては宇宙のなかにも何らかの意味を伴って置かれているのです。

今日このようなことを嘲笑したいひととは、嘲笑すればよろしい。こういふひとたちは、嘲笑に関してすでに別のこともやり遂げました。著名なアカデミー会員たちがこういふ判断を公表したのです、隕石などというものは存在しない、なぜなら天から鉄が落下することはできないから云々、と。わたしが今日お話ししましたようなコウモリの機能について、このひとたちが嘲弄しないなどどうして言えるでしょう。とは言え、実際に私たちの文明を霊的なもの認識で貫くという点において、こういふことすべてが（これを）揺るがすことは許されませぬ。

第6講 一九三三年一月二八日 ドル十八

- ・地球進化においてもつとも古い被造物である人間
- ・土星―太陽―月―地球への進化のなかでの、人間の各部分と個々の動物種の発生

土星紀…人間の頭と蝶の原基

土星紀の終わりから太陽紀前半…人間の頭―胸組織と鳥類、

太陽紀後半…人間の呼吸組織とライオン

月紀前半…人間の腹部―消化組織と牛

月紀後半…人間の消化器官と爬虫類、両生類

人間と動物の形成のされかたの違い

蝶、鳥の形姿は地上に下降してくる前の人間の霊的形姿を思い起こさせる

蝶コロナと鳥コロナが、霊界にいる人間を再受肉へと誘う

人間の胎児期の形成

人間の進化において内から外へと働くものが、動物においては

外から内へと働く

地球のエーテル要素のなかに生きる魚

地球のアストラル要素のなかに生きるカエル

人間の消化器官と両生類、爬虫類

円の集中と放射の図によるマクロコスモスとミクロコスモスの照応

植物界、鉱物界への架け橋

鉱物質のものの意味、霊人[Geistesmensch]と松果腺の脳砂

さて地球での生存において人間と結びつけられている動物、植物、鉱物存在を考察することに移る前に、本日私たちは人間自体の進化に眼差しを向け、いくつかのことを魂の前に思い描かなくてはなりません、これらは、私が口頭であるいは著作で行なってまいりましたさまざまな説明から周知のこととは思いますが、一度ここで概観的にまとめておくことが必要なのです。

今日外的な科学から私達が学ばうとすれば、通常こういうことになり、つまり高等な生物、そうですね、植物界、次いで動物界、人間界といったいわゆる高等生物が、生命のないいわゆる無機質な物質あるいは力からどのように発生してきたかを探究せねばならない、と言われるわけです。

進化を真に観ると、根本的に別のことが明らかになります。つまり皆さんが『神秘学概論』から読み取ることがおできになるように、今日私たちの前に立っているような人間は、もつとも長い進化を経てきて、その進化は古い土星紀にまでさかのぼるそういう存在であることが明らかになるのです。したがって私たちは、人間はこの地球進化のうちでもつとも古い被造物である、と言わなければなりません。太陽紀になってようやく動物が、月紀になって植物が付け加えられました、そして今日私たちが有しているような鉱物界は、本来地球の結果であり、地球進化期になってはじめて付け加えられたのです。

さて、ひとつ今日の形態をとっている人間をよく見てこういふ問いかけをしてみましょう、進化史の上で、人間そのもののうちでもつとも古い部分はいったい何なのだろう、と。それは人間の頭です。この人間の頭が最初の原基(素質[Anlage])を受け取ったのは、地球がまさにまだ土星変容(の段階)にあった時期でした。言つまでもなく土星変容はただ熱実質からのみ成り立っていて、この人間の頭というのも、本来沸き立ち、息づき、波打つ熱だったのです、その後太陽紀には気体の形状をとり、月紀の間は液体状に流動する実体[Ween]でした、そして、地球紀に骨の含有物をともなつた固い形態を獲得しました、したがってこう言わなければなりません、今日当然のことながら外的認識をもつては思い描くことが困難な実体、人間の頭はこの実体の後裔なのだ、と。この人間の頭形成と同時に―このことは皆さんも私の前回の説明から察知されるでしょうが―、この人間の頭形成と同時に、古い土星紀の期間に蝶存在への原基が生じました。後ほどその他の昆虫存在をもつと詳細に考察するでしょうが、まずは蝶存在にとどまりましょう。したがって私たちが古い土星紀から今日まで、現にある地球まで進化を追求するとき、こう言わなければなりません、このとき人間の頭の精妙な物質的形姿(フォルム)が原基として形成される、蝶存在として空中を飛び交うすべてのものが形成される、と。この両方の進化はさらに進みます。人間は内面化し、その結果ますます、魂的なものを顕現させる存在、内から外へと進む存在となつていきます、つまり図式的に表現すると、自らを内から外へと放射しつつ進化させる存在です。それに対して蝶存在というのは、これはその外面に、宇宙がその美という積み荷をことごとく降ろしている、とでも申し上げたい存在です。蝶はいわばその翅の鱗粉に、私が皆さんに説明いたしましたようなしかたで宇宙における美と荘厳として存在しているすべてが飛来して付着している存在なのです。つまり私たちは、蝶

という存在を、いわば上なる宇宙の美的鏡像であるというように思い描かなくてはなりません。人間は上なる宇宙を自らのうちに受け入れ、自らのうちに閉じこめ、内部で魂的となり、宇宙の収縮、つまりその後外に向かつて放射して人間の頭において形姿を得る収縮のように魂的となって、その結果頭においては何か内から外へと形成されたものが得られるのですが、他方蝶存在においては、外から内へと形成されたものが得られるのです。ですから、こういう事柄を霊視者のように観察するひとつとしては、そのひとつが以下のようなしかたでことを進め、こう言うとき、実際途方もないことを学ぶことになるのです、つまり、私は秘密を、人間の頭の土星の秘密、もつとも古い秘密を徹底的に究明するつもりだ、この頭蓋の内部で本来力として統べていたのは何かを知るつもりだ、と言うときです。——そのひとは、外部のいたるところに見られるもの、外部のいたるところに照射してくるものに自らの注意を向け、そして蝶存在を研究しなければなりません。お前自身の頭部の奇跡を学び知るためには、外なる自然において蝶がいかに生ずるかという奇跡を探究するがよい、これはつまり、霊視者の宇宙観察が与えてくれる偉大な教えです。

土星紀から太陽紀へと進化がさらに進むと、さらなる形成、空気（への）変形つまり頭の空気変容を有する存在が生じますが、これは後になって胸形成物、人間の呼吸—心臓形成物になる精妙な實質に組み込まれます。つまりここ土星において私たちが有しているのは、まだ根本的に人間の頭を示している変容なのです。もちろん後になってからとる形姿ですが、私たちが太陽紀に到達すると、頭—胸人間が得られます、これは現在人間の胸であるものに組み込まれます。しかしすでに土星紀の最後と太陽紀の最初の時期において同時に、私たちが驚のなかにその代表となるものを見出さねばならないものがすでに出現しているのです。鳥類は太陽紀の前半に生じ、太陽紀の後半には本来の胸動物、たとえばライオンのような——代表的なものとしてライオンですが、その他の胸動物もいます——胸動物である動物種の最初の原基が生じます。したがってこれらの動物の最初の原基は古い太陽紀まで遡るのです。

皆さんはこのことから、高等動物と人間の形成のされかたそのものにいかに著しい違いがあるかわかりになるでしょう。私は、猿の類も含む過渡的な動物についてもいわずれもう少しお話しするでしょうが、今日のところは包括的な概念を与えておくだけにとどめようと思います。人間形成と高等動物形成にはいかに著しい違いがあるか、おわかりになるでしょう。

人間においてはまず第一に、進化において頭が形成される、ということですが、その他のものは、いわば頭形成に付属している付属器官となります。人間は宇宙進化においてその頭から下方へと生長していくのです。これに対してライオンは、たとえば古い太陽紀、古い太陽紀の後半に、まず胸動物として出現する動物です、まだ非常に小さな、萎縮した頭を持った力強い呼吸動物としてです。太陽が後になって地球から分離して外から作用するようになる、そういうときになってようやく、胸から頭が生じます。つまりライオンは、胸から上に向かつて発達していくという成長をし、人間は頭から下へ向かつて発達していくことで生長するのです。これは全進化における著しい違いです。

私たちが地球の月変容へとさらに進んでいくことにより、むしろ後の時代になって角質状になるにしても月は水変容を示しているがために、月は水性のものであるがために、ここではじめて人間は、下へと向かうさらなる継続をこの時点から必要とするようになります。消化組織（システム）の原基が形成されるのです。古い太陽紀の期間、光を透して波打ち、光を透して輝く空気状のものしかない間は、人間もその栄養摂取のためには下に向かって閉じた呼吸器官さえあればよいのです、人間は頭部—呼吸器官なのです。さて月紀において今や人間は自らに消化組織を組み込みます。それと同時に人間は、頭、胸、下腹部となるにいたるわけです。そして月においてはすべてがまだ水状の實質であるため、人間にはこの月紀の期間、それを使って水中を泳いでいく突起（こぶ [Auswuchsel]）があります。腕や脚について語る事ができるようになるのは、地球紀になって重力が作用し、とりわけ重力の方向に置かれたもの、つまり四肢が形成されてからのことです。つまりこれは地球紀になってから起こることです。けれども月紀の間に、後の時代とはまだまったく別様に作られていたとはいえ、消化器官が形成されます、この人間の消化器官は、まだ四肢の自由で恣意的な動きの処理に仕えるすべてのものを摂取する必要がないように作られています。これはまだ根本的に別の消化器官であり、これがのちに、地球消化器官である消化器官に変容するのです。とは言え、人間は月紀の間に消化器官を自らに組み込みます。

さらにまた、蝶、鳥、そしてライオンに代表されるような種の後裔に、今や主として消化への傾向を持つ動物たちが加わってきます。つまりこの月紀の間に例えば私たちが牛によって代表させたものが付け加わるのです。

けれども人間と対照的に、牛の成長はどのようなものでしょうか。それは、

牛はこの古い月紀の間にまず主に消化器官を形成するという事です、月が分離したあとで、消化器官から胸器官と独特に形成された頭が生え出てくるのです。人間は頭において発達を始め、それから胸、胸変容が続き、さらに消化器官が続く、ライオンは胸の器官から始まって、頭がそれに続き、人間と同時に月紀の間に消化器官を得るのですが、他方牛に代表される動物の場合は、最初の原基としてまず消化器官があり、次いでこれらから生え出てくるように、胸の器官と頭部器官が形成されます。つまり皆さんは、人間は頭から下へ、ライオンは胸から上と下へと生長し、牛は消化器官から胸へそしてようやく頭へと生長する、これを人間と比較すると、いわばまったく上に向かつて、心臓と頭に向かつて生長する、ということがわかりでしょう。このことから人間の進化を観ていくことができます。

さて、当然こういう問いが出てくるでしょう、このとき仲間のごとく人間の進化に参加するのは牛だけなのか、と。単に牛だけではなく、こういう何らかの惑星変容が起こるときはいつも、古い存在たちがさらに進化し、しかも新しい存在が生じるのです。牛は月変容の最初の時期にはもう出現しています。けれども月変容の最後にその最初の原基を獲得するほかの動物たちもさらに加わります。これらの動物はたとえば、月はすでに外部にあるために、もはや去っていく月を経験することができません。つまりこれらの動物は、この月の分離が引き起こすこと、つまり月がいれば牛の腹から心臓器官と頭器官を引き出すことを経験できません、後から出現する存在たちは、人間において消化によって固定されている地点にとどまっているのです。こうして、もともと消化動物のみであり続ける存在たち、人間がその腹部に有している段階にとどまっている存在たちが出現します。

驚と蝶が頭に、ライオンが胸に配分されるように、牛が下腹部に配分されるように、ただし、牛は同時に上部のものをすべての進化において生え出させる動物として、と申し上げたいのですが、ちょうどそのように、両生類および爬虫類、つまりヒキガエル、カエル、ヘビ、トカゲその他は、こういう表現を用いてよろしいなら、人間の下部、人間の消化器官にのみ配置されます。ここで純粋な消化器官が動物として出現するのです。

- 蝶
- 土星
- 鳥
- 太陽
- ライオン
- 牛
- 両生類、爬虫類
- 魚
- 頭
- 頭胸
- 頭胸下腹部

これらは月紀の後半にきわめて不格好な形で出現し、実際生ける胃腸、生ける胃と腸管なのです。その後地球紀になってようやく、これらはやはりまだ格別上品にも見えない頭部分を獲得します。カエルやヒキガエル、あるいはヘビをよくごらんください。これらはまさしく後の時代に消化動物として出現します、人間がその消化器官を、すでに以前得たものにいわば単に付け加えることができる、そういう時代になってです。

地球紀において、人間が重さと地磁気のもとでその四肢を形成すると、このときむろんカメもー私見によりカメを代表的なものとして取り上げてみましょうーその頭を頭というよりはむしろ四肢器官のように甲羅から差し伸ばします。このように私たちは、両生類と爬虫類においてこの頭がいかに不格好に形成されたかも理解することができます。頭の形成については実際のところ、それが正しいにせよ、まさしくこういう感情が起こるほどです、こういう頭では口からたちまち胃の中だ、と。そこにはあまり仲介物はないのです。

つまり人間を観察してその本性を動物の仲間に配分すると、爬虫類と両生類のなかに含まれるものに人間の消化活動を配分しなければなりません。そして事実こう言うことができます、人間がその消化の産物を腸のなかに持ち回るように、宇宙は地球という迂回路をとって、ヒキガエル、ヘビおよびカエルを、いわば宇宙の腸のなかで、地球の水・土状のエレメントのなかに宇宙が形成する宇宙の腸のなかで持ち回っているのだ、と。これに対して人間の生殖とより関連のあるもの、全般に月紀の最後になってはじめてその最初の原基のなかに形成されて地球変容になってようやく発生するもの、これに親和性があるのは魚です、魚とさらに下等な動物たちです。したがって私たちは魚を進化において遅れてきたものとみなさなければなりません、つまり、進化において人間の場合生殖器官が消化器官につけ加えられるときに、ようやく他の動物たちに付け加えられる存在とみなさなければなりません。ヘビは本質的に、生殖器官と消化器官の間を中継するものです。人間の性質を正しくのぞき込むと、ヘビは何を現わしているでしょうか。ヘビはつまりいわゆる腎臓導管

「Nierenkanal」を現わしています、ヘビは宇宙進化において人間の腎臓導管が形成された時期に出現したのです。

このように私たちは、人間がどのようにその頭から始まって下へと生長するか、地球がどのように人間から四肢を引き出して、この四肢が地球の重力と磁力の均衡をとるようにこれを用いるか、正しく追求することができます。そし

てこの下への生長と同時に、さまざまな動物のグループが形成されます。

おわかりですね、このようにしてその被造物をとまなう地球進化の正しい像が得られるのです。この進化にしたがって、これらの被造物は、今日私たちに見せているような姿に発達したのです。皆さんが蝶と鳥をよくごらんになれば、もちろんこれらは地上的な形姿を有しています、けれども皆さんは先の説明から、蝶は本来光の生きものであり、地上的素材は蝶に付着しているだけだ、ということをご存じです。蝶自身が自分は何であるかを皆さんに語る事ができるなら、蝶は皆さんに告げるでしょう、蝶は光からできた体を持っていることを、すでに申しましたように、蝶は地球素材として自らに付着されているものを荷物のように、何か外的なもののように身につけているということ。同様に、鳥は暖かい空気の動物である、と言えるかもしれません、と申しますのも、本当の鳥は、鳥のなかに拡がっている暖かい空気だからです、ほかのものは鳥がこの世で引きずっていく荷物なのです。こういう動物、つまり実際今日なおその光の性質、熱の性質を、地上的な覆い、土の覆いや水の覆いで包んで維持しているだけのこういう生きものたちは、全地球進化のもっとも初期に出現しました。これらの生きものが有している形姿は、人間が地上生活に下降する前に霊界で過ごす時を今でも見はるかすことのできるひとに、この霊界で経験されたことを思い起こさせます。なるほどこれらは地上的な形姿です、地上の素材が付着されているからです。けれども皆さんが、蝶であるこの浮遊し活動する発光存在を正しく思い浮かべるなら、地上的なものが付着しているものをこれらから除外して考えてくださるなら、その翼であるものによって鳥を暖かい空気存在にしている多量の力を、単に輝く光線として考えてくださるなら、そう考えてくださるなら、その外面の覆いのゆえにのみそのような姿に見え、やはりひとえにこの外面の覆いのゆえにそういう大きさであるこういう生きものたちは、やはり地上に下降する前の人間存在のことを知っているひとに、人間存在の地上へのこの下降を思い出させます。このように霊界をのぞき込むひとは、そのときこう言います、蝶のなかに、鳥のなかに、人間が地上に下ってくる前に生きていたあの霊の形姿を、高次のヒエラルキアの存在を思い起こさせる何かがある、と。理解力をもって蝶と鳥を眺めると、これらは、まだ地球進化に下降していなかったときに自らの回りに有していた霊の形姿の、小さなものに置き換えられた、変容された記憶なのです。地球素材は重く、克服されねばならないので、蝶は本来有しているその巨大な姿を、小さなものに縮め

ているのです。皆さんが蝶から地球素材であるものをすべて分離することができるなら、蝶は霊存在、発光存在として大天使の姿にまで拡がる事ができるでしょう。私たちはすでに、空中に棲まう動物たちのなかに、高次の領域に霊に即したしかたで存在しているものの地上的な模像（似姿）を有しています。したがって本能的な霊視者の時代において、飛行する動物の形姿から高次の霊存在の象徴的形姿、具象的形姿を創り出すことは、申すまでもなく芸術的な営みだったのです。それには内的な根拠があるのです。根本において、蝶と鳥の物質的な形姿は霊存在の物質的変容にほかなりません。霊存在たちは変容するわけではありませんが、蝶と鳥は霊存在たちの変容した模像なのです、もちろん両者は別の存在ですが。

したがって、私がすでにお話ししましたことに遡りもう一度以下のことを描写いたしましたら、皆さんにもっとご理解いただけるでしょう。私は皆さんに、蝶は本来光の生きものであり、その生存中から絶えず霊化された地球素材を宇宙に送り込んでいる、と申しました。さて私は、このとき宇宙に送り込まれるこれらの霊化された地球素材を、通常の太陽物理学の表現を振り所に蝶コロナ [Schmetterlingskorona] と呼びたいと思います。このように絶えず蝶コロナが宇宙に放射されているのです。けれども、この蝶コロナのなかに、鳥類が死ぬたびに宇宙に委ねるものが放射されます、こうして鳥類によって霊化された素材が宇宙に放射されていくのです。このとき外部から霊的に見ると、蝶類から発する煌めくコロナー一定の法則によりこれは冬にも維持されます。この光景、鳥たちから流出するものがより光線状にそのなかに入り込んでいくのが見られます。

よろしいですか、人間がまさに霊界から物質界に下降しようとするとき、そのとき人間をこの地上での生存へと呼び寄せるのは、まず第一にこの蝶のコロナ、霊化された地球素材のこの独特の放射です。そして鳥コロナの光線、これはもっと引き込む力のように感受されるものです。今や皆さんは大気圏のなかに生きているものの高次の意味をおわかりになるでしょう。まさに現実において生きて活動しているもののなかにいたるところに霊的なものを探求しなければならぬのです。霊的なものを探求してはじめて、個々の存在領域がいかなる意味を持っているかということに到達します。地球は、蝶コロナの光放射と鳥コロナの光線を宇宙空間に送り出すことで、いわば人間を再受肉へと誘うのです。これは、人間が死と新たな誕生との間しばらく純粋な霊界で過ごしたあ

と、再び新たな地上生へと人間を呼び寄せる（1）ということですが、ですから、人間が蝶の世界や鳥の世界を見る際に当然持つ複雑な感情の謎を解くことを困難に感じるのも不思議はありません。と申しますのも、実際に存在しているものは、下意識の底深く潜んでいるからです。実際に存在しているのは、新たな地上生への憧れの記憶です。

これはまた、これも私が皆さんにしばしば説明したと関連しています、つまり、人間は死の門を通過して地球から去った後、結局その頭を分散させ、それからそれ以外の生体組織を、むしろその力にしたがってであってその素材にしたがってではありませんが、次の地上生における頭へと作り替える、ということですが、つまり人間は本来、下降を求めることによって頭を求めたのです。そして頭は、すでにその後の人間の形態に似た姿で人間の胎児において最初に形成されるものなのです。これらすべてがそうであるということ（2）は、この頭へ向かつての形成が、人間を超感覚的なものから感覚的な生存へと引き寄せる飛翔する世界で作用し活動しているものと密接な親和性がある、ということと関連しています。

人間がその胎児期にまず最初に頭組織を獲得すると、このとき消化組織その他であるものが、母体のなかに配置されて、地上生から形成されます。上にあるもの、頭形成が、熱状のもの、空気状のものと関連しているように、土（水分要素（エレメント））と関連しているのは、進化の後の方で人間に組み込まれたもの、今新たにその胎児期のためにまったく特殊なしかたで準備されなければなりません、つまりほかならぬ母体のなかです。それが外部で地球的なもの、地上的なものなかに分散されてそれ自身のみ形成されるなら、それは下等動物の形態、両性類や爬虫類であるものへと形成されます、それは魚やまた下等動物であるものへと形成されるのです。

蝶が本来自らを光存在とみなし、鳥が自らを暖かい空気存在とみなすのは正当であるにしても、下等な動物、両生類、爬虫類、魚類はそうすることはできません。まずはひとつ魚をみてみましょう。今日見られるような魚は、外部に出現するとき、外的形成にいわば委ねられています、この形成においては人間には内部から作用する力が外部から魚に作用するのです。魚は主として水の要素のなかで生きています。しかし水というのは、化学者にとつての単なる結合した水素と酸素であるのみではありません、水は可能な限りのあらゆる宇宙の

諸力に浸透されています。星々の力さえ水の中に堂々と入ってきます、もし水がまさに水素と酸素の均質な結合であるだけなら、水のなかではどんな魚も生きられないでしょう。けれども蝶が自らを光存在と、鳥が自らを暖かい空気存在だと感じるのとまったく同様に、魚も本来は自らを土（水の存在）と感ずる魚が自らのうちに吸い込む本来の水、この水を魚は自らの本性だと感ずる感ずるん。

鳥は自分が吸い込む空気を自らの本性と感ずります。つまり鳥は本来、図式的に表現しますと、空気として鳥の中に入り込んできて、至るところに拡がっていくものを自分の本性だと感ずっています、この拡がっていき鳥によって暖められる空気（図参照、青「Dan」）、これが鳥の本性です。魚は自らのうちに水を有していますが、魚は自らを水とは感ずりません、魚は自らを、水を閉じ込めるものと感ずります、魚は自らを水を取り巻くものと感ずるのです。魚は自らを、こつたきらきら光る水の覆いある外皮と感ずるのです。しかし水というものを魚は、自分の中で出たり入ったりしているなじみのない要素と感ずっています。



編註

- 1 新たな地上生へと…これについてはシュタイナーによる神秘劇「魂の目覚め」の第八景における新洗礼者の描写も参照のこと。『四つの神秘劇』（1910-1913GA4）所収。
- 2 「われらへんがそつてあるといふこと」…これについては1922年1月6日のシュタイナーの講義も参照のこと。『人間の生成』宇宙魂、宇宙霊（GA205）所収。
- 3 ……魚の中で水が……編集者による意味に即した原文訂正（第7版）。

す、水は魚の中で出たり入ったりすることで、魚が必要としている空気をも同時にたらずのすが。けれども魚は空気と水を何かなじみのないものと感じます。魚はとりもなおさず物質的な魚としては、それを何かなじみのないものと感じるのです。とは言え、魚もまたエーテル体とアストラル体を持っています。これはまさに魚の奇妙なところなのですが、魚は本来自らを覆いと感じ、魚の中で水がその他の水的要素と結びついたままでいることにより（3）、魚はエーテルを自分が本来そのなかで生きているものだと感じるので。アストラル的なものを魚は自分の一部だとは感じません。ですから魚は、このようにまさしくエーテル動物である奇妙な動物なのです。自分自身を魚は水のための外皮と感じています。自分の中にある水を、魚は世界のすべての水と連携しているものと感じます。魚にとつていわば至るところに水分が連なっていくのです。まさに至るところに水分があり、この水分のなかで同時に魚はエーテルを感じとるのです（図参照 薄紫[3a]）。魚はもちろんこの地球上での生において口がきけません、もし話することができて、自分をどう感じるか語ることもできるとしたら、魚は皆さんにこう言うでしょう、私は覆いで、でもこの覆いは、至るところに拡がっている水の要素、エーテル要素の担い手である水の要素を運んでいるのです、私はほんとうはエーテルの中を泳いでいるのですよ、と。ー魚は語るでしょう、水というのはマアヤにすぎません、実在はエーテルです、私はほんとうはエーテルの中を泳いでいるのです、と。ーつまり魚は自分の生命を地球の生命と感じているのです。これが魚の奇妙なところ、魚は自分の生命を地球の生命と感じ、したがって四季の循環のなかで地球によって成されている全てに密接に関わっています、夏におけるこのエーテル力の放出、冬におけるこのエーテル力の回帰にです。ですから魚は全地球のなかで呼吸しているものを感じています。魚はエーテルを地球の呼吸として感じ取っているのです。

以前ここでヴァックスムート博士（4）が地球の呼吸についてお話しされました。とてもすばらしい説明でした。魚がもし講演術を学んだなら、自身の経験から魚はここで同じ内容を講演することができるでしょう、と申しますのも、魚はここで講演されることすべてを、それに属する現象を追求することから感じ取っているからです。魚は四季の経過の間の地球の呼吸生活をまったく並外れたしかたで経験している動物です、なぜなら魚にとつて重要なのは、まさにエーテル生命要素、波打ちつつ出たり入ったりし、他の呼吸するものをひ

たすら巻き込んでいくエーテル生命要素だからです。

爬虫類と両生類、たとえばこの点できわめて特徴あるカエルの場合事情は異なります。これらは宇宙のエーテル要素とはあまり関係なく、むしろ宇宙のアストラル要素と関係しているのです。魚に、そもそもお前はいつたいつたっているのか、と尋ねれば、魚はこう言うでしょう、そうです、この地球上では私は土になつた被造物です、土と水の要素から出来ています、でも私のほんとうの生命は、宇宙の呼吸とともにある地球全体の生命なのです、と。ーカエルの場合は違います、カエルの場合は事情はまったく違つたのです。カエルは普遍的に拡がったアストラル性に参加しているのです。

このことについて私は皆さんに植物の場合をお話ししましたし、さらにもう少しお話ししていくでしょう、宇宙のアストラル性が花の上部にいかにかかっているか、ということについてです。このアストラル性、いわば地球のアストラル体とカエルが関係しているのです、ちょうど魚と地球のエーテル体が関係しているようにです。魚はそのアストラル体をもつと自分自身のために有しています。カエルはもともとそのエーテル体を自分のために、魚よりもはるかに甚だしく自分自身のために有しています、しかしカエルはアストラル的なもの一般のなかに生きています、したがってカエルはとりわけ、四季の循環において起こっているあのアストラル的な経過を共に体験します、ここでは地球が水の蒸発と水の再落下のなかにアストラル性を戯れさせているのです。唯物論的に考えるひとは当然こう言うでしょう、水は私の知るところでは、あれやこれやの空気力学的な[aerodynamisch]、あるいは空気機械学的な

[aeromechanisch]力によつて蒸発するのだ、上昇があり、水滴が形成され、充分に重くなると、落下する、と。しかしこれは、人間の血液循環について、血液循環のなかではすべてが生きているということとを考慮することなく同様の理論を立てる場合とほぼ同じことです。このように、上昇し下降しつつ進む水の循環のなかには地球のアストラル気圏が、地球のアストラル性が生きているのです。私がこう申し上げるとしても、私は皆さんにお話しようなことをお話ししているではありません、まさしくカエルはーほかの両生類の場合にもこれはあるのですが、もつと後退していますー気象状態のなかに、気象

編註

4 ヴァックスムート博士: Gunther Wachsmuth, 1893-1966. 自然科学、法学、国民経済学を研究。法学で学位取得。シュタイナーにより1923年に一般人智学協合理事に任命された。協会で会計主任と自然科学部門の指導者。彼の著書「宇宙、地球、人間におけるエーテルの形成力」(シュトゥットガルト 1924)参照。

学のなかに展開しているこのアストラルの戯れとともに生きている、とお話ししてもです。カエルはご存じのように単に、よく知られた単純な方法で天気予報するものとして利用されるのみではありません、天気予報するのはそのアストラル性をもって地球のアストラル性に混合されていることにより、不思議にもこの戯れを共に体験しているからです、カエルは自分が感情を持っていないと言いません、そうではなくカエルは、雨期、乾期などに地球が持っている感情の単なる担い手にすぎないのです。ですから皆さんは、ある気象状態のもとで、多かれ少なかれ、素晴らしいかあるいはひどいカエルの音楽会を経験なさるわけです。本質的に言ってこれは、カエルが地球のアストラル体のなかで共に体験していることの表現なのです。カエルはほんとうに、全宇宙からそのきつかけを与えられることなしに鳴くことはありません、カエルは地球のアストラル体とともに生きているのです。

私たちはこのように言うことができます、土一水的要素のなかに生きているものは、実際のところ、地球的なものをよりいつそう共に体験する、いうことだ、と。つまり魚の場合は地球的生命状態を、カエルと爬虫類―両性類全般の場合は地球的感受状態を共に体験するのです。逆に、人間の消化組織であるものすべてを研究しようとするなら、こう言わなければなりません、この消化組織は、むろんまたこの図式にしたがって内部から形成される、と。しかしこれらのものがどのように機能を果たしているかを真に研究しようとするひとは、両生類、爬虫類に向かわなければなりません、と申しますのも、人間がその消化器官の中を力として押し進めているものが、両生類―爬虫類には外から飛来してくるからです。人間が消化に用いるのと同じ力で、外なる宇宙、外なる自然はヘビ、ヒキガエル、トカゲ、カエルを形成するのです。そして正しく―お許しください、けれども自然においては何ら醜悪なものはありません、すべては客観的なしかたで論議されねばならないのです―、そうですね、人間の大腸の内部の性質を、その排泄の力とともに正しく研究しようとするひとは、外的にヒキガエルを研究しなければなりません、と申しますのも、人間の腸の中でこの図式にしたがって内部から作用しているものが、ヒキガエルに外から飛来してきているからです。これは描写という点では、私が蝶のために描写せねばならなかったことのように美しいものではありません、しかし自然においては、あらゆるものがまさに客観的な平等において受け入れられねばならぬのです。

よろしいですが、このようにして今や皆さんも、地球は地球自身の方でも宇宙的を共に体験しているということについてひとつのイメージを得られるのです。と申しますのも、いわば地球の排泄の器官を眺めてごらん下さい、地球は単に、生命に乏しい人間の排泄物を排泄するのみならず、もつと生命的なものを排泄します、地球の本来の排泄物はたとえばヒキガエルであり、このなかで地球は使用できないものを処理するのです。

これらすべてのことから皆さんは、いかに自然の外部がいたるところで内部と照応しているか、おわかりになるでしょう。ここで「自然の内部へは創造する霊[Geist]は入り込んでいかない」(5)と言つひとは、外界のいたるところに自然のこの内部が存在している、ということを知りたいだけなのです。私たちが人間全体をその内部存在にしたがって研究することができるのは、私たちが外部宇宙において活動し生きているものを理解するときです。私たちがこれを、この人間を、頭から四肢まで研究することができるのは、私たちが外界に存在しているものを研究するときです。宇宙と人間はまさに完全に補充し合せて全体を成しているのです。さらに、図を作成できるかもしれない、とも言えます、それは次のようなものでしょう、大きな円があります、大きな円はその力を一点に集中します。大きな円は内部にそれより小さな円を作り出します、点がそれを放射するのです。小さい方の円はさらにもっと小さい円を形成します、内部にあるものがそれを放射するのです。こういう円がまたそのような円を形成します、人間のもとにあるものは、外に向かって放射し、人間の外部は宇宙の内部に触れるのです。私たちの感覚が宇宙と出会うところ、そこでは人間において内から外へと出ていったものが、宇宙において外から内へとやってきたものに触れるのです。この意味で人間は小宇宙であり、マクロコスモスに對するミクロコスモスなのです。しかも人間はこのマクロコスモスの驚異と秘密のすべてを内包しています、ただ、展開の方向は真反対ですが。

もし、私が今までご説明してきましたような状況のみだとしたら、これはさらなる進化ということに関して地球にとって非常に不都合なことでしょう、そうなる地球は、ヒキガエルという存在を排泄し、物質的な人間存在と同様いつの日か存続することなく滅亡してしまうでしょう。私たちは今のところ動物

5 「自然の内部へは……ベルンの医師、詩人、植物学者アルフレート・ハラー(1798-1877)の教訓詩「人間の徳の虚偽」のなかの箴言、ゲーテはこの箴言への反論として「もちろん、物理学者に」という詩を書いた、ゲーテ詩集「神と世界」の部に所収。

との関連における人間のみに注目しておりますが、ここ数日間植物存在に対しても小さな橋を架けなければなりません。私たちはさらに植物の領域に、そして鉱物存在の領域にも入り込んでいかなければならないでしょう、そして私たちは地球紀の間に鉱物存在がどのように出現したかを見るでしょう、つまりたとえば、この地域の始源岩層の岩石であるものが植物によっていかにひとつひとつ沈殿させられるか、石灰岩山地がもっと後期の動物によっていかにひとつひとつ沈殿させられるかを見るでしょう。鉱物界は植物界・動物界の沈殿であり、本質的には、もっとも下等な動物の沈殿です。ヒキガエルは地球の鉱物質のものに対してはまだそれほど多くを提供しておらず、魚も比較的わずしか提供しておりません、しかし下等動物と植物は非常に多くを提供しています。珪酸の甲皮や石灰の甲皮、石灰の殻を持つ下等な生きものたちは、まず自らの動物質のもの、植物質のものから作り出したものを沈殿させます、そして鉱物質のものが崩壊します。鉱物質のものが崩壊するとき、まさに鉱物質のものが崩壊生成物[Zerfallsprodukte]を最高の力がとらえ、この崩壊生成物から新たな世界を築きます。ある特定の場所の鉱物質のものがまさにとりわけ重要なことがあるのです。

私たちが地球進化―熱変容、空気変容、水変容、鉱物的・土の変容―を追求していきますと、人間の頭はこれらすべての変容を経てきました、(人間の頭は)崩壊していく、それでも本当は常にまだいくらか生命力に浸透されている頭骨における、まず外へと向かう鉱物的変容です。しかし、もつとずつとはつきりしたしかたで、人間の頭は土的・鉱物的変容を経てきたのです。脳形成において人間の頭の中心部には、ピラミッド型に形成された器官、松果腺[Zirbeldrüse]があります。四丘体[Vierhügelkörper]と視床[Sehnhügel]の近くにあるこの松果腺はいわゆる脳砂[Gehirnsand]を分泌します、レモン色の石粒で、松果腺の一端に小塊のように付いていて実際人間頭部のなかの鉱物質のものです。これがないと、つまり人間がこの脳砂を、この鉱物質のものを内部に持たないと、人間は白痴になるかクレチン病[Kretin]になるかです。標準的な人間の場合松果腺は比較的大きいのです。クレチン病の場合、麻粒大の松果腺しか発見できませんでしたが、これは脳砂を分泌することができません。

霊人[Geistesmensch]は本来この鉱物質の含有物のなかに位置しているので、このことがすでに、生命的なものは本来最初は霊[Geist]を宿らせるこ

とはできず、人間において霊はその中心点として生命的でないものを必要とし、とりわけ独立した生きた霊としてそこに存在しなければならぬ、いうことを暗示しています。

私たちが蝶―頭形成、鳥―頭形成から下降して爬虫類と魚まで導いたのは、素晴らしい展開でした。今や私たちは再び上昇していき、動物系列と同様私たちを満足させることができるもの、植物系列と鉱物系列を考察していくでしょう。私たちが過去について動物系列から学びを引き出すことができましたように、同様に地球の未来のために鉱物系列から希望を引き出すことができるでしょう。その際私たちはむろんまだ、次回からの講義でさまざまなかたで過渡的動物に入っていく必要があります、と申しますのも、この概観において私は、進化の分岐点に現われるもつとも主要な動物たちにしか言及することができなかったからです。

第7講 一九三三年一月二日 ドルナ八

- ・植物界に関わる目に見えない存在たち
- ・根の精霊グノームと鉱物
- ・グノームは植物を通じて宇宙の理念を知覚する
- ・グノームと両生類
- ・地上的なものへのグノームの反感
- ・水の元素霊ウンディーネは植物の葉で働く
- ・ウンディーネは空気素材を結合し分離する夢見る化学者
- ・ウンディーネと魚
- ・空気―熱エレメントのなかに生きるジルフェ
- ・ジルフェは鳥の飛翔とともに空気のなかで響く宇宙音楽を聴く
- ・鳥のなかに自我を見出すジルフェは宇宙の愛の担い手
- ・ジルフェは植物に光をもたらず
- ・ジルフェとウンディーネの共同作用により原植物の理念形態が形成される
- ・滴り落ちてくる植物の理念形態を地下でグノームが受け取る
- ・唯物論的の科学による植物の受精の説明の誤謬
- ・熱―空気のエレメントのなかに生きる火の精霊たち
- ・火の精霊は宇宙の熱を集めて植物の花にもたらず
- ・植物の受精は花ではなく、地下で行われる
- ・植物の父は天、母は大地
- ・グノームは植物の生殖の霊的な産婆
- ・火の精霊は蝶、昆虫と一体化しようとする
- ・蜂のオーラとなる火の精霊たち
- ・下降する宇宙の愛―供犠と上昇する地の密度―重力の共同作用の現れとしての植物

外的に知覚できる可視の世界に、不可視の世界が属していて、可視の世界と共に一つの全体を形作っています。これは、今私たちが眼差しを動物から植物に転じてみると、まず極めて明白になることです。

何はさておき人間を喜ばせる現存する植物は、大地から芽生え萌え出て、秘密に満ちたものと感ぜられざるを得ない何かへの手がかりを形成しています。

動物の場合は、たとえ動物の意志、動物のまったく内的な活動性がすでに人間にとつて何か秘密に満ちたものであるにしても、それでも人間は自らにこう語ることができません、まさしくここにはこの動物の意志があり、そしてこの意志から形態が生じる、動物の発現は結果なのだ、と。しかし植物、これほど多様な形態をとつて地球の表面に現れ、これほど秘密に満ちたしかたで大地と大気圏に助けられて種子から生え出る植物について、人間は、この植物界がまさに人間に向かつて現れてくる形態で現れてくることができるためには、何か別のものが存在しなければならぬ、ということを感じ取らざるを得ないのです。

私たちが植物界に目を向けるとき、霊的な観照はすぐさま私たちを溢れるほど多くの存在たちへと導きます、人間の本能的霊視のあつた古代にも知られ、認識されていたけれどもその後忘れられ、今日詩人たちが用いる名前のみをとどめ、今日の人類にはそもそもその実在を認められていない多くの存在たちに。けれども、植物の周りに群がり取り巻いている存在が実在を認められないのと同じ程度に、植物界に対する理解も失われています、例えば治療法にとつて（一）欠くことはできないと思われるこの植物界に対する理解は、実際今日人類からすつかり失われてしまったのです。

さて私たちがすでに、植物界と蝶の世界との非常に重要な関係を知りました、ただしこれが私たちの魂の前に正しく現れるのは、私たちが植物界の活動と営み全体をさらに深く覗き込むときです。

植物はその根を地中に伸ばします。ここでそもそも植物から地中へと伸ばされているものを追求するひとは、霊的な眼差しによって、しかも根を正確に洞察するひとは実際そうであらざるを得ないので、同時にいたるところで植物の根というものがいかに自然元素霊たち[Naturelementargeistern]に取り囲まれ取り巻かれているかを追求することができます。そしてこの元素霊たち、古い観照力がグノームと呼びならわし、私たちが根の精霊[Wurzelgeistern]と呼ぶことのできるこの元素霊たちを、私たちはイマジネーションのインスピレーションの世界観によって実際に追求できます、私たちが物質的なもののなかに人間の生活と動物の生活を追求するのと同じようにです。私たちがいわば、この元素霊たちの、この根の精霊の世界の魂的なものを覗き込むことが

編註

1 治療法にとつて：ルドルフ・シュタイナーノイター・ヴェークマン著。精神科学的認識による治療法の拡張のための基礎』（1925 GA27）参照。

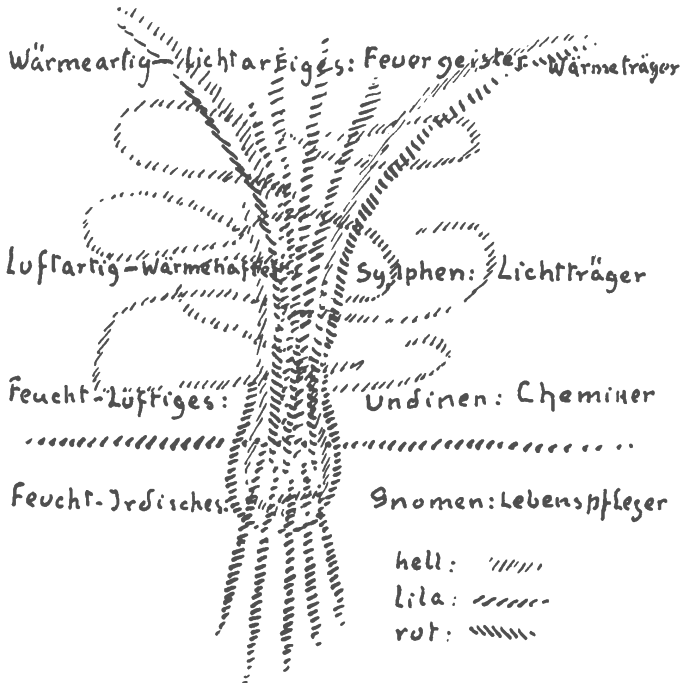
できるのです。

この根の精霊たちというのははまったく独特の地中の民で、外的な眼差しにとつて最初は不可視ですが、その働きはそれだけいつそ目に見えるものだと申しますのも、根と土壌の間をこの奇妙な根の精霊たちが中継しなかつたらどんな根も生ずることができないでしょうから。根の精霊たちは地中の鉱物的なものを流動状態にして植物の根にもたらしめます。もちろんこれは、靈的に根底にある経過のことを申し上げているのです。

土壌のいたるところに存在しているこの根の精霊たちは、多少とも透明な、あるいは金属にも貫入されている岩石や鉱石のなかで格別心地よく感じますが、自分たちの本来の居場所があるためにもっとも心地よく感じるのは、鉱物的なものを植物の根に媒介するときです。根の精霊たちは、内的な靈的性質のものによってすっかり満たされます、私たちが人間の眼や人間の耳の内的靈的な性質のものなかで捉えることのできるものとのみ比較することのできる靈的性質のものによってです。と申しますのも、根の精霊たちというのは、そういう靈的性質のものなかでまさに感覚であるからです。根の精霊たちは本来通常は感覚から成り立っている以外の何ものでもなく、そしてこの感覚は同時に知性でもあり、単に見たり聞いたりするだけでなく、見たり聞いたりしながら即座に理解する感覚、いたるところで単に印象を受け取るだけでなく、いたるところで理念を受け取る感覚なのです。 - - そう、私たちはこの根の精霊たちが理念を受け取るしかたを示すこともできます。よろしいですが、大地から植物が芽吹いてきます(図参照)。植物は、このあとすぐ示しますように、地球外の宇宙万有とつながりを持つようになり、ある季節にはとりわけ、いわば靈の流れ[Geiststrom] (薄紫) が上から、植物の花や実から、下の根に向かって流れます、地中へと流れ込みます。そして私たちが眼を光に向かって差し延べ、そして見るように、根の精霊は、植物を通して上から地中へと滴り落ちていくものにその知覚能力を向けます。このとき根の精霊に向かって滴ってくるもの、これは、光が花の中へと送り込んだもの、太陽の熱が植物のなかに送り込んだもの、空気が葉の中で仕上げたもの、そしてそう、はるかな星々が植物の形成に働きかけたものです。植物は宇宙万有の秘密を集め、それを土壌に送ります、そしてグノームたちは、植物を通じて彼らのところに靈的に滴ってくるものから、この宇宙万有の秘密を自らのうちに受容するのです。そしてとりわけ秋から冬の間中ずっと鉱石や岩石のなかを遍歴しながら、植物を通じ

て滴ってきたものを携えていくことで、そのことによつて根の精霊たちは、地球の内部で全宇宙の理念を地球に浸透させつつ遍歴し携えていく存在となるのです。私たちははるかに宇宙を見渡します。宇宙は宇宙靈[Welengeist]により築かれ、宇宙理念の、宇宙靈の受肉です。グノームたちは、彼らにとつて私たちにとつての光線と同じものである植物を通して宇宙万有の理念を受け取り、それを地球の内部で完全に意識しながら鉱石から鉱石、石から石へと運んでいくのです。

私たちは大地の奥底を見下ろします、そうすることで、何らかの単に機械的に作用する自然法則のための抽象理念をそこに探し求めるものではありません、そうではなく私たちは大地の奥底を見下ろして、地球の内部での宇宙知性の光に満ちた番人である遍歴し逍遙するグノームたちを見るのです。このグノームたちは見たものを即座に知るがゆえに、人間と比べても確かに同じ性質の知識



Wärmeartig-Lichtartiges :Feuergeister: Waermetraeger
 (熱-光的なもの)(火の精霊たち)(熱の担い手)
 Luftartig-Waermehaftiges: Sylphen: Lichttraeger
 (空気-熱的なもの)(ジルフエたち)(光の担い手)
 Feucht-Luftiges: Undinen: Chemiker
 (水-空氣的なもの)(ウンディーネたち)(化学者)
 Feucht-Irdisches: Gnomen: Lebenspflieger
 (水-土的なもの)(グノームたち)(生を養う者)

hell:明色
 Lila:藤色
 rot:赤色

を有します、グノームは抜きん出た知性存在であり、彼らは完全知性そのものなのです。グノームにあつてはすべてが知性です、ただしそれは普遍的な知性ですが、人間の知性など不完全なものとして見下すような知性です。グノームの世界は実際、私たちがこうしてあれこれのことを把握しようとするときのしばしば難渋し悪戦苦闘する知性を思う存分笑っているのです、グノームはあれこれ思案する必要などまるでないわけですから。グノームは宇宙における知であるものを見ます、そして、人間があれこれのことにどうにか辿り着くために骨折らなければならぬと気づくと、とりわけ嘲笑的になります。どうしてまたそんなことができるんだい？グノームは言います、どうしてまたあれこれ考えるなんていう骨折りができるんだい？見りやあ全部わかるじやないか。人間どもはばかだよーグノームはこう言うのです、何せあれこれ考え込まなきや始まらんのだからな。

さらに申し上げたいのですが、ひとがグノームに論理について語るなら、彼らは不作法なまでに嘲笑的になるでしょう。いったい何のためにそんな無駄なものが必要だと言つんだ、思考への導きだつて？思考はそこにあるじやないか。理念は植物を通して流れてるじやないか。何で人間どもは鼻を植物の根みたいに地面の奥に突つ込んで、鼻先にぼたぼた落としてもらわなんだ？太陽が植物に話して聞かせることをさ。そうすりや人間どもも少しはものがわかるつてもんだらうに！だけど論理なんかじやーグノームは言います、ほんのこれっぽっちも知るなんてこたあできつこないのさ。

このようにグノームとは本来、宇宙万象の、万有の理念を、地球の内部で担う者なのです。ところがグノームたちは地球自体を全く好んではおりません。彼らは宇宙万有の理念を携えて地球を飛び回っておりますが、もともと地上的なものを憎んでいるのです。地上的なものは彼らにとつてもっとも逃れ去りたいものなのです。それでもやはりグノームたちはこの地上的なものそばにとどまり続けます、なぜなのかはまもなくおわかりになるでしょう、でも彼らはこれを憎みます、なぜなら地上的なものは、グノームたちに対して絶えず危険を作り出すからです、しかも地上的なものは、グノームたちにある姿をとらせようと、つまり私が前回にここで皆さんに描写いたしました存在たちの姿、とくに両生類、カエルやヒキガエルの姿をとらせようと脅かすからなのです。ですから地中のグノームはこう感じています、あんまり土にくつつくと、カエルやヒキガエルの姿になつちまう、と。ですから彼らは大地とあまり癒着

しすぎてこういう姿にならないように、絶えずジャンプしています、彼らは、自分たちが属しているエレメントのなかでこうして脅かすこういう土の姿に対して絶えず抵抗しているのです。彼らは土、水的エレメントのなかにとどまっています、ここでは絶えず両生類の姿になる危険に脅かされます。この両生類の姿になることからグノームは絶えず身をもぎ離し、地球外の宇宙万象の理念で自らを満たすのです。彼らは本来、地球の内部で地球外のものを示すものです、地上的なもの癒着することを絶えず避けなければならぬからです、さもないと個々のグノームはまさに両生類世界の姿になつてしまつてしまうから。そして地上的なものに対するまさしくこの憎悪の感情、嫌悪の感情でも申し上げたいものから、グノームたちは、植物を地面から追い出す力を獲得します。彼らはその根源力で地上的なものから離れ、この離脱によって植物の上への成長の方向が与えられます、彼らは植物を巻き添えに引き離すのです。これはグノームの地上的なものに対する反感です、これは植物をその根においてのみ土領域に属させ、その後土領域から引き出して生え出させるものです、つまり実際グノームたちは、植物をその生来備わった土の姿から引き離し、上に向かって成長させているのです。

さらに植物が上へと成長し、グノームの領域を去つて、水、土的エレメントの領域から水、空気のエレメントの領域へと移行すると、このとき植物は葉において外的物質的に形状化するものを発達させます。けれども、今や葉において活動しているすべてのものなかでは、また別の存在たちが作用を及ぼしています、古代の本能的霊視者の術がたとえばウンディーネと呼んだ水の精霊（水の精）たち「Wassergeister」、水のエレメントの元素霊たちです。グノーム存在たちが根を取り巻いて飛び回り動き回っているのが見られるように、地面の近くでは、この水存在たちが、これら水の元素霊たち、ウンディーネたちがグノームが与えた上への志向を心地よく眺めているのが見られます。

ウンディーネたちは、その内なる性質によりグノームたちとは異なっています。ウンディーネは感覚器官のように、霊的な感覚器官のように宇宙万有へと伸びていくことはできません。ウンディーネは本来、空気、水的エレメントのなかの全宇宙の動き働きに身を委ねることができるだけで、そのためグノームほど利発な精霊ではないのです。ウンディーネは絶え間なく夢見ています、とはいえこの夢が同時にウンディーネ自身の姿なのです。ウンディーネはグノームほど烈しく地球を憎んではおりませんが、地上的なものに対して非常に敏感

です。ウンディーネは水のエーテル的エレメントのなかで生きていて、このエレメントのなかを漂い浮遊しています。それにウンディーネは魚であるものすべてに対してとも過敏です、なぜなら、時折とつしまつ魚の姿はウンディーネにとって脅威だからです、とはいえずぐまた魚の姿を捨てて別の姿に変容していくのですが、ウンディーネは自らの存在を夢見ています。そして自身の存在を夢見ながらウンディーネたちは結びつけては解き放っています、空気の素材を結びつけては分離しているのです、空気の素材をウンディーネたちは秘密に満ちたしかたで葉のなかにもたらし、グノームたちによって上へと押し上げられたものところに運んでいくのです。グノームたちは植物存在を上へと押し上げます（前の図参照、明色）。ウンディーネ存在たちがいわば四方からやってきて、植物を取り巻くこの夢のような意識のなかで、これ以外に言いようがないのですが、宇宙化学者[Weltenchemiker]である証しを見せてくれないなかつたら、ここで植物存在は干からびてしまつてしまう。ウンディーネたちは素材の結合と分離を夢見ているのです。そして植物がそのなかに生き、上へ向かって地を去りそのなかへと成長していくこの夢、このウンディーネの夢こそが、植物のなかで葉から発して素材の秘密に満ちた結合と分離を引き起こしている宇宙化学者なのです。したがって私たちは、ウンディーネは植物の生の化学者だと言つことができます。ウンディーネは化学を夢見ています。これはウンディーネのなかのきわめて繊細な靈性です、実際そのエレメントを水と空気が触れ合うところに有している靈性です。ウンディーネたちはまったく水的なエレメントのなかで生きています、ところがウンディーネがほんとうの内なる満足を感ずるのは、どこか表面に、単に滴（しずく）や何らかの液体であってもその表面にいるときです。と申しますのも、ウンディーネは、魚の姿になつてしまわないように、魚の姿をとり続けられないように苦心して身を守らなければならぬからです。ウンディーネは変容し続けたいと思つていますが、永遠に常に絶えることなく姿を変えていきたいと思つてからです。ウンディーネはこうして変化しつつ星々や太陽、光や熱のことを夢見ているのですが、この変化においてウンディーネは、今や葉から発して植物をさらに形成させる化学者となります、グノームの力によって上へと押し上げられた植物をです。さてこのように植物は葉を成長させ（前図参照）、植物がそのなかへと成長していくウンディーネの夢として秘密のすべてが明かされるのです。

けれども、ウンディーネの夢のなかへと成長していくのと同じく、今や植物

はさらに上の別の領域へと入っていきます、グノームが水・土的エレメントのなかに、ウンディーネが水・空気のエレメントのなかに生きていくように、今度は空気の「熱的エレメント」のなかに生きていく精霊たちの領域へ。このように空気の「熱的エレメント」のなかに生きていくのは、古代の本能的靈視術がジルフェと名付けた存在たちです。気体状の暖かいエレメントのなかに生きていくこれらジルフェたちはしかし、空気はいたるところで光に浸透されているため、光へと押し進み、光に親和的になります、そしてとりわけ、気圏の内部のより精妙でより大きな運動であるものの影響を受けやすいのです。

皆さんが春か秋に、ツバメの群をごろんになるなら、飛翔しつつ空気の体を振動させ、運動する空気の形状を引き起こしているツバメの群をごろんになるなら、この運動する空気の形状、とはいえこのときは個々の鳥に備わっているのですが、この空気の形状は、ジルフェにとって聴き取ることでできるものなのです。そこからジルフェに宇宙の音楽が鳴り響いてくるのです。皆さんがどこか、そつです、ね、船に乗っていて、カモメが飛んでくるとき、カモメの飛翔によって呼び起こされたものの中には、船の伴奏をする靈的な響きが、靈的な音楽があるのです。

さらにまた、この響きのなかで自らを広げ展開させ、この呼び起こされた空気の形状に故郷を見出しているのもジルフェなのです。靈的に響きを発しつつ揺り動かされた空気エレメントのなかにジルフェは自らの故郷を見出し、そこで光の力がこの空気の振動のなかに送り込むものを受け取ります。けれどもこれによってジルフェは、鳥が空中を通り過ぎるところではどこでも、もつとも慣れ親しんだ、我が家のような感じを持ちます、ジルフェは基本的にそれ自身としては多かれ少なかれ眠っている存在なのですが、鳥のいない空中を飛んでいくことを強いられると、これはジルフェにとってまるで自分自身が失われたかのようなものです。空中に鳥が見えるようになると、ジルフェにまつたく特別なものがやって来ます。私はしばしば人間にとってのあるべきことを提示しなければなりません。私は常に、人間の魂を自らを「私」[Ich]と言つことに導くことができず。私は常々、ジャン・パウルの言葉（2）に注意を喚起してまいりました、人間が最初に私という表象に辿り着いたとき、ヴェールをかけた魂の至聖所を覗き込むようだ、という言葉です。ジルフェは自分の魂のこのようなヴェールをかけた至聖所を覗き込むわけではありません、ジルフェは鳥を見るのです、すると私という感情がジルフェを襲います。鳥が空

中を飛翔しつつ自らのなかに呼び起こすもの、このなかにジルフェは自分の私（自我）を見出しします。そして外的なものにその私（自我）を点火するために、ジルフェは大気の空間を貫く宇宙的な愛の担い手となるのです。ジルフェはまた同時に、たとえば人間の希望のように生きておりますが、私（自我）を内部に持たず、鳥の世界のなかに持つことによって、宇宙万象を貫く愛の希望の担い手でもあるのです。

ですから鳥の世界へのジルフェの深い共感に目を向けなければなりません。グノームが両生類の世界を憎んでいるように、そしてウンディーネが魚に対して過敏でいわば魚に近づきたがらず、魚から離れたがっている意味で恐怖を感じているように、ジルフェは鳥の方へ行こうとし、漂い響きを発する空気を鳥の羽に乗せて運んでくることができると、心地よいと感じます。そして皆さんが鳥に向かって、誰に歌を習ったのか尋ねるとしたら、鳥からこう聞かされるでしょう、私に靈感（インスピレーション）を与えるのはジルフェです。と。ジルフェは鳥の姿を好ましく思っています。とはいえジルフェは宇宙の秩序により、鳥になることを妨げられています。ジルフェには別の務めがあるからです。ジルフェの務めは、愛の中で光を植物にもたらすことです（前図、明色と赤）。ウンディーネが化学者であるように、これによってジルフェは植物にとつて光の担い手なのです。ジルフェは植物に光を浸透させます、植物の中へと光をもたらすのです。

ジルフェが植物のなかに光をもたらすことによって、植物のなかにまったく独自のものが作り出されます。よろしいですが、ジルフェは絶え間なく光を植物のなかに運び入れます。光、すなわち植物のなかのジルフェの力は、ウンディーネが植物のなかに移動させる化学的力に働きかけます。ここでジルフェの光とウンディーネの化学的共同作用が起こります（前図、赤）。これは奇妙な可塑的な活動です。上へと流れてきてウンディーネに加工された素材を助けに、ジルフェはその中に理想的な植物形態を光から織り上げます。ジルフェは実際光とウンディーネの化学的働きから、植物のなかに原植物 [Urpflanze] を織り出すのです。そして植物が秋にかけてしほみ、物質的な素材であるものがすべて塵と化すと、このときこの植物のフォルムはまさしく滴り落ちていき、それを今やグノームが知覚します。宇宙が、つまりジルフェを通して太陽が、ウンディーネを通して大気が植物に引き起こすものを知覚するのです。これをグノームたちは知覚しているのです。したがってグノームたちは冬の間中ずっと、

下で、植物によって土壌のなかに滴り落ちてくるものを知覚するのに忙しいのです。このときグノームたちは、植物のフォルムのなかの宇宙の理念を捉え、それはジルフェに助けられて可塑的に形成され、精神（霊）―理念の形態 [Geist-Ideengestalt] をとつて土壌のなかに入っていきます。

植物を単に物質的に、物質として観察する人々は、この精神―理念の形態について（3）何もわからないの言うまでもありません。したがってここで登場してくるのは、物質的な植物観察にとつての大きい誤謬、恐るべき誤謬に他ならぬものです。この誤謬を皆さんにざっとお話ししてみましよう。

皆さんは唯物論的の科学がいたるところでこう記述しているのをごらんになるでしょう、植物はこの土壌に根付き、上にその葉を広げ、最後に花、花のなかの雄蕊（おしべ）[Staubgefäße]、そして雌蕊の子房 [Fruchtknoten]、そして普通ほかの植物の葯（やく、ひげ）[Anthere]、雄蕊から花粉がもたらされ、雌蕊の子房が受精（受粉）して新しい植物の種子ができる、と。どこでもこう記述されています。いわば子房が女性的なものとみなされ、雄蕊からやってくるものが男性的なものとみなされていて、唯物論的なものにとどまる限り、異なった見方をすることはできません、ここでは本当にこのプロセスは受精 [Befruchtung] のように見えるからです。ところがそうではなくて、受精一般、植物の生殖を洞察するために、私たちが意識しておかなければならないのは、まず第一に植物のフォルム、偉大な化学者ウンディーネが引き起こし、ジルフェが引き起こすものから生じる理想的な植物のフォルムは、地中に沈下しグノームに守られている、ということなのです。それは下の方にあるのです、この植物のフォルムは、これをグノームが見て観察した後で、今やこの植物のフォルムはグノームによって地中で大切に守られます。土は、滴り落ちてくるもの

編註

2 ジャン・パウルの言葉：ジャン・パウル Jean Paul、本名ヨハン・パウル・フリードリヒ・リヒター 1763-1825 家庭教師、作家、詩人。このシュタイナーにより自由に再現された言葉はジャン・パウルの著作『ジャン・パウルの生涯の真実』（第一小冊子、フレスラウ 1826、2回の講義、53頁）に基づく。字義通りには、非常に幼い頃、ある朝私は家の戸口の下に立って左の木材の層を見ていた、と突然、私は「*Ich*」である、という内なる視覚が、天からの稲妻のように私の前に訪れ、以来ずっと輝きつづくとまった、このとき私の自我「*Ich*」ははじめて自己自身を見たのだ、永遠に。記憶違いはここでは考えられない。どんなにも珍しい物語も、ヴェールをかけられた人間の至聖所で起こる事件、その新鮮さだけであんなにありふれた付随状況までとめておく事件には、何かを付け足して干渉することなどできなかったから。」

3 この精神―理念の形態について：シュタイナー『四つの神秘劇』（1910-1913 GA14）参照。第四の劇「魂の目覚め」第一景：グノームたちの合唱、ジルフェたちの合唱。

の母胎となるのです。ここには、唯物論的な科学が記述するのとはまったく別のものであります。

植物はこの上部で（下図参照）、ジルフェの領域を通過したあと、火の元素の精霊たち[Elementar-Feuergeister]の領域に至ります。この火の精霊たちは、熱—空気のなものを住処としていて、地熱が最高度に上昇させられるか適当な状態になると、熱を集めます。シルフェが光を集めたように、火の精霊は熱を集めてこれを植物の花のなかにもたらしめます。

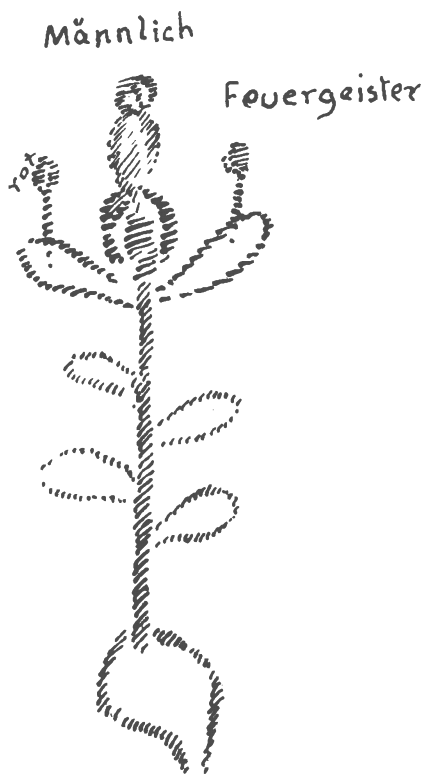
ウンディーネは植物の中に化学エーテルの作用をもたらし、ジルフェは植物のなかに光エーテルの作用をもたらし、火の精霊は植物の花の中に熱エーテルの作用をもたらします。そして花粉、これは今や、いわば熱を載せて種子の中にもたらし小々な空気の舟を火の精霊に提供するものとなります。花糸

[Staubfaden]の助けを借りていたるところで熱が集められ、花糸から子房のなかの種子へと運ばれます。そしてこの子房のなかに形成されるもの、この全体が宇宙からやって来る男性的なものなのです。子房は女性的なものではありませんし、花粉の葯が男性的なものというわけではないのです！そもそも花のなかで受精が起こっているのではなく、花においては単に男性的な種子が形成されるだけです。ここで受精として機能しているものは、宇宙万有の熱から火の精霊たちによって花のなかに宇宙男性的な種子として取り出されたものであり、これが女性的なもの、皆さんにお話ししましたように、形成する植物から理念的なものとしてすでに前もって土壌のなかに滴下され、土壌の中に安らっている女性的なものひとつにされるのです。植物にとって大地は母であり、天は父です。地上的なもの外で起こっていることはすべて、植物にとつて母胎ではありません。植物の母性原理が雌蕊の子房のなかにあるなどと考えるのは、とつともない誤謬です。子房のなかにあるのは火の精霊に助けられて宇宙から取り出された男性的なものに他なりません。母的なものは、植物の形成層[Kambium]、これは樹皮や木質部に向かって広がっていますが、この形成層から理想的形態として植物にもたらされるものです。そして今、グノームの作用と火の精霊の作用との共働から生まれるもの、これが受精なのです。根本的に言って、グノームたちは植物の生殖の霊的な産婆なのです。そして受精は冬の間、地下で起こります。種子が地中に送り込まれて、ジルフェとウンディーネの作用からグノームが受け取った形態にぶつかるときです。授精しつつある種子にこの形態がぶつかることができるまで、グノームはこの形態を運

ぶのです。

おわかりですね、人々が霊的なものを知らないために、植物の成長とともに、グノーム、ウンディーネ、ジルフェ、火の精霊—これは以前はサラムンダーと呼ばれていました—がいかに活動し、生きているかを知らないために、植物界における受精という出来事についての理解がまったく不明瞭なのです。つまり、大地の外で起こっていることは受精などではなく、植物界の母は大地、植物界の父は天です。これはまったく文字通りの意味でそうなのです。そして植物の受精は、火の精霊が、葯という空気の小舟に乗せて、凝縮された宇宙の熱として子房のなかにもたらししたものを、グノームが火の精霊から受け取ることによって起こります。ですから火の精霊は熱の担い手なのです。

本来植物の成長全体がいかにして起こるか、今や皆さんは容易に理解なさるでしょう。まず下の方で、火の精霊からもたらされたものに助けられてグノームが植物に生命を与え、それを上方へ押し上げます。グノームは生命の担い手です。グノームは生命エーテルを根に運びます、彼ら自身が生きてくるあの生命エーテル、これをグノームたちは根に運ぶのです。さらに植物のなかではウンディーネが化学エーテルを、ジルフェが光エーテルを、火の精霊が熱エーテルを養います。それから熱エーテルの果実が下の生命であるものと



Maennlich (男性的)
Feuergeister (火の精霊たち)

結びつきます。ですから、植物を理解することができるとは、植物を取り巻いて飛び交い、活動し、生きているものすべてとの関連で植物を観察するときのみです。さらに、植物においてもっとも重要な経過の正しい理解にも、こつこつ事柄に入り込んで行って、霊的なしかたで入り込んで行って初めて到達できるのです。

このことがいったんわかると、ゲーテのあの覚え書きに再会するのは興味あることです、その覚え書きでゲーテは、ある他の植物学者と結びつけて、植物の上部での永遠の結婚（4）について人々が語るのに対してひどく腹を立てているのです。草原一面が結婚だらけだ、などと思われていることに對してゲーテは腹を立てました。ゲーテにとつてそれは何か不自然なことと思われたのです。それは本能的に非常に確固とした感情でした。ただゲーテにはまだ、ほんとうはどういうことなのかを知ることはできませんでしたが、それは本能的に非常に確固たる感情だったので、ゲーテはその本能から、花の上部で受精が起こっていると言われるのが理解できなかったのです。ただ彼はまだ、下方、地下で起こっていること、大地が植物にとつての母胎であることは知りませんでした。けれども、上で起こっていること、これは植物学者たちの誰もがそうみなしているところのものではない、とゲーテは本能的に感じたのです。さて、皆さんも一方において、植物と大地との密接な関係を理解されました。けれどもまた別のものにも目を向けていただかなくてはなりません。

よろしいですが、この上部で火の精霊があちこち飛び交うとき、とりわけ薬の花粉を媒介するとき、火の精霊たちはひとつの感情しか持っておりません。それは、ジルフェの感情に比べてより高められた感情です。ジルフェたちは鳥が飛び交うのを見ることによって、自らの自己を、自我を感じ取ります。火の精霊たちはこれを見ることができて、昆虫全般の世界に向かってさらに高めたいわけです。そしてこの火の精霊たちは、子房にまさに熱の伝達を引き起こすために昆虫のあとを追いかけていくのもっとも好みます。理念的形態とそこで結びつくために地中に入って行かなければならない凝縮された熱、この熱をもたらすために、火の精霊たちは、蝶の世界、そして昆虫の世界全般に対しても非常に親近感を持っています。火の精霊たちは、花から花へと飛び交う昆虫のあとを追いかけることで追いかけます。花から花へと飛び交う昆虫たちを追いかけるとき、実際こう感じられます、このように花から花へと飛び交う昆虫たちはどれもまったく特殊なオーラを有していて、これは昆虫からのみ

では全然説明がつかない、と。特に、花から花へと飛び交い、ひときわきらぎらと不思議な光を放ち、ほのかに煌めく玉虫色のオーラを持つ蜂を、そのオーラに基づいて説明するのはきわめて困難です。なぜでしょう？蜂という昆虫はいたるところで火の精霊に伴われているからです、火の精霊たちは蜂に非常に親近感を持っているので、蜂がいると、霊的な眼差しにとつてその蜂が、いたるところで本来は火の精霊であるオーラのなかにいるのが見えるほどです。蜂が植物から植物へ、樹から樹へと空中を飛ぶとき、蜂は、本当は火の精霊から与えられたオーラとともに飛んでいるのです。火の精霊は単に昆虫の存在のなかに自分の自我を感じるのみではなく、昆虫と完全に結びつこうとしています。

けれどもこれによつて昆虫の方も、皆さんにお話ししました力、微光を放ちつつ宇宙へと自身を示すあの力を獲得します。これによつて昆虫たちは、自分に結びついている物質的質料（マテリアル）を完全に霊で浸透し、この霊で浸透された物質的なものを宇宙空間へと放射させる力を得るのです。けれども、



hell-lila (明るい藤色)
rot (赤色)
gelb (黄色)

編註
4 永遠の結婚…ゲーテ、進行、飛散、蒸発、滴化」参照。『ゲーテ、自然科学的論文集』所収。このゲーテ『自然科学的論文集』5巻はキョルシュナーの「ドイツ国民文庫」においてシュタイナーにより編集され、註釈を付された（1884-1897）。復刻版、ドルナ1975 GAT-a-e 第一巻 163頁

炎において光を輝かせるものはまず第一に熱であるように、物質的受肉へと下降させるべく人間を惹きつけるもの（5）を、昆虫たちが宇宙空間に放射させるとき、地球の表面にいるのは、昆虫たちです（前頁図参照、赤と黄）、宇宙を貫き、回りを飛び交う火の精霊たちを貫いてこの行為へと燃え上がっている存在たちです。そして火の精霊たちは、一方では火で浸透された質料を宇宙へと流入させるために活動し、他方では凝縮された火、凝縮された熱が大地の内部に入り込んで、ジルフェとウンディーネから地中に滴下された霊の形態をグノームに助けられて呼び起こすことができるように働くのです。

よるしいですか、これが植物の成長の霊的経過です。本来人間は下意識において、花咲き芽吹く植物とともに何か特別なものがあるということを感じているので、植物存在があれほど秘密に満ちたものに思えるのです。この秘密はもちろん引き裂かれてはおりません、驚くべき神秘からは蝶の鱗粉が払い落とされていらないからです、とは言え、単に物質的な植物があるだけでなく、植物の力を最初に押し上げる（6）、直接理解し、まさに知性を形成するグノームの世界の驚くべき働きも下の方にあるとき、通常植物において人間を魅了し高めるものは、いっそう驚異に満ちたものに思われると申し上げたいのです。いわば人間の知性は重力に屈しないように、私たちが頭の重さを感じることなく頭が持ち上げられるように、そのようにグノームはその光輝く聡明さによって大地的なものを克服し、植物を押し上げます（6）。グノームは下で生命を準備するのです。しかし生命は化学機構によってかき立てられることがなければ死滅してしまうでしょう。化学機構をもたらすのはウンディーネです。さらに光がこれに浸透しなくてはなりません。

このように私たちには、下から青黒い色調で、グノームから発して上へと弾みをつけられた重力（図参照）が上昇してくるのが見え、さらに植物を取り巻いて飛び回り、葉のなかにほめかされるウンディーネの力、植物が成長することによって素材を混合しまた分解する力が見えます。上からは、ジルフェ精霊によって植物のなかに光が刻印され、ジルフェは今や可塑的な形態を作り出し、これはまた理想化されて下降し、大地の母胎へと受け入れられます。さらにまた植物の回りを火の精霊たちが飛び交い、小さな種子の粒の中に宇宙の熱を集め、これがさらに種子の力とともにグノームのところまで下ろされ、こうしてグノームは下で火と生命から植物を誕生させることができるのです。

さらにまた皆さんは、いかに大地の反発力、密度が、根本的にグノームとウ

ンディーネの両生類と魚に対する反感に帰せられるかわかりでしょう。土の密度が高いとき、この密度はグノームとウンディーネの反感です、反感によって彼らはその姿を維持するのです。光と熱が地面に下降してくるとき、これは同時に、あの共感の力、担い手であるジルフェの、大気中を運ばれる愛の力の現れ、そして担い手である火の精霊の、自らに下降させる傾向をもたらず供犠の力の現れなのです。ですからこう言うことができます、地の密度、地磁気、地の重力であるものが、上を目指して苦闘することにより、下を目指して愛―供犠の力と、大地の上方で一体化する、と。そしてこのように、下へと流れ込む愛―供犠の力と上へと流れる密度、重力が混じり合って作用することで、



5 編註
人間を惹きつけるもの…第六講の編註 1 参照
編集者による原文訂正。意味に即して「押し出す」が「押し上げる」に訂正された。(第七版)

これらが共に作用することによって、両者が出会う地面の上方で、植物存在が、宇宙の愛、宇宙の供養、宇宙の重力、宇宙の磁力の共同作用の外的な現れである植物存在が生育していくのです。

これで皆さんは、私たちをあれほど魅了し、高揚させ、楽しい気分にさせる植物界に眼差しを向けるときに重要なことは何であるかがおわかりになりました。私たちは、物質的なもの、感覚的なものに霊的なもの、超感覚的なものを付け加えて観ることができてはじめて、植物界を見通すことができるのです。これは同時にまた、唯物論的な植物学のたいへんな誤謬を修正することも可能にします、あたかも上の方で受精が起こっているかのように思う誤謬を。上で起こっているのは受精ではありません、大地の母胎のなかで植物のために前もって準備されているもののために、植物の男性的な天の種子が用意されるのです。

第八講 一九三三年一月三日 ドルナハ

- ・現代の人間からはエレメンタル存在たちを知覚する力が失われている
- ・グノームは骨格のない下等動物たちを霊的に補足する
- ・グノームの知性と注意深さ
- ・入眠時の夢とグノームの知覚
- ・ウンディーネはもう少し高等な動物たちを補足し、鱗、甲殻を生じさせる
- ・夢のない眠りとウンディーネの知覚
- ・ジルフェは本来頭である鳥を霊的に補足する
- ・目覚めの夢とジルフェの知覚
- ・火存在は蝶の体を補足する
- ・グノームとウンディーネは下等動物を上つまり頭の方向に補足し、
- ・ジルフェと火存在は鳥と蝶を下つまり四肢の方向に補足する
- ・思考存在としての自己の観察と火存在の知覚
- ・宇宙思考と火存在の領域
- ・良い種類の元素霊と悪い種類の元素霊
- ・悪い種類のグノームとウンディーネにより寄生生物がもたらされる
- ・人間の排泄プロセスと脳形成、脳は排泄物の高次のメタモルフォーゼ
- ・グノームとウンディーネの力による物質的な脳形成
- ・グノームとウンディーネは破壊の力に関わり、ジルフェと火存在は構築する力に関わる
- ・悪い種類のジルフェにより果実に毒が生じる、ペラドンナ
- ・悪い種類の存在たちは領域をずらして作用する
- ・火存在は果肉を焼き尽くし、これが行き過ぎると果実の核が有毒となる
- ・ブラフマー、ヴィシュヌ、シヴァと元素霊の関係

昨日私は皆さんに、現存する自然の別の面について、眼に見える感覚的自然の存在と出来事に、超感覚的で不可視のそれとして付き従っている存在たちについてお話ししました。古代の本能的観照は、感覚的な存在たちを見るのと同様に、現存する自然の背後にある超感覚的世界のこれらの存在たちに対して目を向けていました。今日ではこれらの存在たちはいわば人間の観照の前から退いてしまいました。とは言え、こうしたグノーム、ウンディーネ、ジル

フェ、火の精霊といった民が、動物、植物、あるいは物質的・感覚的世界のよう

に知覚され得ないのは、ひとえに人間が地球進化の現時点で、その魂的本質を、物質体エーテル体の助けなしには展開できないせいなのです。人間は、地球進化のまさに現在の状況において、魂を用いるためにはエーテル体を、霊的なものを用いるためには物質体を使うことを、余儀なくされています。霊のために道具を提供している物質体、感覚器官は、物質的世界の根底をなす存在たちとの結びつきを得ることはできません。人間のエーテル体も同様です、人間は自らを魂存在として展開するためにエーテル体を用いるのですから。そのため人間からは、こういう表現が許されるなら、そもそも地上的環境の半分が失われているのです。私が昨日お話ししましたあのエレメンタル（元素）存在たちが取り巻いているすべてのものが、人間からは失われています。物質体エーテル体はそれに近づくことはできません。こういうグノーム、ウンディーネなどがそもそも何なのかはつきりと理解すれば、現代の人間からは失われてしまったものについての理念を獲得できるでしょう。

よろしいですが、下等動物、目下のところ下等な動物の大群があります、いわば柔らかい塊からできているのみで、液体エレメントのなかで活動し、液体エレメントのなかで生きていて、どんな骨格も、つまり内部に支えとなるものは何も持っていない生物たちです。これらは、地球の最後になってから出現した生きもののひとつで、最古の地球存在である人間が、その頭構造に関連して古い土星紀の間に行ったことを、進化したこの地球で今はじめに行っています。そのためこれらの生きものは、骨格の土台となることのできるあの硬化を内部に形成するに至っていないのです。

さて、グノームたちは、この下等動物の世界、上は、骨格の徴候らしきものをイーとくに魚類はイー備えているだけの両生類と魚類まで含むこの下等動物の世界に欠けているものを、宇宙においていわば外的に霊的になしかたで補う存在たちです、したがっていわばこの下等な動物段階が、グノームが存在することによってようやくひとつの全体となるわけです。

宇宙における存在たちの関係はともかく非常に多様なので、他ならぬこの下等な存在たちとグノームたちの間では、昨日私が反感と特徴づけました何かが働いています。グノームたちはこの下等な存在たちのようになりたくないので、この下等な存在たちの姿をとることから、彼らは絶えず身を守りたがっています。このグノームたちは、皆さんに描写いたしましたように、並はずれて

賢く、知的な存在です。知覚とともに彼らには知性も与えられていて、実際のところ、すべてにおいて下等動物の世界の対をなすものです。グノームは、昨日特性をお話ししました植物の成長にとつて意味を持つ一方、下等動物の世界に対しても実際に不足を補っているのです。グノームはいわば、下等動物の世界に、この下等動物界が持つていないものを付け加えます。この下等動物界はぼんやりした意識を有しますが、グノームたちは極めて明るい意識を有しています。この下等動物界には骨格、骨の土台がありません。グノームたちは、重力としてあるものを束ねて、とても申し上げたいのですが、そしてつかの間の軽い重力から体を形成するのです、もつともこの体は、崩壊する危険、その実質を失う危険に常にさらされているのですが、グノームたちは繰り返し繰り返してしまふ危険にさらされているからです。そのためグノームたちは、自身の生存を維持するために、自分の回りで起こることに絶えず注意を払っています。地球を観察してもこのグノームほど注意深い存在はいません。グノームはあらゆることに注意を怠りません、自分の命を救うためにはあらゆることを知り、あらゆることを理解しておかなくてはならないからです。グノームはいつも目を覚ましていなければなりません、しばしば人間が眠くなるように、グノームが眠くなったとしたら、たちまちその眠気のために死んでしまつてしまうでしょう。

絶えず注意を払っていなければならぬというグノームの特性を実際非常によく表している、非常に古い時代に由来するドイツのことわざがあります。小鬼[Wichtelmann]のようには注意深くせよ、というものです。……小鬼というのはグノームのことに他なりません。つまり誰かに気をつけるよう警告しようとするとき、その人にこう言うのです、グノームのように注意深くしろ、と。グノームは本当に注意深い存在なのです。もし、見本としてグノームを皆から見えるように学校のクラスの最前列に座らせることができたなら、グノームは生徒たち全員が見習つべき優秀な存在であることでしょう。

こういう特性以外に、グノームたちはさらにまた別の特性も持っています、彼らは実に克服しがたい自由の衝動に満たされているのです。グノームたちはいわばお互いにもあまり関わり合いを持たず、本来別の世界、周囲の世界にのみ注意を払っています。グノームは別のグノームに対してあまり興味を示しません。けれども、自分が生きているこの世界で、別のグノーム以外の、自分を取り巻くすべてのものにはとりわけ興味を持つのです。

さて、私は皆さんに、体というものは本来、こつこつと民を知覚する妨げになるのだ、と申しました。体がもはやこつこつという妨げをしなくなつたとたん、自然の他の存在たちが目に見えるのと同じく、こつこつと存在たちがいるのもわかります。そして、入眠時の夢を完全に意識的に体験できる段階まで行つたひとは、このグノームたちをよく知っています。皆さんは、私が「ゲータアム」誌でちよつと夢について述べたこと（1）を思い出してください。さすればよいのです。私は、夢は本来、その真実の姿で通常の意識の前に現れてくることはない、夢は仮面をつけている、と申しました。入眠時の夢も仮面をつけています。私たちは、昼間私たちが通常の意識で体験したこと、その他体験したことからすぐには抜け出せません、追憶、人生の記憶像、あるいは、心臓がストーブ、肺が翼、などとシンボル化されるような、内部の臓器のシンボルや比喩から抜け出せないのです。これらが仮面です。人間が夢を仮面なしに見るとしたら、人間が眠りへと入つていつて、実際にその世界に入つてそこにいる存在たちが仮面をつけていなかったら、そのひとはちよつと眠りに入るときにこの小鬼たちの群を見るでしょう、その人に向かつて小鬼たちがやってくるでしょう。しかし人間は通常の意識のために、これらのことを準備なしに知覚することをいわば免れています、怯えてしまつてしまうでしょうから。と申しますのも、このものたちが人間に向かつてくる姿のなかに形成しているものは、この人において破壊する力として働いているすべてのもの、絶えず解体させるものすべてを同時に自らのなかで破壊する力として働くもの、絶えず解体させるものすべてを同時に自らの本質において知覚するでしょう。そしてこれらグノームたちは、準備なしに知覚されれば、文字通り死のシンボルなのです。通常の知性にとつてそれらについて何も聞かされたことがなく、さて眠り込むときになってグノームたちが向かつてきて、その人をつらむらむら埋葬してしまつ、と申しますのも、これは、向こうのアストラル界ではその人をつらむらむら埋葬するように見えるからですが、ということになれば、人間はこれらを前にして途方もなく怯えてしまつてしまうでしょう。眠りに入るとき起こっていることは、向こうから見れば、グノームたちによる一種の埋葬なのです。

編註

1 私「ゲータアム」誌でちよつと夢について述べたこと。ルドルフ・シュタイナー「魂生活について」『夢の薄間のなかの魂の本質』参照。これは最初週刊「ゲータアム」(1922年10月21日、第二巻、第二号)に掲載された。全集版では『現代文明の危機のさなかにおけるゲータアム思想』1921年から1925年の論文集 GA36、349頁以下に所収。

さて、これは本来眠りに入る瞬間のみにあてはまることです。物質的・感覚的世界をさらに補っているのはウンディーネたち、水の存在たちで、これらは絶え間なく変容し続け、グノームたちが地とともに生きるように、水とともに生きる存在です。これらウンディーネたちもー私たちがウンディーネが植物の成長においてどんな役割を果たすかも学びましたがー、補う存在として、いくらか高い段階にある動物たち、より分化された土の体を受け取った動物たちと関係しています。その後高等な魚類あるいは高等な両生類へと成長するこれらの動物たちには、鱗(うろこ)が、何らかの硬い甲殻が必要です。これらには外部に硬い殻が必要なのです。この外側の支え、いわばこの外骨格を、昆虫のようなある種の動物たちに獲得させるための力として存在するもの、これを宇宙はウンディーネの働きに委ねているのです。グノームはまったく下等な動物たちをいわば霊的に支えます。外部から保護されなければならぬ動物、たとえば甲殻に覆われなければならない動物、これらの動物を保護する覆いはウンディーネの働きによるものです。ウンディーネはこのとき、私たちが頭蓋冠のなかに有しているものを、原始的なしかたでこれらのいくらか高等な動物たちに付与するのです。ウンディーネはこれらの動物たちをいわば頭に置くわけです。可視の世界の背後に不可視のものとして存在するこれらすべては、存在するものの連関全体のなかで大きな使命を持っています、そして皆さんは、唯物論的な科学が、私が今取り上げたような種類のことを説明しようとするとき、いたるところで無力さを露呈するのをこらになるでしょう。唯物論的な科学はたとえば、下等な生きものたちが、そのなかで生きているエレメントより硬いわけではないのに、どうやってそのエレメントのなかを移動していくことができるようになるのか、説明することはできません、なぜなら科学は、私たちがちょうど説明しましたようなグノームによる霊的な支えがあることを知らないからです。他方、甲殻に覆われるという事実も、純粹に唯物論的な科学を常に手こずらせます、ウンディーネたちが、自分自身が下等動物になつてしまふことに対して過敏になり、それを回避するうちに、鱗その他の甲殻としていくらか高等な動物にかぶせられるものを自身から切り離していることを知らないからです。

そしてまたこれらの存在にとつても、今日の人間の通常の意識が、たとえば植物の葉やいくらか高等な動物たちを見るようにこれらを見ることを妨げているのは、まさに肉体的なものです。

けれども、人間が今や深い夢のない眠りに入るとき、しかも眠りが人間にとつて夢のないものではなく、インスピレーションの才によつてこの眠りが見通されるとき、霊的な眼差しの前に、霊的な人間の眼差しの前に、あのアストラル的なものから、眠りに入る際にグノームたちが人間を埋葬し隠したあの海から浮かび上がってくるのは、これらウンディーネ存在たちです、ウンディーネたちは深い眠りのなかで目に見えるようになるのです。眠りは通常の意識を消し去ります。眠りにとつて明るくなつた意識は、生成する液体の世界、あらゆる可能なしかたでウンディーネたちの変容へと隆起するこの驚くべき液体の世界を内容とします。ちょうど私たちの昼の意識にとつて、堅固な輪郭を持った存在たちが周囲にいるように、夜の明るい意識は、これらの絶えず動き回る、これら自身ひとつの海のように波立ちまた沈んでいく存在たちを見せてくれるます。完全に深い眠りは本来、人間の周囲には、活発に動く生きものたちの海、ウンディーネたちの波立つ海がある、ということによつて満たされているのです。

ジルフェにとつては事情は異なります。ジルフェについては、ジルフェもまたあるしかたで、ある種の動物存在の補足をするのですが、今度は別の方向にむかつて補足するのです。グノームとウンディーネは、頭を欠く動物たちに頭的なものを付け加える、と言えるかもしれません。さて鳥というものは、私が皆さんに述べましたように、本来純粹な頭です、鳥はまったく頭組織そのものなのです。ジルフェは、いわば頭組織の肉体的補完として鳥に欠けているものを、霊的なしかたで鳥に付け加えます。ジルフェはつまり、人間においては新陳代謝ー四肢系である生体組織の領域に向かつて鳥類を補足するのです。鳥たちが脚を縮めて空中を飛び回ると、それだけいっそうジルフェたちの四肢は力強く形成され、牛が下の物質的質料のなかに表すものを、霊的なしかたで、空中に表す、と申し上げたいのです。ですから私は昨日、ジルフェたちは鳥類のなかに自我を持つ、ジルフェを大地に結びつけるものを持つ、と云うことができました。人間は地上でその自我を獲得します。ジルフェを大地と結びつけるもの、それは鳥類なのです。ジルフェが自我を、少なくとも自我の意識を有するのは、鳥類のおかげです。

さて、人間が夜眠り込んで、さまざまなウンディーネのフォルムに形成されるアストラル的な海に囲まれ、そして目覚めて目覚めの夢を見ると、この目覚めの夢もまた人生の回想や内部の臓器の比喩という仮面をつけていないとし

たら、つまり仮面をつけていない夢を見るとしたら、そのとき人間は、ジルフェの世界と対峙することでしょう。しかし人間にとってジルフェたちは奇妙な姿をとっているでしょう。ジルフェは、太陽が何かを送り出そうとするとき、しかも本来やつかいなしかたで人間に作用する何か、ある種のしかたで人間を靈的に眠り込ませる何かを送り出そうとするときのようなうすをしていることでしょう。なぜそうなのかは、すぐ後ほど聞くことができるでしょう。やはり人間は、もし仮面なしの目覚めの夢を知覚するとしたら、その夢のなかに羽ばたきつつ入り込んでくる何かを、本質的に羽ばたきつつ入り込んでくる光のような何かを見るでしょう。人間はそれを心地よく感じないでしょう、ジルフェたちの四肢がいわば絡みつき巻き付いてくるのですから。人間は、光が四方から彼を攻撃してくるときのように、光が何か襲ってくるもの、それに対してひどく過敏になってしまうものであるかのように感じます。もしかすると、人間はあちこちでこれを、光が撫でていくように感じるかもしれません。こういうすべてのことで皆さんに示唆したいのは、支え、手探りするこの光が本来ジルフェの形（フォルム）をとって近づいてくるということなのです。

次いで火存在たちに移りますと、火存在の場合、これらははかない蝶の本性の補足をしています。蝶はいわば自らその物質的な体、本来の物質的な体でできるだけ作り出さないようにしています、蝶はその体をできる限り希薄にしているわけです。蝶は体に対して光存在なのです。火存在たちは自らを、蝶の体を補完する存在として示します、したがって次のような印象が得られます。つまり一方に物質的な蝶を見て、それをしかるべく拡大したと考え、そして他方に火存在を——火存在たちが一緒にいることはまれで、昨日皆さんにお話ししましたような場合のみです——見るとき、こう感じられるのです、つまりこれらをお互いにくつつけると、翼を付けた人間のようなものが、実際に翼を付けた人間が得られる、と。ただ蝶をしかるべく拡大し、火存在を人間の寸法に合うように見なければなりません、そうすればそこから翼を付けた人間のようなものが得られるのです。

このこともまた皆さんに、火存在たちは本来、實際靈的なものの一番近くにいるこの動物存在の補足をしていることを示しています、これらはいわば、下向きの補足なのです。グノームとウンディーネは上向きの、頭の方に向かう補足であり、ジルフェと火存在は、下へ向かって鳥と蝶を補足します。つまり火存在は蝶と組み合わせられねばならないのです。

ところで、人間がいわば眠っているときの夢を賣っていくことのできるのと同様のやりかたで、人間は目覚めた昼の生活をも賣っていくことができます。昼の生活では人間はまさにまったく無骨なしかたでその物質体を用います。このことも私は「ゲーテアナム」誌の論文のなかで述べました。昼の生活では、人間は、次のようなことを洞察するところまで全然到達しておりません、ほんとうは昼の生活の間に常に火の存在たちを見ることのできる、火存在たちは人間の思考と、頭の組織から発するものすべてと内的な親和関係にあるからだ、ということなのです。ですから人間が、完全に目覚めた昼の意識にあつてもある意味で自身の外にいるという状態になれば、つまりまったく理性的であつて両脚でしっかりと大地に立ち、しかも同時にやはり自らの外にいる——つまりつまり彼であると同時に彼に相對するもの[Gegenüber]である、すなわち自己自身を思考存在として観察することができる——という状態になれば、そのとき人間は知覚するでしょう、火存在たちは宇宙のなかで、もし私たちがそれを知覚すれば、私たちの思考を別の側から知覚できるようにするエレメントを構成していることを。

このように、火存在を知覚することは、自己自身を思考する者として見ることに私たちを導いてくれます、単に思考する者としてあり思考を煮詰めるのみではなく、思考の経過を観察することに導くのです。ただ、このとき思考は人間に結び付けられていることをやめます、このとき思考は自らを宇宙思考として呈示します、思考は宇宙における衝動として生き生きと活動するのです。このときひとは気づきまず、人間の頭は、あたかもこの頭蓋の内部に思考が閉じこめられているかのように思つた幻影を呼び起こしているにすぎない、と。思考はそこに反映しているだけなのです、そこにあるのは思考の鏡像です。思考の根底にあるものは、火存在の領域に属します。この火存在の領域に入っていくと、ひとは思考のなかに自己自身を見るのみならず、宇宙の思考内容

[Gedankengehalt der Welt]を、本来同時にイマジネーション的な内容である思考内容を見るのです。つまりこれは自己自身から出ていく力であり、思考を宇宙思考として呈示してくれる力です。そう、こつ申し上げてよいかもしれませんが、今や人間の体ではなく、火存在の領域から、つまりいわば地球に入り込んでいる土星の本質から、地上に見られることを眺めると、私が『神秘学概論』で地球進化（2）について記述したその通りのイメージが得られる、と。この神秘学の概要は、火存在の視点から見て、思考が宇宙思考として現れてくる

ように描かれています。

こうした事柄に深く現実的な意味があることがわかりでしょう。けれども人間にとって深く現実的な意味はほかにまだまだあります。グノームとウンディーネのことを考えてみてください、これらはいわば、人間の意識の世界と境を接する世界に生きています、すでに境界の向こう側にいるのです。通常の意識はこれらの存在を見ることから守られています、これらの存在は本来すべてが良い種類のものではないからです。良い種類のもものは、私が昨日述べましたような、たとえばさまざまなかたで植物の成長に働きかけている存在たちです。しかしそのすべてが良い種類の存在ではありません。これらの存在たちの活動している世界に進入するやいなや、良い種類のものだけでなく、悪い種類のものもいるのです。こうなると、これらのうちどれが良い種類のもので、それが悪い種類のものか、見分け方を修得せざるをえません。これはそうたやすいことではありません。私が皆さんに悪い種類のもを描写せざるを得ないしかたから、それがわかりになるでしょう。悪い種類の存在たちが良い種類の存在たちから区別されるのはとりわけ、良い種類は植物界と鉱物界をよりどころとすることが多いけれども、悪い種類は常に動物界と人間界に接近しようとする、そしてもつと悪い種類は、また植物界と鉱物界に近づくと、ということによつてです。とは言え、これらの領域の存在たちが持ちうる悪というものについてしかるべき概念が得られるのは、人間と動物に近づこうとする存在たち、本来は高次のヒエラルキアによって植物・動物界のために良い種類の存在たちに（役目として）指定されていたことを、人間のなかで実行しようとする存在たちに関わり合うときです。

よろしいですか、グノームおよびウンディーネの領域に由来するこのような悪い種類の存在たちがいます、これらは人間と動物に近づき、人間と動物に働きかけて、本来なら下等な動物たちに付加すべきものを人間のなかに物質的なしかたで実現させるのです、人間のなかにはどのみちすでにそれは存在しているのですが、人間のなかにこれを物質的なしかたで実現させようというのです、動物のなかにもです。これらの悪い種類のグノームおよびウンディーネ存在たちがいることによつて、人間と動物のなかで、もつと下等な動物・植物存在が生きるようになります、寄生生物[Parasiten]です。このように、悪い種類の存在たちは寄生生物をもたらすものなのです。とは言え、霊的世界へと境界を踏み越えた瞬間、人間はすぐさまこの世界の策略のなかに入り込む、と申し上げ

たいのです。実際いたるところに畏があり、人間はまさに小鬼たちから学ばなければなりません、つまり用心することをです。たとえば心霊主義者たちは決して用心することができません。畏はいたるところにあるのです。今やこう言えるかもしれません、悪い種類のグノームとウンディーネ存在たちが寄生生物を発生させるなら、そもそもいつたいこれらは何のために存在しているのか、と。そう、これらの悪い種類の存在たちがいなくなつたら、すなわち人間はその脳塊を作り出す力を自らのなかに発達させることができないうでしょう。さてこうして、きわめて重要なことに行き着きます。

これを図式的に描いてお見せしたいと思います。人間を、新陳代謝・四肢人間として、胸・つまりリズム人間として、さらには頭人間つまり神経・感覚人間として考えるとき、皆さんにはつきりと理解していただかなければなりません、この下の部分でいくつかのプロセスが進行し、リズム人間は除外し、まじりこみであるこの上の部分でやはりいくつかのプロセスが進行します。この下で起こっているプロセスを一緒にすると、本質的に、通常の生活ではたいい誤解されている結果が出てきます、これらは排泄プロセスです、腸を通じての排泄、腎臓を通じての排泄その他、下へと流出するすべての排泄プロセスです。これらの排泄プロセスはたいい単なる排泄プロセスとしか見られていません。しかしこれはばかげたことです。単に排泄されんがために排泄されるのではなく、上で物質的に脳であるものに似た何かが、出現する排泄物と量を同じくして、下部人間の中に霊的に出現するのです。下部人間において起こっていることは、その物質的發展に関しては道の半分にとどまっています。排泄されるのは、ものが霊的なものへと移行するからです。上ではプロセスは完了しています。下では単に霊的にのみあるものが、上で物質的に形成されます。私たちは上に物質的な脳を、下に霊的な脳を持つていっているのです。そして、下で排泄されるものを、さらなるプロセスのもとに置くなら、その改造を続けていくなら、最終的な変容はさしあたり人間の脳となることでしょう。

人間の脳塊はさらなる形成を受けた排泄物です。これは、たとえば医学的な関連にうおいても途方もなく重要なことです、これは19、20世紀においてはまた当時の医師たちによく知られていたことです。今日、かつての「汚物薬局」[Dreckapotheke]について、軽蔑されて当然な部分もあるとはいえ、非常に軽

編註

2 『神秘学概論』で地球進化…第一講の編註 2 参照のこと。

蔑的に語られております。けれどもそれは、汚物のなかにこそいわば霊のミイラがまだ存在したのだ、ということを知らないからなのです。もちろんだからと言ってかつての数世紀に汚物薬局として現れたものを崇拜しようというわけではありません、私は、ちょうどお話ししましたような深い連関を持つ多くの真実を指摘しているだけなのです。

脳はまったくもって排泄物の高次のメタモルフォーゼ[hoehere

Metamorphose der Ausscheidungsprodukte]です。したがって、脳の病気は腸の病気と関連し、脳の病気の治療は腸の病気の治療と関連しています。

よろしいですか、グノームとウンディーネがいることによって、そもそもグノームとウンディーネが生きていることのできる世界があることによって、力が存在します、なるほど下部人間から寄生物を発生させることもできるけれども、同時に上部人間のなかで排泄物を脳に変容させるきっかけにもなる力です。もし世界が、グノームとウンディーネが存在することができるようにならなければ、私たちはまったく脳というものを持つことはできないでしょう。

破壊の力に関してグノームとウンディーネに当てはまることー破壊、解体はこのときやはり脳から起こりますーが、構築する力に関してはジルフェ存在と火存在に当てはまります。これまた同様に、良い種類のジルフェ存在と火存在は、人間から距離をとり、私が示唆しましたやりかたで植物の成長に関わりますが、悪い種類のものも存在するのです。悪い種類のジルフェ存在と火存在はとりわけ、上のほうつまり空気ー熱の領域にのみ存在すべきものを、下へ、水的、土的領域へと運ぶのです。

さて、たとえばこれらのジルフェ存在が、上に向かうべきものを、上の領域から下の水および土の元素の領域へと運び下るときに起こることを研究したいとお思いなら、ベラドンナ[Belladonna](*1)をじっくりと「らん」になってください。ベラドンナは、こういう表現が許されるなら、その花がジルフェにキスされ、そのために良い汁であり得たものが、ベラドンナの毒液に変化してしまった植物です。

この場合、領域のずれと呼びづることが起こっています。私が先ほど描写いたしましたように、ジルフェが巻き付く力を発達させ、そのとき人は文字通り光に触れられるわけですが、これも上では正しいのですー鳥の世界がそれを必要としているからです。けれどもこれらのジルフェが下へ降りてきて、そして植物界に関して上に適用すべきことを下で用いると、強い植物毒が生じます。

寄生物的な存在はグノームとウンディーネによって生じ、ジルフェによって毒が生じます、毒とは本来、あまりに深く大地へと流れ込んだ天的なものなのです。人間あるいは動物のあるものが、ベラドンナ、これはサクランボのように見えますが、ただ雪の中に隠れていますー下に押しつけられているのです、私が今描写したことはベラドンナの形のなかにも見て取ることができますー、このベラドンナを食べますと、つまり人間あるいはある種の動物がベラドンナを食べますと、それがもとで死んでしまいます。ところが、ツグミヤクロウタドリをひとつよくごらんください、これらの鳥はベラドンナの枝に止まり、そこで世界で最良の食料を得ています。ベラドンナのなかにあるものは、ツグミヤクロウタドリの領域の一部なのです(*2)。

それにして奇妙な現象です、もともとその下部組織によって大地と結びついている動物と人間たちが、地においてベラドンナのなかで損なわれたものを毒として摂取し、他方ツグミヤクロウタドリに代表される鳥たち、つまりジルフェを通じて霊的になしたでこのまったく同じものを得るー鳥たちは良い種類のジルフェを通じてもこれを得ますー鳥たち、上の鳥たちの領域にあるものが下へと運ばれたとは言え、この鳥たちがこれに耐えられる、というのは、鳥たちより大地に強く結びついている生き物たちにとって毒であるものが、鳥たちにとっては食物なのです。

こうして、一方においてグノームとウンディーネによって寄生物が地から他の存在がけて上昇していき、そして毒が上から滴り落ちてくるようすについて、ひとつの見解が得られるでしょう。

これに対して、火存在たちが蝶の領域に属するあの衝動、蝶の進化のために非常に役に立つ衝動で自らを賞き、これを果実のなかへと下ろしてくるなら、たとえば一連のアーモンド類のなかに有毒のアーモンドとしてあるものが生じます。このときこの毒は火存在の働きによってアーモンドの実のなかへと下ろされるのです。そして、いわば私たちが他の果実の場合食しているものが、こ

訳註

*1 ベラドンナ、和名セイヨウハシドリコロ。ナス科の多年草。葉は卵型、葉の付け根に暗褐色、色の花をつけ、黒色の液果を結ぶ。全体にアトロピンなどのアルカロイドを含み猛毒。瞳孔を拡大させる作用があるためルネサンス時代のイタリヤで、瞳を大きく見せる美用法としてこの植物が用いられたことがあり、ベラドンナ(Beladonna 美しい婦人)という名前はそこに由来すると言ふ。非常に希釈して(最低でも原液の千万分の一の希釈)ホメオパシー療法でも用いられる。ベラドンナの特性と人間への作用については、『精神科学と医学』(GA312)第19講での説明も興味深し。

の同じ火存在によつて良いやりかたで燃やされないとしたら、そもそもアーモンドの実というものも生じることができないでしょう。ともかくアーモンドをよくこらんでください。他の果実の場合、中心に白い核がありその回りに果肉がありますね。アーモンドの場合、この中心に核があり、回りの果肉は焼き尽くされています。これは火存在の働きなのです。そしてこの働きが節度を失うとき、つまり火存在が実行することが、単に褐色のアーモンドの外皮に入り込むだけならまだ良い種類のものであり得ますが、外皮にとどまらず、外皮を作り出すべきものからわずかではあってもアーモンドの白い核の内部まで入り込むなら、アーモンドは有毒になります。

このように、境界のすぐ向こうの世界で隣り合っているこれらの存在たちは、その衝動を実行するとき、寄生生物や有毒の存在の担い手となること、それによつて病気の担い手になることについてのイメージが得られます。こうして、病気のなかに人間をとらえることのできるものから、人間が健康な存在としてどこまで抜け出していくかが明かになります。と申しますのも、これは、構築のすべて、自然の成長と芽生え、さらにまた自然の破壊をも可能にするために向こう側に存在せねばならないこれらの存在たちのうちの、悪い種類のものの展開と関係があるからです。

これは結局、本能的な霊視から発した、ブラフマー、ヴィシユヌ、シヴァについてのインドのそのようなインテュイションの根底にあるものです。ブラフマーは宇宙領域において、人間に接近することを許されている活動する存在を表します。ヴィシユヌは、構築されたものを絶えず再び取り壊さなければならぬ、つまり構築されたものが絶えず変化していかざるを得ない、その限りにおいてのみ人間に接近することを許されている宇宙領域を表します。そしてシヴァは、破壊する諸力と関係するすべてを表しています。古代におけるインドの高度な文化の時代にはこう言われていました、ブラフマーは火存在の性質であるもの、ジルフェの性質であるものすべてと密接に関係がある、ヴィシユヌ又は、ジルフェウンディーネの性質であるすべてと、シヴァは、グノームウンディーネの性質であるものすべてと関係がある、と。総じて、これらの古代の表象に遡っていくと、今日自然の根底にある秘密として再び探し出さなければならぬものが、具象的に表現されているのがいたるところで見いだせるのです。

さて以上のように、私たちは昨日、この不可視の民と植物界との親和性を観

察いたしました、きょうは、この不可視の民と動物の世界との親和性を付け加えました。境界のこちら側の存在たちは、いたるところで境界の向こう側の存在たちに干渉し、境界の向こう側の存在たちは、境界のこちら側の存在たちに干渉する、等々です。そしてこの両者の生き生きとした共同作用のことを知るべきのみ、可視の世界がどのように展開していくかがほんとうに理解できるのです。人間にとつて、超感覚的世界の認識はほんとうに不可欠です、と申しますのも、死の門を通過する瞬間、人間の回りにはもはや感覚世界はなく、このとき別の世界が人間の世界となることが始まるからです。現在の進化において人間はこの別の世界に赴くことはできません、この向こう側の別の世界を指し示す文字を、いわば物質的な顕現から認識することがなかったなら、また、地の動物のなかに、水の動物のなかに、空気の動物のなかに、そして光の動物と申し上げたい蝶たちのなかに、死と新たな誕生との間の私たちの同居人であるエレメンタル存在たちを示すものを読みとるすべてを学ばなかつたとしたらです。しかし、私たちがこれらの存在について見出すものは、まさにこの誕生と死の間においてはどこでも、粗雑で濃密な部分と申し上げたいもののみなのです。超感覚的なものに属するものは、私たちが洞察力をもって、理解力をもって、この超感覚的世界へと赴くときはじめて認識することができます。

訳註

*2 この点は、『精神科学と医学』(GA312)第15講で、オニゲモを食べたツグミがその毒の作用を消すために、ヒヨス(ハラドンナと同じくナス科の毒草)を食べる、と述べられていることも関連すると思われる。

第九講 一九三三年一月四日 ドルナハ

- ・人間と元素存在たちの知覚・体験の違い
- ・地球の内部でのグノームの逍遙とその地質・鉱物体験
- ・グノームは月に対して敏感であり、月相によって姿を変える
- ・月の秘密と未来の地球に対するグノームの使命
- ・グノームたちは過去から未来へと固体の構造を保持していく
- ・海の微生物の死とウンディーネ
- ・ウンディーネたちは燐光を発しつつ上昇し、高次存在たちの糧となることに至福を感じる
- ・ジルフェは死んでいく鳥たちが霊化した実質を高次世界に媒介する
- ・ジルフェたちは稲妻となつて霊化された実質と共に上昇し、高次存在たちに呼吸し尽くされることを欲する
- ・火存在たちは、蝶が絶えず霊化する実質を熱エーテルにもたらし、地球の本来の景観を高次存在たちに観てもらふことを望む
- ・地球と霊宇宙を媒介する元素存在たち
- ・意識とともに前進せよと人間に勧告する元素霊たちの言葉
- ・元素霊たちが自らの本質を表現する言葉
- ・元素霊たちから人間に向かって響いてくる金言
- ・宇宙は言葉から創り出された、という抽象的真理の具体的な意味
- ・元素霊たちが発する宇宙言語のさまざまなニュアンスから
- ・人体組織の各部分が形成される
- ・宇宙言語の協和音である人間

感覚界の存在たちをよく知ることができるようになるのは、これを生き生きとした活動のなかに観察するときのみですが、このことは、私がこの連続講演で皆さんに語ってきました、そして今語っております存在たち、自然元素存在たち[Naturelementarwesenheiten]の場合にもあてはまりません、感覚的・物質的なものの背後に超感覚的に存在し、感覚的・物質的存在と同じく、あるいは本来、感覚的・物質的存在よりも高次の意味で宇宙の全事象に参加している不可視の存在たちの場合にもです。

さて皆さんは、宇宙はこの存在たちにとって、感覚界の存在たちにとってと

は異なつて見える、と考えることがおできになるでしょう、と申しますのも、感覚界の存在が持つていような物質体というものをこれらの存在たちは持つていない、ということが皆さんにおわかりになつたでしょうから。これらの存在たちが宇宙で理解すること、宇宙で知覚することはすべて、たとえば人間の目に押し寄せてくるものとは異なつてに違いありません。これは実際そのなです。人間はたとえばこの地球を、その上を人間が歩き回つていて天体と感じています。時折そつであるように、この天体が、大気ありとあらゆる経過によつて柔らかくされ、人間がほんの少しだけ中に沈むようであれば、これを少々不愉快と感じます。人間はこの大地を、堅いと感じたいのです、人間がその中に沈んでいったりしないものと感じたいのです。こういった感じ取り方全体、地球へのこういう姿勢は、たとえばグノームには全く存在しないものです、グノームたちはいたるところで沈みます、グノームにとって地球という天体全体がまずもつて通過できる空洞のようなものだからです。グノームはどこへでも入つていくことができます、彼らにとっては岩石も金属も何のその、岩石も金属も、そう、彼らがその本質を携えて歩き回る、と申しましょか、泳ぎ回る、と申しましょか、そういうことを妨げるものではないのですから。私たちの言語には、地球の内部でのグノームたちのこの逍遙を表現する語はありません。ただ、グノームたちは、地のさまざまな成分についての内的な感性、内的経験を持ちます、彼らは金属鉱脈に沿つて移動していくとき、石灰岩層に沿つて進んでいるときは別様に感じます。とは言えこのすべてをグノームは内的なしがたで感じます、グノームはあらゆるものを突き抜けていくのです。彼らは本来、地球が存在していると思ひ浮かべることさえありません、金の感情、水銀の感情、錫の感情、石英の感情などといったさまざまな感情をそのなかで体験する空間が存在する、と思つのみです。これも人間の言葉で語られることであつて、グノームの言葉ではありません。グノームの言葉はもつとずつと具象的です、彼らは本来その生涯にわたつて鉱脈のすべて、地層のすべてを涉獵することにより、繰り返し繰り返し涉獵することにより、私が皆さんにお話ししました際だつた知性を獲得するのです。彼らはそうすることに包摂的な知を獲得します、金属のなかで、地中で、外部の宇宙万有のなかにあるものがすべて彼らに明かされるからです、鏡に映つていよう、彼らは外部の宇宙万有のなかにあるものすべてを感じ取ります。けれども地球そのものに対しては、グノームはまったく観照力を持たず、地球のさまざまな成分、内的

体験のさまざまな性質についてのみです。

その代わりこれらグノームたちは月からやってくる印象に対して、まったく特別の天分を持っています。月は彼らにとって、常に注意深くよすをつかがうべきものです。この点でグノームたちは「生れついで」とは言えませんが、これを表す言葉を見つけたのはまったく困難です。「言わば発生ついで」の神経衰弱患者なのです。私たちにあつては病気であるもの、これがこれらグノーム存在たちにとっては本来生の要素であるわけですね。これは彼らにおいては何ら病気ではなく、彼らにおいては自明のことなのです。これは彼らに私が皆さんにお話ししてきたことすべてに対するあの内的な敏感さを与えてくれます。これはまた彼らに、月の様相の変化に対する内的な敏感さをも与えます。この月の様相の変化を、グノームたちはあれほどの注意深さで、この内的な注意が「私」は皆さんに彼らの注力を描写いたしましたね。「彼ら」の姿さえ変化させるほどの注意深さで追いかけているのです。したがって、グノームの生存を追求していくと、満月の場合、新月の場合、またこれらの中間の月相の場合、実際まったく異なった印象を受けます。

満月のとき、グノームたちは不快になります。物質的な月光が彼らには気に入らず、このとき彼らはその存在感情[Seinsgefühl]のすべてを外に向かつて駆り立てます。満月になると、彼らはいわば霊的な皮膚を張り巡らして自分を覆い、体の周囲に存在感情を押しやるのです。ですからこういう事柄をイマジネーション的に観ることができるようなら、彼らは満月が輝くとき、甲冑を付けた光を放つ小さな騎士のように見えるのです。そのときグノームは霊的な甲冑のような何かで身を覆っているのですが、これは、彼らにとって不快な月光を避けるために、皮膚において外へと急ぎたてられていくものです。けれども月が新月に近づくと、グノームはまったく透明になり、不思議なことにグノームの中には、きらきらと光を放つ色彩の戯れが見えます。ひとつの宇宙全体がグノームのなかに生起している様子が見えるのです。それはちょうど、人間の脳のなかを覗き込むときのような、とても申し上げたいのですが、ただし単に脳の中に細胞組織を探る解剖学者のようにではなく、そのなかで思考がきらきらと輝いているのを観る人のように覗き込むときです。このようにこのグノームたちは、内部で思考の戯れが輝いている透明な小さな人間のように見えます。ちょうど新月のときには、このグノームたちはきわめて興味深いものです、なぜなら、彼らはそれぞれが自らのうちにはひとつの宇宙全体を担っているからです、

そこでこう言うことができます、本来その宇宙のなかに月の秘密が安らつてい

るので、と。

この月の秘密を解明すれば、非常に奇妙な結果に至ります、つまり、月は現在、絶え間なく接近しつつある「も」もちろんこの場合月があたかも地球目指して突進してくるかのような複雑な想像をなさる必要はありませんが、「月」は実際毎年少しずつ近づいてくる、と自らに言つて聞かせることになるのです。そしてほんとうに月は毎年地球に少しずつ近づいているのです。このことは、グノーム世界において新月の期間にますます活発になっていく月の力の動きから知ることが出来ます。そしてこの接近に対して、これらの小鬼たちも特別注意を払っています、月が彼らにおいて行うことから結果を引き出すこと、これを彼らは宇宙万有における自分たちの最大の使命とみなしているからです。彼らは、月がまた地球とひとつになる時点に非常に緊張して待ち受け、全力を集中して、月が地球と一体化した時点で備えようとしています、と申しますのも、その際彼らは月の実質を用いて、地球をその全実質に応じて徐々に宇宙に分散させるでしょうから。実質は去らねばならないのです。

けれども、こういう使命を定められていることで、これらの「ゴールト」たち、グノームたちは自分たちをとりわけ重要と感じています、彼らは地球存在全体にわたつてきわめて様々な経験を集めるからです、そして今や、全地球実質が宇宙にまき散らされ、木星紀へと進化していくとき、このときに地球の構造のなかに、この構造のなかの良いものを保管し、これをさらに一種の骨格として木星に組み込む準備をするからです。

よろしいですが、この出来事をグノームから見取る時はじめて、この地球が水をことごとく取り去られたらどう見えるか、ひとつ思い浮かべてみましょう。そのとき思い浮かべることができるのです。「一」という気持ちになるものです。ひとつ考えてみてください、西半球においてはすべてが北から南へ、東半球においてはすべてが東から西へと方向付けられます。つまり、皆さんが水を取り去るとするならば、アメリカはその山地と海の下にあるものとともに、北から南へと延びるものとして得られると考えてみてください。そしてヨーロッパの方をながめると、アルプス、カルパチアなどに沿つて東半球においてこういう方向にあるものが得られるでしょう。皆さんは、何か地球における十字構造のようなものを得るでしょう。

これを貫いていくと、これは本来、古い月のグノーム世界を集合させたものだという印象を受けます。ですから、今の地球のグノームの祖先であるものたち、月のグノームたちが月の経験を集め、この構造を、堅い地球組織の、堅い地球組成の堅い構造を、彼らの経験から作り上げたのです、つまりこの堅い地球の形態は、本来古い月のグノームたちの経験から得られたのです。

これが、このときグノーム世界に関連して起こってくることです。このことによつてグノームたちは、宇宙万有の全進化に対して、興味深い、きわめて興味深い関係を獲得します。グノームたちはいわば常に、固体を前のものから後のものの固体へと運んでいっているのです。彼らは進化における堅い構造の持続性の守護者です。このように、ある宇宙体から別の宇宙体へと、グノームたちは堅い構造を保持していくのです。超感覚的世界のこれら霊的存在たちに接近し、この存在たちの特殊な使命を研究するのは、きわめて興味あることのひとつです、と申しますのも、そうすることによつてはじめて、宇宙のなかの存在として現れているものすべてが、宇宙のあらゆる形成に際して共働している、という印象を得ることができるようです。

今度もまた、グノームからウンディーネ、水存在たちに移りましょう。ここで実際、非常に奇妙な思いが起こってきます。これらの存在たちは、人間が持っているような生の欲求、本能的にしる動物が持っているような生の欲求すら有しておらず、ほとんどこう言えるほどです。ウンディーネたち、ジルフェたちは、むしろ死への欲求を有している、と。ほんとうにこれらの存在たちは、宇宙的なしかたで炎のなかに飛び込んでいく蚊のようなものなのです。これらの存在たちは、本来死んではじめてほんとうに生命を持つところができ、と感じています。これは非常に興味深いことです、この物質的地球においては、すべてが生きようと欲し、生命力を自らのうちに有するものすべてが評価され、生き生きと萌える芽生えの持つすべてこそが重んじられるということ。それを超えていくと、これらすべての存在たちがこう語りかけます、ほんとうは死こそが生の始まりなのです、と。そしてこれらの存在たちはこのことを感じ取つてもいるのです。と申しますのも、ウンディーネたちのことを考えてください。皆さんもご存じかも知れませんが、そうですね、海での経験を積んだ船乗りは、東の海上では7月、8月、9月に、ずっと西ではもう6月に、海がほんなんにも独特の印象を与えることを知っているのです、この人たちは言います、海が花を咲かせ始める、と。いわば海が萌えるのです、海の中で腐敗するもの

すべてによつて萌えるのです。海の腐敗が起こり、そのため海は独特の腐った臭気を発します。

けれども、こうしたすべても、ウンディーネたちにとっては異なっています。このときウンディーネたちは何ら不快を感じません、海中で腐敗するこれら何百万もの水の生き物たちが崩壊していくとき、そのときウンディーネたちによつて、海はきわめてすばらしい燐光を発する「phosphoreszierend」色彩の戯れに輝くものとなります。すべてがありとあらゆる可能な色彩に輝き煌めくのです。とりわけ青みを帯びた、重色がかった、緑がかった色彩で、ウンディーネにとつて海は内的にも外的にも煌めきます。海中のこの腐敗全体が、緑までの暗い色彩でのこのような鈍い煌めきとなるのです。けれどもウンディーネにとつてはこういう色彩が現実であり、このときウンディーネたちが、この海の色彩の戯れのなかでこれらの色彩を自らのうちに吸収するのが見られます。ウンディーネたちはこれらの色彩を自身の肉体性のなかに引き込むのです。ウンディーネたちはこの色彩の戯れのようになり、ウンディーネ自身が燐光を発するようになります。そしてウンディーネたちがこの色彩を吸収し、自ら燐光を発するようになることにより、ウンディーネたち自身の中に何か憧れのようなもの、上昇したい、浮かび上がりたいという大きな憧れのようなものが生じます。この憧れがウンディーネたちを浮上させ、この憧れとともにウンディーネたちは、高次のヒエラルキア存在たち、天使（アンゲロイ）、大天使（アルヒアンゲロイ）その他に、自らを大地の糧として差し出します、ウンディーネたちはこのことに至福を見出すのです。こうしてウンディーネたちは高次存在たちの内部で生き続けます。

このように、これらの存在たちが底知れぬ深みから、いわば早春となるたびに上へと発生してくるのは奇妙なことです。このときこれらの存在たちは、私が描写しましたようなしかたで植物に働きかけることによつて、地球の生に参加しています。しかしそれからこれらの存在はいわば水中に溢れ出し、自身の肉体性を通して水の燐光放射を、腐敗していくものを吸収し、途方もない憧れのなかでこれを上へと運んでいきます、ですから、地球の水から発生し、ウンディーネを通じてもたらされた色彩、霊的・実質的な色彩が、高次のヒエラルキアの存在たちにその糧を提供するようすが、巨大な、壮大な宇宙像のなかに見られます、ウンディーネたちの憧れはまさに高次存在たちに自分を食べ尽くしてもらつことなので、高次のヒエラルキアによつて地球は食料の供給源とな

るのです。ウンディーネたちはこうしてさらに生き続けます、こうしていわば永遠のなかへと入っていくのです。実際このように、地球から形成された内部を持つこれらの存在たちの絶え間ない上への流出は毎年起こります、これらは憧れに満ちて輝きを放ち、自らを糧として高次存在たちに差し出すのです。

続いてジルフェに移りましょう。私たちは一年の経過のなかで死んでいく鳥たちを発見します。私は皆さんに、この死んでいく鳥たちが、霊化された実質を持つていること、地球から上昇していくために、これらの霊化された実質を高次の世界に引き渡そうとすることをお話ししました。けれどもこのとき媒介者が必要です。ジルフェがこの媒介者なのです。実際のところ、死んでいく鳥の世界を通して、空気は絶えずアストラル性に満たされていきます、低次のアストラル性とはいえまさにアストラル性、アストラルの実質に満たされます。

このアストラルの実質のなかを、羽ばたいていく「Fatern」¹と申し上げることはできません、この言葉の響きが不快でなければ浮遊していく

「verschweben」²、とでも申し上げたいのですが、このなかを浮遊していくのはジルフェなのです。ジルフェたちは、死んでいく鳥の世界から発するものを吸収し、これをやはり憧れに満ちて高みへと運び、高次ヒエラルキアが存在たちによって呼吸し尽くされることを欲します。ジルフェたちは、高次ヒエラルキアの呼吸存在であるものとして自らを差し出すのです。これもまた壮大な光景です！鳥の世界が死んでいくのを見ると、このアストラル的な、内的に輝く実質が空中に移っていくのです。ジルフェたちが青い稲妻のように空気を貫いてひらめき、この青い稲妻のなかへと、最初は緑、次いで赤みを帯びつつ、鳥の世界から発してくるこのアストラル性をジルフェたちは吸収し、上方に向かってひらめく稲妻のようにさつと上昇していきます。これを空間の外まで追っていくと、ジルフェたちは高次ヒエラルキア存在たちに呼吸されるものとなります。

したがってこう言うことができます、グノームたちは、ある宇宙をその構造に従って別の宇宙へと携えていく、と。グノームたちはいわば「これは比喩的にのみ言えることです」が「水平的に進化と共に進んでいくのです。他の存在たち、ウンディーネやジルフェたちは、自身の死のなかで、味わわれ食されるなかで、呼吸されるなかで至福と感ずるものを上へと携えていきます。こうしてこれらの存在たちは高次のヒエラルキアのなかでさらに生き続けます、そのなかから自らの永遠を見出すのです。

さらに火存在たちに移りますと、愛する友人の皆さん、ひとつ考えてみてください、蝶の翅（はね）の鱗粉は、死にゆく蝶とともに融けてなくなってしまうように思えますね。ところが、鱗粉が融けてなくなってしまうのは正しくありません。蝶の翅から飛散するものは、最高に霊化された質料です。

これはすべて、地球を取り巻く熱エーテルのなかへと、ごく小さな彗星のように飛び去っていきます、鱗粉のひとつひとつがごく小さな彗星のように地球の熱エーテルのなかへ飛んでいくのです。一年の経過のなかで、蝶の世界が終わりを迎えるとき、きらきらと煌めきつつ、すべてが内的な煌めきとなります。

そしてこの煌めきのなかに火存在たちが溢れ出し、これを吸収します。火存在のなかでこれはきらきらと煌めきつつ、火存在もまた憧れを持ちます。火存在たちは、こうして吸収したものを、高みへと運びます。そして「すでに皆さんに別の側面から描写いたしました」が「今や、蝶の翅から火存在によって外へと運ばれたものが、宇宙空間へと煌めき出るようすが見られます。けれどもこれは外へと煌めき出る、流出するのみではなく、地球について高次ヒエラルキアの霊たちの本来の眼差しを生み出すものでもあるのです。高次ヒエラルキアの霊たちは地球を眺めて、地球に関して主にこの火存在によって運ばれていく蝶・昆虫存在を見ます、そして火存在たちの最高の歓喜は、高次ヒエラルキアの霊眼の前に置かれたあるがままの自分を感じ取ることで、火存在たちの最高の歓喜は、見られること、いわば眼差しに、高次ヒエラルキアの霊的な眼差しに受け入れられることなのです。火存

在たちはこれらの高次ヒエラルキアを指して進み、これらに地球についての知をもたらしめます。

以上、これらの元素存在たちがいかに地球と霊宇宙との媒介者であるかわかりでしょう、高次ヒエラルキアの光の海・炎の海のなかで糧となつて消えて行く、燐光を発し上昇するウンディーネたちの光景、呼吸されるジルフェたちの、上へとひらめく緑がかり赤みがかつた稲妻、そこでは地上的なものが絶え間なく永遠のものへと転じていきます、そして行為し続ける火存在が永遠に在り続けること。なぜなら、この地上では鳥たちの死が起こるの是一年のある時期のみですが、これら火存在たちは、彼らによって見ることが出来るものを、いわば一年中ずっと宇宙万有へと注ぎ出すよう気を配っているからです。このように地球は周囲に一種の火のマンント「Feuernante」をまとっています。外から見ると、これは火のように見えます。けれどもその全体は、人間が見ている

のとはまったく別様に地球のものをしている存在たちによって、引き起こされているのです。申しましたように、人間にとって地球は、その上を歩いたり立ったりできる堅い実質と感じられます。グノームたちにとって地球は、透過性のある球、空洞の球です。ウンディーネたちにとって水は、その中で燐光放射を感じ取ってそれを自分のなかに吸収し、体験することのできる何かです。ジルフェたちにとって、死にゆく鳥の世界から発する空気のアストラル的なものは、従来そうであったよりもずっと鋭くひらめく稲妻にしてくれるものです。ジルフェたちはふつうは鈍い青みがかった稲妻なのです。そして蝶存在の死滅もまた、いわば地球を火の外皮のように絶えず覆い続けるものです。これを観照すると、いわば地球はすばらしい火の絵画に取り巻かれているようです、一方地球から見渡すと、これらのひらめく稲妻、これらの燐光を発し消えていくウンディーネたちがいます。これはすべて、あたかもこう言わざるを得ないかのようです、この地球上では、これらの元素霊たちの生き生きとした営みがある、これらは上方を目指し、地球の火のマントのなかで消え去る、と。けれども実際には元素霊たちは消えてしまふのではなく、高次のヒエラルキアの存在たちの中へと移行することで、そこに自分の永遠の実在を見出すのです。

けれども、最終的にすばらしい宇宙絵画のように見えるこのすべても、地球上で起こっていることの現れであり、すべてはまず最初の段階がこの地球上で起こっているのです。私たち人間はいつも、ここで起こっていることの内部にいます、ですからほんとうは、たとえ通常の意識では最初これらの環境を把握することができないとしても、人間は毎晩これらの存在たちの活発な営みのなかにいて、自我およびアストラル体としてはこれらの存在たちの営みに参加してさえいるのです。

とは言いとりわけグノームたちにとって、人間が眠っているのを観察することは一種の楽しみです、ベッドのなかの物質体をではなく、自我およびアストラル体として物質体の外にいる人間を観察し、そして、この人間はほんとうは霊のなかで考えているのにそれを知らない、人間は自分の思考が霊的なものなかに生きていることを知らない、とわかることは一種の楽しみなのです。さらにまた、ウンディーネにとっても、人間がこれほど自身を知らないということとは不可解です、ジルフェにとってもそうですし、火存在にとっても同様です。よろしいですか、物質界にあっては夜にヘビその他に巻きつかれるのは、心地よいものではありません。けれども霊的人間、つまり自我およびアストラル

体は、夜これらの元素存在たちに包まれ取り巻かれていて、こうして取り巻かれていたことが本来、宇宙についてもっと知ることができるように意識をもたせて前進せよという勧告なのです。

したがって私はこれから、皆さんに理解していただく試みをすることができ、これからグノーム、ウンディーネ、ジルフェ、火存在といった存在たちがそのときいかに飛び交っているかについて、そして、彼らが実際の何をおもしるがっているか、意識をもつてさらに進むよう勧告することで彼らから何を欲しているかを聴き始めるとどのようになるのか、これについての理解です。そう、よろしいですか、ここにグノームたちがやってきて、たとえばこう言います、

お前はお前自身を夢見ている
そして目覚めを避けている。

グノームたちは、人間が自我を実際夢のなかでのように有していること、人間はまず、この真の自我に到達するために正しく目覚めなければならぬことを知っています。グノームたちにはこのことがはつきりわかっているのです。彼らは眠りのなかで人間に呼びかけます、

お前はお前自身を夢見ている
――昼にはこう言います――
そして目覚めを避けている。

さらにウンディーネたちから響いてきます、
お前は天使のわざを思考している・・・
人間の、自分の思考が本来天使のもとにあるということを知りません。
お前は天使のわざを思考している

それなのにそのことを知らない。
そして、ジルフェたちから、眠っている人間に向かって響いてきます、
お前に創造の力が輝く、

お前はそれを予感しない・・・
お前はその力を感じる
――創造の力――
それなのにこの力を生きない。

以上がおおよそジルフェの言葉、ウンディーネの言葉、グノームの言葉です。
火存在の言葉は

お前を神々の意志が力づける、
お前はそれを受け取らない、
お前はその力で意志する

「神々の意志の力で」

それなのにこの力をお前から突き離す。

これはすべて、自分の意識とともに先に進めという勧告なのです。物質的生
存には至らないこれらの存在たちは、自分たちの世界に人間も参加できるよう
に、人間がその意識をともなつてさらに前進することを欲しています。

こうして、いわばこれらの存在たちが人間に語るべきことに習熟していくと、
これらの存在たちがいかに自らの本質を表現するかも次第にわかってきます。
たとえばグノームたちはこのように表現します、

私は根の本質の力を保つ、

この力は私に形成体を創り出す。

ウンディーネたちは

私は水の成長力を動かす、

この力は私に生命の素材を形作る。

シルフェたちは

私は空気の生命力を呑み込む、

この力は私を存在の威力で満たす。

そして火存在「」ここで火存在が行うことに対して何らかの地球の言葉を見
出すのは非常に困難です、火存在は地球生と地球の営みからはるかに隔たつて
いるからです。ですから、私は「消化する」[Verdauen]という言葉から、と
は言えこれが消化を思い起こさせないように「」これは火のように焼き尽くす
ことです。ですから「」私は溶かす[Ich daue]ふという言葉を作ります。「溶かす」
[dauen]は動詞とならなければなりません、「」ここで起つていっていることはその
よつにのみ表現できるからです。

私は火の志向する力を溶かす、

この力は私を魂の靈性のなかに解放する。

私はここで皆さんに、これらエレメンタル世界の存在たちがいかに自分自身を
特徴づけるか、そしてこれらがまず何を人間たちに勧告してもたらすか、理
解していただくことを努めました。けれどもこれらの存在たちは、人間に否定的
なことだけを耳打ちするほど不親切なわけではなく、これらの存在からはいわ

ば碑文体の金言も発せられます。こうした金言は何か途方もなく巨大なもの
と感ぜられます。このような事柄の場合、皆さんはこういうことに対する感受性
を身につけておかなければなりません、つまり、いかにすばらしいにせよ、あ
る文が単に人間の言語でのみ語られるのか、そのような文が力強いグノームの
一団から宇宙的に響くかではいかに異なるか、といったことに対する感受性です。
生じてくるしかたによつて、まったく違いが出てくるのです。そして人間がグ
ノームにたちに耳をすますと、グノームの合唱は、私が書き記しました勧告を
与えたあと、人間に向かつて響いてきます、そのときグノームの合唱は人間に
向かつてこう響いてきます、

目覚めを希求せよ！

これは、力強い道徳的印象です、宇宙万有を貫いて流れ、夥しい数の個々の
声から成るこのような言葉がこれを表すことができます。

ウンディーネの合唱はこう響きます、

霊のなかで思考せよ！

シルフェの合唱「」となるとそう単純ではありません、と申しますのも、満
月の輝きのなかでグノームたちが鎧をつけた輝く騎士のように現れるとき、ち
よつどそのとき、地の底からのようにグノームたちから「目覚めを希求せよ！」
と響いてきます。また、ウンディーネたちが、食べ尽くされるといふ憧れのな
かで上へと漂つていくとき、漂い上昇しながらも地上へと「霊のなかで思考せ
よ！」が響き返してきます。シルフェたちは宇宙光のなかのように青い赤い緑
を帯びた稲妻となつて消えつつ上方で自らを呼吸させるのですが、このとき、
光のなかにひらめき入りそのなかで消え去りつつ、高みのシルフェから下へと
響いてきます、

創造しつつ呼吸する現存を生きよ！

そして、火のような怒りのなかで、と申し上げたいのですが、と申しても何
か破壊的なものではなく、宇宙から人間が得なければならぬ何かと感ぜられ
るような怒りのなかで、つまり火のような、しかし同時に熱烈な怒りから響い
てくるように、火存在たちが彼らのものを地球の火のマントのなかに携えてい
くときに、これは響いてきます。このときはもう個々の声と一緒に響いてくる
のではなく、周囲全体から力強い雷鳴のように響いてきます、

神々の意志の力を愛しつつ受けよ！

むろんすべてから注意をそらすこともできません、そうすればこれを聞き取る

ことはありません。人間がこういう事柄を聞くかどうかは人間の意志にまかされています。けれども人間はこういう事柄を聞き取ることによって、これが現にある宇宙を成り立たせている要素であること、描写しましたようにグノーム、ウンディーネ、ジルフェ、火存在が自らを展開していくことで実際に何かが起こっているということを知るので、そしてグノームたちは、人間に対して単に私が描写いたしましたような関係にあるだけでなく、彼らの宇宙言語を大地から響き渡らせるためにそこにいるのです。ウンディーネたちはその宇宙言語を上へと流れ漂いつつ響かせます、ジルフェたちは上から、火存在たちは合唱のように、一つの力強い声の展開が合流するように。

これは私たちに現れてくるであろう言葉に置き換えられました。とは言え、これらの言葉は宇宙言語の一部なのです、そして、たとえ私たちが通常の意識ではこれを聞くことが出来ないとしても、これらの言葉は人間にとつて意味のないものではありません。と申しますのも、宇宙は言葉から造り上げられた、という本能的な霊視に基づく太古の観照は、まさしく深い叡智であるからです。けれども宇宙言語は、何かわずかな音節から構成されたものではありません、宇宙言語は、数え切れないほどの多くの存在たちから響き合ってくるものです。持つていて、宇宙言語はこれらの数え切れない存在たちから一緒に鳴り響いてきます。宇宙は言葉から生まれた、という一般的抽象的な真理はこれを私たちに完全に伝えることはできません、これが私たちに完全に与えられるのは、いかに個々の存在たちの声から宇宙言語がさまざまなニュアンスで構成されていくか、そしてこのさまざまなニュアンスが、大いなる宇宙の調和（ハーモニー）と力強い宇宙の旋律（メロディー）のなかへと響いていって、いかに語り、創造するかを、私たちが次第に具体的に知るようになるかのみです。

グノームたちの合唱がその「目覚めを希求せよ」を響かせることにより、人間の骨組織、運動組織（系）全般を出現させるための力として働くものが、グノームの言葉に置き換えられます。

そしてウンディーネたちは「霊のなかで思考せよ」と呼びかけることにより、ウンディーネたちは、ウンディーネ的なものに翻訳しつつ、新陳代謝器官を形成するための宇宙言語として人間のなかに注ぎ込まれるものと呼んでいるのです。

ジルフェたち、これらが呼吸されることにより、ジルフェの「創造しつつ呼

吸する現存を生きよ」が下へと流れ込んでくることにより、人間に律動（リズム）組織（系）の器官を備えさせる力が人間を貫いて揺り動かし、活気づけます。

そして火存在のしかたで宇宙の火のマントから雷鳴とともにやってくるように響いてくるもの、ひとがこれに気付くとき、これは反照、模像のなかに現れるものです。考えてごらんさい、これは宇宙の火のマントからこちらへ放射してくるのです！この言葉の力がこちらへ放射してくるのです！人間の神経―感覚組織（系）のひとつひとつ、いわば人間の頭のひとつひとつが、このとき火存在の言葉に翻訳すると、「愛しつつ神々の意志を受けよ」という意味になるものの小さな、ミニアチュアの模像なのです。この「愛しつつ神々の意志を受けよ」という言葉、この言葉は、最高の宇宙実質のなかで作用するものであり、人間が死と新たな誕生との間で進化を遂げるとき、そのひとが死の門を通過して担っていくものを、その後人間の神経―感覚器官となるものに造り変えるものです。

運動組織 グノームの合唱…目覚めを希求せよ！

新陳代謝機構 ウンディーネたち…霊のなかで思考せよ！

律動組織 ジルフェたち…創造しつつ呼吸する現存を生きよ！

神経―感覚組織 火存在たち…神々の意志の力を愛しつつ受けよ！

ごらんのように、境域の向こうにあるものが私たちの自然に属していること、これが私たちを創造する神々の力へと、他のすべてのものにおいて働きかけ生きているもののなかへと導き入れることがわかりでしょう。別の世を待ち焦がれるもの、そしてこの言葉のなかにあるものすべてを思い出すとき、こう言ってもよいかもしれません、私は

働く力のすべてと種子を観る

もはや言葉をあれこれとかき回すことはしない――

これは人類の進化、人類の発展の歩みのなかで実現されなければなりません。人間をさまざまなかたで作り上げる種子の力のなかをのぞかないうちは、私たちはあらゆる知のなかで言葉をあれこれと引っかき回すのです。

ですから私たちはこう言うことができます、運動組織、新陳代謝組織、律動組織、神経―感覚組織は、合流してひとつになったもの、つまり、下から上へと響いてくる「目覚めを希求せよ」「霊のなかで思考せよ」、そしてこの上昇を志向する言葉に、上から下へともう一方が、つまり「創造しつつ呼吸する現存

を生きよ」と「神々の意志の力を愛しつつ受けよ」が混ざることによって、ひとつになったものである、と。

この「神々の意志の力を愛しつつ受けよ」、これは頭のなかで静かに創造するものです。下から上を目指してくる「霊のなかで思考せよ」、上から流れ落ちてくる「創造しつつ呼吸する現存を生きよ」、これはとくに、人間の呼吸が血液のなかの人間の働きへと移行する、リズムカルに移行する、そのしかたでひとつの写しを取るように、生き生きと相互作用しているものです。そして私たちに感覚器官を植え付けるもの、これは上から流れ落ちてくる「神々の意志の力を愛しつつ受けよ」です。けれども、私たちが歩くとき、立つとき、腕や手を動かすときに働いているもの、これは、人間をそもそも意志にしたがつて生き抜くことに導くものであり、これは「目覚めを希求せよ」のなかに響いています。

以上、人間がいかにあの宇宙言語の協和音であるかわかりでしょう、この宇宙言語は私皆さんに述べましたようにもっとも低い段階に解釈できるので、この宇宙言語はさらに高次のヒエラルキアのところまで達しますが、高次ヒエラルキアは、宇宙を発生させ生み出すために、さらにまた別のものを宇宙言語として繰り広げねばなりません。けれども、これら元素存在たちがいわば宇宙へと呼びかけてきたもの、これは、創造し、造形し、形成する宇宙言語、あらゆる働きとあらゆる存在の根底にある宇宙言語であるものの、最終音なのです。

グノームたち

お前はお前自身を夢見ている
そして目覚めを避けている。

私は根の本質の力を保つー

この力は私に形成体を創り出す

ウンディーネたち

お前は天使のわざを思考している
それなのにそのことを知らない。

私は水の成長力を動かす、

この力は私に生命の素材を形作る。

ジルフェたち

お前に創造の力が輝く、
お前はそれを予感しない…
お前はその力を感じる
それなのにこの力を生きない。

火存在たち

私は空気の生命力を呑み込む、
この力は私を存在の力で満たす。
お前を神々の意志が力づける、
お前はそれを受け取らない…
お前はその力で意志する
それなのにこの力をお前から突き離す。

グノームたちの合唱…

私は火の志向する力を溶かす、
この力は私を魂の霊性のなかに解放する。

ウンディーネたち…

目覚めを希求せよ！
霊のなかで思考せよ！

ジルフェたち…

創造しつつ呼吸する現存を生きよ！
神々の意志の力を愛しつつ受けよ！

火存在たち…

- ・真の人間認識の必要性
- ・各進化期に人間に与えられたもの…
- ・地球進化期：運動機能に関するもの、月進化期：新陳代謝に関するもの、太陽進化期：律動（呼吸・循環）的経過に関するもの
- ・土星進化期：神経・感覚に関するもの
- ・人間と鉱物、植物、動物の関係…
- ・人間が摂取する鉱物質のもの、植物質のもの、動物質のものは体内でそれぞれ、

熱エーテル、空気状のもの、液体状のものに移行する固体的なものに入り込んでいくのは人間的なもののみ

- ・人間の呼吸、炭素の働き…炭素は炭酸となって吐き出されるときに人体内にエーテルを残していく
- ・新陳代謝組織は常に人間を病気にする傾向を持つ
- ・循環は絶え間ない治癒プロセス
- ・呼吸のリズムは宇宙のリズムと一致し、循環リズムを制御する
- ・土星と人体組織の照応…土星の内部は病む力、土星環は健やかにする力
- ・これを眺める高次ヒエラルキアの満悦が神経―感覚組織を貫いて精神的進化の力を形成する

- ・真の合理的な治療学の体系は新陳代謝から出発すべきである
- ・教育芸術と医学
- ・全体的な人間認識から医学体系が生み出される必要性
- ・人体における栄養摂取経過、治癒経過、精神的経過の相互移行
- ・血液のなかで起こるべきプロセスが他の場所に入り込むと炎症徴候が生じる
- ・神経のなかで起こるべき経過が他の場所に入り込むと腫瘍形成への衝動が生じる

- ・教育学における病理学的―治療学的認識の必要性
- ・教育芸術的治療において物質的なものの治癒作用を知ることの有益さ
- ・銅をはじめ、鉱石形成の持つ治癒作用
- ・外なる自然の治癒プロセスと人体組織の治癒プロセスの関係

私が先日行いました講義において、すべてが、真の包括的な人間認識が最終的に生み出されるべく宇宙の諸現象を総合するよう迫られていることがおわかりになったと思います。私たちが観察してまいりましたすべてが、人間認識を切実に必要としているのです。そもそも人間認識が可能なのは、それが現象界の最も低次の形式、つまり人間に対して物質的世界として顕現しているすべてから開始され得るときのみでしょう。そしてこのように、物質的世界として顕現するものの観察から始まるもの、これがヒエラルキアの世界の観察とつながっていかなければなりません。真の人間認識に通じうるものは、物質的存在の最も低次の形式から霊的存在の最も高次の形式まで、ヒエラルキアの世界に至るまで、追求されねばなりません。さしあたっては、今皆さんの前で行なっておりますこれらの講義のなかで、このような人間認識のための一種の素描を試みることにしたいと思います。

私たちがはつきりと理解しておかなくてはならないのは、人間として私たちの前に立っているものは、私が常々、土星進化、太陽進化、月進化として要約してきましたあの長い宇宙的な進化の結果であるということです。地球進化はまだ終わっておりません。とは言え、そもそも人間は、狭義の、すなわち月進化に続く地球進化のおかげで何を待っているのか、はつきり理解しておくのが望ましいのです。

よろしいですが、皆さんが両腕を伸ばして動かすとき、皆さんが指を動かすとき、何らかの外的な運動をするとき、皆さんが腕、脚、頭、唇その他を動かすことができるために―そしてこのような人間の発現のための諸力が生体組織のもっとも内側の部分まで入り込んでいくために―皆さんの生体組織のなかで必要なもの、これはすべて、狭義の地球進化を通じて人間に授けられたのです。これに対して、新陳代謝の展開であるものすべて、人間の一番外側の皮膚に閉じ込められた空間のなかを皆さんのがぞき込むとき、物質的―肉体的内的人間において新陳代謝の展開として起こっているすべての目を向けるなら、そのなかに人間が月進化のおかげで得ているもののひとつの像が得られるでしょう。そして、人間が古い太陽進化のおかげで得ているものの像を得られるのは、皆さんが、人間において何であれ律動的（リズムミカル）な経過であるものすべてを眺めるときです。呼吸経過、血液循環経過は、実際もっとも重要な律動的経過です、これらすべての律動的経過を、人間は古い太陽進化のおかげで

得たのです。そして、やはり今日の人間の全身に広がっている神経―感覚の展開であるものすべて、これを人間は古い土星進化のおかげで得たわけです。

にもかかわらず皆さんに注目していただかなければならないのは、人間はひとつの全体であり、そして宇宙進化はひとつの全体であるということです。今日私たちが、私が『神秘学概論』で行なったように古い土星進化に言及するとき、私たちはかつて太古の時代に太陽進化、月進化、地球進化に先行していた進化のことを意味しています。ところがこれは根本的に言って地球までたらされた土星進化なのです。地球が進化する一方で、土星進化も生じます。この新たな土星進化は、地球進化のなかにあります、これはいわば、もつとも若い土星進化なのです。地球進化までやってきたものはもつとも古いものです。土星進化として古い太陽に組み込まれたものはもう少し若いもの、月に組み込まれたものはもつとも若いものであり、今日地球を満たしている土星、本質的に地球のある種の熱組織に関わっている土星は、もつとも若い土星進化です。私たちは私たちの人間とともにこの土星進化のなかに組み込まれているのです。

このように私たちは宇宙の進化に組み込まれています。けれども私たちは、地球上で空間的に私たちを取り巻いているものにも組み込まれているのです。たとえば、鉱物界を考えてみてください。私たちは鉱物界と相互作用しています。私たちは食物を通じて鉱物を摂取しています。私たちはそれ以外にも呼吸その他を通じて鉱物を吸収しています。私たちは私たちのなかで鉱物的なものを加工します。

ところがあらゆる進化、あらゆる宇宙の経過は、人間においては人間の外部とは異なっています。すでに指摘しましたように、私たちが今日、化学の実験室で化学的経過を研究して、人間が食物を食べるときにこれらの化学的経過が単に人間の内部に継続していく、と考えるなら、それはまったくばかげていません。人間は何か化学作用の合体ではありません、人間の内部ではすべてが変化するのである。そしてある観点からすれば、この変化は以下のように現われます。

私たちが鉱物質のものを摂取すると仮定してください。私たちが鉱物質のものとして摂取するものはすべて、人間のなかで以下のような効力を持つまで駆り立てられねばなりません。ご存じのとおり私たちは自身の熱を持っています、健康なひとの場合、血液の温度は約37度です。私たちは血液の温度のなかに、平均して外部の熱を凌駕する何かを持っています。私たちが鉱物的に、鉱物として、摂取するものはすべて、私たちの生体組織のなかで変化させられ、変容

させられなければならないのですが、それは、私たちの血液の温度のなかで外的環境の中くらいの温度を超えていくもの、外部の環境の中くらいの温度より高いものが、満悦して鉱物質のものを摂取するというしかたです。皆さんが砕かれた食塩を味わうとき、この食塩は皆さん自身の持つ熱によって、皆さんが外界と共有している熱によってではなく、皆さん自身の熱によって吸収されねばなりません、満悦のうちに摂取されねばなりません。鉱物質のものはすべて、熱エネルギーに変化しなくてはなりません。そして、人間がその生体組織のなかに、何らかの鉱物が熱エネルギーに変化するのを妨げるものを持つ瞬間、この瞬間に人間は病気になるのです。

さらに進んで、人間が摂取する植物質のものに移りましょう。人間は植物質のものを摂取します、人間は植物質のものを自らの中でも発達させることで、自分自身が宇宙の一部となっています。人間は鉱物質のものを含みますが、これは絶えず、熱エネルギーになろうとする傾向を持ちます。植物質のものは人間のなかで絶えず空気のように、ガスのようになるうとする傾向があります。つまり人間は植物質のものを自らのなかに空気領域として有しているのです。人間のなかに植物から入ってくるもの、あるいは人間自身が内的な植物体機構として発達させるもの、これはすべて、空気のようにならなければならない、人間のなかで空気の形状をとることができなければなりません。これが空気の形状をとらないとき、人間の生体機構が、人間のなかで植物的であろうとするすべてのものが空気の形状に移行するのを妨げるとき、人間は病気になる。人間が摂取する動物質のもの、あるいは人間自身が自らのうちに動物質のものとして育成するもの、これはすべて、人間のなかで、少なくともある期間、液體的な、水のような形をとります。人間は、自らのうちにどんな動物質のものも持つことは許されませんが、内的に作り出された動物質のものも、摂取された動物質のものも、それがいったん人間のなかで液體的になるという経過を遂げないなら持つことは許されないので。人間が人間自身の動物質のものあるいは外来の動物質のものを液体状にして、さらにまた固体へと移行させることができないなら、人間は病気になる。人間のなかで純粋な人間の形を生み出すもの、人間において、人間が直立歩行する存在であること、人間がその内部に話し思考する衝動を持つことに由来するもの、これのみが、そして、人間を動物を超えて本来の人間にしているもの、これのみが固い地上的なものへと――これを成し遂げるのは私たちの生体組織のせいぜい二パーセントです――

「これのみが固体的なものへと、堅固に形成されたもの、形（フォルム）へと入り込んでいくことを許されるのです。動物質のものと植物質のものとのうちの何らかのものが人間の固体的フォルムのなかに入り込むと、人間は病気になるります。

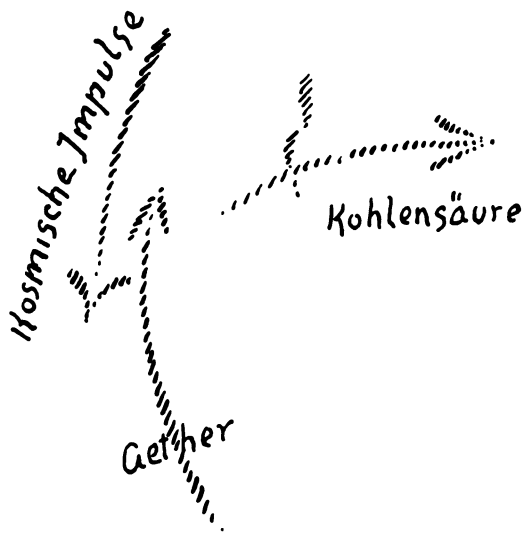
鉱物質のものはすべて、人間のなかでいったん熱エーテルにならなければなりません。植物質のものは全て人間のなかで空気状の通過段階を経ていかなければなりません。動物質のものはすべて人間のなかで水状の通過段階を経ていかななくてはなりません。人間的なものだけが人間のなかで地上的「固体的」フォルムを常に維持することが許されています。これが人間の生体組織の秘密のひとつです。

さて、まず人間が地球から得ているものを除外して——これは後ほどの考察をそれだけいつそう豊かにするでしょう——人間において新陳代謝機構であるもの、もちろん地球が組織化される間に形成し直したとはいえ、その原基は古い月から得たもの、つまり人間の皮膚の内部で狭義の新陳代謝として起こっているもの、この場合排泄というものもまったく新陳代謝とみなさなければなりません。そういうものを取り上げてみましょう、すると、これは食物の摂取によって絶え間なく変化させられている、と申し上げたいのです。最初は人間の外部にある食物が人間のなかに入り込み、まずこの新陳代謝組織に組み込まれます。

この新陳代謝組織は、人間の環境であるものを人間的なものへと加工します。鉱物質のものはすべて熱エーテルに近づき始め、植物質のものはすべてガス状「空気状」蒸気状のものに近づき始め、動物質であるものはすべて、とりわけ固有の動物質のものとして生み出されたものは、水状のものに近づき始めます。そしてともと人間のものを、組織されたフォルム形成として固体的なものに形成します。これらすべてが、傾向にしたがって新陳代謝のなかにあるのです。新陳代謝はこの点においてきわめて興味深いものです。

私たちが新陳代謝を呼吸まで上昇して追求していくと、人間は人間のなかのいたるところに見出せる炭素を自らから形成している、ということがわかります。炭素は酸素の来訪を受け、炭酸に変化させられ、これを人間が吐き出します。炭酸は炭素が酸素と結びついたものです。呼吸を通じて吸い込まれた炭素は炭素に襲いかかり、炭素を自らのなかに取り込みます、人間は炭酸、つまり炭素が炭素とともに成立させた化合物を吐き出します。けれども、息を吐き出

す前は、炭素はいわば人間の性質の善行者となっていています。と申しますのも、炭素は酸素と結びつくことで、つまり、いわば血液循環を引き起こすものを、呼吸が血液循環から作り出すものに結びつけることで、この炭素は人間の生体機構の善行者となるからです。と申しますのも、炭素は、人間の生体組織を去る前に生体組織全体にわたってエーテルを流出させるからです。物質的な科学は単に、炭素は炭酸とともに吐き出される、と言うのみです。けれどもこれは経過全体の一面にすぎません。人間は炭酸を吐き出します、しかし人間の生体組織全体のなかには、呼吸を通じて酸素に用いられる炭素によって、エーテルが後に残されるのです。このエーテルが人間のエーテル体のなかに入ってしまう。そして、常に炭素によって生み出されるこのエーテルが、今や人間の生体機構を精神的（霊的）な影響に対して開くのに適したものにします。宇宙からアストラルーエーテル的作用を受け容れるものとなります。こうして炭素が後に残していくこのエーテルによって宇宙の衝動が引き込まれます、これも人間を形成するように働きかけるあの衝動、たとえば人間の神経組織をそれが思考の担い手となることができるように準備するような衝動が引き込まれるのです。このエーテルは絶えず私たちの感覚、たとえば目に浸透していかなくはなりません、目が見ることができるよう、目が外部の光エーテルを取り入れることができるようにするためにです。宇宙を出迎えることのできるエー



Kosmische Impulse:宇宙の衝動

Kohlensäure:炭酸

Aether:エーテル

テルの広がりを持ちが有することができるのは、炭素のおかげというわけなのです。

これらすべてはすでに新陳代謝組織のなかで準備されています。けれども新陳代謝組織は人間の組織として宇宙全体のなかに組み入れられています、それ自身だけで存在することはできないのです。新陳代謝組織はそれ自体だけでは存在することができません。つまりこれは第三のものとして人間のなかに原基[Anlage]として形成されたのです。神経―感覚組織のための第一の原基は古い土星の時代に、律動組織のための第二の原基は古い太陽の時代に形成され、これらの他の組織が形成されたあとに始めて、新陳代謝組織が人間のなかにもたらされることができました、なぜなら新陳代謝組織だけでは存在できなかったからです。さしあたり自らの意志による運動を除外すれば、新陳代謝組織は、人間にとっての宇宙の関係のなかで食物摂取とみなされます。けれどもこの栄養摂取そのものはそれだけで存在することはできません。人間は栄養摂取を必要としますが、栄養摂取は栄養摂取それ自体だけでは存在できません。と申しますのも、人間における新陳代謝そのものを研究すると――皆さんは明日以降の講義で人間の全生体機構にとってこれがいかに不可欠かごらんになるでしょう――、新陳代謝組織は、人間を病気にしようというあらゆる可能な傾向に浸透されているのです。内的な、つまり外的な損傷によって生じたのではない病気の原因を、私たちは常に新陳代謝組織のなかに捜さなくてはなりません。したがって真に合理的(ラツイオネル[Rationell])な病氣觀察を行なおうとするひとは、新陳代謝組織から出発しなければなりません、そして本来新陳代謝組織における個別のどんな症状に対しても、お前はいつたどのよう道に在るか、と問わなければなりません。――私たちはある種の物質を私たちのなかでデンプンや糖その他に変化させますが、私たちが、口のなかでの食物摂取について、食物の加工についてのあらゆる現象を取り上げるなら、私たちが口中でプティアリン(唾液アミラーゼ)[Ptyalin]によって食べ物を覆うことを取り上げるなら、さらに進んで、胃のなかでのペプシン消化[Einpepsieren]を取り上げるなら、さらに進んでやはり消化組織のなかでの代謝産物の加工、これはリンパ管へと移行し、血液へと移行するのですが、こういう加工を取り上げてみるなら、私たちはどんな個別の経過も探究しなければなりませんし、考察されるべき無数の経過があります。脾臓分泌液と代謝産物の混合、胆汁と物質との混合その他、個々のどんな経過に対しても私たちは訊ねなければなりません、お前はそもそもいつたどのようのか、と。――するとこの経過はこう答えることでしょうか、私だけだったら、私は、人間をいつも病気にさせるようなプロセスなのです、と。――いかなる新陳代謝経過も人間の本性においては最後までいくことを許されておりません、と申しますのも、どんな新陳代謝経過も、それが最後までいくと、人間を病気にしてしまうからです。人間の本性は、新陳代謝経過がある段階でストップされる場合のみ健康なのです。

もしかしたら最初は宇宙の仕組みの上での愚行とも思われかねないこうしたこと、人間においてはそれが途中で止められなければ人間を病気にしてしまうであろうものが開始される、ということ、これを私たちは明日以降の講義において、聡明の最たるものとして知るようになるでしょう。けれどもさしあたり当面は、事実にしたがってこれを觀察してみましよう、私たちが新陳代謝経過のひとつひとつをその本質にしたがって内的に研究するとき、それらが私たちに、私たちは生体組織全体を病気にする途上にあります、と答えるだろうということも考慮しましょう。そもそも人間のなかに新陳代謝を存在させようとするだけで、別のプロセス、それ以前に原基のなかで発達していなければならぬ別のプロセスが存在せねばなりません、そしてそれは循環のなかに存在している経過です、それは循環の経過です。循環経過は絶えず治癒するプロセスを含んでいます。したがって、実際のところ人間を次のように描写することができ、人間は古い月進化の間に患者として生み出されたが、古い太陽進化の間に人間自身の性質のなかからあらかじめ医者が派遣されていたと言える、と。古い太陽進化の間、人間は人間自身の性質に関して医者として生み出されたのです。患者の前に医者が生じていたというのは、宇宙進化において非常に慎重なことでした、なぜなら、古い月進化の間に、人間そのもののなかに患者がつけ加えられたからです。人間を正しく描写しようとするなら、新陳代謝経過から循環経過へ、むしろ衝動として循環経過の根底をなすものすべてへと上へ進まなければなりません。もっとも広い意味において、ある物質はより早い循環を、別の物質はより遅い循環を引き起こします。私たちのなかには実際まったく小さな循環経過もあります。何らかの鉱物的物質を取り上げてみてください、金、銅を取ってみてください、これがあつたか別のやりかたで、内的にか、あるいは注射その他によって何らかの方法で人間に服用されれば、これはすべて、循環のなかに何らかのものを形成し、変化させ、健康にするよ

う働きかける云々といったことのきつかけとなるものです。そして、人間の本来の治癒プロセスをのぞき見るために知っておかねばならないことは、人間の周囲にある個々の物質が、循環変化に関して人間のなかで誘発するものは何かということなのです。つまり私たちはこう言うことができます、循環は絶え間ない治癒プロセスである、と。

皆さんがそうしたいと思われるなら、皆さんはこれを算出することもできると申し上げたいのです。皆さんに申し上げたことをよく考えてみてください、人間は平均して毎分18回呼吸します。これは宇宙にきわめて規則的に適合していて、一日の呼吸数は、太陽年を通じて運行する際の太陽の循環リズムが作り出すのと同じ数になります。しかし太陽はその春分点が25920年で全体を一巡します。人間は中年期において平均一日に25920回呼吸します。脈拍はこの4倍です。別の循環、もっと内的に集中した循環は新陳代謝の影響を受けています。呼吸の循環は、人間と外界との外的な交流に対応するもの、外界との相互関係であるものです。この呼吸リズムが絶え間なく循環リズムを制御して、それが4倍を保つようにしなければなりません、さもないと、人間はその循環リズムとともにまったく不規則なリズムになってしまいます、103680と25920の4倍という数にならずにです。これは宇宙の中に何ら対応するものを持たないものです。そうなると人間は宇宙からまったく引き離されてしまいます。新陳代謝は人間を宇宙から引き離し、宇宙から疎外します、そして呼吸リズムは絶えず宇宙のなかに引き込みます。呼吸リズムによる循環リズムのこの切り離しと結合のなかに、皆さんは、人間のなかで絶えず行なわれている原治癒プロセスをこらんなるでしょう。けれども、実際あるしかたで体全体に入り込んで継続していく呼吸プロセスを、あらゆる内的な治療とともに、ある種もっと精妙なしかたで助けなくてはなりません、呼吸プロセスが人間のいたるところで循環プロセスを制御し、これを宇宙との普遍的な関係に引き戻すようにです。

したがって私たちはこう言うことができます、人間は本来下方からは常に病気になる傾向を持ち、生体の中間の組織、循環組織において絶えず健康を維持する傾向を開発しなければならぬため、私たちは食物摂取から治療へと移行する、と。このように私たちの生体の中間の組織では絶えず健康にする衝動が生じていることにより、この衝動はまさに頭の神経―感覚組織に向かって何かを残していきます、こうして私たちは第三のものとして神経―感覚組織に至り

ます。それでは私たちは神経―感覚組織のなかにどんな力を見出すでしょうか。私たちは神経―感覚組織のなかに、いわば医者が私たちのなかに残していった力を見出します。この医者は一方においては、下の新陳代謝プロセスを健康にするように作用します。けれども新陳代謝組織を健康にするような作用をすること、医者は全宇宙のなかで今やある評価に定められていることをします。私は皆さんに何ら空想的なことを申し上げているのではなく、徹頭徹尾であることをお話ししているのですが、この経過、つまり私たちのなかで、絶え間なく下方に向かって健康にするプロセスが起こっているという経過は、高次ヒエラルキアの満悦[Wohngelallen]を呼び起こします。これは地上世界に対する高次ヒエラルキアの喜びです。ヒエラルキア存在たちは下を見下ろして、地上的なものから人間のなかへと流入していくもの、物質の地上的な特性によりそこにどまつているものから、病気が上昇してくるのを感じます。彼らは、地上的なものから作用する諸力、循環する空気その他のなかにある諸力の衝動が、絶え間なく健康にするプロセスであるようすを見ます。これが高次のヒエラル



gesundheit:健康
krankheit:病氣

キアの満悦を呼び起こすのです。

さて今、いわばもつとも威厳に満ちた精神的（靈的な）研究対象としてこの太陽系の境界に置かれた宇宙体を手がかりに皆さんが何を研究できるか、思い浮かべてみてください。この中心にあるのは、それが地球上に集中されていると考えると病ませる力である諸力を自らのうちに秘めているものであり、周囲には、健康をもたらす回転する諸力が示されます。そしてこういう事柄に感受性のあるひとには、土星の環について、人間はその内部にいますので地球を囲んでいるもののなかにはそういう刻印を知覚できないのですが、回転する健やかさであるものが見えます。この土星の環は、天文学者たちがそれについて語るものとは本質的に異なる何かです。この土星環は回転する健やかさであり、土星の内部は、もつとも純粋な集中において見れば、病んでいくもの、病気にさせるものなのです。

このように、この太陽系の最も外側の端に置かれている土星では、私たちが絶えず新陳代謝と循環組織を通じて私たちのなかにもたらしめているのと同じプロセスが起こっているのが見られます。しかも、私たちがこれをはるかに見るとき、私たちの靈的眼差しはとりわけ第二ヒエラルキアと第一ヒエラルキアの世界に導かれることもわかります。第二ヒエラルキア、キュリオテス、デユナーミス、エクスシアイの世界、第一ヒエラルキア、セラフィム、ケルビム、トロローネの世界です。私たちが靈的眼差しをもって土星と土星環に注意を向けるとき、私たちは、ご満悦で、とても申し上げたいようすでこの病ませることと健やかにすることをみはるかしているこの上位ヒエラルキアに導かれるのです。

この満悦、これが今や宇宙万有における力となります。高次ヒエラルキアのこの満悦がこつして私たちの神経―感覚組織を貫いて流れ、その内部に人間の精神的（靈的）進化の力を形成します。これはいわば、人間のなかで絶え間なく起こっている治癒から開花してゆく力なのです。したがって、第三に精神的（靈的）進化が得られます。

- 1 新陳代謝[Stoffwechsel] 栄養摂取[Ernaehrung]
- 2 循環[Zirkulation] 治癒[Heilung]
- 3 神経―感覚機構 精神的（靈的）進化
[Nerven-Sinnesorganisation] [Geistige Entwicklung]

今、人間を土星時代、太陽時代、月時代を通じて記述してみますと、私たちはこう言わなければなりません、人間は最初宇宙から生み出された精神（靈）であり、これが自らのうちに癒す者を生じさせ、それによって宇宙的な患者を受け容れることができるようになる、と。そして、これらすべての共同作用を通じて、地球上に、自らの意志による運動をする人間であるものが作り出されるのです。

人間認識の個々の部分はどれも、私がここで申しましたことの根底にあるものによってインスピレーションを与えられなければなりません。誰かが治療学の体系を、真に合理的な治療学の体系を確立しようとする、と考えてみて下さい。この体系はいったい何を内包しなければならぬのでしょうか。皆さんは新陳代謝経過から出発しなければならぬでしょう、その他のものは、せいぜい前提であることができるのみです、これについてはさらにお話ししていかねければならないでしょうけれども、解剖学的なもの、これは精密な解剖学的なものであってもですが、これは固く形成されたもので、出発点であることができるにすぎません。これはすでに自らを人間的に作っているのです。けれども新陳代謝経過は、そのなかに常に病気をもたらしものに移行する傾向が知覚されるように、まず最初に医学の合理的な体系によって研究されなければなりません。したがって確立することができる今日の医学体系は、まったくもって新陳代謝組織から、すなわちまず最初に正常な新陳代謝経過から始められねばなりません、そして、そこから、内部の病気がもつとも広い意味での新陳代謝から生じてくるという可能性が認識されるようにならなければいけないのです。さらにそこから、律動プロセスが作り出すものについて詳しく認識することによって、本来の治療学であるものも生じてこなければなりません。したがって、今日の医学体系においては、新陳代謝経過の研究から開始されなければならず、次いでそこから、人間の律動的経過の領域で起こっているすべてへの移行がなされなければならぬのです。そしてそのとき、人間の精神的（靈的）な原基の健康な発達の前提となるのは、治癒する諸力から発してくるものの認識である、ということが示されることで、全体の一種の戴冠とても申し上げたいものが達成されるのです。今日皆さんが治癒プロセスから出発しなければ、どんな教育も見出すことはできません、つまり、人間の精神の本性を健全に発達させるどんな芸術もまったく見出せないのです。と申しますのも、治癒プロセス

セスとは、人間の精神的（靈的）経過を育成する場合には純粹思考のなかで用いられなければならないものを、人間の中心性質に適用することに他ならないからです。

教育芸術家は物質的なものに凝縮した、エーテル的なものに凝縮した治療経過である力を用いて、精神的（靈的）なしかたで最初から最後まで活動しなければなりません。教育芸術において私がある子どもに何かをしようとすれば、それは何か精神的（靈的）なものを根底に持つ経過です。私がこの経過を移動させて、私が精神的（靈的）なものにおいて実行することを、何らかの物質的なものあるいはあるプロセスを適用することによって実行するとき、このプロセスあるいはこの物質が薬剤（治療手段）なのです。こう言うこともできるでしょう、医学とは人間の精神的（靈的）な治療処置を下方の物質的なものへと変容させることである、と。当時イギリスの聴衆のために行なわれた教員講座において私が示唆いたしました事柄を思い出さざれば、教師が行なうことにおいて一種の普遍的人間の療法が開始されているということ、あれやこれやの教育上の措置は、のちの年齢になって不健康な新陳代謝の沈殿あるいは不規則な新陳代謝の吸収を引き起こすということに、私がいたるところで注意を喚起していたことがおわかりになるでしょう。つまり、教育者がすることが、下方に継続されて、治療をもたらすのです。そして治療のもう一方の対であるもの、下から上を目指すもの、これが新陳代謝経過なのです。

つまり皆さんは、今日、全体的な人間認識からひとつの医学体系が生み出されなければならないこともおわかりでしょう。そうすることができません。そう感じているひともいます。とは言え、こういう医学体系が事実上形成されてはじめて何かが達成されるのです。現在、これは最大の急務のひとつです。皆さんが今日、治療学の手引き書をこらんにすると、たいいていの場合、新陳代謝組織から開始されていることはないか、あるいはあつても極めてまれ、ということがおわかりになるでしょう。しかし、新陳代謝から開始されなければならないません、さもないと、そもそも病気の本性がどこにあるのか、診断するすべを学べないでしょう。

よろしいですか、以上のことはやはりすべて、事実上、栄養摂取経過が治療経過に、治療経過が精神的（靈的）経過に、そして再び精神的（靈的）経過が治療経過に移行しうるといふことなのです、あるいは、精神的（靈的）経過が直接新陳代謝障害を引き起こすなら、精神的（靈的）経過もまた、人間の生体

の中間組織によって癒されねばならない段階に移行しているのです。これらすべて、人間のなかで互いに入り交じって移行し合っています、そして人間の全生体機構が、ひとつの驚くべき変容なのです。たとえば、人間の血液のこのすばらしい循環全体の中に見られる経過を取り上げてみてください。これはいったいどんな経過でしょうか。

さて、まず最初に、血管のなかを流れる血液を、他の人体組織からまったく切り離されていると把握してください、人間の形姿を、そうですね、血管組織を、そして筋肉組織として繋がっているものを、骨組織その他、つまり固い形成であるもの、そしてこれを貫いて液体状に流れているものを把握してください。私たちは液体的な状態、血液にとどまりましょう、もちろんまだ別の液体性も存在するのですが、血液にとどまりましょう。この流れる液体のなかで、この内部で絶え間なく起こっているのはいったいどんなプロセスでしょうか。

絶え間なくプロセスが起こっています。液体状の血液のなかで起こっているこの同じプロセスが、今やいずれかの側に向かつて、人間のなかの、壁あるいは骨格あるいは何か堅固に形作られたもの、形成物でのみありうるものに襲いかかることもあります、すると、血液のなかに入れられるべきものが、血管壁あるいは筋肉あるいは骨の内部のどこか、あるいは何らかの被覆器官のなかにあることとなります。するといったいどういふことになるのでしょうか。このときそれは、炎症徴候[Entzündungserscheinungen]への衝動となります。私たちが炎症徴候の衝動としてそこに見出すもの、私たちは絶えずこれを液体状の血液のなかに正常な経過として見出します。このとき炎症において現われてくるもの、これは、常に流れる血液のなかで起こっていないなければならないのに、正しくない場所に、すなわち形成された固い場所に押しやられた経過なのです。絶対的に正常な、健康なプロセスが別のふさわしくない場所に配属されて置かれるのは、病気をもたらすプロセスです。そして神経組織のある種の病気が、人体組織全体のなかで血液組織の反対の極として置かれている神経組織が、血液中では正常なプロセスへの移住という体験を強いられるということなのです。血管の通路においては正常なプロセスであるこれらのプロセスが神経の通路へと侵入していくと、神経の通路は、これはきわめてわずかな侵入の場合でも起こることで、まさしく炎症性の発端であるところの炎症に捉えられ、私たちは病んだ神経組織のさまざまな形を獲得するのです。

私は、神経のなかには、血液のなかとはまったく異なる経過が、反対の経過

がある、と申しました。血液のなかには燐的な[phosphorig]ものに向かっている経過があります、それが燐的な経過として、血液を取り囲むもの、あるいは血液に隣接するものを捉えるとき、これはまさに炎症的なものに至る経過です。皆さんが神経の通路における経過を追求して、これらが別の隣接する器官や血液のなかにも入り込んで移動していくとき、人間にはあらゆる腫瘍形成[Geschwulstbildung]への衝動が生じます。これが血液のなかへともたらされ、その結果血液が不健康なしかたで他の器官を養つと、腫瘍形成が起こるのでした。したがって私たちはこう言うことができます、いかなる腫瘍形成も人体組織における正しくない場所に変容させられた神経プロセスである、と。

おわかりのように、神経のなかで進行することは神経のなかにとどまらなければならず、血液のなかで進行することは血液のなかにとどまらなければなりません。血液に所属するものが、隣接するものへと移動すれば、炎症が起こります。神経に所属するものが隣接するものに移動すれば、腫瘍形成という通俗名のもとに総称されるありとあらゆる形成が起こるので、けれども、まさに神経組織のなかの諸経過と血液組織のなかの諸経過の間に、正しいリズムが生じなければなりません。

一般に私たちの呼吸リズムが血液のリズムとコントラストをなしているのみならず、私たちの循環する血液のなかには、それが血液から出ていくと炎症経過となるような繊細な経過もあります。呼吸が血液循環とある関係になければならないように、この繊細な経過も隣接する神経のなかで起こることとある関係になければなりません。そして血液リズムと神経リズムの間でこれが妨げられる瞬間、それはまた立て直されねばなりません。

ごらんのとおり、こうして私たちは再び治療法分野、治療プロセス分野に入っていきます。このすべてが皆さんに、人間のなかにはすべてが存在していなければならないということを示します、つまり最も多く病んでいるものも、別の場所で健康なものであることができるために存在しなければなりません、それは単に正しくないプロセスによってまちがった場所にやってきただけなのです。と申しますのも、それがまったく存在しないとしたら、人間は生きていけないでしょうから。人間は炎症を患うことができなかつたら、生きていけないでしょう、なぜなら、炎症を呼び起こす力は常に血液のなかになければならないからです。私がいれば、人間が本来認識において獲得するものはすべて真の人間認識から生じてこなければならぬ、と申しましたとき、このように

考えていたのです。ここで皆さんは、そもそもある教育学が、こんなにも上へ向かって、と申しますか、抽象に走ってかなり無意味なものになっている理由がどこにあるか、おわかりでしょう。本来教育学というものは、人間のなかのある種の病理学的なプロセスと、その治療の可能性を出発点とするよう押し進められなければならないのです。

脳疾患とその脳疾患の治療可能性を知っているとき、粗雑なものの中に――これがまた別のしかたによれば繊細であるのはもちろんです、これが物質的な経過である、ということに関連して私は「粗雑な」と言うのです――脳の治療処置のなかに、教育芸術においてまさに厳密に実行されなければならないものがあるのです。したがって、将来真の教員養成機関を設立するならば、実際一方で教師たちに病理学的―治療学的なものを教えなければならぬでしょう、ここで教師たちは、まず思考をより具象的なものを手がかりに訓練するでしょう、なぜなら彼らが本来の教育学において理解すべきもののためには、物質に根ざしているものを手がかりにするほうが多いからです。そしてまた、教育芸術的治療処置において、あれこれのものがどのように作用するかを知ることほど、治療にとつて、とりわけ内的な病気の治療にとつて有益なことはありません。と申しますのも、物質的なものへの架け橋を見出せば、まさに教育的なものにおいてどのように治療するべきかというしかたで、薬をも見つけることができるからです。

たとえば、子どもたちに見られる、消化システムにおける障害に起因するある種の怠惰な徴候に教育的に対処するために、正しい教育的手段が見つかるとき、まったく奇妙な内的傾向が得られます、もつとも、真に教育のなかに生きる場合であつて、表面的に学ぶだけほんとうは学校が終わつたら夕方には「公共酒場」に座り込み学校であつたことは忘れてしまつほうがいい、という場合でないのはもちろんです。そのときこのような子どもにも与える措置のしかたから、頭の経過の全作用、頭の経過と下腹部の経過との関係全体、とでも申し上げたいものを見ていく傾向が得られます。そしてさらに、鉱物学において、たとえば、銅が土壌中であれこれのものを形成するとき、銅において起きている経過を研究するならば、それはほとんどこのようになり、銅があれこれの銅鉱石になるときに銅が行なうことすべてにおいて、つまり鉱石が銅鉱石あるいは他の鉱石になるこの生成において、次のように思われるのです、つまり、教育者であるお前が男の子や女の子とともにやっていることを、銅の力

は土の中でやっているのだ！と言われるように。自分が行なうことの模様がまぎれもなく銅プロセスのなかに見えるのです。そして、教育者として、ひとが行なうことについて、直観的な、感情と本能にかなった明解さを獲得し、さらに魅惑されつつ自然をながめて、本来外では自然が大規模に教育的に治療処置していることを知るのにはきわめて魅力あることです。つまり何らかの石灰プロセスを通じて何か良くないことが起こる可能性のあるいたるところに、何らかの銅プロセス、他の地球プロセスの内部のこの鉱石形成プロセスのなかにも、絶え間ない治療があるのです。ですから、どこかで黄鉄鉱あるいは何か他のものを見つけて、これはまさに正しい方法で人間を治療処置するときと同じだ、と言つのはすばらしいことです。このように自然の霊たちは、ヒエラルキア以下、皆さんにお話ししましたあの元素霊たちにといたるまで、他ならぬ生命のなかにも病気をもたらす障害するプロセスとして登場してくる可能性のあるものを、癒し手として治療処置しているのです。こうなると実にもう、もはやこれは読み取り以外の何ものでもありません。と申しますのも、外で起こっていることを見るとき、そしてあれこれの物質を薬剤とみなしたり、あるいはそれを薬剤として加工するとき、ひとは単に立つてこう問いかけるからです、鉄はどこに現われているか、鉍脈のなかのあれこれの金属はどこに現われているか、と。——このとき環境を研究するなら、何らかの金属的なものがそこかしこに、自然によるあれこれの加工をされて現われるときはいつでも、その内部に治療プロセスがあるのだ、ということがわかります。つまり、それを取れ、それを人間の生体組織のなかへと継続させよ、そうすればお前は、外なる自然がお前の前に示してくれた治療法を生み出すのだ、ということなのです。

そうです、実際のところ、宇宙（世界）を貫いていくことはすべて、栄養摂取するもの、癒すもの、精神的（霊的）なものを正しく研究することです、と申しますのも、自然においては、絶えず病がもたらされ、絶えず癒されているからです。外において自然は、偉大な宇宙的治療プロセスです。私たちはただ自然を人間に応用しなければならぬだけです。これはマクロコスモスとミクロコスモスの驚くべき連関です。私が若干の皆さんに、あれこれの形式で語ってきたことは実際、深い真実なのです、

お前自身を認識しようとするなら

あらゆる方向に向かつて宇宙を見るがよい。
宇宙を認識しようとするなら
お前自身のあらゆる深みをのぞき見るがよい。

皆さんはしかしこれをあらゆることに応用することができません、人間を治療しようとするなら、宇宙をあらゆる方向に向かつて見よ、宇宙がいかにもあらゆる方向に癒しを繰り返しているかに目を向けよ。宇宙の秘密を病氣と治療のプロセスとして認識しようとするなら、人間の本性のあらゆる深みを見下ろせ。——皆さんはこれを、人間存在であるすべてのものに応用することができます。そして皆さんは大いなる自然に眼差しを向け、人間をこの大いなる自然との生き生きとした関係のなかで見なければなりません。

今日慣れ親しまれているのはこれとは別のことです。可能な限り自然から離れ、視線さえも自然から遮断してしまうものが作り出されます、と申しますのも、調べようとするものは小さな机の上のガラスの下に置かれるからです、目は自然を眺めることはなく、そのなかを覗き込みます。視線さえも自然から断ち切られるのです。ひとはこれを顕微鏡[Mikroskop]と呼びます。これはある意味で顕微鏡[Nulloskop]*1と呼んでもよいかもしれませんが、大いなる自然から断ち切られているのですから。それに、その下でこれを拡大したとしても、実際のところ精神的（霊的）認識にとつては、自然のなかの経過が生じたときに起こるのであるということと同じであるということとは知らないのです。それでもひとつ考えてみてください、皆さんが、人間の何かごく小さな一部を、それを観察することができるように、その内部で拡大しますと、皆さんが実際この人間の薄片によって行なうであろうことは、皆さんが人間をばらばらに引きちぎったり引き裂いたりするとき、人間によって皆さんが行なうであろうことと同じなのです！皆さんはプロクルステス（1、*2）よりもずっとおぞ

編註

*1 プロクルステス(Prokustes)：ギリシア神話で別名ポリュペモンあるいはエレウシスのダマステス。ポセイドンの息子で、客をベッドに寝かせ、ベッドが短すぎるとわかると、その客のはみ出た四肢を切り落とし、そうでないときは、客の手足を引き伸ばした。

訳註

*1 顕微鏡(Nulloskop)：NulloskopのNull(ヌル)はゼロのこと。

*2 プロクルステス：ギリシア語では「引き伸ばす男」の意。エレウシスの宿屋の主人で、旅人を鉄のベッドに寝かせては、旅人がベッドより小さいとはみ出した部分を切ってしまう、長さが足りないと背文を引っ張って伸ばして殺してしまう。英雄テセウスによって殺される。

ブルフィンチ『ギリシア・ローマ神話』(大久保博訳、角川文庫)など参照。

ましいものでしょう、もし皆さんが人間をそのようにばらばらに引きちぎり引き裂いて、顕微鏡の、円筒の下でそのちっぼけな物体が拡大されるように人間が拡大されるとしたらです。それでも皆さんは、そこにまだ人間がいる、とても思われるのでしょうか。そこにまだ人間がいるなどと言えないのはもちろんでしょう。同様に顕微鏡の下には真実はないのです。拡大された真実はもはや真実ではなく、見せかけの形成物です。ひとは自然から離れてはならず、自身に眼差しを閉じこめてもいけません。もちろん、すべては他のことのためには有益でしょう、とは言え、真の人間認識であるものにとって、それは何よりもまず、この真の人間認識から大いに逸脱していくものなのです。

真の人間認識は私たちが示唆しましたように求められなければなりません。それは栄養摂取経過から治療経過を経てもっとも広い意味での人間教育、世界教育に通じていかなければなりません、栄養摂取から治療を経て文明と文化へ、と私たちは言うことができます。と申しますのも、これはすべて、人間において栄養摂取のなかに集中されている物質的経過の、また常に回転するもの由来し、人間において律動的経過のなかに集中されているものである治療経過の、さらに、上からやってきて人間において神経―感覚プロセスを通じて集中されているもの、これらの下の基盤のようなものだからです。このように宇宙は三段階に打ち建てられています。

このことを私は皆さんにまず一種の基礎としてお話したいと思いましたが、さらにこの上に構築していきたいと思います。私たちが実際にこのような出発点から上昇して、いわば實際生活における事柄の取扱いであるもの、さらにヒエラルキア認識へと移行されうるものへと入っていきけることを見ていきたいと思えます。

第一講 一九三三年一月一〇日 ドルナハ

・人間の体内での代謝経過は、外部に観察される物理・化学的経過の継続ではない

・体内に摂取された鉱物質のものは、いったん熱エーテルの形になって

宇宙からの諸力を受け取り、再び硬化して人体形成の基礎となる

・鉱物質のものが熱に変化されきらずに人体組織内に沈殿すると、

たとえば糖尿病などの原因となる

・外部から人体内に入ってくるものは、物質であれ力であれ、完全に加工され

尽くされねばならない

・外部の熱を体内で完全に変化させられないと風邪をひく

・外界でのエリメンタルガイストの仕事が、人体内では高次ヒエラルキアに委託される

・植物の根は地上的に満足し、花は宇宙に憧れる

・植物界は自然界において人間の良心を映す鏡

・植物の根は月がまだ地球のもとにあった時代に由来する

・花的なものは月が地球を去ってから展開する

・霊的・宇宙的なものから地上的・物質的なものが生まれる

・人間が植物を食べることで植物の宇宙への憧れが満たされる

・植物質は人体内で空気のなものになり、上下逆転する

・人間に食べられると根は頭へと上昇し、花は下にとどまる

・動物の消化においては植物は逆転できず、植物の宇宙への憧れは満足されず

に

地へと投げ戻される

・動物の消化における、消化の流れに対抗する不安の元素霊の流れ

・草食動物と肉食動物の死における不安

・人智学はアジテーション的に何らかの食餌法を支持するのではなく、

あらゆる食餌法を理解させるもの

・子どもにはまだ鉱物を熱エーテル化する力が不足しているため、ミルクが必

要

・子どもは頭の内部から形成力を発達させるが、年取ってからは頭以外の

生体組織全体が形成力を放射しなければならない

・人間が頭の内部で行っていることを蜂は外部で行っている
・蜂の巣は頭蓋冠の無い頭

・人間が年取ってから形成力を促進しようとするときは、ミルクでなく蜂蜜が適する

・「乳と蜜の流れる土地」という言葉に含まれる深い叡智

今までに述べましたことから、人間の周囲の宇宙と人間自体の関係は、今日の諸概念に従って描き出されるものとはやはり異なつたものであるとお察しいただけるでしょう。実際安易にこう考えられています、人間の周囲に生きているもの、つまり鉱物界、植物界、動物界に属して人間に摂取されるものは、いわばその経過を、つまり物理学や化学者その他が調べ出すその外的な新陳代謝経過を、人間自体のなかで続行していくのだ、と。ところがこれはまったくお話になりません、そうではなく、はっきり理解しておかなければならないのは、人間の皮膚経過の内部では、すべてがその外部とは異なつていゝこと、この皮膚経過の内部には外部とはまったく異なる世界があるのだということ。このことに気づかない限り、ひとは相も変わらず、レトルトのなかやその他何らかのしかたで研究されるあれこれがどうやって人体組織のなかで継続されていくのか思索し続けるでしょう、そして人体組織そのものを単にレトルト内の経過が複雑に配置されたもののようにみなすのみでしょう。

皆さんは、私が昨日の考察で申しましたこと、鉱物質のものはすべて人間のなかで熱エーテルへと置き換えられねばならない、ということを出してくださりさえすればよいのです。すなわち、鉱物質のものとして人体組織のなかに入り込んでくるものはすべて、それが少なくもある一定期間を通じて純粋な熱であるように、しかも人間が自分自身の熱として人間の周囲の熱を超えて発達させる熱とひとつになるように、変容させられ、変化させられねばならないということ。私たちが生体組織のなかに塩を摂取するにせよ、何らかの他の鉱物質のものを摂取するにせよ、それはなんらかのしかたで熱エーテルの形（フォーム）をとらなければなりません、しかも人体組織そのもののなかでそれがその構築と形成に用いられる前にその形を取らなければなりません。

つまり、人体組織の外部に何らかの鉱物（ミネラル）があつて、この鉱物が単にそこへ入り込んでいき、人体の骨、歯その他の何らかの部分形成すると想像するなら、それはまぎれもないナンセンスです、そうではなく、人間の形

成において再び現れるものは、まず最初に、完全に揮発的に熱エーテルの形へと移行させられていなければならず、次いでまた姿を変えて、人体組織のなかで生きた形成のなかに現れてくるものにもどらなければならぬからです。

けれども、これにはさらにまったく別のものも結びついていきます。つまり、たとえば堅いフォルムを有しているもの、すでに口中で水性のものに変化し、さらに熱エーテルへと変化させられるもの、これは、まず最初に水のフォルムに移行することで、人間のなかで徐々に重さを失い、地上と疎遠になるといことです。そして、これが熱エーテルのフォルムに達し、上からやって来る、宇宙のあなたからやって来る霊的（精神的）なものを自らのなかに受け入れる準備が完全になるのです。

つまり皆さんが、鉱物質のものが人間のなかでどのように用いられるか思い描こうとなさるなら、次のように言わなければなりません。ここに鉱物質のものがあります、これが人間のなかに入り込みます。人間のなかでそれは液体的なものその他を経て熱エーテルへと変化します。この熱エーテルがあります。この熱エーテルには、宇宙の彼方から力として放射してくるもの、流れ込んでくるものを、自らのうちに受け入れようとするきわめて大きな傾向があります。これら宇宙万有の諸力が、ここで熱エーテル化された地球質料を貫いて霊化する[durchgeistigen]霊力として、今や自らを形成するのです。そしてそこから、熱エーテル化された地球実質の助けを借りて、今や肉体がその形成のために用いるものをはじめ肉体のなかに進入していきます。

ですから考えてみてください、私たちが古い意味で熱を火と呼ぶとき、私たちはこう言うことができます、鉱物的に人間によって摂取されるものは、人間のなかで火の性質にまで高められる、と。火の性質は、高次のヒエラルキアの影響を自らのうちに受け入れようとする傾向にあり、この火がさらにまた人間の内部領域すべてにまず流出し、それが新たに硬化することによって人間のなかで個々の器官の実質的な基礎を形成するのです。人間が自らのうちに摂取するものでそのままにとどまっているものはありません、地上的なままにとどまるものは何もないのです。すべては変化します、とりわけ鉱物界からのものはすべて、それが霊的―宇宙的なものを自らのうちに受け入れ、霊的―宇宙的なもののおかげでそれが再び硬化して地上的なものにもどるまで変化するのです。

ですから、皆さんがある骨から磷酸石灰の一片を取ると、これはたとえば皆さんが外部の自然のなかに見出すか、たとえば実験室のなかで皆さんが

調査するような磷酸石灰ではありません、そうではなくこれは、外的に摂取されたものが熱エーテルの状態に移行させられている間に進入し、人間の形成に介入した力、これらの力の助けを借りて、外的に摂取されたものから生み出された磷酸石灰なのです。

よろしいですか、ですから人間はその生涯にわたってきわめてさまざまな実質を用います、そして人間がその年齢にしたがって組織化されるのに応じて、生命無きものを熱エーテル的なものに変化させることができます。子どもは一般にまだ、生命無きものを熱エーテル的なものに変化させることはできないでしょう、子どもの生体組織のなかにはまだ充分に力がないのです。子どもは、人間の生体機構そのものにまだ近いミルクを摂取しなければなりません、そしてこれを熱エーテル的なものに至らしめ、その力を、真に拡張された造形[Plastizieren]これは肉體形成に関して幼児期の間には不可欠なのですが、この造形を成し遂げるために用いることができるのです。外から摂取されたものはすべて徹底的に加工されなければならぬ、ということを知ってはじめて、人間の本性をのぞき見ることができません。ですから皆さんが外部のある物質を取り、これが人間の生にとって価値があるかどうか調べようとするとき、さしあたり通常の化学ではまったくそれをするにはできません、なぜなら、皆さんが知らなければならぬことは、ある外部の鉱物的な物質を熱エーテルの揮発性[Eruchtbarkeit]にまで至らせるために、人体組織はどれくらい多くの力を使わなければならないか、ということだからです。人体組織がそれをするのでなければ、この外的な鉱物的物質は人体組織のなかに沈殿し、熱へと移行させられる前に、重い地球物質になってしまいます、そして人体組織に疎遠なままの無機質な物質として人間の組織[Gewebe]を貫くのです。

このようなことが起こるのはたとえば、鉱物化されて―これはもととは有機的なのですが―鉱物化されて糖として人間のなかに生じるものを、人間が熱エーテル的なものの揮発性にまで至らせることができないときです。するとそれは、全生体組織がそのなかにあるものすべてに参与していればもたらされるはずのあの状態になる前に、体組織のなかに沈殿し、そしてあのやっかいな糖尿病[Zuckerkrankheit]、ディアベテス・メリトゥス[Diabetes mellitus]が起るのです。つまり、どの物質の場合にも、生命無きもの、これはたとえば私たちが食塩を食べるときのようにすでに物質を形成しているか、砂糖の場合のようにこれからそうなるかはずれかですが、この生命無きものを人体組織が

どの程度熱質料にまで至らせることができるかに注目しなければなりません、これが熱質料にまで至るとき、地上に根をおろした生体組織も霊的宇宙との結びつきを見出すのです。

糖尿病の場合に起こっているような、人間のなかの加工されないままにとどまっているこいつ沈殿ははずれず、その人間が自分のなかにある物質のために宇宙の霊的なものとの結びつきを見出せないでいる、ということの意味しています。これは、外部から人間のところにやってくるものは、内部で人間によって完全に加工しつくされなければならない、という普遍的原則の個別的適用のひとつにすぎない、と申し上げたいのです。ある人の健康に配慮しようとするれば、とりわけ、その状態のままにとどまるもの、最もわずかな原子にいたるまで人体組織によって加工され得ないものは、なにひとつ人間のなかに入っていないように注意を払わなければなりません。このことは単に物質のみに関わるのではなく、たとえは力にも関係しています。

外部の熱、私たちがものをつかむときに感じる熱、空気の持つ外的な熱、この熱は、それが人体組織によって取り入れられるとき、変化させられて、実際に人間のなかの熱そのものが、こいつという表現をさせていただいてよいなら、外部とは別のレベルにあるようになります。外部の熱が持っている熱レベルをこれで示しますと（描かれる）、この熱レベルは、私たちによって取り入れられると、内的にいっくらか変化させられなければなりません、そこで、外部の熱のなかの、私たちがまだその内部にいないところにはどこへでも生体組織が介入していきます。どんな最小の熱量[Waermequantum]にも生体組織が介入していかねばなりません。

さて、よく考えてみてください、私が寒気のなかを歩いていき、寒気があまりに大きいために、あるいは寒気が空気の動きや風となってゆらぐために、私が必要とされるほど迅速に宇宙の熱を私自身の熱に変化させることができな、と。この場合私は、外から暖められる一個の木材がそれぞれどこか石のように宇宙の熱によって暖められる、という危険に陥ります。私は外部の熱を単に客体的のように私のなかに流入させるといって危険にさらされてはなりません。私はあらゆる瞬間ごとに、私の皮膚の位置からただちに熱を捉え、私自身の熱にする状態になければならないのです。私がそうできないと、風邪をひくというわけです。

これが風邪の内的な経過です。風邪とは、生体組織によって占有されなかつ

た外部の熱による中毒なのです。

よろしいですね、外の世界にあるものはすべて、人間にとっての毒、まさしく毒なのであり、人間が人間自身の力を通じてそれを占有することによってはじめて、人間にとって有用なものとなるのです。と申しますのも、ただ人間によってのみ、諸々の力は人間的なしかたで高次ヒエラルキアのところまで上昇していく一方、外部では、力はエレメンタル自然存在たちのもとに、自然霊（エレメンタルガイスト）たちのもとにとどまるからです。人間にあつては、自然霊たちが人体組織のなかでその仕事を高次ヒエラルキアに委託することができる、というこの驚くべき変化が起こらなければならないのです。このことは、鉱物質のものが完全に熱エーテル的なものに変化させられるときのみ、鉱物質のものにあてはまります。

植物界を見てみましょう。この植物界というのは、人間が霊眼でもって地球の植物の覆いを観察し始めると、実際のところ人間にとってさまざまに魅了させるものを持っています。私たちは草原が、どこか森のなかに出かけていきま、私たちが霊眼で眺めると、それは実際すばらしく魅惑的な構成です。ものを、私たちが霊眼で眺めると、それは実際すばらしく魅惑的な構成です。根は本来、それについて、これはまったくもって地上的なものなものでふくらんでいる、と言つことができるような何かであることが判明します。ああ、植物の根、私たちの前にそれが粗野な姿を見せれば見せるほど、根は実際何か恐ろしく地上的なものなのです。と申しますのも、植物の根、とりわけそうですね、カブの根は、実際いつも太った銀行家を思い起こさせます。そう、植物の根は、あんなに大きく太って、あんなにも自分に満足しているのです。根は地の塩を自分のなかに摂取したので、地を自分のなかに取り込んだ、というこの感情のなかであんなにも心地よく感じているのです。本来あらゆる地上的なものの中で、このようなカブの根ほど満足しているものはありません、カブは根的なものの代表です。

これに対して花を見てみましょう。霊眼で花に向き合うとき、私たちは本来、花をもっとも柔らかな希望を宿しているときの私たちの魂のように感じる、と言うほかありません。ひとつ汚れない春の花をこらんになってみてください、根本的に言つて春の花は希望の息吹です、春の花は憧れの化身です。そして事実、私たちがそのための繊細な魂感覚を充分に有していれば、私たちの周りの花々の世界には何か驚くべきものが溢れ出しているのです。

私たちは春にすみれや、あるいはたとえば水仙や鈴蘭や黄色い花を咲かせるいくつかの小植物を見ます、そして私たちはそれに心をとらえられるでしょう、これら春に花咲く植物たちがみなこう語りかけようとしているかのよう、ああ、人間よ、ほんとうはなんて純粹に汚れなく、あなたは望みを精神的（靈的）なものに向けていることができるでしょう！とー。精神的（靈的）な希望の本性、敬虔さに身を沈めた希望、とても申し上げたいものが春の花々のどれからも芽吹き萌え出てくるのです。

次いでもっと遅咲きの花々に移りましょうーさっそく極端なものを、イヌサフランを取り上げましょうー、そう、いったい、軽い恥じらいの感情を持たずして魂感覚によってこのイヌサフランを眺めることができるでしょうか。私たちの希望が不純になりうることを、私たちの希望がきわめてさまざまな不純さに浸透されうることを、イヌサフランは警告してはいないでしょうか。イヌサフランはあらゆる方向から、私たちに向かって語りかけていると言えるかもしれません、あたかも私たちに、あなたの希望の世界をこらん、おお人間よ、あなたはなんとたやすく罪人になることができるのか、と絶えずささきかけようとするかのように。

さてこのように、本来植物界は人間の良心を映す外なる自然鏡

「Naturspiegel」なのです。内部において一点から発してくるようなこうした良心の声が、きわめてさまざまな植物の花の形へと分かち与えられていると考えること以上に詩的なものは、考えられません、このさまざまな花の形が四季を通じてこのように私たちの魂に語りかけます、きわめてさまざまなしかたで魂に語りかけるのです。私たちが植物界を正しく眺めるすべを知っていさえすれば、植物界は拡張された良心の鏡です。

私たちがこのことに注目するなら、植物の花を眺め、いかに花が本来宇宙万有の光の彼方（広がり）への憧れであるか、地球の希望を宇宙万有の光の彼方に向けて流出させるために、花はいかに形態的に上へと成長していくか、そして他方ではいかに太った根が植物を地に繋ぎ止めているか、つまりいかに根が植物から絶え間なく天への希望を取り去り、それを大地の安楽さに形成し直そうとするものであるか、照合することが、私たちにとってとりわけ重要になるでしょう。

地球の進化史において、植物の根のなかにあるものは常に、月がまだ地球のもとにあった時代に素質を与えられたということに至るとき、私たちはこれが

なぜそのようなか理解することを学びます。月がまだ地球のもとにあった時代には、地球体の内部の月に固定された力が非常に強く作用したために、植物をほとんど根だけに止めたのです。月がまだ地球のもとにあつて地球がまだまったく異なつた実質を有していたとき、根的なものは非常に力強く下に向かつて伸びていました。これは、こう言うことで描写できます、下へ向かつて植物ー根的なものが力強く伸びていた、そして上に向かつては、植物は宇宙万有を仰ぎ見ていただけだった。細かい繊毛のように植物はその宇宙万有への衝動を送り出していた、と申し上げたいのです。ですからこう感じられます、月がまだ地球のもとにある間、この月は、地球体そのもののなかに含まれていたこれらの月の諸力は、植物的なものを地上的なものに繋ぎ止める、と。そして、当時植物的なもののなかに移し入れられたもの、これがその後も、植物的なものなかに原基となつてとどまり続けるのです。

ところが月が地球を去つたあの時期以来、以前は単に小さなわずかなものであつた衝動、はるかに宇宙をつかがい見ていた衝動のなかに、憧れが開いてきます、彼方への憧れ、宇宙万有の光の彼方への憧れが開いてきて、そして、花的なものが生まれたのです。ですからいわば、植物界にとって月が出ていくとは一種の解放、まさに解放だったのです。

とは言えこの場合も注目しておかなければならないのは、地上的であるものはすべて、靈のなかにその起源を持つということとです。古い土星の時代ー私の『神秘学概論』での記述を取り上げてみてくださいさすればよいのですがー地球は完全に靈的であつて、ただ熱エーテル的なエレメントのなかにのみ生きていて、まったく靈的であつたのです。地上的なものは靈的なものから形成されてきたというわけです。

さて植物を見てみましょう。植物は、その形態のなかに、生き生きとした進化の記憶を携えています。植物はその根的なもののなかに、地球的になること、物質的ー素材的になることを担っています。私たちが植物の根を見ると、私たちはさらに気づきます、靈的なものから地上的ー物質的なものが発生したことによつてのみ植物は生成できたのだ、と植物は私たちに語っているのです。けれども地球が月的なものの重荷から解放されるやいなや、植物はまた光の彼方に戻ろうと努めます。

さて、私たちが植物質のものを食物として取るとき、植物が外部の自然においてすでに始めたことを正しく継続する機会が、単に宇宙の光の彼方にのみな

らず、宇宙の霊の彼方にも戻ろうと努める機会が植物に与えられます。したがって、昨日申し上げましたように、私たちは植物質のものを空気の性質のもの、ガスのものにまで駆り立てなければならぬのです、植物質のものが光・霊の彼方への憧れに従うことができるようにするためです。

私は草原に出かけていきます。私は草花から、植物の花々から、それらが光を求めているのを見て取りります。人間は植物を食べます。人間はその内部に、外の環境とはまったく異なる世界を有しています。植物が外部で花々のなかに憧れとして顕現させているものを、人間は自分のなかで成就させることができます。私たちは、自然のなかに広がっている植物の憧れの世界を見ます。私たちは植物を食べます。私たちはこの憧れを私たちのなかで精神的（霊的）世界に對峙させます。私たちは、植物がより軽い空気界のなかで精神的（霊的）なものに向かつていく可能性を得られるように、植物を空気界へと高めなければならぬのです。

ここで植物はある特殊なプロセスを経ていきます。人間が植物質のものを食べる時、以下のようなことが起こります。ここに図式的に描いて、根のなものが、それから葉を経て花に向かつていくものがあり、次いでこの植物的なものが空氣的になる際に、内的に植物存在が完全に逆転する

「Umstuephen」ということが体験できるのです。根は、まさしく地中で生きることによって、地に繋がれていることによって上昇を目指します、根はきわめて強く上の靈的なものを目指し、花の努力を引き離します。これは事実、皆さんが植物的なものを、このようにして下へと展開していくと思ひ描き、そしてこの下のものをこの中へと差し込むことができ、その結果、上のものが下に、下のものが上になる「ひっくり返されたハンカチ」というときのようです。植物は完全に逆転しているのです。植物は自分自身のなかで、下のものが上に、上のものが下になるように自らを形成します。すでに開花まで成長したものは、いわば物質的な求めのなかで光を食し、物質を光にまで上昇させたのです。そうすることによってそれは、今もなお下にとどまらねばならない、という罰を受けなければなりません。根は地上的なものの奴隷でした、しかし皆さんがすでにゲーテの植物のメタモルフォーゼ論 1) からおわかりのように、根は同時に自らのうちに植物の全本性を担っています。根は上方を目指すのです。人間が頑固な罪人であるなら、人間は罪人で在り続けようとしませぬ。植物の根は、それが地に繋がれている限り、太った銀行家の印象を与えますが、人

光へと至らせたもの、つまり花は、下にとどまらなければなりません。ですから、植物における根のなものは本来、それが食べられると、それ自身の性質にしたがって人間の頭を目指していく何かがあり、他方花に向かつて位置しているものは、下位の領域にとどまります、これは全新陳代謝において頭形成まで上昇することはないのです。

こうして、奇妙な不思議な光景が得られます、人間が植物質のものを食べるときももちろん植物全体を食べる必要はありません、植物の個々のどの部分も植物全体を含んでいるからです、申しましたようにゲーテのメタモルフォーゼ論をごらんください、つまり人間が植物を食べるとき、植物は人間のなかで空気へと変化する、上から下へと植物的に進んでいき、上から下へ向かつていわば花を咲かせるような空気へと変化する光景です。

古い本能的な霊視によってこういう事柄が知られていた時代には、植物はその外的な性質に依りて、それが人間の頭にとってなにかの根のなものでありうるかどうか、あるいは靈的なものへの憧れを持つことをすでに強くその根のなかで告げたかどうか、吟味されてきました。そして、私たちがそれらの植物から食べるものは、いわば完全な消化において人間の頭を訪れ、頭の中へと進入していくでしょう、そこで靈的（精神的）宇宙を求めて上昇し、宇宙との必要な結びつきに入っていくために。

すでにアストラル的なものに強く浸透されている、たとえば莢果へエンドウなどの豆科植物の実のような植物の場合、実さえも下の領域にとどまり、頭まで上昇しようとしないので、眠りをぼんやりしたものにし、それとともに人間が目覚めているときも頭をぼんやりとさせるでしょう。ピュタゴラス学派の人々（2）は純粋な思索者でありつづけようとし、頭の機能において消化の助けを借りようとはしませんでした、ですから彼らは豆を禁じていたので。このようにして、自然のなかに存在するものから、人間的なものとの関連、人間において起こっていることとの関連を予感することができます。そもそも精神的（霊的）イニシエーション学を持てば、唯物論的な科学が人間の消化の場合一たしかに牛の消化の場合は異なっていますが、これについてはさらに

編註

1 ゲーテの植物のメタモルフォーゼ論「ゲーテの植物のメタモルフォーゼ（変態）」（M.ゲーテ「自然科学論文集」所収）参照、第7講の編註 4も参照のこと。
2 ピュタゴラス学派の人々：ピュタゴラスによってクロトン（南イタリア）に組織された倫理的・宗教的生活形式のための教団、その閉鎖的な貴族的保守的立場のために迫害されたが、4世紀初頭まで存続した。アリステレスは、ピュタゴラス派は数学と真剣に取り組んだ最初の人々だった、と伝えた。オルフェウス教徒にならってピュタゴラス学派の人々は、魂の輪廻と再来を教えた。

お話ししていきましょー、単に植物質のものが摂取されるといふ考えとどうやって折り合いをつけているのか、まったくわからないでしよ。植物質のものは単に摂取されるのみではなく、残らず霊化されます。植物質のものはそれ自身のなかで、最も下のものが最も上へ、最も上のものが最も下へと転じられるように形成されるのです。これ以上に大きな作り替えは考えられません。そして人間は、最も下のものが最も上へと、最も上のものが最も下へと転じられていない植物のほんの少量でも食べるなら、すぐに病気になるでしよ。

このことから、人間は霊（精神）が作り出さないものはなにも自らのうちに有していない、ということがおわかりになるでしよ、と申しますのも、人間が物質的に摂取するもの、人間はこれにまずひとつの形（フォルム）を与えねばならないからです、その結果、霊（精神）がそれに影響を及ぼすことができます。

私たちが動物質のものに近づくと、はつきり理解しておかなくてはならないのは、動物質のものがまず消化をすること、動物質のものがまず植物質のものを摂取しているということ、草食動物を見てみましょう。動物質のものは自らのうちに植物質のものを摂取します。これはまた非常に複雑な経過です、と申しますのも、動物が植物質のものを自らのうちに摂取することでは、そもそも動物は、植物に人間的な形態を対置することができないからです。したがって動物のなかでは植物質のものは下から上へ、上から下へと転ずることができません。動物の脊柱は地球の表面に平行しています。そのため、消化の際に起こることは、動物のなかでまったく無秩序になります。ここでは下のものが上へ、上のものが下へ行こうとするのですが、停滞してしまいます、それ自身のなかで停滞してしまうのです、ですから動物の消化は人間の消化とは本質的に異なつた何かなのです。動物の消化の場合、植物のなかで生きていくものは停滞します。その帰結として、動物の場合、植物存在に対して、お前は宇宙の彼方へのお前の憧れを満足させてよい、と約束がなされるのですが、動物にはこの約束が守られません。植物は再び地へと投げ返されます。けれども、動物の生体組織のなかで植物が地に投げ返されることによって、逆転が起こる人間の場合のように上から宇宙たち[Weltengister]がその力とともに進入してくる代わりに、動物の場合、ぐさま植物のなかへと、ある種の元素霊たちが進入します。これらの元素霊たち、これは不安の霊たち、不安の担い手たちです。したがって霊的な観照にとつてはこの奇妙なことが追求さ

れねばなりません、動物は自分で食物を取り、内的な心地よさのうちに食物を取るのです、そして食物の流れが一方に向かい、他方で不安の元素霊たちの不安の流れがもう一方に向かっています。消化の方向に絶えず動物の消化管を貫いて、食物摂取の満足感が流れていき、この消化に相対して、不安の元素霊の恐ろしい流れがやってきました。

これも、動物たちが死ぬときに後に残していくものです。つまり私がすでに別様に述べました順序に属さない動物たち、さらにたとえば四つ足の哺乳動物に属する動物たちも、これらの動物が死ぬことで、その死において、もっぱら不安から構成されたある存在が常に死に、本来こう言えるかもしれませんが、甦ります。動物とともに不安は死ぬ、ということはすなわち不安が甦ることです。肉食獣の場合、すでに不安と一緒に食べているということになります。肉食獣は獲物を引き裂き、満足感をもって肉を食べます。肉食へのこの満足感に対抗して、不安が、恐怖が流れ込みます、この恐怖を、植物を食べる動物たちは死に際してはじめて自分から発するのですが、肉食動物は生きていくうちにすでに流出させます。したがってライオン、トラといった動物たちは、そのアストラル体が不安に浸透されており、この不安をさしあたり生きていくうちは感じませんが、これらの動物は死んだ後、それがまさに満足感に対抗してやってくるものであるがために、この不安を撃退します、ですから肉食する動物たちは、その集合魂において、なおも死後の生を、人間がいつか経ていくであろうよりずっと恐ろしいと言えるカマロー力である死後の生を送るので、それは肉食動物が、すでに有しているこの性質を有しているがゆえにです。

こつこつ事柄の場合、これは別の意識においても体験されるのだ、と皆さんは想像されるにちがいありません。つまり皆さんがまたすぐに唯物論的になり、皆さん自身を動物の立場に置くことによつて肉食動物はどんなことを体験せねばならないのか、と考え始めるとき、そして今や、このようなカマロー力は私にとつてはどういうものであらねばならないか、と考えるとき、ーそしてさらに、このようなカマロー力が皆さんにとつてどのようなものでありうるかということにしたがつて肉食動物を判断することを始めるとき、そつこつとき、皆さんは言つてもなく唯物論的であり、実際動物崇拜的[animalistisch]なのです、このとき皆さんは動物の性質に身を置いています。世界（宇宙）を理解しようとするれば、こつこつ事柄を理解しなければならぬのはもちろんです、唯物論者が全宇宙に対して生命無き物質に感情移入するように、いわばこつこ

う事柄に感情移入してはならないのです。

ここで、魂的に語るほかはない問題が始まります、と申しますのも、人智学は決してアジテーション的に、あるものを支持したり別のものを支持したりするのではなく、まさに真実を提示すべきものだからです。そのひとつが自分の生活様式のためにどんな結論を導き出すかはその人の問題です、人智学は規定を与えるのではなく、真実を語るものだからです。ですから私は決して、フアナティックなひとのために、植物を食べることから動物が形成するものから導かれるいわば戒律を提示したりすることはしないでしよう。つまり私は、こういう観点から戒律的にヴェジタリアリズム、肉食その他について語るつもりはありません、こういう事柄は徹頭徹尾各自が考慮検討する領域に置かれなければならず、各自の体験領域に置かれてのみ本来価値があることだからです。私がいこう申しますのも、人智学とは、あれこれの食餌法その他を支持することだ、という意見が出てきたりしないようにするためです、事実人智学は、あらゆる種類の食餌法を理解させてくれるのみなのです。

けれども、まさに私が示しておきたかったことは、鉱物質のものが霊的なものを受け入れることができるために、私たちはこれを熱エーテルにまで駆り立てなければならぬ、ということでした。そして、霊的なものを受け入れの後、鉱物質のものが人間が構築されます。人間がまだ非常に若いとき、申しましたように、人間にはまだまったく鉱物質のものを熱エーテル的なものまで追いつたての力がありません。人間がミルクを自分のなかに摂取しなければならぬということ、あらかじめ準備がなされます、ミルクにおいてはすでに変化が起こっていて、そのため、熱エーテル的なものに変化させられねばならないものが容易に変化させられやすいので、子どもの場合、飲まれたミルクはその力とともにすばやく頭へと注ぎ込み、子どもに必要なフォルム形成の衝動を、頭から発達させることができるのです。なぜなら子どもの生体組織形成全体は頭から発していくからです。

人間がこのフォルム形成の力をのちの年齢においても保持しようとするなら、ミルクを取ることによってこれを促進することはよくありません、と申しますのも、子どもの場合、頭まで行って、歯の生え替わりまで存在する頭力によって形成しつつ全身に放射していくことができるもの、これが、その後の年をとってからの人間にはもはや存在しないからです。年をとってからは、頭以外の生体組織全体が形成力を放射しなくてはなりません。そしてこの、その

ほかの生体組織にとつての形成する諸力、これはまったく特殊に、頭とは異なつて作用する何らかのものを摂取することによってその推進性が促進されます。

よろしいですか、頭は丸く閉じられていますね。この頭のなかには体の形成のための子どもの衝動があります。そのほかの体においては内部に骨があり、形成する力は外にあるのです。そこでは形成する力であるものは、外へと刺激されます。私たちが人間にミルクを取らせると、私たちが子どもであるうちは、頭のなかのこれらの形成する力が刺激されます。私たちがもはや子どもではなくなると、その形成力はもうなくなりません。これらの形成する力をもつて外から刺激することができるためには、ここで私たちがいったい何をすべきでしょうか。

もしこうすることができたらきつとよいでしょう、頭が頭蓋冠によつて閉鎖されていることによつて行うこと、頭が完全に内部で行うことを、外的な形を持つことができるなら、つまり頭がその内部で行うことができどこか外からなされるしたらです。内部にある力、これらはミルクを取ることに対して良いのです。エーテル的变化をしたミルクが内部にあるとき、ミルクはこの頭の力の発達のために良い基礎を与えます。私たちはたとえ、ミルクのような何かを持たなければならぬでしょう、けれどもそれは人間の内部では製造されず、外から製造されるものですが。

ここで自然のなかには、頭蓋冠のない頭であるものが存在します、つまりここでは、頭の内部で作用しているのと同じ力、つまりミルクを必要とし、ミルクを再び生み出すことさえする力、なぜなら子どもはミルクをまず熱エーテル的な状態に移行させ、それからまたそれを作り出すからです、そういう内部で作用するのと同じ力が、外から作用しているのです。ーさて、あらゆる方向に開いている頭というのは蜂の巣です。蜂が営んでいることは本来、頭が内部で営んでいるのと同じことですが、ただしそれは外部にありますー私たちは蜂に支えとしてせいぜい巣箱を与えるのみですー、それは閉じられておらず、外から作用します。さらに蜂の巣の内部には、すでに外的霊的影響のもとに、私たちのこの頭のなかで霊的影響のもとにあるものと同じものがあります。蜂の巣の内部には蜂蜜があり、私たちが蜂蜜を摂取したり、年配になつてから蜂蜜を食べると、蜂蜜は私たちに、今はむしろ外から形成する力を与えなければならぬものために、子どもの年代には頭のためにミルクを与えて

くれていたのと同じ力を与えてくれます。

つまり私たちが子どもであるうちは、私たちはミルクを取ることによって頭から造形する「Pastzierend」力を促進します、後の年齢にもなお造形する力が必要なときは、蜂蜜を食べなければなりません、とは言え、そんなに多量に食べる必要はありません、要は蜂蜜から力を得るといっただけのことですから。

このように、外なる自然を完全に理解すれば、人間の生命にどうやって促進衝動を供給しなければならぬか、外なる自然から見て取ることができません。それでは、美しい子どもたちと、年老いた美しい人々のいる国を想像しようとするなら、それはどんな国でなければならぬでしょうか。それは「乳と蜜の流れる」国（*1）でなくてはなりません！おわかりでしょう、古い本能的な見力が、人々の憧れるそのような国々について語ったのも不当なことではありません、それは「乳と蜜の流れる」国々なのです。

こういう単純な言葉が途方もなく深い叡智を含むことがあります、そして、まずは可能な限りの力を尽くして真実を探究し、「乳と蜜の流れる」国についてのようないくつかの深い叡智の充溢した太古の聖なる真理の言葉をどこかに見出すこと以上にすばらしい体験はありません。と申しますのも、それは実にたぐい稀なる国だからです、美しい子どもたちと美しい老人たちのみがいる国は。

おわかりですね、人間を理解するには、自然を理解することが前提となっております。自然を理解することは、人間理解のための基礎を与えます。そこでは常に、最も下位の物質的なものが、最高の精神的（霊的）なものまで通じています、自然界、鉱物、動物、植物界が一方の下の極に、ヒエラルキアがもう一方の上の極にあるのです。

訳註

*1 「乳と蜜の流れる」国：旧約聖書「出エジプト記」3・8など。モーゼがエジプトからイスラエルの民を導いていく土地についてこの表現が与えられている。

第二二講 一九三三年一月一日 ドル十八

- ・物質的、自然的な人体組織と靈的（精神的）道徳的なもの
- ・人類の道徳的・精神的（靈的）なものの源泉…人間理解と人間愛
- ・今日、精神的（靈的）なものは単なる抽象思考として語られる
- ・物質界、自然界にあるすべてのものは、靈的世界に関する文字
- ・人間の（物質的）形姿は、靈的に観て道徳的冷たさと憎悪から構築されている…

道徳的冷たさは人体組織を固く構成し、憎悪は血液循環を引き起こす

- ・人間の魂には道徳的熱（暖かさ）、人間愛への萌芽があるが、

下意識には道徳的冷たさと憎悪が潜んでいる…現代文明との関係

- ・死の門を通過していくとき、人間は冷たさと憎悪の結果を携えていく

- ・今日の一般的な社会生活に見られる道徳的な熱と愛の欠如

- ・人間が携えてきた冷たさと憎悪の結果を負担する高次ヒエラルキア存在たち…

第三ヒエラルキアが冷たさに由来するもの、次いで第2ヒエラルキアが

憎悪に由来するものを取り除く

- ・人間の形姿は純粹に靈的なもの…単なる物質的なものを人間の形姿に保つのは

靈的なもの

- ・死後靈的世界でこの形姿は徐々に頭の部分から溶解していき、

第一ヒエラルキアのもとで完全に変容する

- ・第一ヒエラルキアのもとでの靈形姿の形成…

四肢であったものが未来の頭の原型となる

- ・脳だけでなく、手足で思考することでカルマを追求することができる

- ・人間の動きとともに、その人間の道徳的全体が運動している

- ・死後の生の後半における新たな形姿の形成プロセス…

第二、第三ヒエラルキアは死後の生の前半に人間から取り出したものから、

胸器官、四肢代謝器官の原基を形成する

- ・人間の物質的本質と周囲の物質的自然との違い

- ・人間と結びついているヒエラルキアの営み

新たな人間形姿形成のために使い果たされなかった人間無理解と人間憎悪の

力の残余、その帰結としての文明の癩形成、潰瘍形成

- ・寄生生物に冒された生体組織のような現代文明…人間との生きた結びつきを

持たない思考

- ・現代文明に上から下降してくる靈的なものは人間を通じて有毒となる…

下からの寄生性と上からの毒性

- ・文化の病の診断と治療法

- ・人間の心と心情から生み出される新たな文明の必要性…

文化の病の治療としてのヴァルドルフ教育

- ・真の文化の覚醒衝動としての人智学

人体組織において、外的・自然的なものがいかに変化させられるか、たとえば熱エーテル的なものにまで変化しなければならぬ物質の場合非常に激しい変化ですが、これがわかりますと、自然的な人間、有機的に組織された人間のなかに生きているものがいかに靈的（精神的）なものとなっていくのかも認められるでしょう。たとえば解剖学や生理学に関する一般的な手引き書にある図にしたがってしばしば考えられているように、人間というのは固い構築物であって、外部に在る自然の成分を摂取し、それを体内にほとんど変化させないままとどめる、と想定するならば、橋が欠けていることに始終悩むことになるのは当然でしょう、自然的な人間のなかにあるものから、人間がその本来の魂的なものにしたがって結びつけられているものへと架けられねばならない橋が欠けていることに。

まず、固い物体と思われている骨組織、筋肉組織と、たとえば道徳的

[*Moralisch*]な宇宙秩序との結びつきを見出すことはできないでしょう。ひと

はこう言うでしょう、一方はまさしく自然であり、もう一方は自然とは全く異なる何かだ、と。けれども、人間のなかにはあらゆる種類の物質が存在してお

り、すべては、筋肉と骨よりもっと揮発的な種類の物質を経ていかなければな

らない、ということが明確に理解されるならば、より揮発的、エーテル的なもの

は、道徳的宇宙秩序の衝動であるものと結びつくことができるということが認め

られるでしょう。

すでに私たちが行なった考察を、人間が上に向かって有している結びつき、

つまり宇宙の靈的なもの、私たちが高次ヒエラルキア存在たちとみなしている

存在たちに向かつて有しているあの結びつきにまで導こうとするならば、以上の

ような考えを引き継いでいかなくてはなりません。そこで、今までの講義ではむしろ自然的なものから出発しましたように、本日私たちは、そうですね、人間のもので精神的（靈的）―道徳的に作用しているものから出発していきたいと思えます。

精神的（靈的）、道徳的、というのは、現代の文明にとっては実際すでに多かれ少なかれ慣習的なものを表わす概念になってしまっています。人間の本質において、道徳的―精神的なものの根源的基本的感情はほとんど衰退していききました。現代文明はたとえば、その教育の全てにしたがってますますこう問いかけるように人間に指示します、一般に通用しているのは何か、慣習的に定着しているのは何か、掟とは何か、法とは何か、などなど。―現代文明は、人間からまさに衝動として、たとえばしばしば漠然と良心の場所と設定される場所に根づく衝動として発してくるものに向かうことは少なくなっています。この内的な自己自身への方向付けと目標設定、現代文明においてますます衰退していったものはこれなのです。ですから結局のところ、精神的―道徳的なものは、今日多かれ少なかれ慣習的―伝統的なものなかに生きる何かになっただけです。

古代の世界観、とくにまた本能的な靈視に支えられていた世界観は、人間の内部から道徳的衝動を、成熟した道徳的衝動を引き出しました。こういう道徳的衝動は存在してはいますが、今日では伝統的なものになってしまいました。たとえば道徳的なものが非常に伝統的になってしまったことについて、はっきりと理解しておかなくてはなりません。もちろんそれで道徳的なものにおける伝統的なものに対して何か異論を申し立てようというわけではありません。ただよく考えてみてください、いったい十戒はどれくらい古いものでしょうか。十戒は古代から記録されてきたものと教えられています。根源的基本的な人間本性から、かつてテカローク[Dekalog]、十戒においてそうであったような何か湧き出てくるのが、今日でも普通に見られることである、と私たちは言えるでしょうか。そして、人間たちを社会的に結びつけ、ひとからひとへと社会的な系をつなぐ道徳的―精神的なものは、いったい何から湧き出てくるのでしょうか。

人類における道徳的―精神的なものの本来の源泉としてあるのは、人間理解[Menschenverstaendnis]と呼びうるもののみです、相互の人間理解、そしてこの人間の理解に基づく人間愛[Menschenliebe]なのです。社会生活において

役割を果たしている、人間の道徳的―精神的衝動が成立する際、なおもよく見回してみるとよいでしょう、私たちはいたるところで、こういう道徳的衝動が基本的に人類から発したところでは、それは人間理解と人間愛から生じたのだ、ということを見出すでしょう。後者は本来、人類の内部で社会的に精神的―道徳的なものを促進させるものなのです。そして根本において人間は、人間が精神的（靈的）存在である限り、人間理解と人間愛を発達させることによってのみ、他の人間たちの間で生きるのです。

さて、皆さんは意味深い問いを投げかけることができます、なるほどいつも投げかけられるわけではないけれども、まさに言われていることに対しては誰も口先まで出かかっているにちがいない問いかけ、つまり、人間愛と人間理解が人間の共生の本来の衝動であるなら、いったいその反対のもの、人間無理解[Menschenunverstaendnis]と人間憎悪[Menschenhass]がどうして私たちの社会秩序の内部に生じることになったのか、という問いです。

これは、あらゆる人間のなかでもまさに秘儀参入者たちの最大の関心事であった問いです。秘儀参入学[Initiationswissenschaft]は、それが原初的であったあらゆる時代に、これをまさに最重要の問いとみなしていました。けれどもこの秘儀参入学は、それが原初的であったときにはまだ、この問いの解明の背後に至るある種の手段を有していました。今日通用している科学を眺めると、人間を観察するとき―神に創造された魂には本来人間理解と人間愛の素質があるわけですから―、実際こう問いかけることになり、人間理解と人間愛が自明のものとして社会秩序の内部で働かないのはいったいなぜだろう、人間無理解と人間憎悪はいったいどこからやってくるのか、と。そして、人間無理解と人間憎悪を精神的（靈的）なもの、魂的なものなかに捜すことができなければならぬ、私たちはおのずとこれを物質的―身体的なものなかに捜さなくてはなりません。

とは言えいかにも、今日通用している科学は、人間の物質的―体的なもの、血液、神経、筋肉、骨とは何であるか、私たちに答えてくれます。ひとつの骨をどんなに長いこと眺めることができても、今日の自然科学の目だけで見ると、この骨、これが人間を憎悪へと誘惑するものなのだ、と言うことはできないでしょう。―あるいは、今日調べられているような原理にしたがってどんなに血液を調べることができても、そのやりかたでは、この血液が人間を人間無理解へと誘惑するものだ、と確認することはできないでしょう。

秘儀参入学が原初的な状態であった時代においては、むしろこれはまったく異なっていました。そのころ人間の物質的・身体的なものを眺めると、本能的な霊視によって精神的（霊的）なものの中に見られるものの対応像がそこに得られました。今日人間が精神的なものについて語るとき、せいぜい抽象的な思考について語るのみです、それが人間にとって精神的（霊的）なものなのです。そして人間にとってこれらの思考があまりに希薄になると、人間には言葉だけが残され、人間はフリッツ・マウトナー（1）がしましたように『言語批判』を書くのです。このような言語批判を通じて、そうでなくともじゅうぶん希薄になってしまった精神（霊）を、単なる抽象的な思考へと完全に蒸発させてしまう可能性が出てきます。本能的な霊視に浸透された秘儀参入学は精神的（霊的）なものを抽象的思考のなかには見ませんでした。秘儀参入学は精神的（霊的）なものを形態のなかに見ました、具象的なもの、それ自身が語り、音を発することができたもののなかに見ました。秘儀参入学は精神的（霊的）なものを生きた活動性のなかに見たのです。精神的（霊的）なものが生きた活動性のなかに見られたことによって、物質的なもの、骨、血液もまた精神的（霊性）において見られることができました。この秘儀参入学においては、今日のこのような骨格という考え、表象は存在しておりませんでした。こういう骨格は、今日、解剖学者あるいは生理学者たちにとって、計算する建築技師によって構築されたもののように見なされているものです。けれども、骨格はそういうものではないのです。この骨格というのは、皆さんがごらんになったように、鉱物質のものが熱エーテルにまで駆り立てられ、熱エーテルのなかに霊的ヒエラルキアの力が介入し、そしてそれから骨の形（フォルム）が構成されることによって形成されたのです。

つまり骨格を正しく観ることができると対して、骨格は霊的な起源をそつと明かします。そして実際のところ、骨格を今日の形（フォルム）において、つまり今日の科学が観る形において、ということですが、骨格をそういう形に観るひとは、ここに印刷されたページがある、文字の形がある、と言うひとに似ています。ーそのひとは、これらの文字の形を書きますが、それを読むことができないので読まないのです。そのひとは文字の形のなかに表現されているものを、その根底にあるものに関係づけることなく、ただ文字の形を書くだけです。今日の解剖学者、今日の自然研究者は、このように骨を記述します、あたかも骨が示唆していることなど何もないかのように。けれども骨は霊的な

ものから発したその起源をほのめかしています。

物質的な自然法則、エーテル的な自然法則のすべてに関してこれがあるままです。すべては、霊的（精神的）世界であるものに関する文字のようなものなのです。これらを霊的世界に由来する文字と解釈できてはじめて、こういう事柄が理解できるのです。

けれどもさらに、人間の物質的な生体組織へと目を向けるとき、まず最初に知覚されるのは、あの領域に属するものです、つまり、あらゆる時代の秘儀参入者たちがーつまりまさに真に秘儀参入者であったひとたちがー、霊的世界へと境界を越えて最初に知覚されるのは、ぞつとするような何か、最初は容易には耐えられないような何かだ、と語ってきたようなあの領域に。人間は大抵の場合、自分にとって努力する価値があると思われるものによって喜びを感じたいと思うものです。とは言え、霊的な現実、すなわちおしなべて真の現実に精通しようとするれば、ひとは恐怖を通過して行かねばなりません。と申しますのも、解剖学的・生理学的に私たちの眼前に置かれている人間の形姿 [Menschengestalt] に関してひとは、この人間形姿は霊的世界から、つまりそこにおいて道徳的な冷たさと憎悪である二つの要素から構築されている、ということに気づくからです。

私たちは実際に魂のなかに、人間愛とあの熱、他の人間を理解しようとするあの道徳的な熱への萌芽を有しています。ところが、生体組織の固い構成部分のなかには、道徳的な冷たさを持っています。これはいわば、霊的世界から私たちの物質的生体構成をくつつけて固めるあの力なのです。そして私たちは、私たちのなかに憎悪への衝動を担っています。これは、霊的世界から血液の循環を引き起こすものです。そして私たちは、もしかすると非常に愛に満ちた魂、人間理解を切望する魂をもって世界を進んでいくかもしれませんが、他方、下意識（潜在意識 [Unbewusstes]）の底には、魂はそこで私たちがそもそも肉体というものを担うことができるために、体的なものの中に流れ込み、衝動を与えるわけですが、この魂の底には冷たさが潜んでいるのです。私は最終

編註

1 フリッツ・マウトナー：Fritz Mauthner 1849-1923 作家、哲学者『言語批判論集』全3巻（シムトウツカガルト、1901）参照。
360頁以下）参照。

冷たさについて語るでしょうが、これはつまり道徳的な冷たさのことです、ただしこれは熱エーテルという迂回路を経て物質的な冷たさに移行することができます。私たちの底深く、下意识には道徳的な冷たさと憎悪が潜んでいます、そして人間がその魂のなかに、体内に潜んでいるものを持ち込むのは簡単です、その結果、人間の魂がいれば人間無理解が感染させられることとなります。これは道徳的な冷たさと人間憎悪の帰結なのです。こういうわけですから、人間は道徳的な熱、すなわち人間理解と愛をそもそもまず自分のなかに育成しなければなりません、これらが、体的なものからやってくるものを克服しなければなりません。

さて、これは否定できないことでしょうが、これは霊的な眼差しにはきわめて明確に示されることです、一五世紀とともに始まり、一方においては主知主義的に、他方においては唯物論的になった私たちの時代、私たちの文明に結びついているのは、魂の根底で多くが人間無理解と人間憎悪において存在する、ということです。これは考えられている以上にそうなのです。と申しますのも、人間の無意識のなかに人間無理解と人間憎悪がどれほど存在しているか、本来人間は死の門を通過してはじめて気づくであろうからです。このとき人間は魂的・霊的なものを物質的・肉体的なものから引き離します。人間は物質的・肉体的なものを脱ぎ捨てるのです。冷たさの衝動、憎悪の衝動はこのとき単なる自然力[Naturkräfte]であることが判明します、これらは単なる自然力なのです。

死体をよく見てみましょう。霊的な眼差しで、エーテル的な死体をもよく見てみましょう。私たちはこのとき、もはや植物や石のように道徳的判断を呼び起こさないものを眺めています。道徳的なものの内部に入り込んでいたものは、自然力へと変化したわけです。けれども人間は生きている間に多くを吸い込みました、人間はこれを死の門を通過して携えていきます。このように自我とアストラル体は後退し、物質体とエーテル体のなかに繰り返し戻りたく沈み込んでしまったために、生きている間に気づかないまま残ったものを引き出して、携えていきます。この自我とアストラル体は、霊的世界へと、まさに魂のなかにはびこっていた人間に対する人間憎悪と冷たさの衝動のすべてを携えていくのです。私は申しました、私たちのこの文明において、さらにこれからお話ししていくであろうさまざまな事柄を通じて、人間無理解と人間憎悪を通して人間のなかにいかに多くが植え付けられているか、ひとは人間が死の門を通過して

いくのを見るときはじめて気づくのです、と。なぜなら、今日の人間は、この両衝動のうち非常に多くを死の門を通過して運んでいくからなのです、途方もなく多くを運んでいくのです。

けれども、このとき人間がともに携えていくものは、物質的なもののなかにあるべきものの、物質体とエーテル体とを完成すべきものの霊的な残余なのです。人間は人間無理解と人間憎悪のうちに、本来物質的世界に属するものの残余を霊的世界へと持ち込みます、しかもこれを霊的なしかたで持ち込むのです。これをさらに死と新たな誕生との間の時期を通じてずっと携えていることは、人間にとって決して役立つことはできません、なぜなら、人間がこの人間無理解と人間憎悪をさらに持ち運ばなければならないとしたら、人間はまったく前進することができず、死と新たな誕生との間でさらに進化する際に、前へ進むたびにつまづいてしまうことになるでしょうから。いわゆる死者たちが歩み入っていく超感覚的世界のなかに、今日絶えず見られるのは、それが直接的に作用すれば人間の進歩が阻まれるであろうような動向ばかりなのです。こうした動向、これはいったい何に由来するのでしょうか。

これが何に由来するのか知ろうとするなら、今日の生活をよく見さえすればよいのです。人間たちはお互いにすれ違い、他のひとがどんな特性を持っているかを見ることはほとんどありません。そもそも今日人間たちは多くの場合、誰もが自分自身がどうであるか正しく良く見る、というようなありかたをしているのではないのでしょうか。そして他のひとが違った様子をしていると、愛情深くそのひとのなかに入り込んでいくのではなく、このひとはそうあるべきではないのに、と判断するだけです、その際結局のところその判断の背後にあるのは、このひとは私のようであるべきなのに、とつぶやくことなのです。――こういうことはいつも意識されているとは限りませんが、これはまさに社交上の交流、人間の社会的なつき合いのなかに潜んでいるのです。今日明るみに出されているもの、人間言語の形式と申し上げたいもののなかに、他の人間の理解であるものはほとんど生きておりません。人間であるべきことを自分がいかに考えているか、人間は世界に向かって大声でがなり立てますが、その際その背後にあるのは、たいていの場合、すべての人間は自分のようであるべきだ、ということにほかならないのです。そのときまったく別なようすの誰かがやってくると、その誰かはただちに、たとえ

それが完全に意識されないにしても、敵であり、反感を覚えさせる人間なので、ここでは人間理解が、道徳的な熱が欠けています、愛が欠如しているのです。そしてこれらが欠けているのと同じだけ、道徳的な冷たさが、人間憎悪が人間とともに死の門を通過していき、そこに人間を引き留めるのです。

けれどもここで人間がまず最初に見出すのは、第三ヒエラルキアの存在たち、つまりアングロイ、アルヒアングロイ、アルヒヤイです、なぜなら人間がさらに進化することは人間自身の目標であるのみならず、全宇宙秩序の、叡智に満ちた宇宙秩序の目標であるからです。人間が死の門を通過して死と新たな誕生との間にある世界へと入った後の最初の時期に、彼らは人間たちに近づき、人間無理解から来る冷たさを慈悲深く人間から取り去ります。そして、人間が死の門を通過して今描写しましたやりかたで霊的世界に持ち込んだものを、いかにこの第三ヒエラルキアの存在たちが負担してくれるか、私たちにわかるのです。

人間憎悪の残余を人間はもつと長い間運んでいかなければなりません、これが人間から取り去られるのは第二ヒエラルキア、エクスシアイ、キュリオテテス、デユナーミスの恩寵によってのみだからです。そのとき彼ら人間憎悪によって残されているものすべてを人間から取り去ります。

けれども次いでそうこうするうちに人間は、死と新たな誕生との間のあの領域、セラフイム、ケルビム、トロローネという第一ヒエラルキア存在たちが滞する領域へと、私が神秘劇において霊的生存の真夜中時と呼びましたもの(2)に、ほぼ到達します。人間が前もって第三ヒエラルキアと第二ヒエラルキアの存在たちによって、人間無理解すなわち道徳的冷たさと人間憎悪を慈悲深く取り除かれた状態にされていなかったら、人間が内的に完全に破壊されることなしに、つまり消し去られることなしに、このセラフイム、ケルビム、トロローネの領域を通過することは決してできないでしょう。こうして私たちにわかることは、人間は、そのさらなる進化に貢献できる衝動に結びつきを見出すために、それがあるべき物質的エーテル的本性から霊的世界に持ち込んでいくものを、最初に高次ヒエラルキア存在たちに負担させざるを得ないということです。

とは言え、こういふことすべてを見通すとき、いまやこうした道徳的冷たさが霊的世界で意のままに活動するようすを見ると、この霊的(精神的)冷たさとこの下方の物質的な冷たさとの親和性を判定するすべも獲得されず、雪

や氷のなかにあるこの物質的な冷たさは、実際この上にある道徳的(霊的)精神的冷たさの物質的模倣にすぎないので、自分の前に両者を置いてみると、これらを比較することができません。このようにして人間はその人間無理解と人間憎悪を取り去られた状態を保つのですが、その間人間がまず徐々にその形姿をいけば失っていくようす、この形姿が多かれ少なかれ溶解していく、とでも言いたいようすが、霊的な目で追求できるのです。

イマジネーションという霊的眠差しにとつて、人間は死の門を通過して行ったとき、本来まだこの地上にいたときと同じように見えます。と申しますのも、人間がこの地上で自らのうちに担っているものは、多かれ少なかれ粒のような形状、そうですね、原子のような形状で人間のなかにある実質だからです、けれども人間の形姿、これは霊的なものなのです。私たちはこれについてはつきりと理解しておかなくてはなりません、人間の形姿を物質的に表象するのはまったくナンセンスです、私たちは、人間の形姿を霊的に表象しなければなりません。そのなかの物質的なもの、これはいわば小さな粒子として内部のいたるところにあるのです。単なる力体[Kraftkörper]である形姿が、この、そうでなければならぬに崩れてひとかたまりになってしまつてあるものを、形態にしたがつて結合させているのです。皆さんがたひとりひとりの髪の毛をつかんで形姿を取り除くことができるとしたら、物質的なものとそれにエーテル的なものは、砂山のように崩れ落ちるでしょう。これが砂山でないということ、これが配分されていて形姿を持っているということ、これは、何ら物質的なものに由来するのではなく、霊的なものに由来するのです。人間は実際霊的なものとしてこの物質的世界を動き回っています。人間が単なる物質的な存在であるというのはナンセンスです、人間の形姿は純粋に霊的なのです。物質的なものは、おおよその表現として、ひと山のパンくずなのです。

しかしこの形姿を、人間は死の門を通過していくときもまだ有しています。この形姿がほのかに光り、きらめき、いろいろな色彩に輝くのが見えます。ただし、人間はまず最初にその頭の形態であるものを失います、次いで他のものも徐々に溶解していきます。そして人間が完全に変容して宇宙の一種の模倣のようになるのは、死と新たな誕生との間で、セラフイム、ケルビム、トロローネ

編註

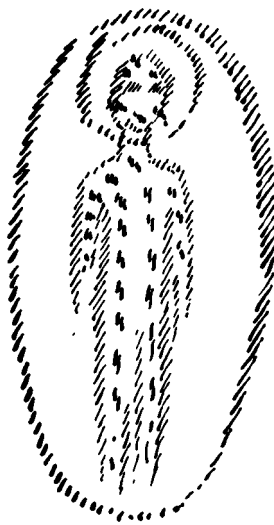
2 私 が 神 秘 劇 に お いて 霊 的 生 存 の 真 夜 中 時 と 呼 び ま し た も の … ル ド ル フ ・ シ ュ タ イ ナ ー 『 四 つ の 神 秘 劇 』 (G A 1 4) 所 収 の 『 魂 の 目 覚 め 』 第 四 景 及 び 第 五 景 参 照。

の領域に至る時です。

死と新たな誕生との間人間を追求していくと、つまりこのように、その形姿を上から下へと徐々に失っていきながら、人間がさらに動き活動しているのが見られます。けれどもいわば最後のものが下から失われるとともに、すばらしい霊形姿[Geistgestalt]である何かがつ形成されるのです、自らのなかに全天球の模像のようにあり、同時に人間が自分の身に備えるであろう未来の頭の原型でもある霊形姿です。ここで人間は、単に下位ヒエラルキア存在たちのみならず、セラフイム、ケルビム、トローネといった最高のヒエラルキア存在たちが関与する活動に織り込まれます。

このとき何が起こるのでしょう。このとき起こっているのは実際、そもそも人間として表象しうるもつとも驚くべきことです。と申しますのもこのとき、人間が下部人間としてこの人生にあつたものが頭形成へと移行するからです。私たちがこの地上を動き回るとき、私たちが表象の器官、思考を担う器官として有しているのは、この貧しい頭のみです。けれども思考は私たちの胸の同伴者でもあり、思考はとりわけ私たちの四肢の同伴者でもあります。けれども、私たちが今や単に頭でのみ思考するのではなく、たとえば四肢で思考し始めるようになる瞬間、この瞬間に、カルマの現実(リアリティ)の全てが私たちに開かれるのです。私たちが私たちのカルマについて何もわからないのは、私たちがいつもこの本来表面的な器官、脳でのみ考えるからです。私たちが指で思考し始める瞬間――そうしようと奮起したなら、ひとは頭の神経で思考するよりもずっと明快に、まさしく手指で、足指で思考することができます――、私たちが完全に物質になつていないもので、下部人間で思考し始める瞬間、私たちの思考は私たちのカルマの思考なのです。私たちが手を使って単に掴むだけでなく、手で思考するとき、私たちは手で思考しつつ私たちのカルマを追求していきます。そしてとえいわけ、足によつて、単に歩くだけでなく、足で思考するとき、私たちはとりわけ明瞭にカルマを追求するのです。人間が地上でこれほど偏狭なのは――ご容赦ください、ほかの言葉を思いつかないものから――人間がその思考のすべてをこの頭の領域に閉じこめているからなのです。けれどもひととは全人間をもつて思考することができます。そして全人間をもつて思考するとき、この中間の部分で、全宇宙論が、すばらしい宇宙の叡智が私たち自身のものとなります。そして下の部分と四肢全般にとつては、カルマが私たち自身のものとなるのです。

私たちがこの地上で、歩いている人間を観察し、無関心に陥らずに、その歩みの美しさ、歩みの特徴を追求していくなら、そしてたとえば人間の手を私たちに作用させてみて、この手を解釈して、どの指の動きにも人間内部をきわめてすばらしく証左するものがあることを見出すなら、私たちは実際すでに多くを成し遂げているのです。とは言えこれは、歩行し、掴み、指を動かす人間とともに運動しているもののほんの小さな部分にすぎません。何しろこのとき、道徳的人間の全体が運動するのです、そのひとの運命が共に運動しています、霊的にそのひとであるものすべてが共に運動しているのです。そして、死の門に歩み入つた後人間の形姿が溶解していくのを私たちが追求できれば――物質的形姿を思い起こさせるものがまず最初に溶解します――なるほど物質的形姿の方に似てはいるけれども、その内的な性質、その内的な本質を通じて、これは本来道徳的なものの形姿であると告げるものが、現われてきます。存在の真夜中時に近づき、セラフイム、ケルビム、トローネの領域に至りつつ、人間はこのようになっていくのです。次いで私たちは、驚くべき変容(メタモルフォーゼ)が起こるのを見ます、このとき形姿が溶解する、と言つことができるのです。けれどもこれは本来重要なことではありません。形姿は溶解するように見えますが、実際にはこのとき高次世界の霊的存在たちが人間に共同して働いています、人間は自分自身で、そしてまたカルマ的に結びついているひとたちとともに――ある人間がほかの人間にも働きかけます――人間の以前の形姿、過去の地上生での形姿から、まずは霊的に、次の受肉の形姿となるものを



作り上げます。

この霊形姿はそれからまず、物質的生において胎児として人間に与えられるものに結びつきます。けれども上の霊的世界においては、足と脚が頭部の顎（あご）に変化します。ここでは腕と手が頭部の頬骨に変化します。そこでは、下部人間全体が、後の頭のための霊原基となるものへと変化するのです。これは、宇宙から認識しつつ体験しうるもっとも驚くべきことです、このときこのメタモルフォーゼが起こるようすは、つまりいわばまず全宇宙の模像が創造され、そして道徳的なものすべてが付着する――私が言いましたすべてを取り除かれたあとにですが――形姿へとこれが分化されていき、存在していたものが生成するものへと変化していくのです。そして、人間が霊形姿としてさらに変化を続け、再び第二ヒエラルキアの領域、第三ヒエラルキアの領域にもどっていくのが見えます。今やこの変化した霊形姿に――霊形姿は根本的に未来の頭のための原基にすぎないので――、胸器官となるもの、四肢器官、代謝器官となるものがいわば取り付けられねばなりません。これらを取り付けられねばなりません。この取付のための衝動はどこからやってくるのでしょうか。

そう、この衝動は、人間がこの道の前半にいたときに、第二及び第三ヒエラルキアの存在たちが慈悲深く拾い集めたのです。この存在たちは、人間の道徳的なものからこの衝動を取り出したのですが、今やこの衝動を再び下降させ、それからリズム人間および代謝―四肢人間の原基を形成します。このとき人間は、死と新たな誕生との間における生存の後半期に、物質的生体組織のための成分、霊的な成分を受け取るのです。胎児的なものなかに、この霊形姿が入り込んでいき、今や物質的力、エーテル的力となつていくものを運び入れます、この物質的、エーテル的力はしかし、私たちが人間無理解と人間憎悪として過去の生から携えてきたもので、私たちの四肢はそれから霊的に形成されるのですが、その物質的な模像にすぎません。

このような見方をしようとするれば、物質界のために必要とされるのとはそもそもまったく違った種類の感じ方を身につけなくてはなりません。と申しますのも、今示唆されましたようなしかたで人間において霊から物質になつていくものを眺めることができなくてはなりませんし、骨のなかには、冷たさが、道徳的冷たさが物質的模像の状態でききていて、血液のなかには道徳上の憎悪が物質的模像として生きている、ということに耐えることができなくてはならないからです。いわば、こういう事柄をまったく客観的に眺めるすべを改めて学

ばなくてはならないのです。

とは言え、こういう事柄をこのように覗き込むとき、ひとは人間内部と外部の自然であるものとの違いにようやく気づくのです。

私が言及しました事実、私たちは分解された人間の良心のような何かを植物界の花のなかにみとめる、ということを思い起こしてください。外にあるものは、いわば私たちの魂的なものの像「Bild」です。私たちがまず内部に有しているもの、これは、外なる自然とは親近性を持たないように見える力です。骨が骨であることができるのは、骨が、鉱物的に現われている炭酸石灰および燐酸石灰を憎み、それらの前から後退し、自分自身のなかに収縮して、外部の自然のなかで炭酸および燐酸石灰であるものとは別の何かになることによつてのみなのです。人間が物質的形姿を持つことができるためには、人間の物質的なものなかに憎悪と冷たさがなくてはならない、という見解にまで跳躍することができなければなりません。

このとき私たちの言葉は内的な意味とでも申し上げたいものを獲得します。私たちの骨が一定の堅さを有しているとき、それは骨にとつて良いことです、骨は霊的な冷たさの物質的模像としてこの堅さを有します。私たちの魂がある種の堅さを持つていたら、それは社会生活にとつて良いことではありません。人間の物質的本質は人間の魂的なものとはまったく異なつていなければなりません。人間が人間である可能性、人間の物質的本質は人間の魂的―霊的（精神的）なものとは異なるという可能性はまさにこの点にあるのです。人間のこの物質的本質は、周囲の物質的自然とも異なつています。私が皆さんにお話ししました変化が不可欠なのは、このことに依るのです。

けれどもおわかりのように、私がかつて、宇宙論、哲学、宗教を扱いました講座で（3、*1）申しましたことに対して、この重要な補足を、人間とヒエラルキアとの結びつきのために不可欠なこの補足を、私たちは一度加えなければなりません。けれどもちよつとこれまでの講義の出発点と同様な出発点を獲得したうえでのみ、私たちはこれらの補足を加えることができましたので

編註

3 : 講座で「ルドルフ・シュタイナー「人智学における哲学、宇宙論、宗教」(GA215 全10講 ドルナハ 1922年9月6日―15日)参照。さらにルドルフ・シュタイナー『宇宙論、宗教、哲学』(GA25 ゲーテアナムにおける「フランス講座」のための論文集(1922年9月6日―15日)参照。

訳註

*1 シュタイナー『宇宙論、宗教、哲学』(GA25)の邦訳は『霊界の境域』(西川隆範訳 水声社)に所収

す。この地上で鉱物界、動物界、植物界の個々の存在とは何であるかを霊的な眼差しで見通すように、ちょうどそのようにひとはヒエラルキアの営みをのぞき見るのです、この下方で物質的な自然のできごとと人間の営みが時とともに経過していくように、時とともに経過していくヒエラルキアの営みを。

このように死と新たな誕生との間の生を、すなわち霊的世界での生活を見つめると、人間が死と新たな誕生との間に行なうことを、ちょうど人間がこの地上で誕生から死までの間に行なうことを伝記的に記述できるのと同じように、事細かに記述することができません。そして、人間が死の門を通過していくときに人間を通じて霊界に持ち込まれた人間無理解と人間憎悪に基づくものすべて、これらすべてがまたもや人間に付与されること、すなわち、そこから、それを高貴なものに改良しつつ人間の形姿が創造されること、これは本来望まれるべきことだ、と申し上げたいのです。

さてしかし、何世紀も経過するうちに地球人類の現在の進化にとつて、何か非常に奇妙なことが生じてきました。霊的世界においては、人間無理解の力と人間憎悪の力のすべてが、新たな人間形成、新たな人間形姿のために使い果たされることはできません。残余ができます。この残余がこの数世紀の間に地球へと流れ込んできて、その結果霊的な地球大気圏のなかに、地球のアストラル光と申し上げたいもののなかに、混入物として、外部から人間に現われてくる人間憎悪と人間侮蔑の衝動の総和が見られるのです。これらの衝動は人間の形姿にはならなかったもので、地球の周囲のアストラル光のなかに巡り流れています。これらの衝動は人間の中へと作用しますが、今のところ個々の人間であるものには作用しません。これらは人間たちが地上で互いに形成するものなかに作用を及ぼします。これらは文明のなかに作用を及ぼすのです。そしてこれらが文明の内部に引き起こしたものは、私が1914年の春ウィーンで（4、*2）こう語ることを余儀なくさせたのです、つまり、現代文明には、霊的な癌[*Karzinom*]、霊的な癌の病、霊的な潰瘍[*Geschwueren*]が混入している、と。

死と新たな誕生との間の現象を扱ったウィーンでの講演会（チクルス）においてこういうことが語られたのですが、これは当時人々が好んで耳を傾けることではありませんでした。けれどもそれ以来人々は、当時なされた発言が真実であったことを、いくらか経験することになったのです。当時人々は、文明を通じて流れ込んでくるものについてよく考えることなく生きていました。人々

は、文明の潰瘍形成がほんとうに存在していることがわかりませんでした、ただ潰瘍形成は一九一四年から突発したのです。それは今日、まったく損なわれた精神的（霊的）文明実質として姿を現わしています。文明のなかに生きているものを、統一ある精神的（霊的）形成物とみなすこともできません。そうです、人間形成の際に使用されなかった人間憎悪と人間の冷たさの流れが入り込んだほかならぬこの現代文明にとつてここで明らかなのは、ここに流れ込んであるものが現代文明の寄生的なものとして生き抜いている、ということなのです。

現代文明は、何か根深く寄生的なものを持っています、それは、寄生生物、細菌に冒された生体組織の一部のようです。人間の思考に積み上げられたものは、人間との生きた結びつきを持たないまま存在しています。きわめて日常的な現象にこれがいかに現われいるかちよつと考えてみてください。何かを学ばなければならぬ一ひとは、学ぶべき内容がすでにあるからなのですが、熱中して学ぶのではなく、試験に通るために、あるいは正しい公務員を演じる云々のために腰を据え、まさに学ばなくてはなりません。そのひとつとつて、彼が受け容れるものと、彼の魂において本来精神的（霊的）なものを受け容れることへの渴望能力として生きているものとの間に、基本的なつながりがないわけです。これはちよつと、飢えを感じるように作られなかった人間が、絶えず食物を自分の中に詰め込んでいるようなものです。食物は、私がお話ししました変化を遂げず、その本質において余計なお荷物となり、とどのつまり、ほかな

編註

4 1914年の春ウィーンで「ルドルフ・シュタイナー「人間の内的本質、死と新たな誕生との間の生」(GAT53 全6講 ウィーン 1914年4月) 参照。文明が霊的潰瘍に冒されていることについてシュタイナーは第6講で語っている。

*2 シュタイナー「人間の内的本質、死と新たな誕生との間の生」(GAT53)の 邦訳は『死後の生活』(高橋巖訳 イザラ書房)。

文明の癌、潰瘍形成については、「今日では、消費を顧慮しないままに、市場のための生産が続けられています。私が論文「霊字と社会問題」において述べた意味においては、生産された商品は全部、市場の仲介を通して倉庫に集められ、そして買われるのを待っています。この傾向はますます顕著になっていくでしょう。そして「なぜ私が今こんなことを言うのか、すぐにわかっていただけだ」と思いますが「この傾向は自己を破壊させるまではやまないでしょう。社会生活の中にこのような生産方式が導入され、それによって人類社会の秩序の中に、生体に癌が発生するときとまったく同じことが生じます。まったく同じ癌が、文化癌が人類社会に発生するのです。今日の社会生活を重視する人は、そこに癌への傾向を発見します。今、いたるところに社会的潰瘍形成への恐ろしい素地が作られつつあるのです。これは現実を直視する者にとつて、とても憂慮すべき状況なのです。(中略)自然という創造の場においてはなくてはならないものが、今述べたような仕方では社会の中へ入ってくるときには、それは癌を発生させるのです。」(第6講 205-206頁)

らぬ細菌を呼び寄せるものになってしまつたのです。

現代文明において、人間から切り離されたようになってきたままの多くのもの、これは、まさにヤドリギとでも申し上げたいもの—霊的に考えて—のよう、人間がその心の、心情の根源的衝動から生み出すものの上で生きています、その多くは、この文明の寄生的なものとして生き抜くというように生きていますのです。そしてこれを霊的な眼差しで観るひと、この文明をアストラル光のなかに見るひと、こういつひととって、すでにほかならぬ1914年に強度の癌形成が見られました、こういつひととって文明全体が何か寄生的なものに冒されていたのです。ところが今や、寄生的なものに加えてまた別の何かが登場してきます。

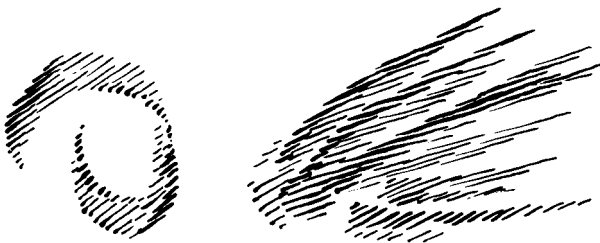
私は皆さんに、下から上へと作用してくるグノームたちとウンディーネたちの性質から、寄生的になる衝動を持つ可能性が人間のなかに有機的に生じてくるようすを、いわば霊的—生理学的に描写いたしました。けれどもこのとき、反対像が生じる、とも申しました。このときシルフエたちと熱元素（エレメンタル）存在たちを通じて、有毒のものが上からもたらされるのです（*3）。

そして今日の文明のように寄生的な性質を持つ文明においてはこのように、上から、すなわち霊的な真実として流れ込んでくるものは、自分を通じて毒になることがありませんが、人間のなかで毒に変化します、その結果人間は、私が「ゲーテアム」誌に記述いたしましたように（5）、不安の中でそれを拒絶し、それを拒絶するためのありとあらゆる理由を作り出すのです。この二つの事柄は互いに対となつています、つまり、下の寄生的文化は、元素の（エレメンタル）な法則から跳躍して抜け出ることがないために寄生生物を自らのうちを含み、そして降下してくる毒、上から降下してくる精神性（霊性、スピリチュアリティ）、これは文明のなかに侵入して人間に摂取され、毒となるのです。このことをよく考えてとらんになれば、現代文明にとつてきわめて重大な徴候を示すものが得られます。そしてこのことを洞察すると、まったくおのずから、これに対する治療手段として登場してこなければならぬ文化教育的なものが生じてきます。実際の診断、実際の病理学からラツイオに基づく治療法が生まれるように、文化の病の診断から治療法が生まれます、一方が他方を引き寄せることによつてです（図参照）。

今日、人類が新たな文明から、人間の心情と人間の心に寄り添う文明、人間の心情と人間の心から直接生み出される文明から、再び何かを必要としている

ことは明白です。今日、子どもが小学校に入ったとき、この高度な文明に属する文字形、現在ABCとして学ばされることになっているこの文字形に子どもをなじませるなら、それは子どもの心、子どもの心情のなかの何ものとも関わり合うことがありません。それは、子どもの心、心情とはまったく関わりません。子どもがABCを学ばねばならないとき、子どもの頭、子どもの心情のなかで発達するものは、霊的—魂的に考えて、人間の性質における寄生生物なのです。

このように、実際私たちの教育時代全体にわたつて、今日文明から発して寄生的に人間に迫つてくる多数のものがあつます。したがつて私たちは、子どもが学校に入るとき、子どもの心情から創造するような教育芸術を開発しなければなりません。私たちは子どもに色彩を作り出させ、喜びから、落胆から、ありとあらゆる感情から生み出されるこの色彩形成を、紙に表出させなければなりません、喜びから苦悩まで！このとき子どもが単にその心情を繰り広げることで紙に表出したもの、これは人間と結びついています、これはいかなる寄生的なものももたらしません。これは、指のように、鼻のように、人間から生み出るものをもたらしません、他方、文字のなかで高度の文明の成果に導かれるこ



編註

5 私が「ゲーテアム」誌に記述いたしましたように…ルドルフ・シュタイナー『魂生活について—魂の勇氣と魂の不安における魂の本質』（当初週刊「ゲーテアム」誌に発表 1923年1月2日 第三期 11号）、全集版では『現代の文化の危機におけるゲーテアム思想 1921—1925年の論文集』GAS6 366頁以下）参照。

訳註

*3 グノームとウンディーネによる寄生生物の発生 シルフエと熱存在による毒の発生については第8講参照。

とで人間が受け取るものは、寄生的なものへと至ります。

そして、人間の心情と人間の心に非常に近いものと教育芸術とがこのように結びつけられる瞬間、私たちはスピリチュアルなものをも人間にもたらしませ、それが人間のなかで毒になることなしにです。皆さんはまず最初に、私たちの文明は癌に冒されている、とわかる診断を得て、次いで治療を——つまり、ヴァルドルフ学校教育を得るわけです！

ヴァルドルフ学校教育は、愛する友人の皆さん、別様に組み立てられているわけではありません。そこでは、医学的に考えるのとまったく同じ思考法によって、文化について考えられています。ですからここで皆さんは、私が数日前に申しましたことつまり、人間存在は本来、下から、栄養摂取から、治癒を経て、上へ、精神的（霊的）発達へと進むこと、そして、教育は、精神的（霊的）なものへと移された（翻訳された）医学と見なしうるということが、特殊なケースに適用されているのをごらんになるのです。けれども、私たちが文化治療法を発見しようとするれば、このことはとりわけ厳しさをもって際だっています。と申しますのも、この文化の治療というのを、私たちはヴァルドルフ学校教育としが考えられないからです。

こういふ関連を単に見通すだけでなく、この関連においてこのヴァルドルフ学校教育を実践的に強化拡張しようと試みるなら、それがどういふ気分のものか考えてみるがおできになるはずですが、そして今、文明の癌の共通の帰結として、中部ヨーロッパに起こっていますことは、今日では皆さんも自身できつと理解されるでしょうが、実践的なヴァルドルフ学校教育であるものを、まったく不可能にはしないまでも、おそらく非常に危うくする状況です。

このような考えを私たちから振り払ってはなりません。この考えを私たちのなかで、まだ可能なところではどこでも、この文明の治療に働きかけよう、という衝動にしようではありませんか。実際今日、何倍にも増してそうなので、1913年のヘルシンキでの講演会（チクルス）で（6）、ある種の霊的認識から私はウッドロー・ウィルソン（7、*4）の劣等性についてお話ししました。彼はそのとき多くの文化人たちにとって一種の世界の主なる神となっており、今日ようやく人々は、もはやそれ以外できないために、彼についていくらか明確に理解するところも出てまいりましたが——、そのときそうであった状況は、当時文明の癌について語られたことについてもまったくあてはまるのです。当時これらのことについてはまったくそういう状態でした、今日、

私たちの時代に適合することについても、まったく同様な状態です、眠りこんでいる状態なのです。私たちにふさわしいのは何と言っても覚醒です。人智学は真の文化を目覚めさせるすべての衝動をそのなかに含んでいます、人間の真の文化の覚醒のための衝動を。

これがこの連続講義の最後に皆さんに申し上げたかったことです。

ルビルク・シュタイナー

創造し、造形し、形成する

宇宙言語の協和音としての人間

GA230

[]

ルビルク・シュタイナー

創造し、造形し、形成する

宇宙言語の協和音としての人間

GA230

[]